五藤家屋敷跡

安芸市

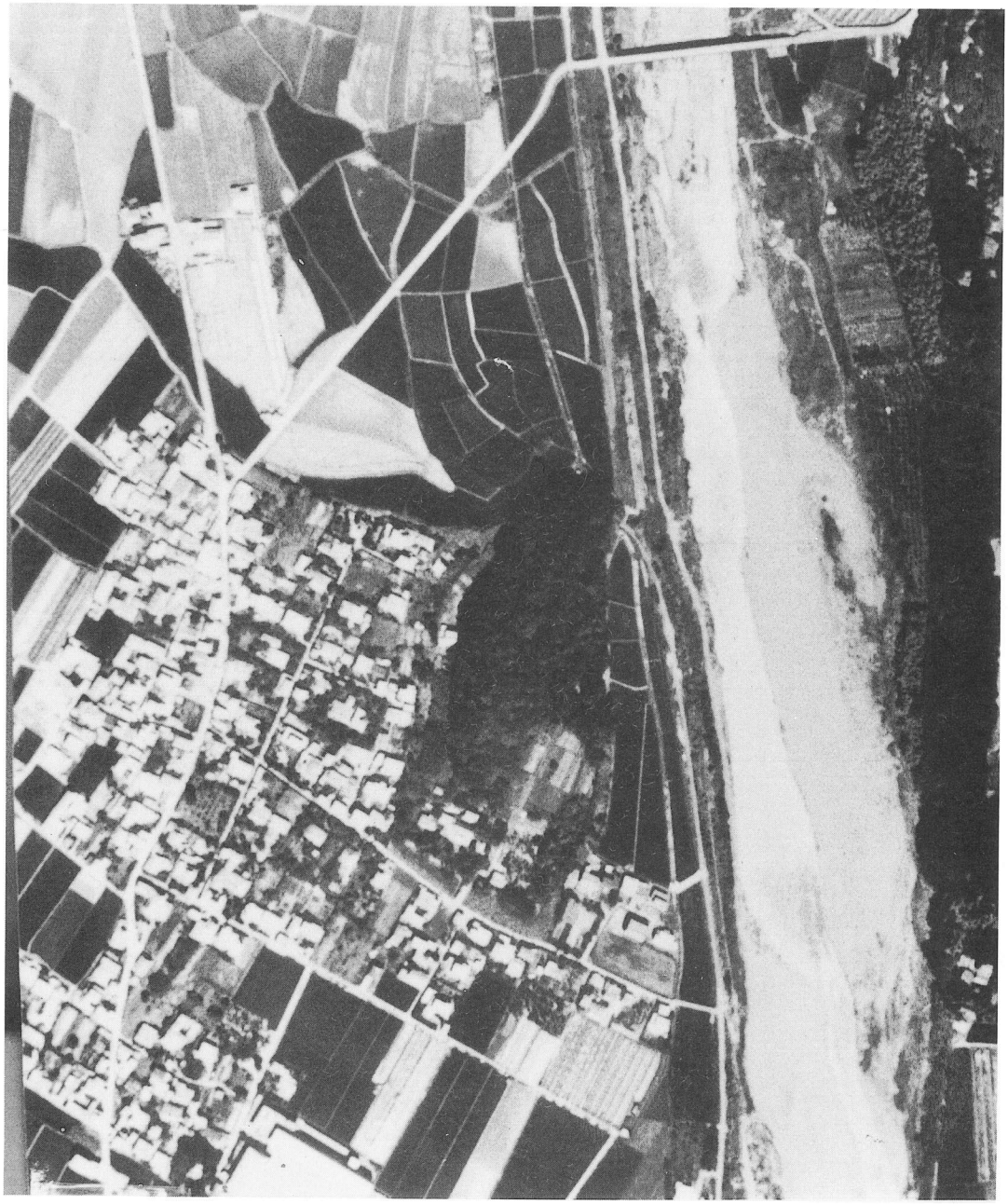
五藤家屋敷跡
発掘調査報告書

1987年3月

高知県安芸市教育委員会

第II・III層完掘状況

第Ⅳ層完掘状況



安芸城跡及び土層廓中

序

安芸市は古くから県東部の中心として長い歴史をもち，多くの文化遺産に恵まれ，特色ある教育文化都市をめざし歩んできました。このような市にとって，文化財等の保護は教育行政の重要な施策であります。

五藤家屋敷跡は鎌倉時代から戦国時代まで安芸氏の居城であった安芸城跡のある山麓にあります。そして近世初頭山内一豊が土佐入国にあたって五藤為重が土居に入り，以来五藤氏の居館となり改築，修復が繰り返されてきたものであります。

安芸市には五藤家を中心とした武具，甲冑類をはじめ古文書，考古資料，民俗資料が数多く保存されていることから，歴史的遺産の保存・啓もうを更に促進するため歴史民俗資料館の建設が具体化し，当地が選定されたものであります。

このため，昭和58年（1983）８月，やむなく発掘調査を行ったものであるが，発掘調査の結果，近世遺構が確認され，多くの出土遺物が検出されたものであります。

安芸市教育委員会では，昭和60年（1985）３月に安芸城跡保存管理計画書の策定と併せて発掘調査結果を記録保存するとともに出土品は一部歴史民俗資料館への展示等により，次代に継承していく資料として広く活用していきたいと考えております。

おわりに，本調査にあたりまして御指導いただきました各位に厚くお礼申し上げ，刊行のごあいさつといたします。

安芸市教育委員会

教育長　中　川　一　郎

例　　言

1．この報告書は，安芸市立歴史民俗資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，昭和58年８月15日～11月26日，昭和59年５月14日～７月６日及び８月28日～９月21日に実施し，以後遺物の整理等を行い，昭和62年３月に調査報告書の作成を完了した。

3．調査，報告書作成においては，高知県教育委員会文化振興課の協力と岡本健児（高知女子大学教授・現高松短期大学教授）・前田和男（高知県立高知追手前高校教諭）等多くの方の指導を得た。

4．調査体制

昭和58年度	調査顧問	岡本健児（高知女子大学教授・現高松短期大学教授）
	調査員	宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事・現高知県立佐川高校定時制教頭）
	〃	松田直則（高知県教育委員会文化振興課主事）
	〃	出原恵三（高知県教育委員会文化振興課主事）

5．本書の執筆は，安芸市教育委員会（Ⅰ），前田和男（Ⅱ・Ⅲ），宅間一之（Ⅳ・Ⅵ），松田直則（Ⅴ・イ～ニ）・出原恵三（Ⅴ・ホ～リ）が担当し，他の整理編集は，安芸市教育委員会が実施した。

6．出土遺物整理にあたっては，大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），倉田芳郎（駒沢大学文学部教授），仲野泰裕（愛知県立瀬戸陶磁資料館）の御指導，御教示を賜り，厚く謝意を表する。

7．遺構実測にあたっては，開成測量株式会社の協力を得た。

8．発掘調査においては，中島恒次郎・松村信博・高橋慎一（高知大学生）の協力を得，遺物整理は高知大学考古学研究会及び多くの方々の協力を得た。

9．なお本書には，昭和56年度に実施した安芸市立書道美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要を付載した。

10．出土遺物の図版番号については，挿図番号と一致する。遺構については，ＳＢ（建物跡），ＳＫ（土壙），ＳＤ（溝跡），ＳＳ（通路状遺構），ＳＦ（石積遺構），ＳＸ（不明遺構）で標示した。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　周辺の歴史地理的環境 …… 2

第Ⅲ章　城跡と土居跡の概要 …… 7
1．城跡と土居跡の歴史 …… 7
2．城跡と土居跡の景観 …… 11

第Ⅳ章　調査の概要 …… 19
1．調査の方法 …… 19
2．層　　位 …… 19
3．検出遺構 …… 19

第Ⅴ章　出土遺物 …… 38

第Ⅵ章　総　　括 …… 159
付　　書道美術館建設に伴う調査 …… 163

挿 図 目 次

Fig. 1 周辺の城跡
Fig. 2 発掘区周辺図
Fig. 3 ＳＦ－05平面・立面図
Fig. 4 ＳＫ－01・02上面の集石
Fig. 5 ＳＫ－01・02
Fig. 6 ＳＢ－04平面・立面図
Fig. 7 ＳＢ－05平面図
Fig. 8 ＳＢ－05立面図
Fig. 9 ＳＢ－05立面図
Fig. 10 トレンチ配置図
Fig. 11 トレンチ遺物出土地点
Fig. 12 Ａ・Ｂトレンチセクション
Fig. 13 Ｃ・Ｄトレンチセクション
Fig. 14 Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチ平面図
Fig. 15 Ｅトレンチ杭列立面図
Fig. 16 Ｇトレンチ遺物出土状況
Fig. 17 土師質土器実測図
Fig. 18 土師質土器，焼塩壺実測図
Fig. 19 土師質土器，瓦質土器，土錘，羽口実測図
Fig. 20 青磁実測図
Fig. 21 染付実測図
Fig. 22 染付実測図
Fig. 23 色絵，白磁，伊万里実測図
Fig. 24 伊万里実測図
Fig. 25 伊万里実測図
Fig. 26 伊万里実測図
Fig. 27 伊万里実測図
Fig. 28 伊万里実測図
Fig. 29 伊万里実測図
Fig. 30 唐津実測図
Fig. 31 伊万里実測
Fig. 32 唐津実測図
Fig. 33 唐津実測図
Fig. 34 唐津実測図
Fig. 35 唐津実測図
Fig. 36 唐津実測図
Fig. 37 備前実測図
Fig. 38 備前実測図
Fig. 39 備前実測図
Fig. 40 備前実測図
Fig. 41 備前実測図
Fig. 42 備前実測図
Fig. 43 備前実測図
Fig. 44 瀬戸・美濃系実測図
Fig. 45 瀬戸・美濃系実測図
Fig. 46 瀬戸・美濃系，産地不明陶器実測図
Fig. 47 産地不明陶器実測図
Fig. 48 産地不明陶器実測図
Fig. 49 産地不明陶器実測図
Fig. 50 産地不明陶器実測図
Fig. 51 瓦類実測図
Fig. 52 瓦類実測図
Fig. 53 瓦類実測図
Fig. 54 瓦類実測図
Fig. 55 瓦類実測図
Fig. 56 瓦類実測図

Fig. 57　瓦類実測図
Fig. 58　瓦類実測図
Fig. 59　銅銭拓影
Fig. 60　銅銭拓影
Fig. 61　銅銭拓影
Fig. 62　金属製品実測図
Fig. 63　金属製品実測図
Fig. 64　石製品実測図
Fig. 65　石製品実測図
Fig. 66　石製品実測図
Fig. 67　石製品実測図
Fig. 68　木製品実測図
Fig. 69　木製品実測図
Fig. 70　木製品実測図
Fig. 71　木製品実測図
Fig. 72　木製品実測図
Fig. 73　木製品実測図
Fig. 74　木製品実測図
Fig. 75　木製品実測図
Fig. 76　土師質土器，土錘実測図
Fig. 77　陶磁器類実測図

表　目　次

Tab. 1　出土遺物観察表

図 版 目 次

PL. 1 城山を望む
PL. 2 〃
PL. 3 詰
PL. 4 虎口
PL. 5 北ノ段
PL. 6 北ノ段北方下堀切
PL. 7 二ノ段下堀切跡
PL. 8 二ノ段・二ノ段より南に望む安芸市街
PL. 9 陸橋・桝形
PL. 10 桝形石垣・土塁（東南隅）
PL. 11 土塁（西）・土塁（北西）
PL. 12 南堀東側・南堀西側
PL. 13 東堀跡
PL. 14 西堀跡
PL. 15 発掘前
PL. 16 第Ⅰ層完掘状況
PL. 17 〃
PL. 18 ＳＳ－01・ＳＳ－02
PL. 19 ＳＳ－03
PL. 20 ＳＦ－01
PL. 21 〃
PL. 22 〃
PL. 23 〃
PL. 24 〃
PL. 25 〃
PL. 26 〃
PL. 27 〃
PL. 28 ＳＤ－03
PL. 29 ＳＦ－02
PL. 30 ＳＦ－03
PL. 31 ＳＦ－04
PL. 32 ＳＦ－05
PL. 33 〃
PL. 34 〃
PL. 35 〃
PL. 36 ＳＸ－01と周辺・ＳＸ－02
PL. 37 ＳＸ－02・ＳＸ－03
PL. 38 ＳＸ－04
PL. 39 〃
PL. 40 ＳＸ－05及びＳＸ－06・ＳＸ－05
PL. 41 ＳＸ－08
PL. 42 ＳＤ－01
PL. 43 ＳＤ－02・ＳＤ－03
PL. 44 ＳＤ－03
PL. 45 〃
PL. 46 〃
PL. 47 〃
PL. 48 〃
PL. 49 〃
PL. 50 ＳＫ－01
PL. 51 ＳＫ－02
PL. 52 〃
PL. 53 ＳＢ－01
PL. 54 〃
PL. 55 ＳＢ－02
PL. 56 〃
PL. 57 ＳＢ－03
PL. 58 ＳＢ－04
PL. 59 〃
PL. 60 〃
PL. 61 ＳＢ－04
PL. 62 〃
PL. 63 ＳＢ－05

PL. 64　ＳＢ－05
PL. 65　〃
PL. 66　〃
PL. 67　〃
PL. 68　〃
PL. 69　Ａ．ＴＲ・Ｂ．ＴＲ
PL. 70　Ｃ．ＴＲ
PL. 71　Ｄ．ＴＲ・土塁裾部１
PL. 72　土塁裾部２・３
PL. 73　Ｅ．ＴＲ柱根状木器検出状況
PL. 74　Ｅ．ＴＲ杭検出状況
PL. 75　Ｆ・Ｇ．ＴＲ・遺物出土状況
PL. 76　下駄出土状況・集石群検出状況
PL. 77　集石群検出状況・Ｇ．ＴＲ層位
PL. 78　Ｈ．ＴＲ掘立柱状自然木検出状況
PL. 79　〃
PL. 80　陶器碗，天目茶碗出土状況
PL. 81　蓋物，伊万里小杯出土状況
PL. 82　唐津焼・伊万里焼出土状況
PL. 83　備前擂鉢，備前小壺出土状況
PL. 84　唐津・伊万里焼，瓦出土状況
PL. 85　火打鎌出土状況
PL. 86　煙管，釣り針出土状況
PL. 87　切羽，金具出土状況
PL. 88　銅銭出土状況
PL. 89　〃
PL. 90　角杓側板，木器出土状況
PL. 91　棒状鉄製品，板状木器，砥石出土状況
PL. 92　出土遺物
PL. 93　〃
PL. 94　〃
PL. 95　〃
PL. 96　〃
PL. 97　〃
PL. 98　出土遺物
PL. 99　〃
PL. 100　〃
PL. 101　〃
PL. 102　〃
PL. 103　〃
PL. 104　〃
PL. 105　〃
PL. 106　〃
PL. 107　〃
PL. 108　〃
PL. 109　〃
PL. 110　〃
PL. 111　〃
PL. 112　〃
PL. 113　〃
PL. 114　〃
PL. 115　〃
PL. 116　〃
PL. 117　〃
PL. 118　〃
PL. 119　〃（金属製品）
PL. 120　〃（　〃　）
PL. 121　〃（小柄・銃弾）
PL. 122　〃（石臼）
PL. 123　〃（石製品）
PL. 124　〃（一石五輪塔・角杓　底板）
PL. 125　〃（角杓　側板）
PL. 126　〃（下駄・柱根）
PL. 127　〃（柱根，楊子，箸）
PL. 128　〃（刀形木製品，柱根，杭）
PL. 129　発掘調査に参加した人々

第Ⅰ章　調査にいたる経過

五藤家屋敷跡は，安芸市土居の安芸城跡内に所在している。

安芸城跡は，永録12年（1569）長宗我部元親の攻撃を受けて落城するまで安芸氏の居城であったが，慶長６年（1601）山内一豊が土佐入国の際，家臣の五藤為重が土居に入り，現在に至るまでその殆んどが五藤家の所有地となっているが，城跡内は高さ39ｍの城があったといわれる城山と，山裾に五藤館，五藤家の先祖を祀る藤崎神社があり，周囲をめぐる土塁の内側は畑として耕作されていたが，南正面は屋敷門の石垣があり，南及び東にも濠が残されており，昭和44年（1960）に安芸市文化財・史跡に指定されている。

城跡内には，昭和56年（1981）安芸市立書道美術館が建設されたが，安芸市には五藤家に伝わる武具，生活用具，美術品，古文書をはじめ数多くの考古資料や生産用具，民俗資料が保存されているが，管理・保存体制が不十分であるため，これを公的に管理・保存及び公開する施設整備のため，歴史と文化の香り漂う安芸城跡内の一隅へ歴史民俗資料館を建設する運びとなったことに伴い，昭和58年（1983）８月に発掘調査に着手したものである。

試掘では試掘区９個所すべてから，現耕作土直下から石列や礎石状遺構等を検出するとともに６世紀後半から７世紀に編年できる須恵器片など多くの遺物を発掘した。このため，調査は対象区全体にわたる全面発掘調査を実施し，昭和59年（1984）７月に発掘調査を完了する。

出土遺物については昭和59年（1984）６月から整理にとりかかり，昭和61年（1985）３月に完了する。

本調査で検出した遺構等については記録保存するとともに遺物等一部については安芸市歴史民俗資料館に展示し活用を図るが，歴史民俗資料館建設に当っては遺構保存のため高床方式とした。

今後，昭和61年（1985）３月に策定した「安芸城跡保存管理計画書」における文化財保存の諸点に留意しつつ，廓中武家屋敷などと共に保存管理を行い，後世に受け継いでいくことが重要である。

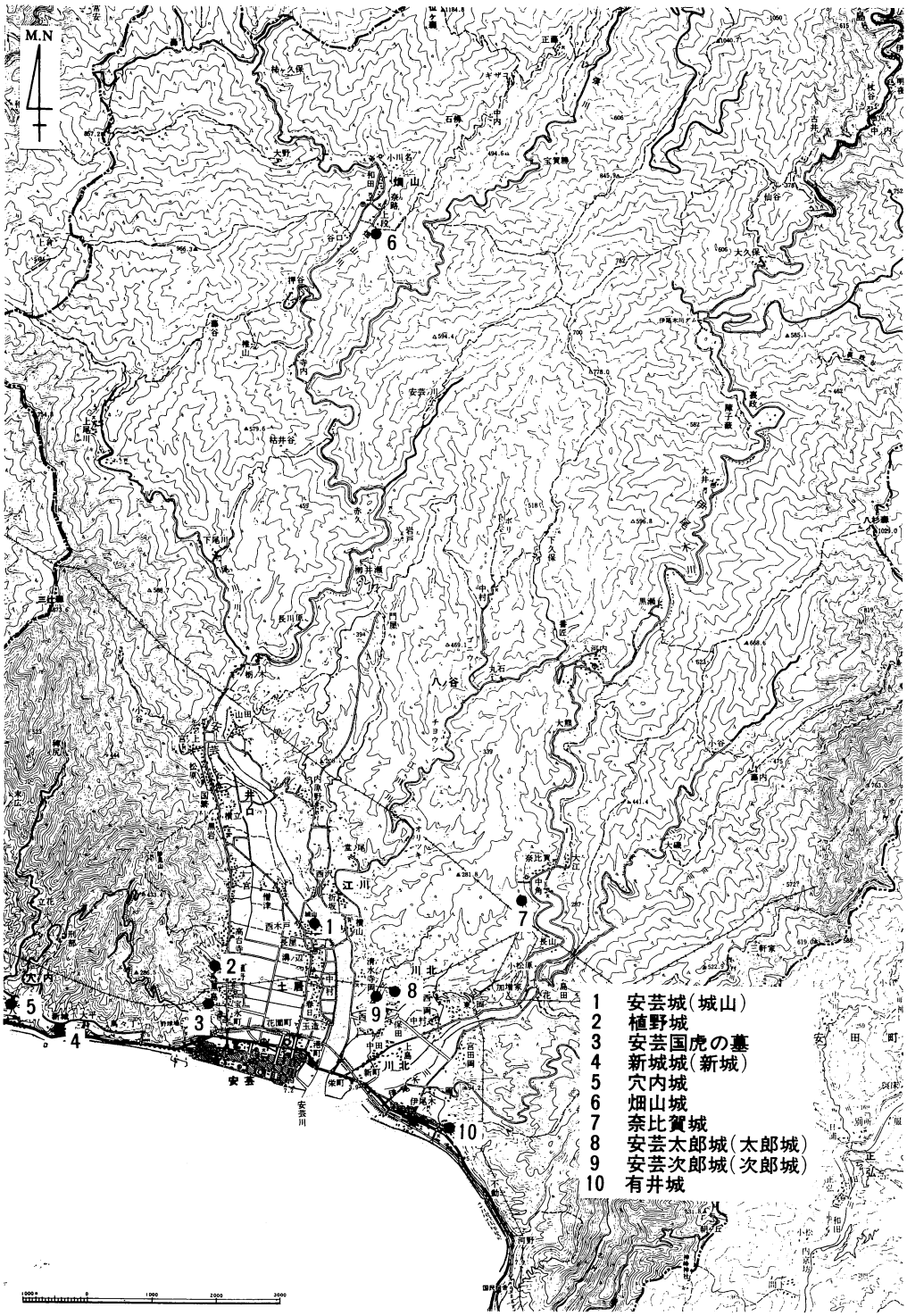

M.N
1 安芸城(城山)
2 植野城
3 安芸国虎の墓
4 新城城(新城)
5 穴内城
6 畑山城
7 奈比賀城
8 安芸太郎城(太郎城)
9 安芸次郎城(次郎城)
10 有井城

Fig.1　周辺の城跡

第Ⅱ章　周辺の歴史地理的環境

安芸市と香美郡物部村との境，五位ケ森付近に源を発して南流する安芸川と，同じく物部村との境，久々場山付近に源を発して南流する伊尾木川の下流に展開する安芸平野は，東・北・西を山に囲まれ，南は土佐湾に面する安芸郡内最大の平野で，古代条里制遺構にもみられるように早くから開かれた地である。古代条里制地割の復原は滋賀大学の小林健太郎氏が安芸川流域において示されたが[1)]，近年では高知大学の大脇保彦氏が小林氏とほぼ同じ復原を試みられるとともに，伊尾木川との間にも条里制地割の断片を認めることができるとしている[2)]。「一ノ坪」「ロクノツボ」は条里地名とみてよかろう。安芸川右岸の島状の小山丘は，中世この地の豪族安芸氏がその居城を構築し，近世には土佐藩家老五藤氏が南麓に土居を構えたところである。

条里制遺構のみられる安芸川下流右岸の地は，『和名抄』にみえる安芸郡８郷のうち３郷の比定地である。布師郷，玉造郷，黒鳥郷がそれである。布師郷は，伊勢本・東急本は「布乃之」と訓じ，高山寺本は「沼乃之」と訓ずる。康保４年（967）５月５日付の太政官符に「応補坐土左国安芸郡従四位下万業神社祝従八位下布師首勝士丸」（『類聚符宣抄』）とある布師首は，布師郷の居住者といわれる。地名は現存せず，万業神社の所在地も不明であるが，『土佐国蠹簡集木屑』所収の土佐郡潮江村（現高知市）寿命院所蔵の応永13年（1406）６月吉日付大般若経跋文に「安芸庄布師郷井口村一結衆」とあるところから，現安芸市井ノ口周辺に比定できる。妙見山東麓には７世紀後半と推定される井ノ口古墳がある。布師郷に比定される井ノ口の南には黒鳥の地名がある。黒鳥郷は伊勢本・東急本とも「久呂止利」と訓じ，黒鳥を中心とした地が比定され，５世紀代の集落関係遺跡として安芸橋付近遺跡がある。黒鳥の東，安芸川右岸の地に玉造の地名がある。玉造郷は伊勢本・東急本とも「多万都久利」と訓じ，玉造を中心とした地に比定され，古くは玉造部が住んでいたものと考えられている。

以上の３郷を中心とする地域は，平安時代末期には荘園化して安芸庄と称するようになったものと推定される。荘名の初見は建長２年（1250）11月日付の九条道家初度惣処分状で（『九条家文書』），別当三位源雅光が九条家に譲進し，道家が娘の四条院尚侍全子に譲与した荘園のなかに「土佐国安芸庄」とみえる。弘安９年（1286）12月25日付二条左大臣家御教書（『中臣祐春記』）に「安芸庄有（布カ）師郷年貢米到来」とあって，当荘内布師郷の年貢が春日社の費用にあてられており，このころ荘内布師郷が二条家に相伝されていたことがわかる。その後当荘は皇室領となり，後宇多院から京都槙尾の西明寺に寄進されたが，「かのあきの荘ハ，そま山ひろきところに候」とある（『西明寺文書』）。元応元年（1319）８月12日付の伴平内身曳状（『安芸文書』）には「安芸庄八多山」とあり，安芸庄は３郷の分布する地域だけでなく，安芸川上流の山間部をも含むものであったことがわかる。

荘域には安芸氏が居住し，中世には地頭職をえていたものと考えられているが，証すべき資

料に欠ける。延慶元年（1308）２月日付の安芸親氏城普請定書には「安芸両川七名つゝ之分，合◇（而カ）十四名」として，安芸川・伊尾木川流域の村々へ出役を命じたことがみえるが（『安芸文書』），これが安芸氏の支配を物語るものかどうかは定かでない。くだって文明８年（1476）６月11日付安芸元盛所領宛行状にみえる「安芸山中」の四至は「東者大通カキリ，南者八多山堺カキリ，西者大忍堺カキリ，北者別役堺カキリ」とあり，一族の八多山藤左衛門尉に宛行われている（『安芸文書』）。永正８年（1511）９月吉日付行宗兵衛左衛門尉証状にも「安芸畑山へ御あつけ候間」とみえる（『行宗文書』）。一方安芸浦八幡社棟札には「安芸荘八幡大檀那地頭橘元泰天文二年癸巳正月廿九日」とあって安芸氏の支配下にあったことがわかる（『土佐国蠹簡集』）。

昭和58年度に高知県教育委員会が実施した中世城館跡分布調査によれば，安芸市内で確認された城跡は10カ所，うち安芸平野周辺の城跡は５カ所である。調査結果を高知県教育委員会の『高知県中世城館跡分布調査報告書』によって示せば次の通りである。

名　称	所在地	占地	現存状況	遺構・遺物	築・在城者（推定・伝承）
有井城	伊尾木古城	台地	やや不良	詰・腰曲輪	有井又三郎・有沢岩見 長宗我部美濃
安芸太郎城	川北久保田	丘陵	やや不良	詰・腰曲輪・段状郭	安芸太郎
安芸次郎城	川北久保田	台地	やや不良	詰・堀切	安芸次郎
安芸城	土居廓中	山頂	良	詰他	安芸親氏・安芸国虎 長宗我部元泰・五藤為重
植野城	黒鳥植野	丘陵	やや不良	詰・段状部分	

安芸城をのぞけばいずれも安芸平野周辺部の台地・丘陵上にある。これらの城は，戦国時代には安芸城による安芸氏の支配下に入り，次いで長宗我部氏の支配を受けることとなる。天正17年（1589）の『安喜庄地検帳』にみえる安喜庄の荘域は，東は安芸川，北は井ノ口，西は妙見山，南は土佐湾に面する地域で，安芸川下流右岸にひろがる平野部，古代の布師郷，黒鳥郷，玉造郷の地域にあたる。以下『安喜庄地検帳』によって安喜庄を概観しよう。安喜庄の支配者であった安芸氏の土居のある土居村は，土居を中心に「御土居東」「御土居前」「御土居西」等とみえ，土居の周辺に屋敷が記されている。屋敷の数は「御土居東」12，「御土居前」26，「御土居西」10を数え，東に東木戸，北に北木戸，西に西木戸，南に大木戸があって四方に木戸が設けられていた。南の大木戸からはまっすぐ南にのびる街道があり，この街道をはさんで商人町が形成されていた。「新町東ノ丁」「新町西ノ丁」とよばれる両側町はそれぞれ屋敷数33で，北から数えて15屋敷は東西とも各屋敷は広狭さまざまであるのに対し，以南の18屋敷は20代均一である。この商人町について『土佐州郡志』は次のように記している。

釘貫

在土居南四百八十歩之外　安喜氏設関門于此　自此以内至大木戸皆為商人之家　今悉為田

（中略）

大木戸

在土居南百二十歩　旧城門之耳在故名

商人町は大木戸から釘貫までの範囲で，「新町東ノ丁」の南端付近の検地は

ホリ町ヤシキワリタシ外三十五代新丁ニナル

堀　村

一、弐十弐代三歩上屋敷　　池内与次兵衛給

と記される。町の南端は堀で画されており，その堀沿いに「安喜氏設関門」，外木戸ともいうべき釘貫門があったと考えられる[3)]。

商人町から南にのびた街道のさきは安芸浜で，東浜村，中浜村，西浜村からなる。安芸川の西に接する東浜村は屋敷数111，うち浜屋敷が88，観念寺，薬師堂，阿弥陀堂などがあり，船頭４，水主54，上乗４，鍛冶３が記され，中浜村は屋敷数34，うち浜屋敷20，念仏堂があり，水主28，上乗２，刀禰，小使が，西浜村は屋敷数93，うち浜屋敷34，長蔵寺，新蔵坊があり，水主52，中乗１，船番匠１，鍛冶２，刀禰が記される。又東浜村には133の塩浜が記されている。慶長２年（1597）の秦氏政事記（『土佐国蠹簡集』）には東浜刀禰として遠見甚十郎・須賀与左衛門，中浜刀禰中内杢左衛門，西浜刀禰浜川新兵衛の名がみえる。

土居の西方から西南方にかけてひろがる条里制遺構をとどめる平野をはさんで，北から井ノ口村，横立村，黒岩村，一宮村，黒岩村が妙見山東麓に展開する。井ノ口村は屋敷数51，他に茶堂（二間に三間）があり，定尺１，番匠１が居住しており，横立村は屋敷数25，うちに薬師堂があり，小使２，番匠１が，黒岩村は屋敷数24，定尺１が，一宮村は屋敷数41，うちに宝性坊があり，中間１が居住する。一宮村の村名となったと思われる一宮神社は地検帳にはみえぬが，ホノギに「一宮」があり，「一宮大明神燈油田」「当庄一宮神主領」などとあるので当然一宮神社は鎮座しており，文字通り安喜庄の一宮であったのであろう。黒鳥村は屋敷数54，うちに高台寺，開堂寺があり，鍛冶１が居住する。安芸氏の菩提寺浄貞寺は一宮神社同様地検帳にはみえぬが，「浄貞寺領」「浄亭寺領」が黒鳥村，一宮村などにみえる。

山内一豊が入国すると，家老五藤為重が安芸氏の土居に入り，安芸平野は五藤氏の知行地となって江戸時代を推移する。以下江戸時代の中世の安喜庄の荘域にあたる地域について概観しよう。五藤氏が土居を構えた土居村は，元禄年間と推定される『七郡本田新田地払帳』（以下『元禄地払帳』と略す）によれば，本田1,008石余，新田139石余で，うち本田191石余が五藤外記の知行，27石余が土居付引地であり，本田788石余が蔵入地，新田83石余が御貢物地であった。『土佐州郡志』は

東抵西川西抵阿曾宇田南抵東濱北抵僧津村　東西十一町南北十五町　安喜氏嘗建営于此

宮殿門観旧地具存　土田平衍河水達其東山麓環其西　川陸之所輻湊隠為一都　然土薄産瘠編民稀少大非昔比矣

と記し，玉作（戸数17）・古弓場（戸数２）・輿休（戸数１）・踊堂（戸数７）・釘貫・一和尚（戸数４）・土居・西木戸（戸数35）・北木戸・摩利支天・大木戸の小村を記す。『御国七郡郷村牒』（以下『寛保郷帳』と略す）では戸数222・人数932・牛４・馬107とみえ，安政４年（1857）の「土居村御改正廉書指出」には戸数280（うち農家161）・人数1,293とあり，農業従事者以外のものとして医師４・諸職人21（紺屋１・木挽６・枌批２・大工６・樽屋３・鍛冶屋３）・紙漉５・焼物師山師３・店屋12（取扱い商品ー草履・鞋・密柑・豆腐・蒟蒻・酒・燈芯・附木・切煙草・臘燭・鬢附・本結・半紙・唐津物・墨筆・箕笠・木履）・居商１・特商１・博労２のほか間人150人が記されている[4]。江戸時代を通じて新田の増加は50石ほどである。

土居村の北に接する僧津（僧都）村は，『元禄地払帳』によれば本田476石余，新田90石余で，幕末までの新田の増石は少ない。『土佐州郡志』は戸数60，「其地砂土」と記していて，安芸川の土砂の堆積地であったものと思われる。『寛保郷帳』では戸数97・人数374・牛７・馬54。僧津村の西方，妙見山東麓に一宮村がある。『元禄地払帳』では井ノ口村と合わせて本田2,102石余，新田462石余で，うち本田196石余が五藤外記の知行，新田225石が五藤外記の役知とある。元禄13年（1700）の『郷村牒』（以下『元禄郷帳』という）では一宮村として983石余が記され，『寛保郷帳』でも同石，戸数145・人数554・猟銃４・牛15・馬65。『土佐州郡志』は井ノ口村の小村としており，戸数56としている。一宮村の北が井ノ口村である。『元禄郷帳』では763石余，『寛保郷帳』でも同石，戸数230・人数924・猟銃５・牛28・馬89で，『元禄地払帳』では前記の如く一宮村と合わせて記される。安芸平野の北端近くにあるため，安芸川の水を潅漑用水として引くのには地の利を得ていたといえるが，毎年下流の農民との水争いが絶えなかった。なお地検帳にみえる横立村・黒岩村は，江戸期には井ノ口村に含まれる。

安芸浜村は現在安芸市の中心となっている地域で，地検帳の東浜村・中浜村・西浜村からなり安芸三浜と呼ばれたが，享保２年（1717）中浜村が西浜村に合併されて西浜村・東浜村となったという。山内一豊入国当初の慶長８年（1603）の『土佐国浦戸ヨリ東浦々船頭水主帳』には水主138人が記されるが，うち本水主110・間人22・前之先頭３・扶持船頭３・ほか６とあり，ほかに鍛冶５軒・舟大工４軒・塩焼６軒・百姓10軒・鍛冶荷持20軒・庄屋小使６軒，ほか18軒とある。その後野中兼山執政時代にはきびしい統制と労役の徴発により疲弊したが，寛文改替後は息を吹きかえし，天和３年（1683）の『浦々諸廻船并水主員数』には水主385人で安芸郡一を誇り，船数は廻船・いさばが74・漁船13で，廻船業の繁栄ぶりがうかがわれる。『元禄地払帳』では東浜村が本田699石余・新田83石余で，本田のうち108石余が五藤外記の知行，新田のうちには１石余の五藤外記船屋敷がある。西浜村は本田746石余・新田52石余で，黒鳥村は西浜村に含んで記されている。『寛保郷帳』では黒鳥村は安芸浜とは別に記され，黒鳥村の地高1,258石余・戸数39・人数172・牛４・馬107，安芸浜村の地高186石余，戸数675・人数3,693・

船数68とある。安永７年（1778）浦奉行谷真潮の巡見記『磯わのもくず』に次のような記事がみえる。

（上略）安喜浦廻船十弐艘，伊尾木弐艘あり，宿りのあるし船もたつといへは，この頃保佐木大坂へ積みのぼりて廉直といへる事するはよきやあしきと問ふに，大坂の問屋廉直をきろふをみれば，廉直はよろしきなるへし。安喜浦の船は前々より脇うりせず大坂へのみのり入てうる。されと去年よりはあたひ極めていやしく，度ことに損のみして舟もてるものくるしみつかれたり。されとわきうりせぬゆゑ，安喜浦の船をば大坂よりもたのもしくあつかふかたなるよしいふ。（下略）

保佐木取引の有様がよくわかる。寛政３年（1791）の『浦分改帳』（『南路志』）によれば，東浜の戸数274・人数1,947・町は本町・裏町・浜町の三筋からなり，分一家１・御蔵２があり，漁業は春は鰯・鯖・鰺，秋は鰤・鯨，冬は鰯・さごしを獲り，漁業の合間には田畑の作付や舟積みの日傭仕事に携ったという。西浜の戸数は217・人数1,357。廻船は東浜・西浜ともで６・いさばも同じく４・地挽網船は東浜・西浜・伊尾木・松田嶋ともで35・小八太船は東浜に15・地挽網は西浜・伊尾木・松田嶋ともで35・小八太網は東浜に３・磯立網は西浜・伊尾木ともで10である。西浜の漁業は春は鰯・さごし・兵鯛・ひらご，夏は鰺・鯖・小鰯，秋はうるめ，冬は鰯・うるめ・さわら・さごしを獲り，漁業の合間には田畑の作付，塩仕成，舟積みの日傭，山仕事に携ったという。西浜には高札場１・火立場１・塩釜９があった。弘化４年（1847）の「安喜浦東浜指出」「安喜浦西浜指出」[5)]には両浜の詳細な記載がある。それによれば戸数に大きな変化はみられないが，人数は東浜2,113，西浜1,531と増え，漁船数は東浜66，西浜61と大きく増えており，その発展ぶりがうかがわれる。

註

1　小林健太郎氏「土佐安芸浜と土居城」（藤岡謙二郎氏編『地形図に歴史を読む　第四集』）

2　大脇保彦氏「土佐の条理」（山本大氏編『高知の研究２　古代・中世篇』）

3　島田豊寿氏「安芸商人町について」（土佐史談　第149号）

4　「安政四丁巳年二月　御改正廉書指出　土居村」（『安芸市史　資料篇』）

5　『安芸市史　歴史篇』

第Ⅲ章　城跡と土居跡の概要

1．城跡と土居跡の歴史

安芸川右岸の小山丘上の安芸城跡とその麓の土居跡のある安芸市土居は，安芸平野のほぼ中央に位置し，山上からは安芸平野全体が一望できる。安芸平野の南辺，土佐湾に面した安芸浜を東西に土佐街道（東街道）が通り，安芸浜を起点として２つの道が，北方山中の畑山に至る。その１つは土居の西方妙見山の麓を通る僧津道であり，いま１つは土居を通る土居大道である。安芸城跡と土居跡は，安芸川と土居大道の間にある。

延慶元年（1308）２月の安芸親氏城普請定書（『安芸文書』）に

（端裏書）　　（姓）
「安藝両川十四名百性中　　親氏」

（而カ）
安藝両川七名つゝ之分，合□十四名，

西川之分，二名初山，一名中之川，一名安藝川，一名とちの木，一名穴内，一名小谷，

東川之分，二名大井，二名別役，一名嶋山，一名橘，一名黒瀬，

城之ふしん事，西川ハ大門之右之柱より南，尾崎をまわし，西をのほり，北の大楠之木の本まで，

東川は大門の左の柱より北をのほり，尾崎を西へまわし，大楠之木の本まて，従先年定也，

安藝
延慶元年貳月□　□　　橘親氏（花押）

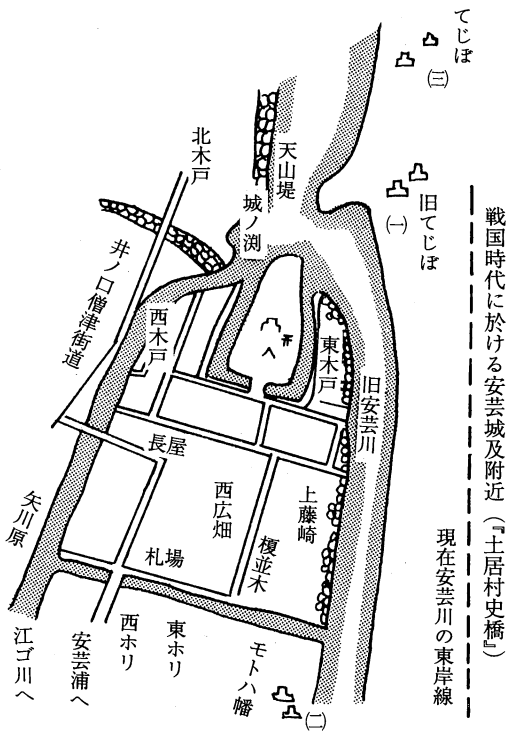
とみえ，このとき親氏が築城もしくは修築した城が安芸城であろうと考えられてきた。しかし，『土佐国地方史料』（『近世村落自治史料集　第二輯』）は，「コノ文書，筆蹟ヲ見ルニ恐ラク当時ノモノニ非ルベシ」と註していて，安芸氏の支配はもちろん城の普請についても疑問が残る。

安芸氏は壬申の乱で土佐に配流された蘇我赤兄の子孫とされるが，赤兄の土佐配流を記した確たる史料はない。伝説の域をでないこの説の因となったのは安芸家系図（『土佐名家系譜』）で，その赤兄の項には「左大臣，天武天皇白鳳元年八月，配流土佐国，裔孫，自是代々，住安藝，領安芸一圓並夜須大忍庄」とある。蘇我氏のほか『続日本記』神護景雲元年（767）６月22日条の西大寺に牛60頭，稲２万束を献じた「土佐國安藝郡少領外従六位下凡直伊賀麻呂」の後裔とする説，藤原氏説，橘氏説，惟宗氏説などがある[1)]。『土佐国蠹簡集』巻２には，前記のように安芸八幡宮の天文２年正月29日付の棟札が収められているが，これに註して編者奥宮正明は次のように述べている。

今按安藝姓橘旧作蘇我為赤兄之裔或作惟宗未詳今検安喜八幡棟札皆作橘且彼氏族至今以橘為家紋寔有由哉可考也世領安喜郡西半分居于土居城故以安藝為氏家系未詳里人所蔵系譜今以旧文書正之罅漏百出可笑者多焉故不取之

安芸氏の名は『平家物語』巻11（能登殿最期）に，「ここに土佐国の住人安藝郷を知行しける安藝の大領実康が子に，安藝太郎実光とて，卅人が力も（ッ）たる大ぢからのかう物あり。われにち（ッ）ともおとらぬ郎等一人，おととの次郎も普通にはすぐれたるしたたか物なり。」とみえる。戦国期に安芸国虎がでて勢力をふるい，いわゆる土佐守護７人の１人に数えられたが，やがて長岡郡岡豊城（現南国市）に拠った長宗我部元親の進出によって安芸・長宗我部両氏の間に紛争が繰り返されることになる。永禄６年（1563）長宗我部氏が長岡郡の本山氏攻撃のために兵を派遣したすきをついて，国虎は一条氏の援助を得て岡豊城を攻めるが，長宗我部氏の武将夜須（現香美郡夜須町）の吉田重俊の救援によって敗走する。その後一条氏の調停で両氏は一旦和睦したが，永禄12年（1569）元親に岡豊城に招待された国虎は，これを降伏を要求するものと思い，拒絶して配下の武将を集めて決戦に備えた。しかし矢流（八流）の要害を破られ，城内に元親に内通するものがでて，ついに国虎は菩提寺浄貞寺に入って自害し，安芸氏は滅亡した。安芸城には元親の弟香宗我部親泰が入って安芸氏を称したが，親泰が長宗我部氏の阿波攻撃に出陣したあとには元親の子盛親が，次いで家臣岩神新右衛門が在城した。次の岩神左衛門は城には入らず番士を置いて，自身は安芸浦に役宅をかまえた。

安芸城と土居については，天正17年（1589）の『安喜庄地検帳』にもみえず定かでないが，『土居村史稿』は次のように述べている。



漸次東方へ流れさしたる安芸川の水は川北村「テジボ」の岬にて淀み水勢は城山北の城の渕へ注ぎ而して二手に分れ一部は現在の安芸川を小巾にて注ぎ，一部は城の渕より城山の西を廻り矢川原を通りそれより南流して安芸江ご川に注ぎたるべし。而して城の渕の水は一部城下を廻りて現在の堀となる。尚矢川原の水は小流となりて札場（科人掲示，広告，両替所）を東へ流れ「西ホリ」「東ホリ」を通り「モトハチマン」の前の前より安芸川に入りたるなるべし。此の矢川原の水こそ安芸城の外堀を形成せるものと考察す。口碑，伝説にも外堀はなきも国虎五千の兵を持ち且つ七千の岡豊に戦をいどむについては現在残れる城下の堀のみにては余りにも手薄い感あり。

之より下りて二代将軍の世安芸川氾濫して「テジボ」は流失す，而して此の「テジボ」以南川北村分の安芸川東岸は浸蝕され，現在安芸の本流となり，又城の渕の西端に提を築き矢川原へは水を通ぜず此の地漸開墾せられたるなるべし。

これに対して安岡大六氏は，「さて，安芸氏の土居の構造は，当時は東に安芸川，北に城ケ渕，西は矢川，南は溝辺附近の堀を合せて，外堀としていた。そして，現在の廓中部落の処に高さ約一米位の石塁を周囲に設け，四方に門を開いていた。現に東木戸，西木戸，北木戸の地名が残っている。」[2]と述べ，島田豊寿氏は「現在土居の堀は内堀で，その外に西木戸，大木戸を結ぶ城門線があり，最も外側にこの外堀があった。すなわち土居南方は，三重に囲郭された広域で複郭式の厳重な構えである。特に土佐では珍らしく，町そのものが城濠で囲い込まれたいわゆる町惣構である。」[3]と述べている。『安喜庄地検帳』には前項で触れたように，土居周辺には番衆と思われる給人屋敷が多くみられ，四方の木戸も記されているが，『土居村史稿』のいう矢川原に通じていたという流れ，安岡氏のいう矢川らしいものはみられない。のちに記す寛文年間頃のものと思われる「安喜土居構之繪圖」にも西流する安芸川の支流はみえない。又『土居村史稿』のいう「城の渕の西端に堤を築き」とある堤もない。これは文化４年（1807）の「安喜土居内外細圖」でも同じである。しかし後者には「城ノ渕」から西に流れる「ミソ」が描かれている。前者には「土手ノ残」「石垣ノ残」「堀ノ跡」が描かれていて，島田氏のいう「町惣構」を彷彿させるものがある。

今回の発掘調査では，後に詳述されるように江戸期の建物跡などの遺構が重なった状態で確認されたほか，中世の遺物も出土しており，下層に中世の遺構が埋もれている可能性があることから，中世の土居即ち安芸氏の土居は城山の東麓にあったものと推定される。発掘部分の南部は下方が湿地であり，これを江戸期に埋め立てていることから，安芸氏の土居はこの湿地より北の山麓にあったのであろうか。城山の南部は，現在の土居構えの南濠にも達するほど南にのびていたのを，五藤氏が土居を拡張するために相当大きく削りとり，その土で城山東南麓の湿地を埋め立てたのではなかろうか。したがって城山の遺構をのぞく山麓の部分については，江戸期に拡張されたものと考えるのが妥当かもしれない。安芸城がいつ取り壊されたものかは不明である[4]。

慶長６年（1601）山内一豊の土佐入国後は，家老五藤為重が1,100石の知行をうけて土居に入り，幕末まで五藤氏が居館を構えていた。為重以後加増もあったらしく，５代正量は1,900石を相続し，６代正保は2,800石を相続している。五藤氏は，橘諸兄の末裔三郎左衛門淨基が山内一豊の父盛豊に仕え，その子吉兵衛為淨は13歳で一豊の家臣となり，元亀元年（1570）越前朝倉合戦に従軍した折，久具坂で主君一豊が敵将三反崎勘右衛門と格闘の末その首を獲たが，自らも顔面に矢を射込まれて苦しんでいたのを為淨が救助し，その顔を踏んで矢を抜くことができた。その後為淨は，天正11年（1583）伊勢亀山城攻めでその先頭にたち討死した。一豊はその遺烈を重んじ，為淨の実弟為重を抜擢して家老に列し，土佐入国にあたって安芸土居に置いたのである。土居は五藤氏によって整備され，改築，修復が繰り返された。その変遷は五藤家に残る絵図面によって知ることができるが，「五藤家文書」にも天和３年（1683）の洪水によって門の石垣が崩れたことがみえ，元禄16年（1703）には土居修復のために藩の援助をうけ，宝暦10年（1760）東西の堀と石垣の改修が，寛政12年（1800）土居内側の改修が行われたことがみえる。絵図面については後項に譲るとして，ここには享保５年（1720）の次の文書を紹介して参考に供することとする。

安喜土居構之内間数地坪覚

一屋鋪之門内地形　東西平ホ　弐拾間

一同断　南北平ホ　六拾間

右坪数千弐百坪

一同家作有之屋地之分　東西平ホ　三拾間

但門内之地形ゟ五尺余高壇

一同断　南北平ホ　弐拾三間

右坪数六百九拾坪

合千八百九拾坪

一古城山屋鋪之後北ニ覆有

一高　正面坂下ゟ　拾弐間

一山上ニ壇之有

上ノ壇　南北弐拾間　東西拾三間余

北二壇目南北拾弐間

北三壇目南北拾九間余

一同山之根置 南北 百拾間斗

一同根置 東西 四拾間斗

一右屋鋪構之外三方ニ水堀有近年ハ連〻ニ埋リ大躰源堀縁ゟ八九尺幅平ホ六七百

(張紙)

附リ門之左右ニ屏但屏下之外分土手薮生立　　此屏寶永四亥年地震ニ崩修補未調

一土居下北東ハ川筋近ク南西ハ家来共住居を構罷在ㇵ 町屋ハ無御座ㇵ

右古城之儀ハ永祿之末迠安喜備後國虎居城之旧跡ニ而御座ㇵ長宗我部元親ゟ攻落ㇵ己後元親二代目盛親破滅之時節迠十市新右衛門と申者古城南之山下只今之土居屋鋪ニ在住仕近邊を相守旨申傳候以上

子

十月廿五日

明治２年（1869）高知藩に次のような内容の伺が出される。

覚

一近〻家族共土居引拂ㇵ上門并外ケ輪掛リ之塀ハ其儘閣可申哉又ハ取壊ㇵ様可被仰付哉之事

一東西之堀ハ其儘差置ㇵ様被仰付度事（但書略）

一家宅并長屋等ハ一切取壊チ可申事

一叢社并墳墓等ハ其儘差置申度事

一竹木之儀ハ先達而得御差図ㇵ通可相心得事

一右跡地如何可被仰付哉考合之筋も御座ㇵニ付御區別被仰付度事

以　上

己十一月九日

翌明治３年高知藩では「門塀等取除可申事」「堀ハ其儘ニ閣可申事」「跡地本田ニ付貢物相立扣へ可申事」との附箋をつけて指示を与えている。こうして門，塀，家宅，長屋等は取壊されて土居の景観は一変する。

２．城跡と土居跡の景観

イ．城跡の現状

城跡のある城山は標高39ｍ，比高25ｍで，東西100ｍ，南北190ｍの山裾部をもつ長楕円形の小山丘である。山頂部に構築された詰ノ段は南北88.5ｍ，東西は南端近くで20ｍであるが北へいくほど狭まり，北端部では１ｍほどとなる。段内は三段に築成され，北の段ほど低くなる。

即ち南端から39mの地点で東西に直線的に切られ，切口に石積みがなされていたようだが現在は破壊されており，ところどころに石が残存する。高さは現状で0.5～0.6mほどである。この石積みから23mの地点で石積みの箇所と同じ様に東西に直線的に切られ，切口に石垣が築かれている。石垣の高さは1.6m，人頭大の河原石等を10mほどにわたって築いているが，現在は西端部近く3mほどをのぞいて崩壊している。南ノ段は南端が半径10mの半円形で，北端は前記の如く直線的に切られる。ほぼ真南方向に虎口が設けられ，南下方の二ノ段へ下りる。虎口は上部で3m，基底部で1.8mであり，この虎口を挟んで東西に土塁がのびる。東側の土塁は虎口に面する部分で基底部幅7.4m，高さ1.0mのかまぼこ状を呈し，詰の南から東側にかけてその幅と高さを減じながら13.8mのびて消滅する。西側の土塁は虎口に面する部分で基底部幅10m，高さ1.5mで，内側はやや丸味をもつたちあがり，外側は比較的急傾斜をなす。虎口から西へ6mのび，ここからゆるやかに北に曲がり，その幅と高さを急速して減じながら北へ33mのびて消滅する。中ノ段は方形で土塁などの址はとどめていない。北ノ段は三角形を呈し，西側に土塁が残る。基底部幅は3.0～3.5m，高さ1.4m～1.6mのかまぼこ状をなし，内側に流土防止のための腰巻石が残存する。この土塁は中ノ段との境から12.0m北へのび，上部で3.2m，下部で1.8mにわたって一旦切れたのち，更に13.5m北へのびる。切れ目は下方への下り口と考えられる。下方にのびていたはずの道は著しく破壊されている。

詰北ノ段の北方は尾根だが，ここに二条の堀切がある。北ノ段のすぐ下の堀切は上部幅3.0m，底部幅1.2m，深さは北ノ段側で1.4m，北側で0.2mで現状では堀切らしからぬ地形となっている。この堀切と1m余の間をおいて上部幅7.0m，底部幅2.5m，深さは南側（詰北ノ段側）で3.5m，北側で1.6mの堀切がある。堀切は東西下の斜面に竪堀状となって下る。この堀切の北は尾根が5.5mほどのびて北端は崩崖となっている。崩崖は北端ばかりでなく，尾根の西斜面下にもみられ，詰北ノ段北部下に至っている。この崩崖は人工のものと思われる。

詰ノ段西方下21mに幅10m，南北75mほどの段があり，今は畑・簸・民家の敷地となっている。前記の詰北ノ段から西下方に下りた道は，この段に通じていたものと思われる。この段の北にも1m低い段があり，ここから西へ110m余にわたって土塁が残存する。東端近くで幅6.0m，西端部では幅2.0m，土塁北側の水田面との比高は2.0mである。

詰ノ段南下方5mに二ノ段がある。東西幅は詰ノ段下で15.0m，南端部で5mほどで，詰ノ段下から南端まで25mを計る。二ノ段東北部，詰ノ段虎口からの通路をはさんで狭長な段が詰ノ段東方下を北にのびる。段の幅は4.0～7.80mで，一部後世崩落したと思われる箇所もあるが，通路から86mほどで消滅する。

二ノ段南下方には堀切が僅かにその姿をとどめている。上部幅10m，底部幅3.0m，深さは二ノ段下で8.3m，南側で2.2mで，堀切の南には尾根が残る。二ノ段東北部から下りて来た通路はこの堀切の内側に通じ，更に山麓に達する。この通路脇から北へ43mにわたって狭長な段がのびる。幅は5.0～5.5mで，一部崩落により幅が狭くなっているところもあり，北端に近づ

くにつれて幅が狭くなり，やがて消滅する。尚，通路に接する段外側に土塁状地形がみられる。基底部幅2.20m，長さ6.70mである。

城山の南端近く，二ノ段下の堀切から南端にかけての西斜面は崩落している。又城山南端は切断され，その切断面には高さ2.40mの石垣が築かれている。石垣は南面直線面で15.60m，東端から東北へ斜面に沿って4m，西端から北へ11.80m以上にわたっている。この石垣は，五藤氏の代になって造られたものと推定される。

ロ．絵図面にみる城跡

「安喜土居構之繪圖」は安芸土居図では最古のものと考えられているもので，その制作年代は定かではないが，五藤家に伝わる「佐川土居繪圖」(寛文12年－1672)，「宿茂繪圖」(延宝7年～天和3年－1679～1683)，「窪川繪圖」(寛文年間)，「本山土居構之繪圖」と同時代のものと推定される。大小2枚あり，細部に相異がみられるが大略同じ内容のものである。いまは大きい方をA（1.495m×1.650m），小さい方をB（1.225m×1.325m）としてその違いを記すこととする。両絵図とも彩色を施こす。

古城山高坂口ヨリ上ノ壇迄十二間ノリナシ

同山ノ根置南北百十間餘

同根置東西四十間餘

と城山の規模を記し，城跡の各段等について詳細に描き説明を加える。詰ノ段は南から上ノ壇，北二壇目，北三壇目として「上ノ壇　南北二十間　東西十三間餘」「北二壇目　南北十三間餘」「北三壇目　南北十九間餘」と記し，各段の境に石垣を描いている。上ノ壇は現状の項で述べた南ノ段，北二壇目は中ノ段，北三壇目は北ノ段である。上ノ壇はＡＢいずれも北の石垣の部分を除いて土塁と虎口を描くが，北三壇目はＡが西側と東側南部に土塁を描いているのにＢには土塁が描かれていない。北三壇目の北の尾根には2つの堀切がある。詰ノ段南下方には南二壇目があり「南北十四間半　東西九間半」と記し，詰ノ段虎口からの通路を挟んで詰ノ段東下方を北にのびる狭長な段の外側には土塁をＡＢともに描き，段は北端で北三壇目につながっている。南二壇目の南下方には南三壇目があるが，他の壇と違って南北東西の間数は記されていない。壇状地形ではあるがもともとが堀切であったのだから当然のことで，壇の西北方から西下方に通路が描かれており，堀切西側は竪堀となって山麓に達していたため，これが通路の役目をはたしていたものと思われ，Ａではこの通路に沿って柵が描かれていて，柵は壇上を東の山麓までのびている。南三壇目から北へ狭い段がのびる。詰ノ段から下りてきた通路は，南三壇目東北から北東下に下りて山麓に達する。下りついたところにＡＢともに「坂口　但今ハ崩レ切岸」と記す。城跡へのこの登り口は崩落していたのである。又北三壇目からは西南下方に通路が描かれており，Ａでは西側の土塁の切れ目から下りるように描かれている。

城跡の北から南流して城山北端に突き当って流れを東南に変える安芸川は，城山の北端に渕をつくる。この渕の少し上流で安芸川は二筋に分れて中洲をつくり，北三壇目東方で合流する。

東北麓には脇ノ壇がある。現在藤崎神社が鎮座しているところで「南北二十二間，東西十五間」である。西麓には３つの壇がある。南の壇が「南北十四間半」，中の壇が「南北三十間餘」，北の壇には間数の記載はないが，この壇から西にのびる土塁は竹籔となっている。

「安喜土居内外細圖」（1.210ｍ×2.090ｍ，彩色，文化４年－1807）

詰ノ段は南北２つに石垣を境に仕切られ，南を「本壇」，北を「同北ノ段」とする。「安喜土居構之繪圖」の「北二壇目」が「上ノ壇」に吸収された形で，すでに現状に近い状景になっていたことが窺われる。本壇には虎口ら東西にのび，それぞれ北に曲ってのびる土塁が描かれる。北に曲ってからの土塁は西側に比して東側のものが短かい。詰ノ段東下方には南北にのびる「コシクルワ」があり，北端は本壇北ノ段の中央部に達する。詰ノ段南下方には「二段」，その下には「一段」を描くが，現状からするとこの部分に２つの段を認めることはできない。「一段」下の堀切はこの図でも通路として描かれ，その中央部に木戸があり，ここから東西の麓に下りている。堀切の南の尾根の残った部分は現在でも半円球形を呈しているが，本図ではこれを「丸山」と記す。詰ノ段の虎口から下りた通路は「二段」「一段」の東を通って堀切の木戸に至るものと，「二段」東端から南東に下りるもの（麓に木戸がある），「コシクルワ」を北に進んで北端から本壇北ノ段に通じるものがある。又本壇北ノ壇の西南部から南西下方に下りる通路があり，これを下りると「御花畠生姜畠」に達する。ここは「安喜土居構之繪圖」の中の脇ノ壇にあたるところである。北の脇ノ壇は，本図では「大竹籔上段」と記され，ここから西にのびる土塁は「同（大竹籔）下段」とあって，いずれも文字通りの竹籔である。本壇北ノ段の北の尾根には「馬ノ背」と記され，ここを東西に道が越える。この道は堀切と思われる。安芸川は城山の西北から東南にかけて流れるが，城山北端には突き当らない。堤が築かれたからである。この堤の内側に大小の渕があり，城山北西の大きな渕を「城ノ渕」，北の小さな渕を「小渕」と記す。

ハ．土居跡の現状

城山山麓に展開する土居跡は，城山を背に東・南・西に土塁をめぐらし，南と東南部の土塁外側に濠が残る。南の土塁中央やや東寄りに表門が開く。間口は5.2ｍで，両脇には基底部幅3.7～3.8ｍ，高さ2.4ｍの石垣が築かれる。石垣は東側が東西３ｍほど，相対する西側は東西５ｍほどで間口で北に折れて10.0ｍ内側に入り，更に東へ折れて6.3ｍのびて桝形を形成する。表門正面からは内部がみえない構えになっているわけである。西側石垣の内側には北へのびる石垣に平行して石垣に上る石段が設けられている。表門石垣から東にのびる土塁は基底部幅7.5ｍ，高さ2.1～2.4ｍで外側の傾斜は40度で，内側の傾斜は45度。石垣から土塁東端までは39ｍほどであるが，石垣に続く11.3ｍの部分には内側に高さ２ｍほどの石垣が築かれている。土塁は東端で北に折れるが，この北に折れたところから２ｍほどの部分内側には石垣がある。北にのびる土塁は基底部幅5.0ｍで，南の土塁東端から北へ55.0ｍ（土塁の高さはこの部分は南端と北端を除いて他の部分より低くなっている）のところで南へ7.0ｍ曲り，更に北西へ200ｍの

びて城山にとりついている。城山下から南東へ95.0ｍの間の土塁内側には1.8ｍほどの高さの石垣が築かれているが，現在その一部は崩壊している。この部分の土塁外側の傾斜は50度，内側の傾斜は75度である。又東側土塁の途中で東に曲り，北西に折れたところから3.70ｍの地点から北へ上部で長さ10.10ｍ，基底部で長さ5.20ｍにわたって土塁が切断されている。

表門石垣から西の土塁は基底部幅7.0ｍ，外側の傾斜40度，高さは表門石垣より１ｍ低く，西に52.0ｍのびる。西端部は1.6ｍ高くなり，北に折れて100ｍほどのびて段状地形（「安喜土居構之繪圖」の脇ノ壇）にとりつくが，南端から北へ80.0ｍまでの部分内側には1.6～1.8ｍの石垣が築かれ（外側の傾斜50度，内側の傾斜75度），南端近くには内側から南へ斜めに上る石段が，中央部には土塁と直角に上る石段が設けられている。

表門からは土塁の外側（南）へ幅4.5ｍの陸橋が設けられ，陸橋の東西には土塁に沿って濠が残る。陸橋の中央南寄りと陸橋南詰には東西に通水溝が穿たれている。陸橋東側の濠は幅10.0ｍで東へ57.0ｍのび，北に折れて25.0ｍ残る。この濠の東南隅から幅の狭い水路が東にのびる。陸橋西側の濠も幅10.0ｍで西へ54ｍのび，西端部で幅8.0ｍとせばまり，北に折れて幅1.5ｍと一段と幅をせばめながら9.00ｍ残っている。濠の石垣の高さは北側（土塁側）で1.0ｍ，南側で1.2ｍである。

東側の濠は，南から25.0ｍ付近から北が埋め立てられて現在宅地・道路・水田となっているが，北部の水田にその址をとどめているといえようか。一方西側の濠は南から9.00ｍ付近までが一部を残して埋め立てられて宅地となっているが，ここから北へ190ｍほどにわたる部分は，ほとんど埋め立てられぬまま宅地・畠地となってその址をとどめており，南端部の幅25.0ｍ，北端部の幅10.0ｍで，北端部内側下方に北方からの通水溝が残る。又この濠址西側のほぼ中央部付近には幅の狭い水路が西方から通じているが，現在は使用されていない。

土居跡内側は，表門を入って北へ真直ぐに道が通じ，北詰には藤崎神社が鎮座する。この道をはさんで西側，土塁内側には五藤氏の屋敷があり，五藤氏の屋敷と城山の間は畠地となっているが，西側土塁と城山の間は植樹がなされ，その北は籔となっている。道の東側には土塁内側の空閑地をへだてて安芸市歴史民俗資料館が建ち，更にその北には安芸市立書道美術館が建っている。書道美術館の西側には井戸が残り，道をへだてた西側の畠地にも井戸がある。

ニ　絵図面にみる土居と土居跡

「安喜土居構之繪圖」

「濱町ヨリ土居迄十八町」（Ｂ），「濱上町通町ヨリ土居門迄十七町五十五間」（Ａ）で，「東臺山ヨリ土居迄二町半」，「北臺山ヨリ土居迄四町」，「西山ヨリ土居迄十二町」の地にある土居は「土居附居屋鋪向口東西百十間　同西境ニテ南北百三十五間」，城山を背に三方に土塁をめぐらし，その外側に幅９間，深さ１丈の堀を設ける。堀はいずれも水を湛える。東側の堀は北にのびて城山東麓北部に達しているが，その南端から東へ狭い「堀ノ跡」があり，同じく水を湛える。この「堀ノ跡」の北側に接して「土手」があり，土手は西端で北に折れて東堀の東岸に

沿って北にのびる。「堀ノ跡」に沿った土手は中央で切れ，内側（北）に宅地が描かれる。西側の堀も北にのびて城山北麓近くから西にのびる土塁の内側に達する。その北端内側には石垣が築かれている。南側の堀のほぼ中央には土橋がかかるが，土橋の南詰は「南北七間半　東西十七間半」の広場があり，広場の南側と東側は石垣となり，東南隅には石段を設ける。石段を下りると道が南へ36間余のびており，その先に林（Bは宮林）がある。

土橋を渡ると櫓門風の門が建ち，門を入ると正面の石垣に沿って石段が東へ下りる。表門東西の土塁上には土塀が連なり，土塀は南側土塁上西端から北に折れ，城山南三壇目西方までのびる。土塁内側には石垣が築かれるが，南側土塁の東端近くから東，及東端から北へ，東側土塁が東へ曲るところあたりまでは石垣はない。これらの石垣は，表門東側で高さ９尺，西側で高さ７尺２寸で，西側土塁では７尺，東側土塁では９尺余である。表門の桝形に接して北へ高さ５尺余の石垣が南北29間にわたって築かれ，土塀が設けられるが，石垣北端には東西棟の建物が建ち，この建物から西の城山山麓にかけて石垣・土塀がのびる。この土塀に囲まれた西側は，５尺余の石垣が築かれていることでもわかる通り，東側より高くなっており，五藤氏の屋敷地である。屋敷地へは表門桝形の北にある門から石段を上って入ることができるが，この門の北にも２カ所に石段が描かれているので，ここに通用門があったものと思われる。さて門を入ると正面に唐破風付の玄関をもつ南北棟の建物があり，南北に東西棟の建物がコ字形に配される。これが主屋であろう。又城山山麓との間には南北棟１棟，東西棟２棟があり，その西にも南北棟１棟がある。城山南麓の石垣西端から西側の土塁にかけて石垣が築かれ，土塀があるが，城山側には通用口を設ける。この段は南三壇目から城山西麓に下りてくる通路下の間に構えられたもので，通路下から西側土塁へかけても石垣・土塀がある。この段にも東西棟の建物が建つ。この段の北には３つの脇ノ壇がある。段のすぐ上，南の脇ノ壇には番所があり，北の脇ノ壇にも番所がある。

五藤氏の屋敷地の東側の一段低い部分には東西棟の建物が２棟建つ。北側の建物は藁葺である。その東の土塁との間には，南北に狭長な土手で囲まれた空間がある。ここは馬場で，南北45間である。従ってここに建つ東西に長い建物の南のものが厩舎ではないかと思われる。又城山東麓の脇ノ壇の南には東西棟の建物が建ち，この建物と脇ノ壇との間の土塁下に番所がある。

最後に土居の周辺についてみてみよう。城山北麓近くから西にのびた土塁の西端から南へ，「土手ノ残」が描かれている。この「土手ノ残」は南へ行くにつれて東にゆるく曲り，前記の表門土橋南詰の広場から南にのびた道の南端西方に至って東に折れ続く。この南北にのびた「土手ノ残」の南端近くには，「土手ノ残」に接して「堀ノ跡」がある。又城山から西にのびた土塁南側には「石垣ノ残」があり，この「石垣ノ残」の西端から南へ，さきの「土手ノ残」に平行して「土手ノ残」が描かれ，その南端は五藤氏の屋敷の西方に達する。そして「石垣ノ残」の南にこれと平行して「土手ノ残」が西堀までのびている。その表記からすると石垣・土手・堀はいずれも古いものと思われる。

「安喜土居内家有来惣繪圖」(1.225m×1.215m，寛延4年－1751)

文字通り土居内の建物の配置を示したもので，屋敷についてはその間取りを記入している。図は一間毎に細い線を引き1/100縮尺で描かれている。表門の東内側には番所が建ち，門の両側には「出コウシ」があり，桝形の石垣上には「キコク」を植える。屋敷へ入る門は「御成門」で，「御成門」の北にも石段がある。屋敷は玄関などのある建物，台所などのある建物，「上ノ間」などのある建物が後ずさりの雁行形に配置される。屋敷中央部北と屋敷の西に井戸がそれぞれある。屋敷東側は「ヘイ」で，北半は「キコク」，東北隅の建物は倉であるが，この倉から城山までは「キコク」。「上ノ間」などのある一番奥の建物の北は「キコク」の垣である。馬場と屋敷の間の東西棟の建物は，北が木蔵，南が馬屋だが，馬屋の馬場寄り南側には杉垣で囲まれた一郭があり，この部分には建物に出っぱりがある。馬場は内側が「土手」，外側が「杉カキ」で，馬場と東側土塁との間には射場がある。木蔵の北方，脇ノ壇下には「新倉」が建ち，その南に番所がある。

「安喜土居細圖」(46.5cm×72.5cm，彩色，享和元年－1801－写，原図は寛政10年－1798)

屋敷地東北隅の倉は「御米蔵」である。この「御米蔵」と雁行形の屋敷との間には「御新宅」ができており，「御新宅」には「御遊所」が付属する。その西には「御賄倉」，次いで「長局」が並び，その北「丸山」と土塁の間には「御北御奥」が，その北の南の脇ノ壇には「御北御居間」が建ち，中の脇ノ壇には「西御倉」があり，その北は「御花畠」となっている。「御花畠」の北から西にのびる土塁は「大竹籔」である。屋敷地東側の馬屋は西の部分を「御厩」，東の部分を「御長屋」と記す。「木倉」の北には柵が設けられ，一本の道が柵で囲まれた「御新倉」に通じているが，その道の脇に井戸がある。東側の堀の外側は「東籔」，でその東南隅近くには柵に囲まれた一郭があり，東南部に東へ門が開く。西側の堀の外側には「西籔」がある。本図では土居内の建物が「安喜土居内家有来惣繪圖」よりも増えており，屋敷地内と脇ノ壇にかけて新しい建物が目立つようである。本図には「附家來共屋敷ホ」と添書があるように土居周辺の町割が描かれ，家臣の屋敷群（45屋敷）がある。

「安喜土居内外細圖」(1.210m×2.090m，彩色，文化4年－1807)

本図は「安喜土居細圖」と基本的に変りがないが，建物内の間取りや，石敷，溝等を詳細に記している。又文化4年以後の建物についても書き込みがある。即ち文化7年には東側の「御厩」と「木倉」の間に「薪置所」が，「木倉」と「新倉」との間に「武器倉」が建っており，五藤氏の屋敷についても朱で玄関のある建物の西側に新たな間取りの書き込みがある。文政2年に拡張されたものである。又「西御倉」は「新規倉」となっている。「御厩」の東に隣る「御長屋」は南に式台を構え，床付きの「上ノ間」がある。この建物と南の土塁との間は，砂利を敷きつめた「弘庭」がある。

「安喜旧土居内圖」(2.165m×1.985m，年代不詳)

成立年代は明らかでないが，幕末か明治初年のものと推定されている。「安喜土居内外細圖」

と異なるところのみを記すと，まず文政２年に拡張された屋敷と西の土塁の間に「御凉処」が建ち，「丸山」と西の土塁の間の建物も建てかえられたものか規模が大きくなっている。又「御廐」の東に隣る「御長屋」の式台・床付きの「上ノ間」はなくなり，６畳の間のみとなっており，この建物の東南に馬場に沿って南北に長い建物（御駕籠倉・御輿倉・御客屋）が新たに建ち，南土塁内側に井戸がある。「薪置所」は東西棟となり，東で南に曲がるＬ字形の建物となり，「御道具納家」・「萬方役場」・「御筭用役場」・「コクヤ」がつく。北の「新倉」は西半分が「御寶倉」，東半分が「御武器倉」である。更に屋敷地東北隅の「御米蔵」に「鉄砲倉」が付属している。

註

1　安芸氏については次の論考がある。

安岡大六氏『安芸郡史考』

安岡大六氏「安芸氏と土居城」（土佐史談　第87号）

吉田萬作氏「安芸家古文書の由来顚末と史実齟齬の諸問題」（『安芸市史　歴史篇』）

吉田萬作氏「安芸氏論考」（『高知の研究　古代・中世篇』）

2　安岡大六氏前掲論文

3　島田豊寿氏「安芸商人町について」（土佐史談　第149号）

4　『安芸郡郷土史』が「市左衛門為重入城するや荒廃せる城跡を修築し堀を鑿ち塀を繞し東辺警備の鎮となす」と記しているのは示唆的である。

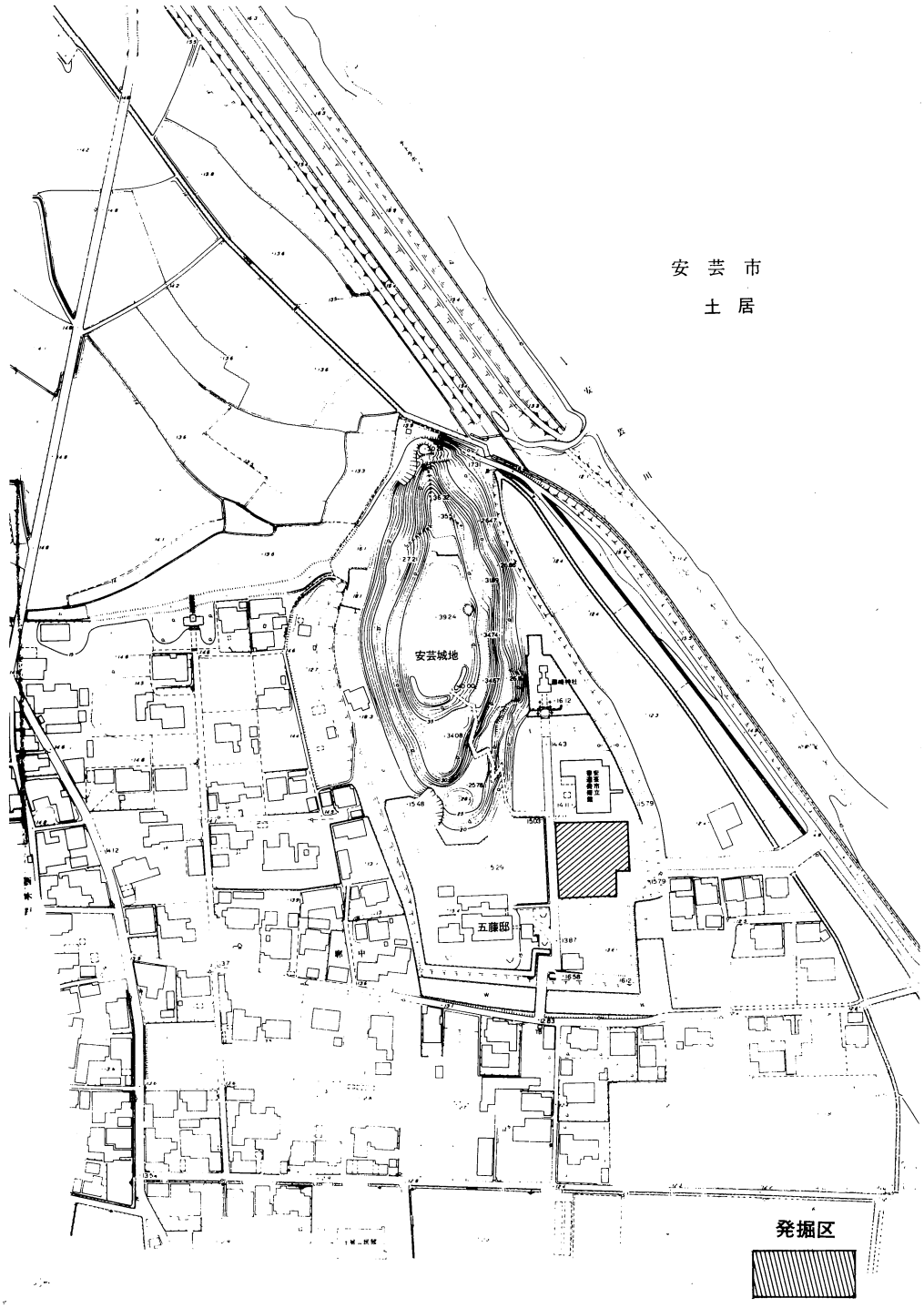


Fig. 2　発掘区周辺図　（S＝$\frac{1}{3000}$）

第Ⅳ章　調査の概要

1．調査の方法

発掘調査対象地は，安芸市土居廓中953－イ・ロ地区で，現状は畑地と雑草木の生える荒廃地である。

調査は磁北を基準線として幅４ｍのグリットを基本に４ｍ×８ｍの試掘区２個所と，８×８ｍの試掘区７個所を設定して試掘を実施した。この結果すべての試掘区にわたって，石群や石列・礎石状遺構を検出するとともに相当量の遺物も出土したため調査区全域にわたる全面発掘調査を実施することとした。調査の進展に伴い各層から独自の遺構が検出され遺物も出土したため最終的には第Ⅴ層に相当するところまでの全面発掘となった。なお第Ⅴ層以下についても遺構の存在が予想されたため，上層で検出された遺構が破壊されない部分について任意にトレンチを設定し調査を実施した。

土層の掘削にあたっては原則として人力で実施したが必要に応じて機械力も導入した。

調査期間は昭和58年８月15日から，昭和59年９月21日までであり，最終的な調査面積は，1200㎡であった。

2．層　　位

調査対象地は一部畑地も存在したがその大部分は小竹，雑草木の生える荒廃地であった。しかしかつては全域が畑地として利用されており，表土層は腐植物を多量に含む耕作土であった。

この表土層以下第Ⅳ層に至るまでは五藤氏の土居屋敷地として永年使用された部分であり，屋敷地造成のための嵩上げなどの整地が常に行なわれ，そのつど搬入された山土や河原石などが混入しており，ある地点は版築状に強化され，またある地点は黄色の礫を含む柔い砂質土層などの各層が乱雑に形成されていた。各層別に独自の遺構は把えることはできたものの，層位を明確に把えることも，また独自の遺物包含層を明確にすることも不可能であった。

一応第Ⅳ層までは人工による盛土嵩上げなどの整地によって形成された層位と考えられるがそれ以下の層位についても，さまざまな土色の粘質土層や砂質土層が幅薄帯状に形成されており，東接する安芸川の小氾濫による流れ込み土層も考慮しなければならないが，全般的には城山の東山麓部の湿地帯かあるいは澱み部分に形成された土層と考えられる層位を示している。

3．検出遺構

調査は1200㎡にわたる範囲内において第Ⅳ層部分までの全面発掘と，それ以下の層についてのトレンチ調査となった。

この調査によって検出された遺構は，まず第Ⅰ層に相当する表土層直下，一部は表土層中に露出した部分もあったが，発掘区北部と南東部に東西方向にのびる路肩に河原石を配石した通

路状遺構と，中央部に東西方向，南東部に南北方向の溝状遺構，特に南北方向の溝は上下二層にわたって検出されておりまたこの両溝にそれぞれ東接，南接するように８間にわたる建造物礎石群も検出された。この他３群にわたる粗雑な集石群も検出された。

これらの遺構の下層からは，南西隅部に石畳状の石敷遺構，それに中央部分に南北方向，それに直交して東西方向の通路状の遺構と，この東西方向の通路状遺構の側石を礎石とする長屋風の礎石建造物址などである。

第Ⅲ層に相当する層からは，発掘区周縁部を画するような石積（垣）遺構が各所に検出された。特に発掘北端部に東西32ｍにわたる塁状石積施設や，南西隅部の段状石積遺構は遺存状況も良好な遺構であり特筆されるべきものである。また総延長54.4ｍにわたる石組溝と，一部この石組溝に囲まれ，石組溝の側石を礎石とした建造物の存在が推定される礎石も検出された。この層からの検出遺構は大部分遺存状況は良好ではあるが，周辺から検出された３群の石群は粗雑なものであった。

これらの遺構下は20～30㎝間は完全な無遺物層で，山土による嵩上げが判然とする層位を示しており，その下層部にある５～10㎝の帯状灰化層直下から，東西に雨落し溝を伴い，床面には敷石を施した東西４間，南北４間の総柱の建造物址と，北接して東西24ｍ区間８ケ所にわたって点在する石群と，西接して存在する南北１間，東西４間の長屋風の礎石群をもつ建造物址がきわめて良好な遺存状況で検出された。この他南端部に土壙２ケ所と石群２ケ所も検出された。

以上本調査において確認された遺構は，礎石建造物５棟，通路状遺構４条，集石群９群溝状遺構３条，石積（垣）遺構５個所に土壙２個所であった。

イ　通路状遺構

ＳＳ－01

発掘区北部で検出された東西方向の通路状遺構である。幅80㎝，全長９ｍまで確認できた。河原石の１個並列で表土層直下でありところどころ散逸している。通路面に偏平な面を整え，傾斜勾配はなく平担な遺構である。

北石列には比較的平均した石が使用された石列であるが，南石列は10ｍ区間にわたって45×30㎝大の上面偏平な礎石状の大石を配し，その間隔も2.0ｍ内外を計測できる。東より3.5間，１個所除石（あるいは元から欠石か不明）されている。また大石を中心にその両側あるいは一方に２～４個の平均した河原石の並列があったり，多分に建造物の礎石を想定させるものであるが現況から建造物設定は困難である。

ＳＳ－02

発掘区南東隅部で検出した東西方向の通路状遺構の一部である。石列は北側が2.4ｍで８個

の石，南側が2.0ｍで７個の石が残存するのみで両石列間は80㎝である。ＳＳ－01同様表土層直下で検出されたためその大部分は散逸している。残石部分は少ないがすべて土中に埋まり堅固に固定されている。北列は通路面が比較的直線的に並列されている。両石間の通路部が周辺地表面に比し特に固められた地表面を呈しているとは思われない。

ＳＳ－03

発掘区中央部に南北方向に12.2ｍにわたって検出した通路状遺構である。幅50㎝内外で，内部通路側に石面を整えた一列の並列石遺構である。配された石は20×20㎝，20×30㎝程度の河原石で，東側は北端部より７ｍ区間は整然とした遺存状況であるが，それ以南の3.8ｍ区間はやや崩れ，内1.5ｍ区間には石は全くなく，また2.3ｍ区間には小石群が残存する。そこより南端部までの1.5ｍ区間は北部同様の構造で残存する。西側並列石も北端部より6.5ｍ区間は整然としているが，それより南1.5ｍ区間はやや崩れがみえる。それより以南4.3ｍ区間は，0.8ｍの崩れを除いて他は整然とした大石が配石されている。路面は版築状に固められ水平を保っている。

北端部はＳＦ－01に接して止っている。ＳＦ－01上の散石部とＳＳ－03路面とは若干のレベル差があり路面がわずかに高いが，ＳＦ－01上への延長状況についてはＳＳ－03両側石の配石部分の延長がなく，また路面版築状の通路面の確認もできない。従ってＳＦ－01上面とそれを越えて北への延長の確認はできない。

南端部は一部攪乱しており，ＳＢ－01東端部で止っており南への接続は不明である。ただ通路と同幅の空地を残して北方ＳＳ－03同様形式による石列が南へ９ｍ程のびてはいるが，路面部の版築状部分なども存在せず，これ以南へのＳＳ－03の延長確認は困難である。

ＳＳ－04

発掘区中央部で検出された東西方向の通路状遺構であり，南北方向のＳＳ－03と直角に交叉する。幅80㎝，全長18ｍで発掘区の西端に至っている。石組方法はＳＳ－03と同様であるが，南側の石列裏側には拳大の石が幅１ｍ区間相当量みうけられる。しかしこの石群は意識的な裏ごめ石と考えるにはやや乱雑さが目立ち，むしろ石列を後から補強するために投入された石群と考えるのが妥当ではなかろうか。

ロ　石積遺構

ＳＦ－01

発掘区最北端部で発掘した東西方向の石積遺構で，東西方向32ｍ，上幅1.0ｍ，基底部は東端部で2.0ｍ，南面にはやや傾斜をもたせた台形断面を呈する石積遺構である。東端部より3.4ｍ西方と西端部に若干の崩石部分は存在するが，全体的には遺存状況は良好な遺構である。北面

には20～25㎝を長軸，10～15㎝を短軸とする河原石が一列に並列されている。南面は東部分が２～３段の石積みで30～40㎝大の石も使用され，その間には拳大の栗石が線密につめられ堅固に仕上げられている。西方部分は自然地形に合わせ石積みの上面を水平に保つために順次２段から１段と石積み段数は少くなっていく。特に１段積みとなる部分については20～25㎝大の大石が利用され，その強度を保つよう配慮がなされている。石積みの高さは東部分が北面で20㎝，南面は72㎝，中央部分は北面が18㎝前後，南面43㎝，西端部では南北両面ともに24㎝前後となっている。積み上げられた石面は，南北双方ともに外側石面が整然と整えられている。

東端部には４個の大石をとめ石としＳＦ－02と接している。現状はやや粗雑な様相を呈しているが，これは後世の破壊かあるいは若干の崩石があったためかも知れない。

西端部はＳＦ－04の南端と接しているが，特別の遺構はなくＳＦ－04の延長線上で止っている。ただ西端部より1.4ｍの東部分で南斜面に接してスロープ状の石敷遺構がある。これは幅1.6ｍ，長さ1.6ｍで外縁部には40×30㎝程度の大石を配したもので，特に東側縁部を堅める大石は40×30㎝大の河原石３個をもってＳＦ－01の南面に密着させている。西側縁部は若干の崩石はあるが，ここも50×30㎝大の石で堅められている。南縁部には1.1ｍ区間にわたって20×15㎝大の平均した石が石面を南に揃え整然と配石されている。これらの大石に囲まれたスロープ内部は，ＳＦ－01上面と同様の大小河原石が比較的粗雑なままで検出された。

ＳＦ－01の石積状況把握のため，上面集石の崩壊している部分を２個所にわたって断ち割り調査を実施した。１個所は西端部より４ｍの地点で１×１ｍのトレンチである。この結果北側は１個の並列石のみであり，南側も１～２個の並列石積のみであった。北側１列並列部には裏ごめの栗石などは全くなかったが，南側には若干の栗石を配していた。上面の石はすべて一列の散石で下方への積石やその他遺構などはなく，茶褐色砂質土層の自然地形となっている。この土層は比較的柔かく自然堆積と考えるよりは人工の埋土とみるのが妥当のような土層である。

他の１個所は東端部より６ｍの地点で，北側石列崩石部分を選んだ。上面の集石は他所同様に粗雑であるが，上面よりは10～20㎝の厚さにわたる２～３段の集石状況である。北側は崩れていたが，周辺部も１列配石であることから同様の状況とみるべきであろう。南側は高さ50㎝内外で２～３段の積石部分である。トレンチは１×１ｍで80㎝の深さまで掘ったが，石積上面南縁より内部へ65㎝幅部分については，深さ40㎝の部分まで径15㎝内外の河原石や風化した茶黄色の砂岩なども詰めるなどかなり強固に裏ごめの栗石が詰められていた。土層は集石部直下15㎝内外部分は灰褐色の砂質土で，それより下方は黒褐色の粘質土である。ともにきわめて軟弱であり人工の埋土と考えられる土質である。又集石上面より50㎝下部の黒褐色粘質土層より波状口縁の青磁片２片も出土した。

ＳＦ－02

発掘区東隅部において検出した石積遺構であり，西方より流れ出る石組溝ＳＤ－02の東端口

より北方ＳＦ－01に至る南北方向の6.5ｍ区間である。上下２段となり，下段はＳＤ－02の溝口に70×20㎝程度の長方形の大石を配し，他は15～20㎝大の河原石の１列並列で，ＳＤ－02の溝口より北へ４ｍで止めている。上段は下段縁部より10～15㎝引き込み，下段に比しやや大きめの石を１列に並列している。南端より北へ４ｍ区間いわゆる上下２段構築部までは拳大の裏ごめ栗石の存在もみられるが，それ以北については裏ごめ石などなく１列の並列で北のＳＦ－01に接している。

ＳＦ－03

発掘区東端，土塁直下に存在し，ＳＤ－02の東溝口より南にかけて発掘区外にのびる石積遺構である。つまりＳＤ－02の東溝口を中心に北にＳＦ－02が，南にＳＦ－03がのびている。発掘によって確認された長さは６ｍである。うちＳＤ－02の東溝口より南に６ｍについては２～３段の積石施設となり，裏ごめの栗石として使用されたであろう石は周辺に散在しており，最上段は一部崩れている。南端部には瓦溜があり，瓦を除去するとその底部には拳大の敷石があり，それより20～40㎝大の石が３～４段に積み上げられている。この部分には裏ごめの栗石はなく，積石法も比較的粗雑である。

ＳＦ－04

発掘区北隅部に検出された南北方向の石積施設で，北方発掘区外よりのびてＳＦ－01の石積施設に接している。調査によって確認できたものは，ＳＦ－01西端より北へ9.5ｍまでである。１段の河原石の並列遺構で，西方に偏平な石面を整えた溝側石の様相を呈している。裏ごめの栗石も乱雑ではあるが量的には多い。

ＳＦ－05

発掘区西南隅で検出された階段状石積遺構である。検出遺構範囲は15㎡程度であるが，遺構はさらに南の発掘区外へのびている可能性が考えられる。

階段状石積は長辺50～60㎝，短辺20～30㎝の河原石や割り石を使用し，それら大石の間には拳大から人頭大ほどの石を強固につめ，また15～20㎝程度の石も裏ごめの栗石として相当量使用されている。

階段状として確認できたものは３段で，２段，３段部分の遺存度が比較的良好である。この部分の踏面は両段とも60～70㎝，跳上は20～25㎝内外である。

この階段状石積の最下段の北端部に接続させ，南端部では４ｍの間隔が開き石段とは方向を異にする石積遺構が存在する。２段石積みで積石方法などは他の階段遺構と同様であるが，石段状遺構との関連やその性格は判断しがたい。

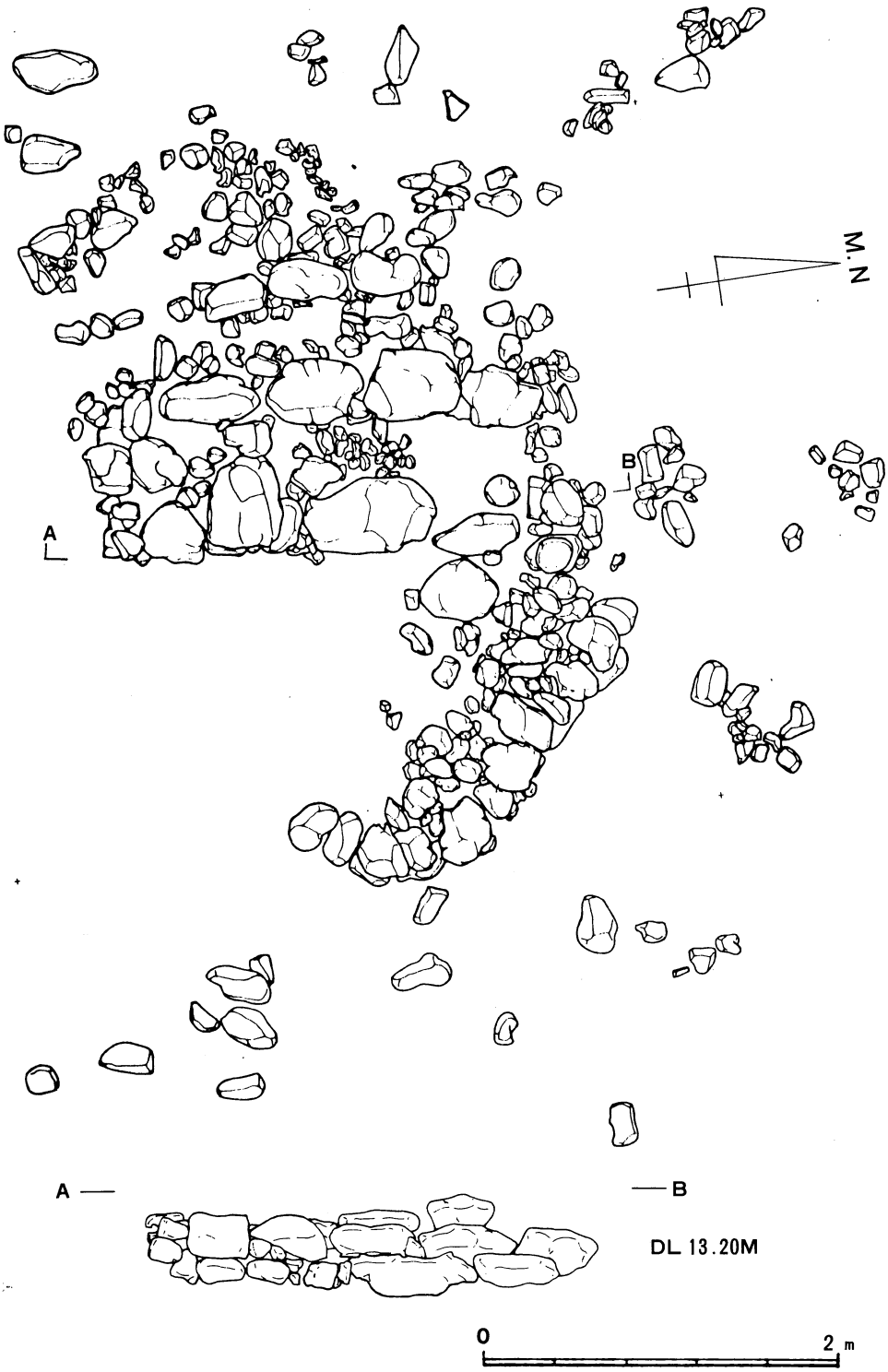


Fig.3　SF-05平面・立面図

ハ　性格不明の石群遺構

ＳＸ－01

発掘区東端部の石群で南北２群に分割できる。北群は東西２ｍ，南北1.2ｍ内に拳大から30×20㎝程度の大小雑多な河原石が集中的に群在する。その中にあって東西方向に1.6ｍ間隔の大石が存在するが，建造物の礎石とすべきか否か判断は困難である。

南群は東西2.5ｍ，南北1.5ｍ区内に散在している小石35個の石群であり，特に規格性もなく性格も不明である。

ＳＸ－02

発掘区中央部で幅1.7ｍ，南北23ｍ区間に集中的に所在する石群である。すべて河原石で拳大から30×15㎝内外までの雑多な散在状況である。北部６ｍ部分いわゆるＳＳ－01に接する周辺以北はまばらな散在状態であるが，それ以南，特に中央部の集中密度は大である。

ＳＸ－03

発掘区中央部南端部で，60×40㎝大から，20×10㎝内外の各種の石を配した短い石列構造で枠状配石遺構であるが，崩れが著しく遺構としての性格把握は困難である。

北側は，東西方向に1.5ｍの長さの石列で，60×40㎝の大石を西端部に配し，15×20㎝内外のものを３個詰め，10㎝の間隔をおいて40×20㎝大の石でとめている。配石状況からは石面を整えた部分（方向）の指摘はできない。

南はＴ字形配石となり，30×20㎝の長方形の上面偏平な石を中心に南北の１ｍ区間に４個，東西の1.4ｍ区間に６個の配石である。南北方向に配された石は３個，比較的大きく石面も西面に整えられた感じがする。東西方向の６個の配石は，東にいくにつれ次第に小ささくなる。石面は南面（外側）に整えられたとみるべきであろう。

これらの石列はすべて１列積みの配列であり，70㎝東方にも本遺構に使用されたものと同程度の河原石が散在した部分もあるが，この遺構との関係を推察することは不可能である。また本遺構の性格も不明である。

ＳＸ－04

発掘区南西隅部分，東西10ｍ，南北4.5ｍ範囲に所在する石畳状遺構である。

この石群は比較的大石を配した東西方向にのびる３群の遺構と，その南に接した円形石群の２群に区分することができる。

北部３群のうち西端石群は，東西2.5ｍ，南北0.7ｍ内外の長方形石群で西部分0.8ｍ区間は比較的小石で配石状況も粗雑である。それ以東は20×20㎝内外の石で上面偏平で形も整った河原石の配石状況である。

中央部石群は，東西3.3m，南北0.9mの区域内の石群で，南北方向１列の配石部から0.4m区間には配石はなく，それ以東2.5m区間には整然とした配石がなされている。使用された河原石は30×30cm，18×50cm，18×20cmなどの比較的大きめのものを使用し，上面はすべて偏平で各石間の隙間はほとんど認められない程度に敷き詰められている。北面に石面を整えた傾向は認めることができる。南接して円形の配石遺構が存在する。

東端部は中央遺構より１m東北部分であり，東西２m，幅20～50cm内外で14～15個の粗雑な石群である。使用された河原石は西方２群と同様に比較的大きく，すべてに関連する遺構とみるべきであろう。

中央石群に南接する円形の石群は，南北２mを長軸とし，東西1.7mを短軸とする円状石群である。外縁石列は15×20cm内外の楕円又は長楕円形の河原石を外円部に短軸を配して石面を整える手法である。北円部は，北部大石の石畳状石群の南端大石３個がそのまま利用された形状を呈している。この円状石列に囲まれた内円部分は，南北1.8m，東西1.4mの楕円状を呈し，拳大から20×15cm大の河原石やその割り石が無雑作に投入された形態を呈している。ただそれらの石間の隙間はほとんど認められない程度に敷き詰められた密度である。北部に接する大石群と比して全体的に石の規模は小さく，配石状況も粗雑であるが，上面はほとんど同じレベル高の偏平さに整形された状況である。

以上ＳＸ－04は全域にわたって１層の配石であり，すべての河原石が堅固に１個ずつ地中に埋め込まれた様相を呈している。大石下の根石や大石間への小石による栗石などの強化策は全く施こされていないが堅固な配石状態である。

ＳＸ－05

ＳＦ－01遺構に関連する遺構の確認のため設定した幅３m，長さ18mの東西方向のトレンチ内で検出した石群である。ＳＦ－01南面の石積部よりは20～30cmの間隔をおいて，径５cm内外のものから20～30cm大の河原石や風化した砂岩の割り石等が混在したものである。他の石群においてみられるような整然とした配石状況の部分もなく，石の種類，石質，形状ともに粗雑であり，人工による敷石と考えるよりはむしろ埋めたての為に投入された石群と解した方が妥当ではなかろうか。

この石群層も薄く10～15cmの１～２個の石を除去すると全く石のない黄色砂質土層の地表となる。

石群中からは若干の瓦片や遺物が出土している。

ＳＸ－06

発掘部東北部で検出したＳＸ－05とはＳＳ－03を隔て東に接する石群である。現存する規模は１m幅で東西７m程度である。石群内の石の大きさや検出状態などＳＸ－05と同様であり，

またＳＳ－03の下層では接続している。ＳＸ－05同様１～２個の石を除去すると下層は全く石のない黄色砂質土層となる。

ＳＸ－07

発掘区中央の東部分から検出した石群であり，東西2.6ｍ，南北１ｍ程度の石群である。西部1.7ｍ区間は40㎝内外の間隔を保ち溝状遺構を呈するようにそれぞれ石面を内側面に整えてはいるが，東部ではこの溝状間隔を塞ぐように40×30㎝大の大石が４個配されている。比較的大きな河原石が利用されており遺構としての性格づけが必要ではあるが，現況では西方ＳＤ－01との接続も考えられないし，又東ＳＤ－02への接続も考えがたく，またＳＤ－03との関連も方向的に考えにくい。

ＳＸ－08

調査区北部，ＳＢ－03とＳＦ－01の中間部の東西24ｍ区間に８個所にわたって点在する石群である。便宜的に西方よりＳＸ－08－１～ＳＸ－08－８とする。

ＳＸ－08－１　石群の西端のもので，東西幅80～90㎝で南北に４ｍの長方形石群で，拳大より40×20㎝大の石まで混在する。西部分には比較的大石が散在し東北部の小さな石群に接続している。大石で上面の比較的偏平な礎石状の河原石も存在するが，全般的には粗雑な石群である。

ＳＸ－08－２　径1.2ｍ，ほぼ同形の石群で西端部と同様の集石状況であり石面を整えた方向など規格性は全くなくＳＸ－09に接する。

ＳＸ－08－３　３群に区分できる石群で，北部石群は東西1.4ｍ，南北1.0ｍの長方区間に40×30㎝，50×35㎝大の大石を中心とした集石群である。

中央部は東西1.5ｍ，南北1.0ｍの範囲内に北部同様の集石状況ではあるが，全般に小石の利用が目立つ石群である。

この石群の西端15㎝の間隔をおいて35×30㎝の上面偏平な河原石がある。

ＳＸ－08－４　ＳＸ－08群の中央に位置するもので，30×20㎝大の河原石中心の９個の石群で他所に比し小規模である。

ＳＸ－08－５　径2.5ｍの円内に５群の石群が点在する。北端部の石群が最大で，形状は70㎝の円形集石群で，他は６～15個前後の小規模な集石である。ただ40×30㎝大の上面偏平な河原石の存在は礎石の可能性もあり注目すべきものであろう。

ＳＸ－08－６　本集石群中最小のもので，５個の石が散在するのみである。

ＳＸ－08－７　径1.1ｍの円形集石群で，西端部分の集石群と形式等同様の集石状況である。

ＳＸ－08－８　ＳＸ－08の東端部の集石群で，南北２ｍ，東西１ｍ内外の長方形内に所在する石群で，比較的小石を中心とした集石状況は他所と同様である。

以上ＳＸ－08の８群の集石群を略述したが，これらの石群はすべて１層の集石で河原石，集石状況も粗雑ですべての石群に共通したものがある。ただＳＸ－08－４を中心にして，その間隔が石群のほぼ中央部の計測によると，ＳＸ－08－３・４を除いてほぼ1.5間の間隔で左右対称に近い計測値を示している。また東西両端部は共に長方形で広い集石群であること，ＳＸ－８－２・７は端部よりともに2.7ｍの内側にあり，規模，形状ともにきわめて類似していることなどからすれば，規格性をもった集石群としてとらえなければならないものではないだろうか。なおＳＸ－08－４の中心となる大石は南に３ｍの間隔をおいて建つＳＢ－03の建造物の中心礎石の延長上であること，及びその北のＳＦ－01の中央部分ともほぼ一致していることも指摘しておく必要があろう。

ＳＸ－09

発掘区北西隅部に発掘した集石群で，ＳＸ－08－２に南接し，ＳＢ－03の北西隅部分にも接する南北5.5ｍ，東西2.0ｍの範囲内の石群である。北部３ｍ区間には拳大より50×30㎝大の大石まで密度濃い集石状況で，北接するＳＸ－08－２の円形集石同様粗雑である。ただ比較的大石が多く目立つ石群ではあるが，南２ｍ範囲の２個所の濃密度部分を除いて他は比較的散在状況を呈する石群である。

この集石群とは別に亀甲形に平瓦を敷いた部分を検出した。南北1.1ｍ，東西52㎝範囲内に７枚の平瓦を敷き，その周縁部には平瓦の小片を数個配して意図的に整形し，北方に向う亀を想定できる形状の瓦敷遺構である。これらの瓦はすべて１枚敷きであり，除去すれば下方は周辺同質の地層面となり，下部遺構等は存在しない。性格は不明である。

その他の石群

発掘区中央部分東西方向に幅狭く5.5ｍ，ＳＸ－02中央部の西側に接して径２ｍの円形，ＳＸ－01，ＳＸ－02中間部分に径２ｍの円形，発掘区北部中央部に径2.5ｍの円形，発掘区南西隅部広範囲にわたる石群などの種々の規模，形状の石群が存在するががいずれも散発的であり，その下層には遺構も存在せず性格不明の石群である。

ニ　溝状遺構

ＳＤ－01

発掘区中央部に所在する東西方向の石組溝状遺構である。石列は南北両側にあり北側は17.5ｍにわたるが，南側は東端部にわずか３ｍを残すのみである。南北両石列間隔は35㎝を測る。すべて単純な１列配石溝であるが，側石はすべて内面に石面を整えている。現地表面に本溝の一部が露出していたためかなり攪乱崩石は考えなければならない。

SD－02

発掘区南東部に所在する南北方向溝で発掘区外にまでのびている石組溝である。調査延長は7.8mであった。西側石組は中央部1.3m区間は崩れているが東側は整然と遺存する。溝幅は北端部で20cm，中央部で30cm，南端部で40cmと南がやや幅広となっている。現地表面にほとんど露出していながら比較的大石を使用していたため残存したものと考えられる。

このSD－02を掘りすすむにつれ，その下層からさらに北方へ接続延長する溝状遺構が検出された。それはSB－01の東端溝であり，SS－03の南端部よりSB－01の東側に沿って7.5m南下し，やや東に折れて5m，再び南に折れて4m南下し発掘区外にのびている。

SB－01の東端に沿う7.5m区間の溝幅は45～50cm，側石はすべて1列配石で河原石，30×20cm程度の比較的平均した石を使用し，短軸側の偏平部を溝内に向け，裏ごめの栗石などは比較的少ない。深さは20cm内外である。

東折した部分の溝幅は屈折部が40cm内外で東南方向に進むにつれ若干狭くなり30cm内外となる。両側石は2段積となり，深さも上段石上面より30cmを測る。溝底部も傾斜が顕著となる。使用する河原石は下段に大ぶりの石を使用し，上段は比較的小さいが平均した石が使用され短軸偏平部が溝面に向いている。この部分には比較的小石の裏ごめ栗石が使用されて強化されている。特に東側石部が顕著である。

再び南に折れて南下する溝は，北方のSB－01東側に沿って南下したものと同方向に修正された溝となる。西側石が2m区間崩石しているが，東側面は良好な遺存状況である。溝幅は屈折部が48cmで南下するにつれ順次幅広となり，南端部は60cm内外となる。溝底は比較的水平な平均したレベルを呈している。側石は2段積になり下段には大ぶりの石が使用され，上段はやや小さい。短軸部の偏平面を溝内に整えているが，裏ごめの栗石などは全くない。

以上第Ⅱ層部に相当するSD－02は，総延長16.5mの南北方向の石組溝であるが，SB－01東側沿いに南下する7.5m部分と，南端部の4m部分は溝幅を広くし，溝底のレベル差も南北においてあまりみられないが，中央部東南方向に流れる5m区間は溝幅も狭くし，かつ溝底レベル差も南北において明確にとらえることができ円滑な流水に配慮のあとがうかがえる。使用されている石は河原石であり，構築方法等はすべて同一様式である。

SD－03

発掘区中央部，SB－01の北に沿って東西方向に6m，直角に北に折れ南北方向溝として5.5m，さらに直角に東へ折れて10.5m東進する。この地点で1.7mの暗渠部があり，この周辺でゆるく南にカーブして2m程東南方向溝となる。ここで2分流し，一方はそのまま南北方向溝として南へ20.5m進み発掘区外までのびている。他方は北東方向溝として1.5m北上し，東折して7m発掘区東端のSF－02とSF－03を分割する流出口となっている。分流地点はY字状溝を呈し，大石の配石による暗渠やカーブする石組溝の景観は立派できわめて良好な遺存状

況である。

ＳＢ－01北側に沿う６ｍ区間は，ＳＳ－04の下層より検出されたもので，他所に比し石組溝として明確に把握はできないが，40×30㎝大の大ぶりの石の長軸方向を溝に沿って利用している点や，その方向性からみてＳＤ－03に接続する溝として捉えなければならない遺構であろう。長楕円偏平面は北側が整っており，検出された遺構は石組溝の南側石部とすべきものであろう。

北折して南北方向溝となる5.5ｍ区間は，東側で若干の崩石はみられるが，ほぼ平均した長楕円の大ぶりの河原石が使用されている。構築方法も長軸面を溝面に向けた石積溝であり，裏ごめの栗石なども全くなく単なる一列の配石状況である。比較的大ぶりの石が利用されており，この周辺はこの程度の強度で維持管理可能な配水状況と理解してよさそうである。溝幅28㎝，深さ20㎝内外の小溝である。また，東側石には5.3ｍ間に他の側石よりは若干大ぶりで上面の比較的偏平な礎石状河原石が同間隔で存在する。溝側石が建造物の礎石として兼用されたものと理解できるものではなかろうか。

東折して東西方向溝となり暗渠部までの10.5ｍについては，北側石は40×30㎝大の大ぶりの石が使用され整然と整えられて強固な石組溝の様相を呈しているが，南側石は比較的小さく石組も粗雑で各所に崩石部分もみうけられるが，溝幅30㎝，深さ20㎝内外の規模である。前述の南北溝の東側石同様に南側石には他所に比べ大ぶりで上面の比較的偏平な礎石兼用の石もみうけられる。

暗渠部は1.6ｍ区間で70×40㎝，60×30㎝，85×30㎝の３個の大割り石と60×40㎝の河原石の４個で形成されたもので各石間の空所には大小さまざまな河原石が詰められ，特に大石両端部には大ぶりの石と拳大石を密度濃く埋め大石の動き防止に特別配慮した構築法がとられている。保存のための大石除去は避けたが，暗渠部分の内部構造は他所と同様の石組溝でその上部に大石を橋状に架したものである。

暗渠部からこの石組溝は分岐部分も含んでＹ字形となっており，暗渠部からの南側石は比較的大ぶりの石が使用され，分岐部まではＳＤ－03石組溝では珍らしく短軸面を溝面に配している。分岐点より南北方向溝となるＳＤ－03西側石は比較的大ぶりではあるが，再び長軸方向を溝方向に向ける配石状況に変じている。

一方暗渠部から分岐部までの2ｍの北側石は分岐点に50×40㎝，厚さ20㎝の河原石を配し，その中間部にも50×50㎝，厚さ20㎝大の大石が配され，その間には比較的小さい石を配した石組溝となっている。

分岐点から2ｍ東北方向溝となり，さらに東折して7.0ｍの東西方向溝となってＳＦ－02・03に至る部分については，東北方向溝に進む部分には若干の崩石部分は存在するが，東西方向溝についてはＳＤ－03中最も良好な遺存状況部分である。特に北側石は45×30㎝，厚さ20㎝程度の河原石が中心で6.4ｍ区間に17個の配列で完成する石組溝は堅ろうかつ壮大ささえ感じさせる。

分岐点から南へ進む南北方向溝は，分岐点から5.5m区間は両側石ともに整然とした配石状況である。特に西側石には礎石兼用石と考えられる大ぶりの上面偏平石が等間隔に並ぶのが目立つ。それ以南の5.5m区間は比較的小さな河原石によって構成されている。そこから南へ4m区間は近年書道美術館建築に伴う廃棄物埋め込み穴として掘られ完全に破壊されている。この破壊された部分以南については5m区間が小石使用であり若干の崩石部分も存在するが，北方から接続する溝状遺構であることは判然としている。

以上総延長54.4mの石組溝で全体的に遺構の残存状況は良好である。特にSB－01北方からの南北方向溝，東折して暗渠部そして分岐点より南への5.5mにおよぶこのSD－03に囲まれたなかに，各所にわたって述べた溝内側石には上面偏平な礎石状の大ぶり石が等間隔に配石されており，溝側石を礎石兼用とした建造物が存在したことを想定しなければならないものであろう。

ホ　土　　壙

SK－01

発掘区南西隅SF－05に接して第Ⅲ層においては集石遺構として検出し，集石排除後土壙として確認した。集石状況は，東西1.7m，南北1.8mのほぼ方形の集石で，外縁部には40×20cm内外の比較的平均した大きさの河原石を内面に石面を合わすように配石されている。内部は外縁部分に比して配石状況は粗雑で，拳大から20×20cm大までの河原石や，河原石の割り石が投入された形状を呈している。この方形集石遺構の四隅外方にそれぞれ小規模な集石遺構が付属している。北西部集石は隅石より20cmの間隔で20×25cm大の上面偏平な河原石を囲むように7個の河原石が配されている。北東隅部は隅石より30cmの間隔をもち，25×15cm大の上面偏平な河原石を囲んで8個の河原石が配され，南西隅部は隅石より30cmの間隔でここも40×20cmの上面偏平な石を中心に5～6個の河原石が囲んでいる。南西隅は他の三隅より間隔が大きく50cmを計る位置に，30×15cmの上面偏石な石を中心にして3個の大きめの石と2～3個の小石で囲んだ形状は，他の3所に比して粗雑な集石状況である。これらの4個所の小集石遺構は，南東隅部を除いてその検出状況から中心石をはじめすべてが原位置で確認できたものと考えられる。ただ南東隅部は位置的にもまた検出時の様相も浮石状で検出されるなど若干の移動は考慮しなければならない。この4個所の小集石遺構の位置関係について上面偏平な河原石の中心部からの計測によれば，北側東西間が2.2m，西側南北間1.8mを計り，これらの上面偏平石の中心部を結ぶ線内に方形集石遺構全域が包括される位置となっている。

方形集石遺構内部の粗雑な河原石や割り石は大は1層，小は2層程度の石盛状況で，除去すると柔かい軟質の黒褐色土となる。深さ1.5mまで発掘したが軟質土で危険を伴い調査を中止した。外縁部の配石も1列の並石で土壙下方への石積みなどは全く認めらず，土師質土器の細片や木片などが出土した。

ＳＫ－02

発掘区南西部，ＳＦ－05に東接して所在する集石遺構として検出しれた。集石状況は３×３ｍ区画内に南北２グループに分割できる形状である。

北部集石は，径1.5ｍの円形状に45×25㎝程度の河原石を最大として，大小２グループに分割できる程度の河原石が粗雑に集石されている。集石は１層積みで下層には遺構等は確認されなかった。なお集石東端部より自然木の焼片が１本出土した。

南部集石は，やや長めの大小雑多の河原石が散在した様相を呈しており，周辺には自然木片，箸，各種土器・陶器片，腐植物など乱雑な状態で出土した。これらの河原石や遺物を除去すると，南端部は1.8×2.0ｍの円形土壙となり，かつその内部の東寄りに径50㎝の小規模な円形の土壙を伴う土壙となった。いずれも浅く，出土遺物も土器片，陶器片，木器，自然木，繊維質，腐植物などきわめて多岐にわたる雑器，雑物ばかりであった。

へ　建造物群

ＳＢ－01

発掘区中央部西よりの表土層直下より検出されたもので，東西方向のＳＤ－01と同方向にのびる等間隔の礎石群である。西端部礎石より東方17.5ｍ地点に東端と思われる礎石に相当する河原石が存在する。

礎石は40×20㎝大などの比較的大きめの河原石を中心とする小規模な集石群となって検出された。これらの集石群は２～３個のやや大きめの石を中心として，その周辺には拳大から15×15㎝程度の河原石が散在した状況である。この集石群は17ｍ区間にほぼ２ｍの等間隔で８間形成されており，ここより2.5ｍ南にほぼ同類の石列群が東西にのびている。ただ北側集石群のようにすべて等間隔の遺存状況ではなく，必要間隔の地点に集石が存在しないところもある。これらの集石群についてはどの石が主礎石かの判断はやや困難ではあるが，一応東西棟の８間×１間の建造物を想定しなければならないだろう。

ＳＢ－02

発掘区中央部東西方向の長屋風建造物礎石群である。南側礎石は東西18ｍ区間に２ｍ間隔をもって50×35㎝程度の上面偏平な大石を配し，その間には15㎝程度の長方形あるいは長楕円の河原石を東西方向を長軸として敷設し一種の石列を形成している。この石列は西方10ｍ区間にみられ東方８ｍ区間は礎石状大石のみとなっている。

北側礎石はＳＳ－04の西側石がそのまま礎石として利用されている。南側石の背後には大小さまざまの石が散在するが，南側石の裏込め石と理解するにはやや粗雑である。ただ南北礎石間の２ｍ区間のみにこの集石が存在していることは，長屋風建造物とその関連を無視すること

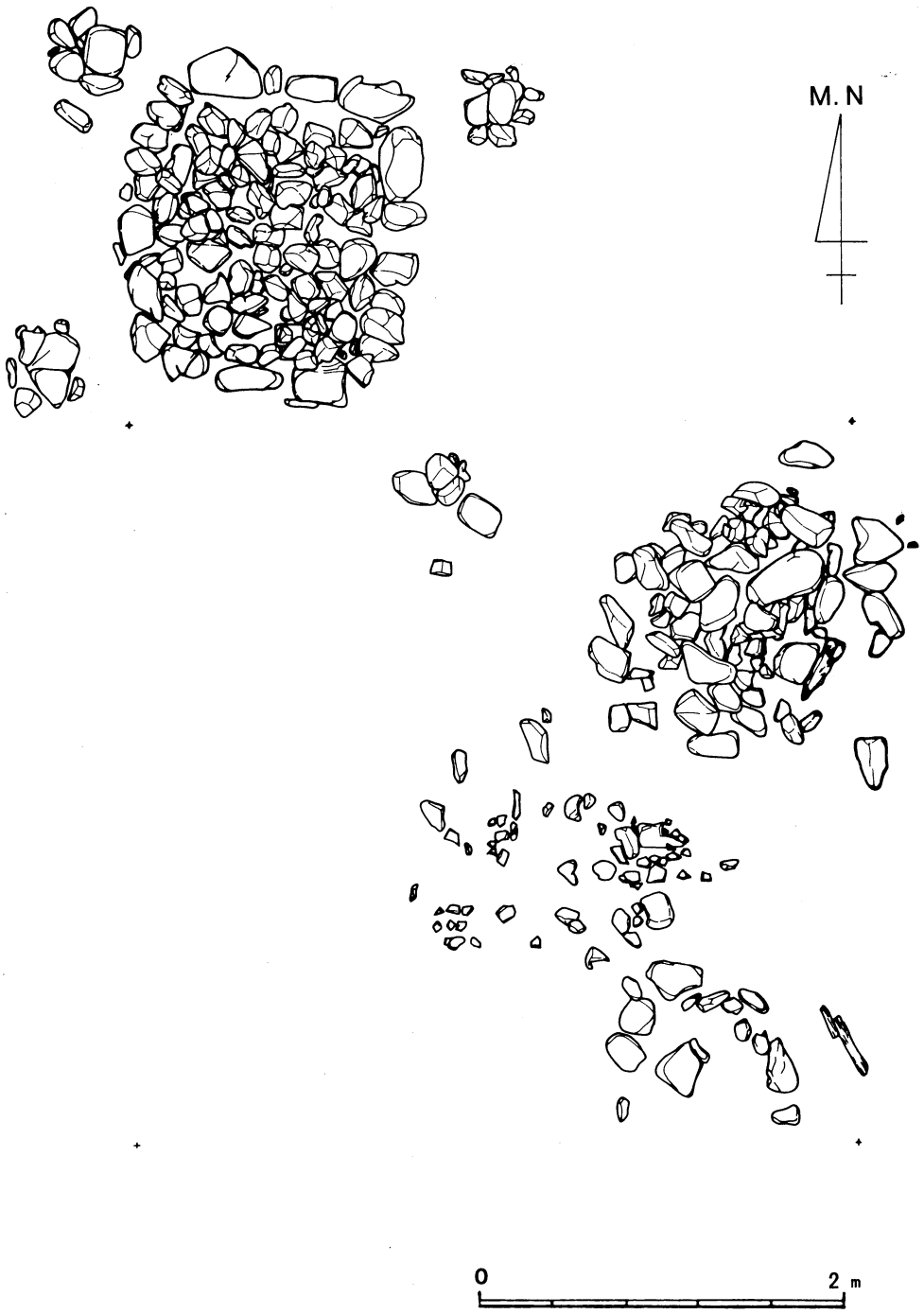


Fig.4　SK-01, 02上面の集石

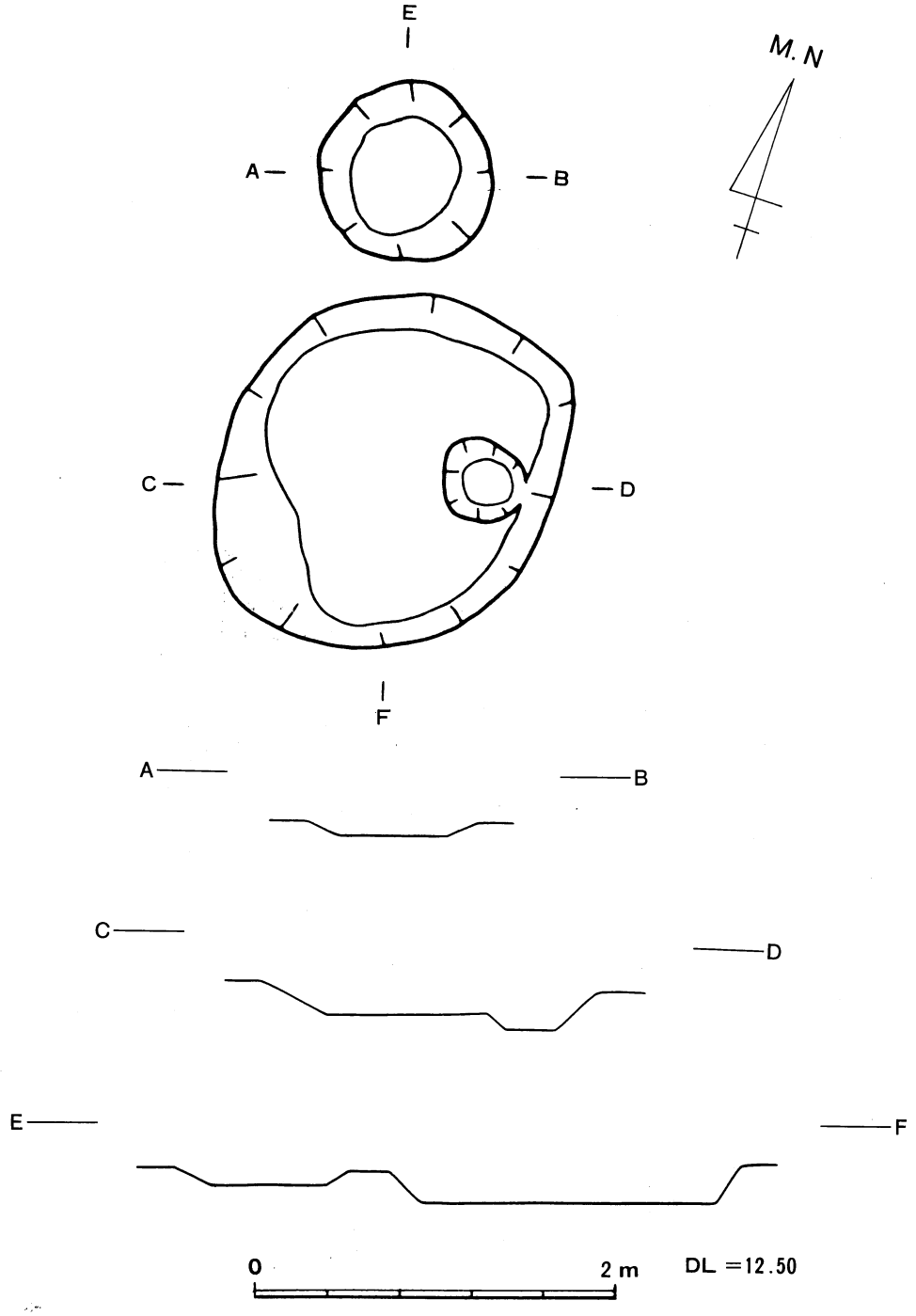


Fig.5 SK-01, 02

はできまい。調査現況からみれば一応１間×7.5間の建造物ではあるが，さらに西方への延長も考えられる建造物である。

ＳＢ－03

ＳＤ－03の溝に囲まれた東西13m，南北５m区内について遺構の存在が考えられる。空間地内部においては発掘状況から礎石状河原石などの確認はできなかった。ただＳＤ－03の西部の南北に5.5m続く溝の東側石には１m間隔で，他の石に比してやや大きめの上面偏平な礎石状の配石があり，又この溝が東に折れて10mのび暗渠部に至る間にもほぼ同間隔の同様礎石状河原石が存在する。この点から考慮すれば，ＳＤ－03の側石には一部礎石として兼用されたものも存在すると考えられ，この部分も単なる空閑地ではなく何らかの建造物も存在したものと考えてもよさそうである。

ＳＢ－04

ＳＢ－05の西南隅部に接して検出された東西方向に棟をもつ長屋風の建造物礎石群である。

検出状況は集石群８個所と，上面偏平な礎石状河原石１個が東西8.5m，南北2.5m区間に整然と並び明確に建造物礎石群との判断可能な規格性をもっている。

各集石群の形状はほぼ円形を呈しており，拳大から人頭大までの河原石が径１m，高さ20～30cm程度盛りあげられた状況である。ただⒷ－④地点の集石群には河原石とその割石が多く，また東南隅部のⒷ－⑤地点には集石はなく50×30cmの長楕円の上面偏平な河原石が１個存在するのみであり，東北隅のⒶ－⑤地点には集石群も礎石状河原石も存在しない。

これらの集石群のほぼ中心部の計測値は，南北が1.8m，東西は2.1～2.2mの規格性を保ち１間（南北）×４間（東西）の建造物が想定できる。集石群のうちⒶ－④，Ⓑ－②，Ⓑ－③については集石群の中央部に上面偏平な河原石を配し，その石を周辺から包み込むような形状で積まれている。特にⒷ－③については礎石上に柱を据え置き，その柱を周辺から河原石で包みこむことによって柱をより強固に固定している配慮がうかがえた。

これらの周辺集石を除去すると各集石群の中心部より大きめの上面偏平な河原石の礎石を検出することができた。ただⒷ－④地点の集石群には礎石に該当する大ぶりの偏平石が確認できなかった。これらの礎石群は西端においてはⒶ－①，Ⓑ－①の礎石間を接続するようにその間に河原石が並列され礎石間隔は中心部計測で1.8mである。

北側Ａ列はⒶ－①地点から東に6.4m区間に３個の礎石があり，その間隔は西方より2.2，2.0，2.2mのほぼ同間隔で並ぶ。一方Ｂ列についてはⒷ－①から1.8，2.2mの間隔でありⒷ－④礎石がなくⒷ－⑤礎石に至り，Ⓑ－③よりⒷ－⑤までは4.3mを測る。Ⓐ列，Ⓑ列の南北間隔はすべて1.8mの等間隔である。

これらの礎石は西端部Ⓐ－①・Ⓑ－①の中心礎石は50×30cm，50×45cm大のものでその間に

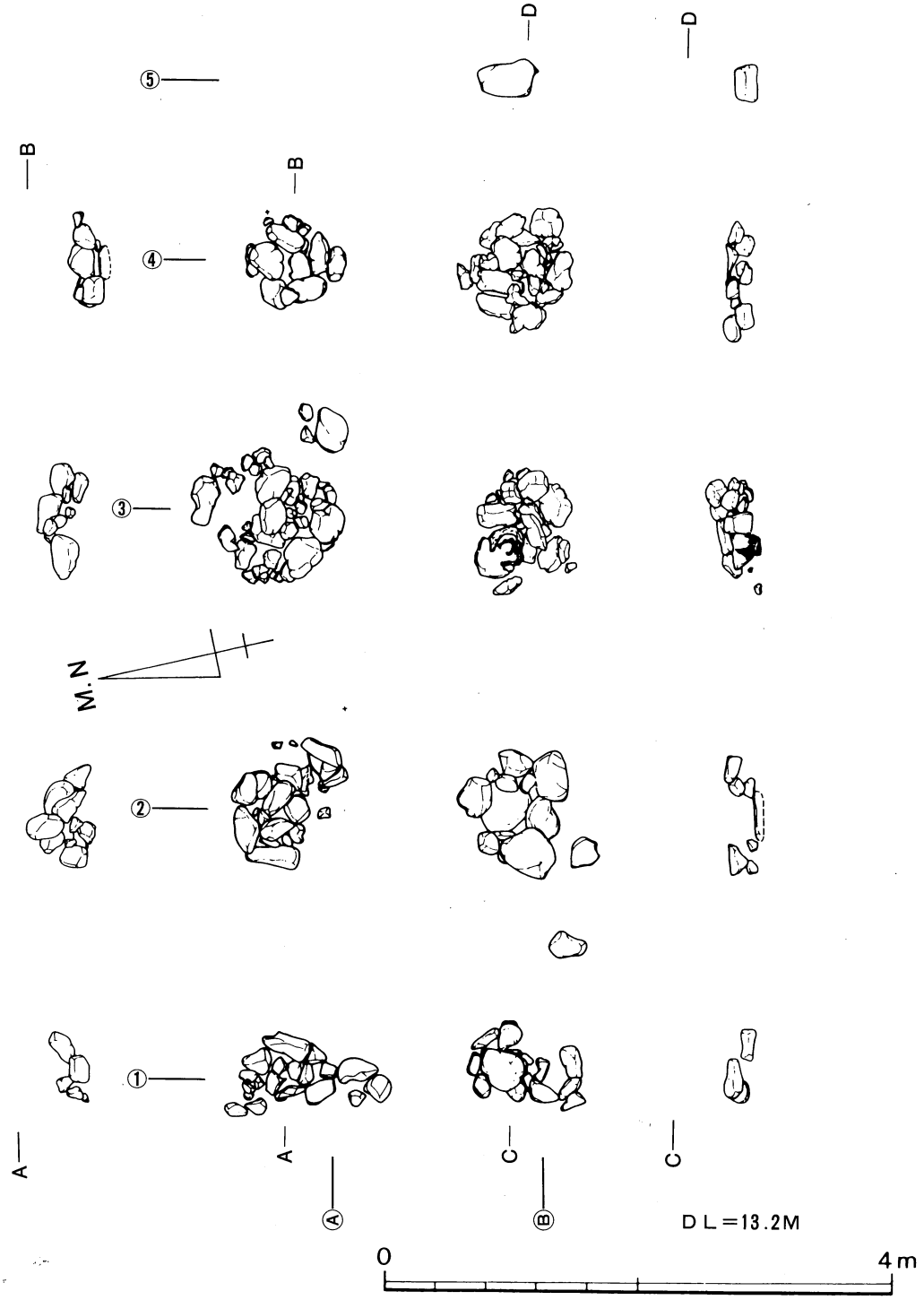


Fig.6　SB−04平面,立面図

おける小河原石の並列は建造物端部として良好な遺存状況の遺構である。Ⓐ－②，Ⓑ－②については両礎石とも50×50㎝程度の大きさであり礎石として良好な石ではあるがⒶ－①及びⒷ－①からの距離が2.2ｍと1.8ｍと若干のずれがあり通りが必ずしも良好とは言えない。Ⓐ－③，Ⓑ－③は30×30㎝，70×40㎝大の礎石で通りも比較的良好である。Ⓐ－④，およびⒷ－⑤にはそれぞれ相対する礎石が存在せず計測は不能である。ただ先述のとおりⒷ－④地点には他所と同様の集石群が存在していたことからこの部分における礎石の存在は否定できない。Ⓑ－⑤地点には当初から集石群はなく礎石１個が存在し，Ⓐ－⑤地点には集石群も礎石も存在しておらずこの周辺についての追求は不可能である。またⒷ－⑤とⒶ－⑤推定点の東部に両礎石とは対応のとれたコ字形の配石遺構が存在する。あるいはこの遺構はこの建造物に伴うものであるかも知れない。

なおⒷ－③礎石上で検出された柱根は，柱幅25.8㎝の面取り柱で70×40㎝の大形河原石に据置かれていた。ただ検出状況は河原石の平担面に柱が密着して据置かれていたのではなく，柱も礎石へ接する部分は四方よりそれぞれ削り込まれ礎石に接する部分は柱の中央部分のみとしている。礎石として１個の大石は配してはいるが，必ずしもその礎石の平担面に柱の切り口全面を密着固定させるのではなく，数個の石に柱の重量を分散させるが如き手法をもって柱を固定している。そのために周辺部から柱をおさえる河原石の積み上げ集石部分が必要であったかも知れない。

ＳＢ－04の建造物は礎石も大きく，柱も大きい。また周辺から出土した板片も46.1×27.3㎝で厚さ3.5㎝程度と重厚であり，木製クサビも出土している。これらの出土物から考慮すればこの建造物は相当の重量にも耐える技法であり重量物の保管用の蔵としての性格を考えるのが妥当のようである。

ＳＢ－05

発掘区中央部で検出した敷石礎石建物址である。

ＳＤ－02上面より20～30㎝下方に礎石上面の偏平面が検出できた。その間の層位は黄色あるいは黄褐色の泥岩礫も含んだ無遺物層であり，その下層部に５～10㎝一面にわたっての炭化層が存在する。その直下から発掘された遺構である。

建物址は東西10.5ｍ，南北11.5ｍ，東西に石組排水溝をもち，その内部に東西４間，南北４間の礎石建造物と，南部に3.5ｍ区間に空地をもつものである。なお建造物敷地内にはほとんど全域にわたって敷石がある。

礎石建造物址

建造物の規模は東西４間，南北４間の建造物で，Ⓐ－⑤，Ⓑ－②，Ⓓ－④の３地点には礎石

が存在しない。それぞれの礎石は40×30㎝，35×40㎝大の大ぶりの石で上面偏平の河原石である。

柱間間隔は礎石中心部からの計測でⒹ～Ⓔ区間が2.3ｍで他はすべて1.8ｍ間隔である。礎石群のうち①の南北列は西側排水溝の側石を利用し，②の南北列についてもⒷ－Ⓒ－Ⓓ区間には南北に整然とした石列をみ，またⒺ－②の間は東西にも配石をみる。そして南北①・②間，東西Ｅ列間の礎石間は版築状平担面であり，他は全域にわたって拳大から40×30㎝大の石までが無雑作に敷かれている。②・③列間には大石が比較的散在しているが③・④・⑤列間は大小さまざまの石が密度濃く敷かれている。また東端⑤列の礎石以東には80～90㎝幅で東に張り出し部分がある。礎石状偏平石の存在しないⒷ－②及びⒶ－⑤については周辺の配石状況から抜き取られた可能性も考えられるが，Ⓓ－④については周辺敷石部分にも全くの乱れもなく，むしろ最初から礎石がなかったものと考えてもよさそうである。

石組排水溝

建造物の東西に所在する南北方向溝の排水溝で，東側は建造物東部礎石より80～90㎝東にあり幅20㎝，深さ15～20㎝内外で延長10ｍのものである。側石は30×20㎝大の比較的平均した楕円状河原石を使用し，その長軸面を内側にしている。礎石建造物の東端⑤列礎石と排水溝の間隔は，北部Ⓑ－⑤部分で1.8ｍ，南端Ⓔ－⑤地点で1.5ｍとやや南が狭くなっている。この間いわゆる⑤列礎石部分に沿って存在する幅80～90㎝の敷石部分以東については溝方向にやや傾斜した地表面であるが，特に版築状に成形したものとは認めがたい。

なお東溝の南端部には1.2×1.2ｍの方形の石群があり排水溜のための土坑としての役割をもった土坑石群とみるべきものであろう。

西側排水溝の東側石は，先述の通り南北①列の礎石列と兼用となっており，北端部より3.6ｍ区間，即ちⒸ－①地点の礎石群までは崩れているがそれ以南については比較的良好な遺存状況である。配石築造方法とも東側排水溝と同様である。ただⒸ－①，Ⓓ－①，Ⓔ－①間の配石状況と西側石の配石を比した場合，礎石間の敷石はやや粗雑な配石である。

またⒺ－①地点以南については1.8ｍ区間に内側石はなく，また南端部1.8ｍ区間には排水溝の配石状況とは全く方法を異にした配石遺構が存在する。即ち30×15㎝内外の長楕円の河原石が８個短軸面を西に整え，裏ごめの栗石なども丁寧に挿入した石列を形成している。従って西側排水溝については内側側石部は北端部から7.7ｍ，西側は9.9ｍで止め，南端部1.8ｍ区間は別の敷石遺構として把握した方が妥当かも知れない。

礎石Ⓔ列以南についても，建造物址ほどではないが比較的大ぶりの石を混じえての粗雑な敷石部分が拡がっている。ただⒺ－⑤礎石南1.8ｍ部を北端とし，東西1.8ｍ，南北90㎝の敷石部

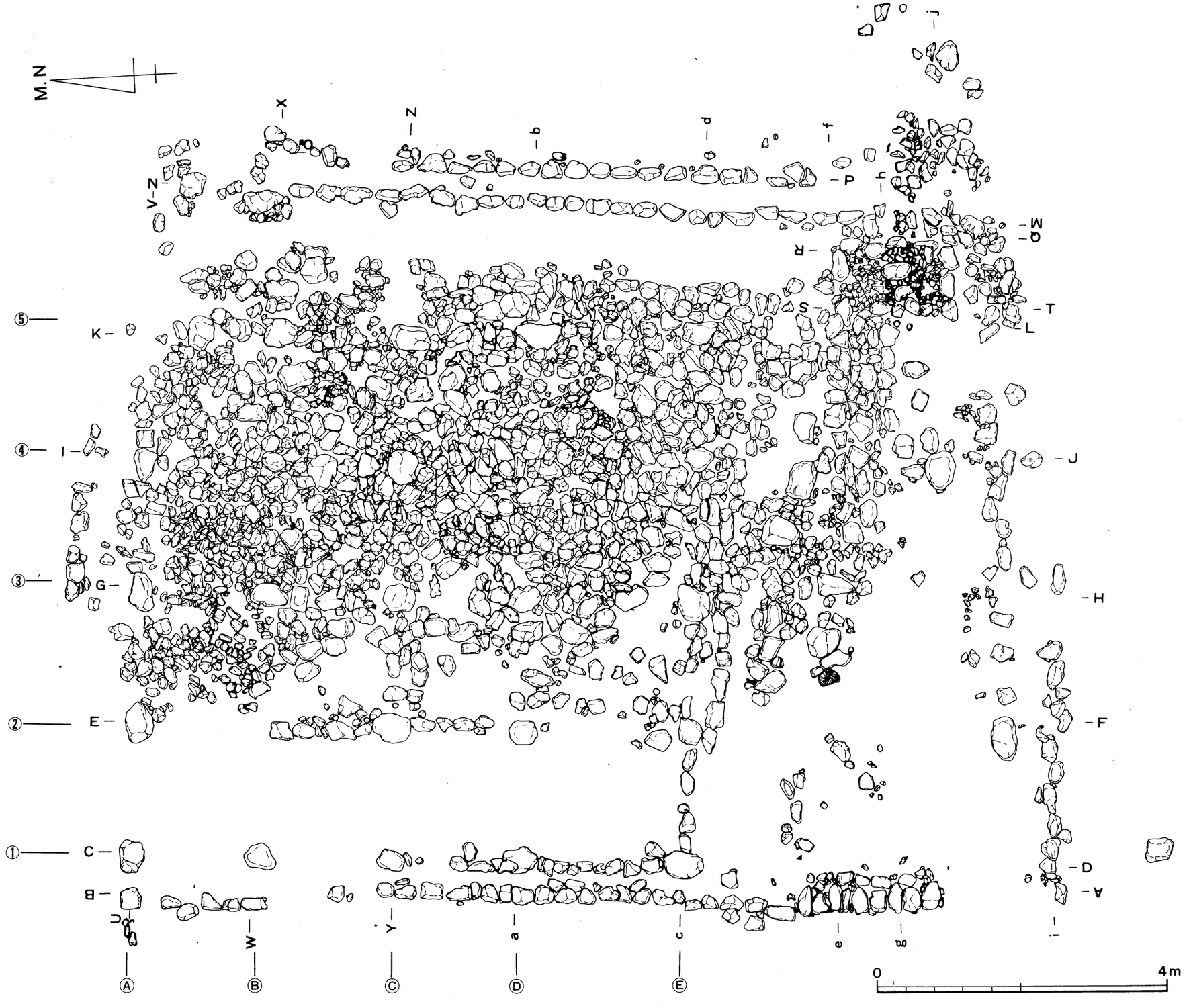


Fig.7　SB-05　立面図

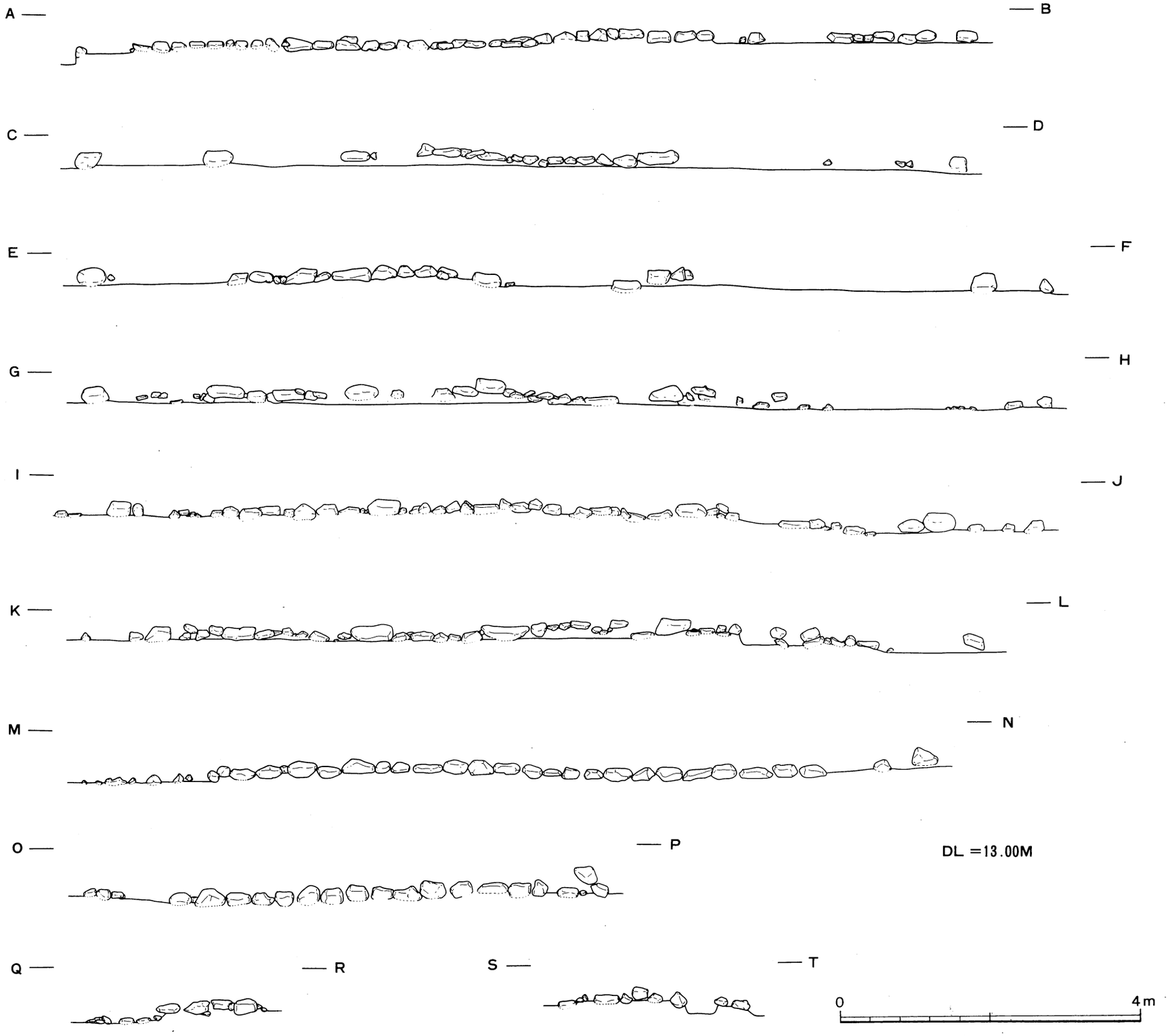


Fig.8　SB-05　立面図

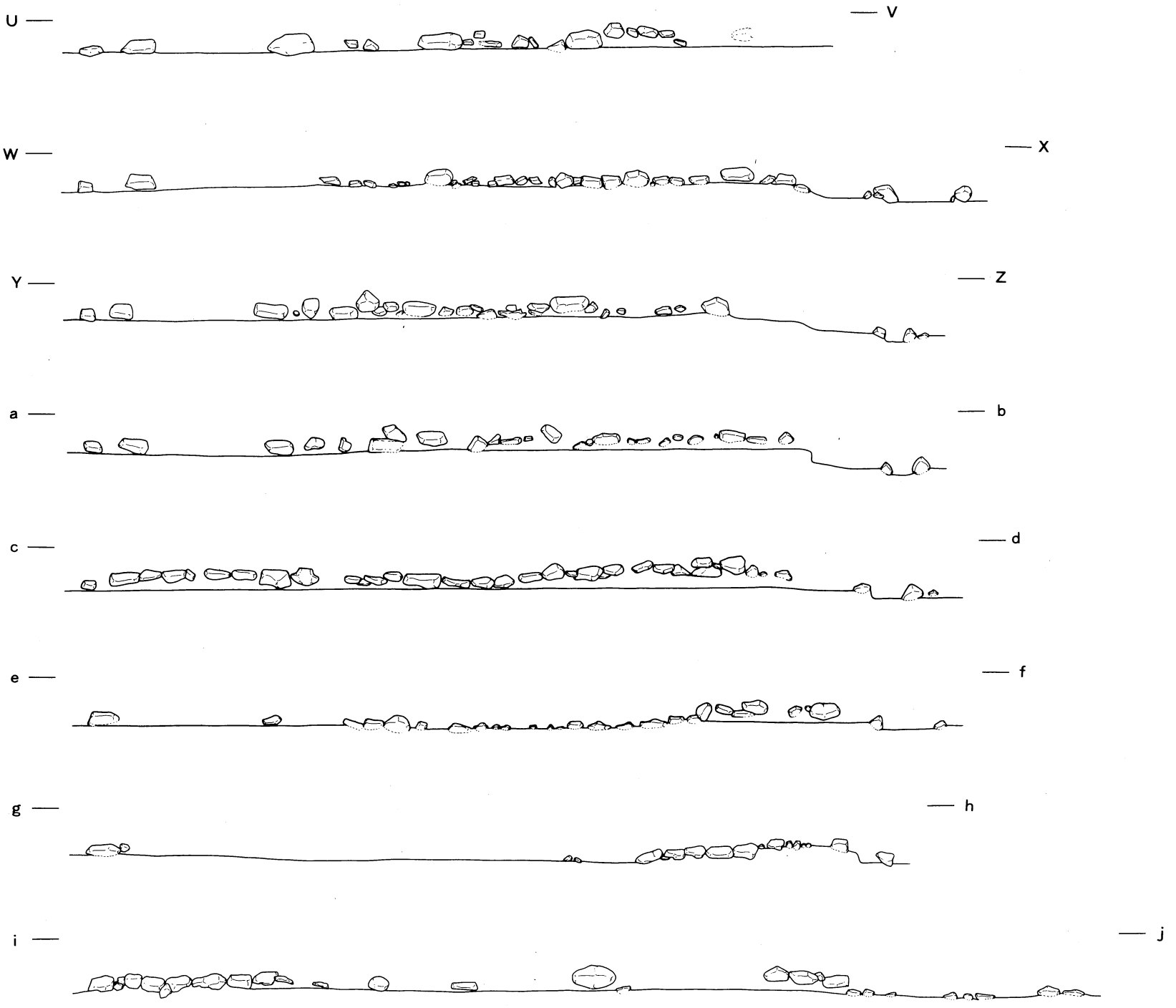


Fig.9　SB-05　立面図

と，その東端に接して南北1.8m，東西１mの東西方向の敷石部は，周囲外面に石面を整え，かつその内部にも30×30cm大の石が全域にわたって散在する。

一方南北方向の部分は外縁部には比較的大石を配置しているが，その内部には他所に比し極単に小さなバラス状の小石がまかれている。いずれも１間×半間に該当する計測値であるが建造物の南東隅部分にあたり，建造物への出入口に関連をもった遺構と考えることができるのではなかろうか。

第Ⅳ層以下の調査

第Ⅳ層以下の調査については，調査期間の調整と既発掘遺構の最大限保存のため下層確認のためのトレンチ調査を実施した。トレンチは既発掘遺構の存在しない地点を選び任意に設定したものである。その結果中世安芸氏土居関係のものと考えられる掘立柱柱根や杭などが出土したが調査期間の関係や既発掘遺構で以下記す程度の調査で終了せざるを得なかった。

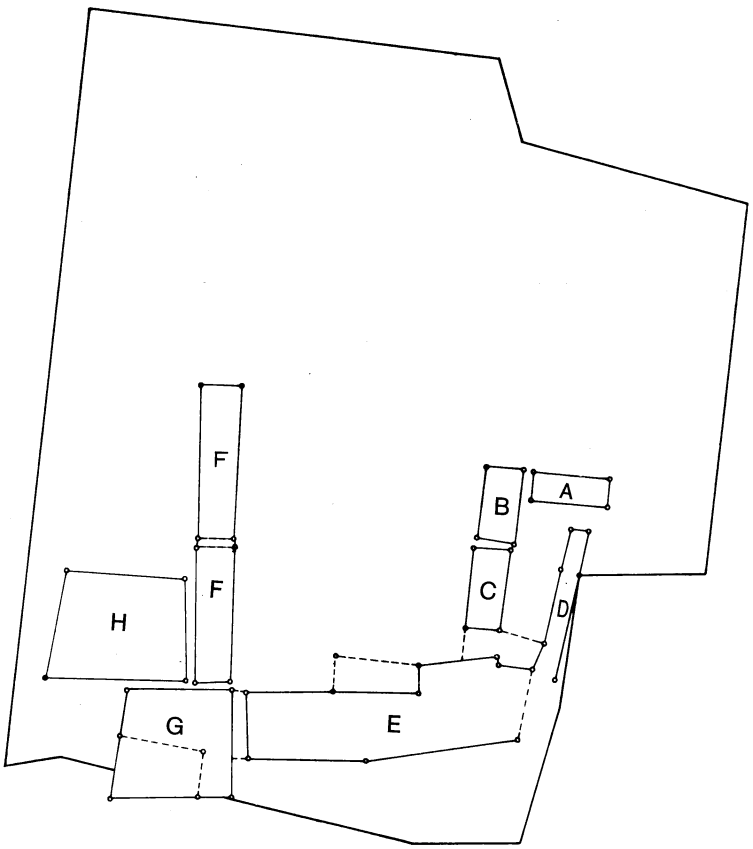


Fig.10　第Ⅳ層以下の調査のためのトレンチ配置図（S＝$\frac{1}{400}$）

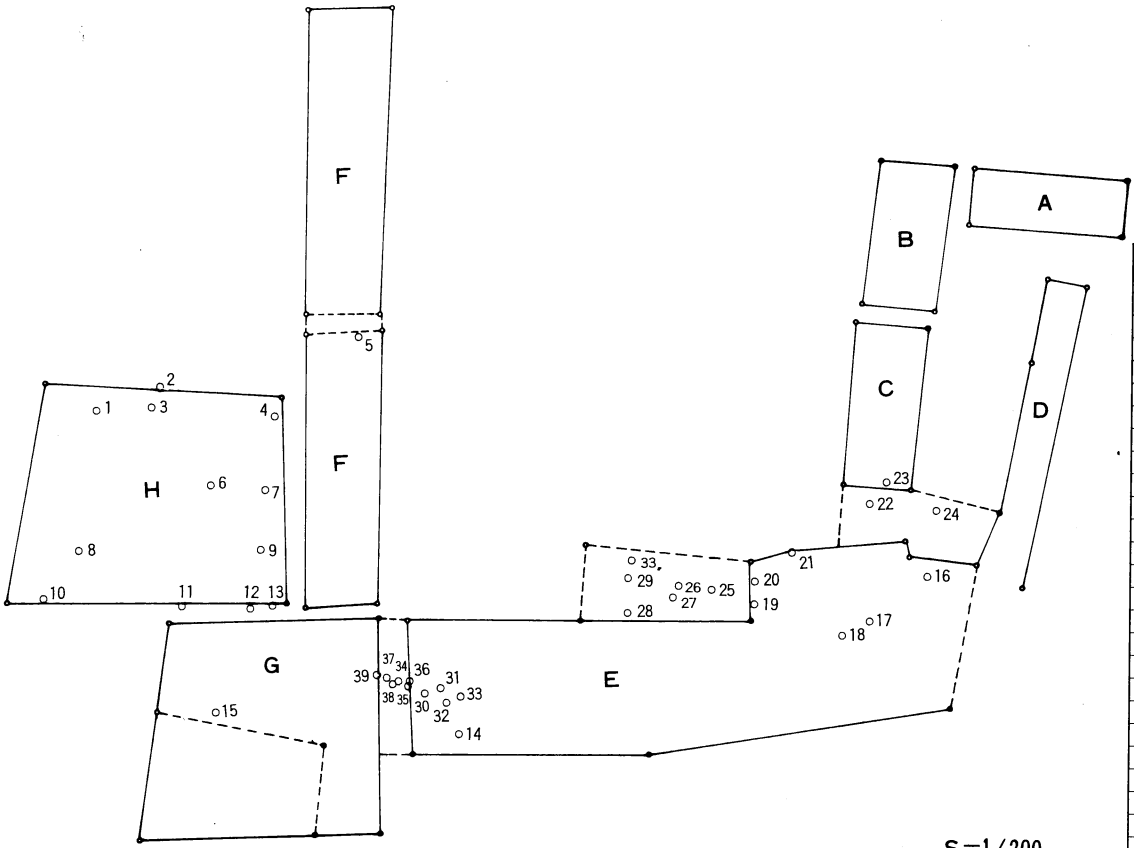


Fig.11 トレンチ遺物出土地点

番号	標高
1	12.194
2	12.071
3	11.819
4	11.948
5	12.016
6	11.969
7	11.967
8	12.132
9	11.962
10	12.047
11	11.967
12	12.145
13	12.047
14	11.801
15	11.705
16	11.718
17北	11.616
南	11.666
18	11.729
19上	11.907
下	11.844
20	11.516
21	11.734
22	11.825
23	11.894
24	11.733
25	11.758
26	11.914
27	12.098
28	11.929

番号	標高
29	11.928
30上	11.682
下	10.382
31上	11.660
下	9.810
32上	11.600
下	10.590
33	11.772
34上	11.445
下	10.453
35上	11.263
下	10.508
36	10.903
37上	11.451
下	10.487
38	10.862
39上	11.468
下	9.995

トレンチ名	規 模(m)	遺構及び出土遺物	特　記　事　項
A	東西1.5 南北4.0 深　1.2	なし	なし
B	東西2.0 南北4.0 深　0.9	なし	なし
C	東西2.0 南北4.0 深　0.9 南拡大部 東西4.0 南北1.5	土　壙 柱根（木杭）2	なし
D	東西1.0 南北8.0 深　1.8	南端部に土塁裾石群	なし
E	東西13.0 南北 3.5 深　 0.9 拡大A区 東西4.5 南北2.0 拡大B区 東西6.0 南北1.7 拡大C区 東西0.8 南北3.5	東端部2ケ所に柱根 西端部56ケ所の坑,柱根状自然丸材 6ケ所の柱根 4ケ所の柱根 8ケ所の柱根	拡大部A区とEトレンチ西端部，及び拡大C区に集中的に抗や柱根状の自然木片が出土した。特に拡大A区及びB区においてはすべてが柱根であったが狭範囲の限定調査であり，柱列として規格性を明確にできるまでの調査に至らなかった。 柱根はすべて自然の丸材であり径10～15cm程度で残存高も15～20cm程度のものばかりであった。各柱根間のレベル差はほとんどなく，すべて時期的には大差ないものであろう。トレンチ西端部と拡大C区における柱根や杭などには全く規格性はなく間隔もレベルもまちまちである。 31，32，36地点の杭については全掘した。この結果32地点においては径20cm，長さ1.85mの自然丸材で先端部は削り尖がってお

			り，また中央部分には枘穴状の長方形の穴も存在する。また31地点の杭は先端部は完全にとがり径10㎝長さ1.0ｍの自然丸木である。36地点については径10㎝内外の自然木を杭間の横木として使用したものである。 杭の打ちこまれた周辺は青灰色粘質土，あるいは青灰色砂質土層部分であり，かつての沼状地の如き湿地のヘドロ状堆積土層である。これらの杭もこの湿地部分における護岸杭であったかも知れない。ただ調査区が狭く杭部分のみの調査であったため，杭列等全域の把握もその杭の性格も把握するまでには至らなかった。
F	東西 2.0 南北15.5 深　0.6	集石群 下駄片方	トレンチ中央部分に2.0×0.8ｍの長楕円状の河原石群がある。 集石群のなかに下駄片方が出土
G	東西5.5 南北5.5 深１～1.6	集石群 自然木片	トレンチ底部より検出した集石群とその中に混入した自然木片などが散在の状況である。周辺地層の断面も複雑で攪乱部分も多い。 また1.6ｍ掘り下げた部分などは暗緑灰色粘質土層であり，ヘドロ状の堆積状況である。自然木片や集石群はヘドロ状沼沢地の底部を堅めるのに投入された河原石や木片であったかも知れない。
H	東西5.5～7.5 南北5.5 深　0.3	12ケ所の柱根	柱根１，３，４の東西列，４，７，９，12の南北列についてはほぼ直線の通りを認めることはできるが，柱間隔は1.5～3.0ｍとまちまちであり，建造物の規模などを明確にはできない。柱根はほとんど径10～15㎝内外の自然丸材であり，取り上げ不能の如き腐敗状況のものが多い。

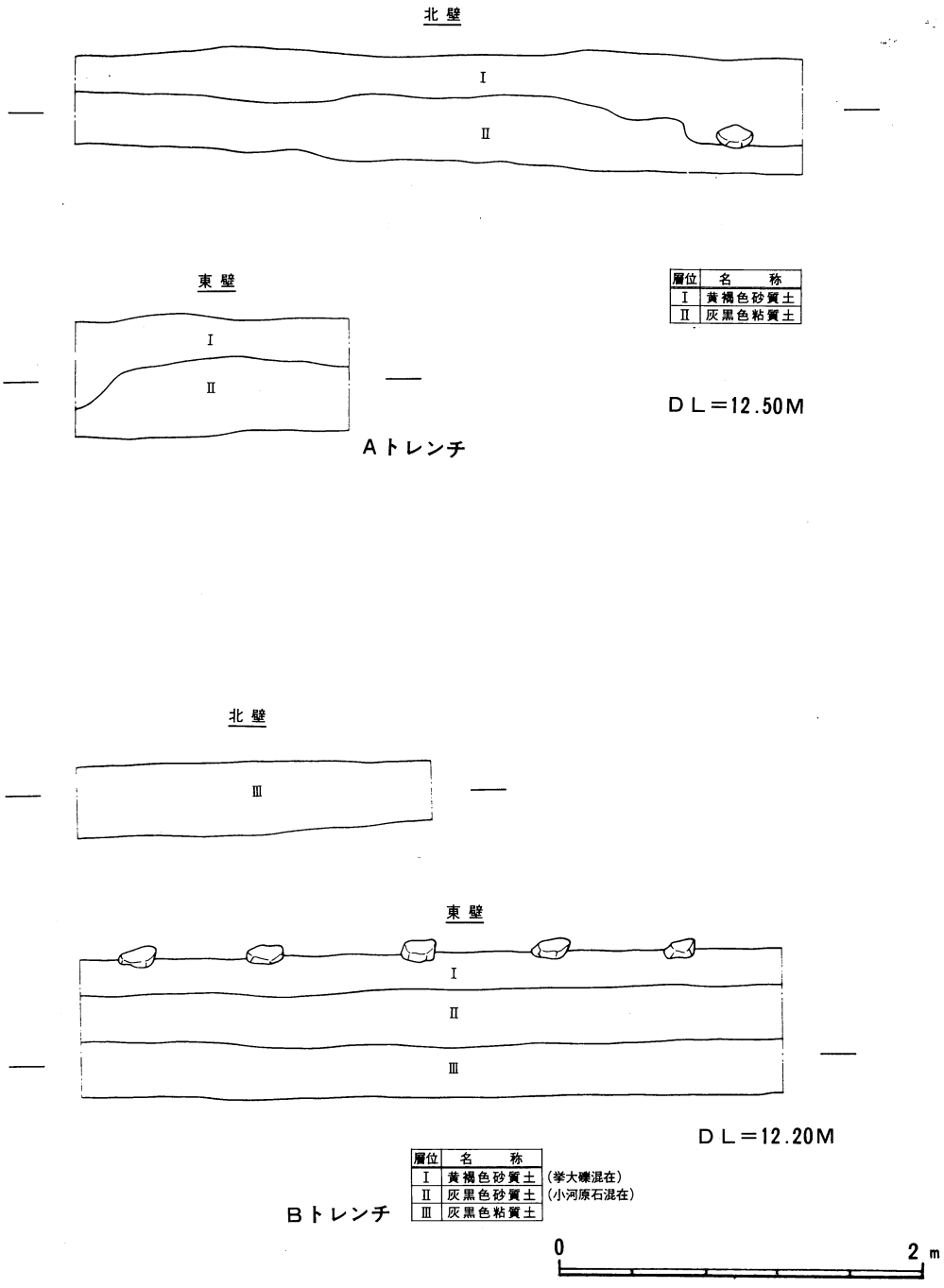
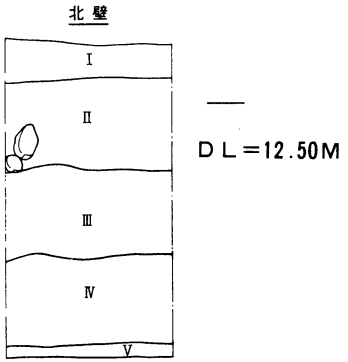


Fig.12 A,Bトレンチセクション

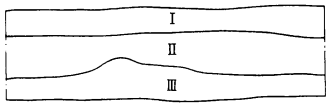
Fig.13 C,Dトレンチセクション



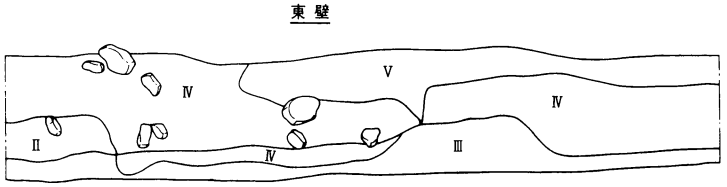
DL＝12.50M

層位	名　　称
I	黄褐色砂質土
II	黄褐色砂質土
III	黄灰褐色粘質土
IV	黄灰色粘質土
V	青灰色粘質土
IV	灰黒色粘質土

（風化砂岩礫混在）

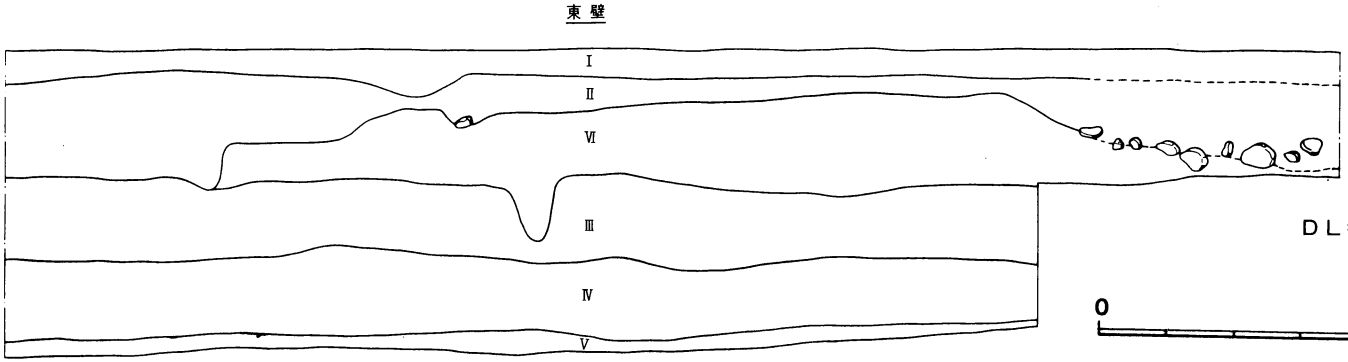


層位	名　　称
I	黄褐色砂質土
II	灰黄色砂質土
III	茶褐色粘質土
IV	茶 褐 色 土
V	褐　　色　土
IV	黒褐色粘質土



DL＝12.20M

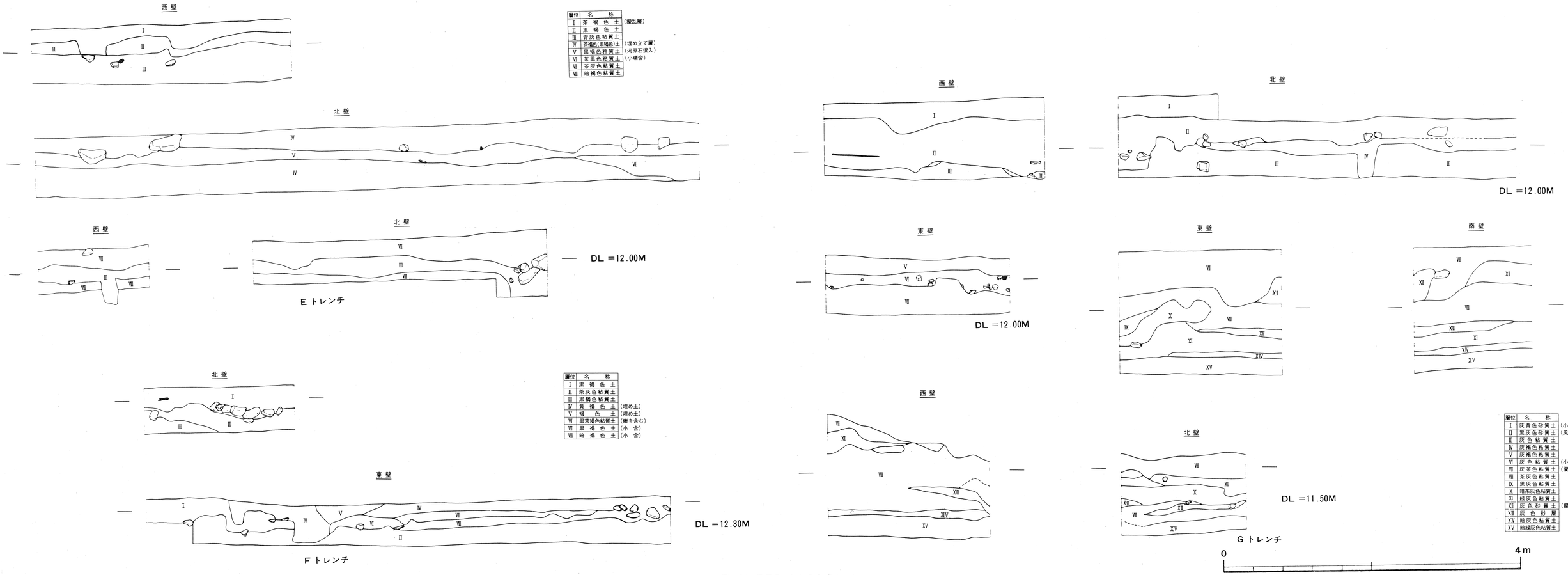
Cトレンチ



DL＝12.50M

0　　2 m

Dトレンチ



層位	名称	
I	茶褐色土	(撹乱層)
II	黒褐色土	
III	青灰色粘質土	
IV	茶褐色(黒褐色)土	(埋め立て層)
V	黒褐色粘質土	(河原石混入)
VI	茶黒色粘質土	(小礫含)
VII	茶灰色粘質土	
VIII	暗褐色粘質土	

層位	名称	
I	黒褐色土	
II	茶灰色粘質土	
III	黒褐色粘質土	
IV	黄褐色土	(埋め土)
V	褐色土	(埋め土)
VI	黒茶褐色粘質土	(礫を含む)
VII	黒褐色土	(小 含)
VIII	暗褐色土	(小 含)

層位	名称	
I	灰黄色砂質土	(小河原石混入)
II	黒灰色砂質土	(風化砂岩混入)
III	灰色粘質土	
IV	灰褐色粘質土	
V	灰褐色粘質土	
VI	灰色粘質土	(小角礫河原石混入)
VII	灰茶色粘質土	(撹乱層)
VIII	茶灰色粘質土	
IX	黒灰色粘質土	
X	暗茶灰色粘質土	
XI	緑灰色粘質土	
XII	灰色砂質土	(撹乱層)
XIII	灰色砂層	
XIV	暗灰色粘質土	
XV	暗緑灰色粘質土	

Fig.14 E,F,Gトレンチセクション

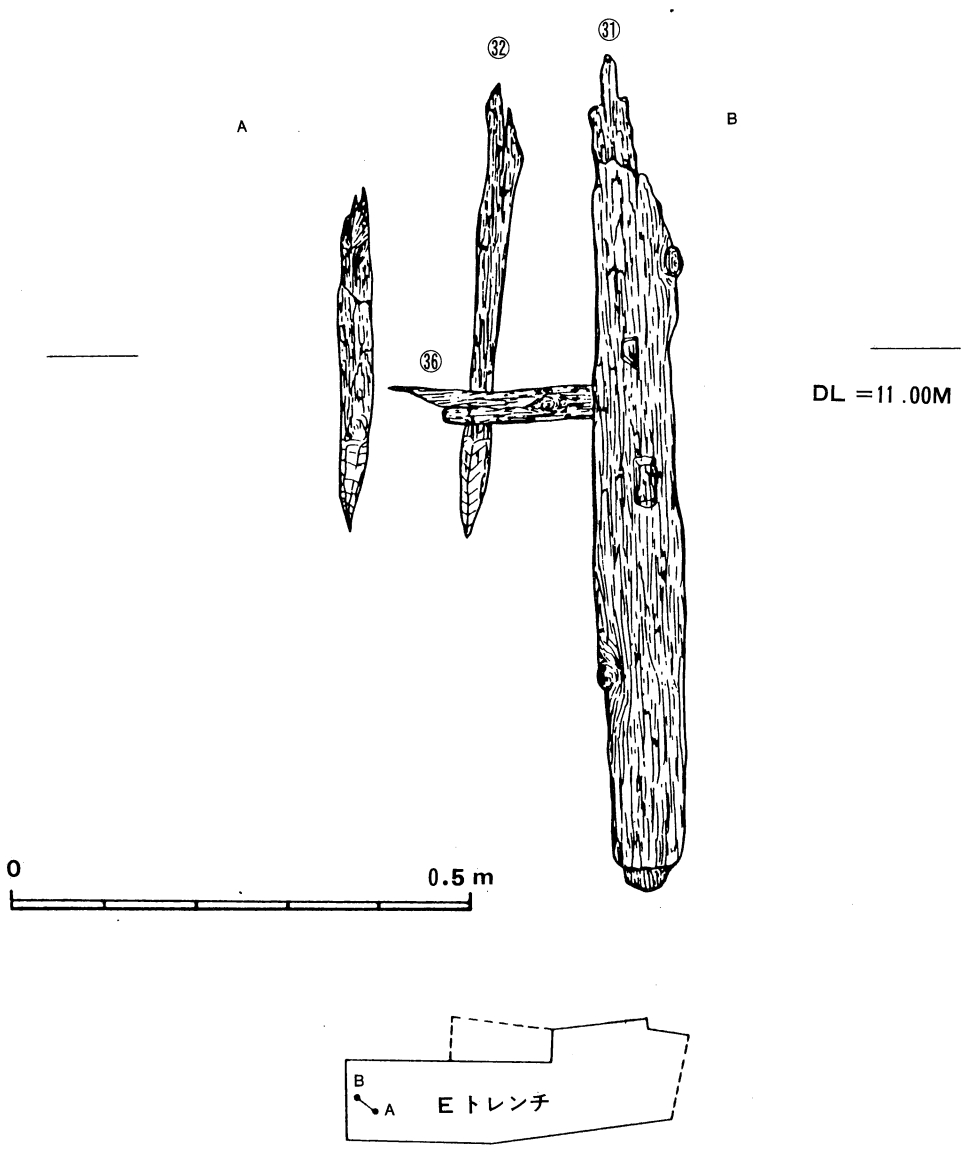


Fig.15 Eトレンチ杭列立面図

Fig.16　Gトレンチ遺物出土状況

第Ⅴ章　出土遺物

今回の調査では，15～19世紀にいたる土器，陶磁器，瓦類が多量に出土した。その中でも，伊万里，唐津の製品が多い。本調査では，近世の屋敷跡という性格上，遺構検出面が浅く層位的にすべて取り上げることが不可能であった。ここでは，土器，陶磁器については種類，器種ごとに，その他の遺物は，瓦類，金属製品，石製品，木製品の順に概略を述べることにする。なお，土器，陶磁器の詳細は観察表も参照されたい。

イ．土師質土器，瓦質土器

1～3，29，33は，小皿である。口径8.4cm，器高は2cm内外を測る。すべてロクロ成形で，1を除き底部回転糸切り調整である。4～28，30～32，34は皿である。4，13，31，32，34はロクロ成形で，その他はロクロ未使用で内外面ナデ調整である。25～28，30は白色糸の皿で，口径15～16cmを測り他と比べて大きい。白色系の皿の形態で，口縁部が外反するもの，直線的に立ち上がるものが見られる。その他の皿類は，すべて褐色系で，口径10～12cm内外である。体部の内外面に指頭圧痕が残る。

35～44は杯である。43を除きロクロナデによる成形である。43は皿になる可能性もある。底部は，35，36に見られるように回転糸切り調整である。形態的に体部が直線的なものと内湾して立ち上がるものが見られる。

46は椀である。底部破片であるが，貼付高台を有する。1片のみで出土数は少ない。45は器種不明であるが，甕か壺の底部破片と考えられる。47は甕である。外面に斜位のタタキ，内面はヘラナデによる調整が施される。48，51は焼塩壺で，輪積みで成形されている。刻印は認められない。時期的に17世紀前半頃と考えられ古いタイプである。49，50，52，54，57は鍋である。49，50は，貼付の鍔を有し口縁部は内傾する。口縁部内外面はヨコナデ調整で，胴部外面に斜位のタタキが施される特徴がある。54は内面に乳状の突起を有する。56は火舎，55は香炉と考えられる。59～67は土錘である。全長は5cm前後を測る。いずれも円筒形を呈しており，土師質土器と共通の土である。58は羽口で，胎土は浅黄橙色で赤く変色している部分がある。

瓦質土器は2点出土している。53は，高杯と考えられ外面に指頭圧痕が残る。68は火鉢である。

ロ．輸入陶磁器

輸入陶磁器は，全体的に下層のⅤ，Ⅵ層から出土している。時期的には，15～17世紀初頭の頃と考えられるものが多数である。以下青磁，染付，色絵，白磁の順に述べていく。

青磁：皿，碗，盤，鉢がある。69～73は皿で，69を除き15世紀末から16世紀のもので，底部破片が多いが，稜花皿である。69は龍泉窯系で南宋までに生産されたものと考えられる。70

菊皿である。

75～81，83～88は碗である。78～80，81は，内外面無文であり，口縁部が外反するものも見られる。76は，外面に蓮弁文が施される。83～88は，新しく出現するタイプである。83は，口縁部外面にくずれた雷文帯が施されており，その他は細蓮弁で構成されている。74，82，89は盤，90は鉢である。全般的に青磁は，碗が多く出土しており，大きく前述した2つのタイプに分けることができ，15～16世紀に生産されたものと考えられる。

染付：小杯，皿，碗がある。小杯は2点である。16世紀末頃に生産されたものと考えられ，91は高台部露胎である。92は外面花卉文が施される。93～112は皿である。93，94は外面に牡丹唐草文，見込に玉取獅子文がみられ95の見込は魚文が施される。96は碁笥底のタイプであり，97は外面に密な唐草文，見込はアラベスク文様である。101は，他と比べると小振りで見込に羯磨文が施される。その他108も同様な文様構成である。104，109の口縁部内面には，四方襷文が施される。110の見込は，花喜字文で高台部の畳付が広く蛇ノ目高台である。111は，16世紀末～17世紀初頭に生産されたもので，外面は口縁部に1条の界線のみで，見込は花文である。

113～129は碗である。113は，口縁部外面に飛馬文，114，120，122は，外面口縁部が波濤文，体部は芭蕉葉文である。115，119も同様に口縁部が波濤文の構成で，115の体部のみアラベスク文様が見られる。116，117は，見込に列点文が施され，いわゆる「蓮子碗」の系統に属するものと考えられ，見込が高台内に凹む器形になっている。118の見込は，樹下羅漢図文であり，121と同様に外底に銘が施される。123～128までは，16世紀末～17世紀初頭の頃と考えられるものである。123の見込には，盒子錦図文，124，126，127は小破片で文様構成等明確ではないが，124の内外面が花卉文，126の外面が蟠龍文，127の外面は卍文が施される。125は，外面に花卉文，口縁部内外面四方襷文である。128は，見込に雲文と飛馬文の構成で染付られている。この時期の特徴として，口縁端部に虫喰が見られる。全体的に他の輸入陶磁器と比べると小破片が多く明確な器形等は把握できないが，県内では出土数が少なく貴重な遺物である。

色絵：色絵は碗と盤の3点のみである。130の碗は，口縁部が稜花形を呈しており，色絵の部分は小範囲しか確認できない。131は盤の口縁部破片で，内面のみに波濤文が施される。144は碗で，比較的高い高台を有しており，見込は蛇ノ目釉ハギで花卉文が施されている。色絵は不鮮明で明確でない。

白磁：小杯，皿，碗が出土している。132は小杯で，底部の小破片であるが見込は，蛇ノ目釉ハギが施される。16世紀末～17世紀初頭に出現するものである。133は灰白釉の施される皿で，外底は露胎で見込に篦描き文様が施される。134は，玉縁の口縁を持つ碗である。この2点は，輸入陶磁器の中でも古く位置づけられるものである。135～142は皿である。135は，輪高台で口縁部が内湾して立ち上がるタイプと考えられる。15世紀中頃から後半にかけて出現するものである。136～142は，口縁部が端反りのもので，138や142の大振りの皿や136，140のように小振りのものと2つのタイプに分けることができる。畳付は，露胎のものや砂が溶着しているも

のがある。この端反りの皿は16世紀に多く見られる。143は，口縁部が外反する碗で，胎土は密で薄く仕上げられており型による陽刻文が施される。16世紀末～17世紀初頭のものである。

ハ．国内産陶磁器

伊万里：145～177，179は皿類である。145～152は17世紀前半の皿で，148を除き底径が狭く畳付のみ露胎で砂が溶着しており，古い特徴を示している。145は，見込に鳳凰文，146は狩図文が描かれる。その他見込の文様として，147の花卉文，150の草花と蝶文，152の草花文などがある。148は，折縁皿で口縁部内面に鋸歯文が施される。151は，手塩皿で口唇部は稜花である。口縁部内面に福と花卉文，見込に花文が施される。窯ノ述窯[1]でも同様な製品が焼かれている。153，154は，17世紀中葉の皿である。153は，高台内が深く削られている。154は，変形皿で見込に山水文，外底に大明の銘が観察できる。155～163は，17世紀後半から18世紀前半の頃と考えられる。比較的高い高台を有するものが多い。155は色絵である。157は，見込蛇ノ目状釉ハギで体部下半から高台部にかけて露胎である。158は，手塩皿で貼付高台を有する。口縁部は輪花で，内面に亀甲花文が施される。160は，見込釘掘りによる刻線で牡丹唐草文が描かれる。162は，コンニャク判を使用し見込に五弁花が施される。164～166は，18世紀中頃から幕末にかけての製品である。特徴として，蛇ノ目凹形高台を有している。164は，見込に竹文様が施される。167，168は中皿である。17世紀前半の製品で，文様構成も167が一重の網目文，168は見込に亀甲菊花文などが施される。169～172は大皿である。169は17世紀前半のもので，見込に草花文が施される。これは雑器ではなく，一般の集落遺跡では見ることのできないものである。171は17世紀中葉，172は後半と考えられる。古いものと比較して高台部に差異を見ることができる。173～177は深皿である。174，175は口唇部に辰砂が施される。179は小皿で畳付のみ無釉で，口唇部は口錆びである。180～191は紅皿である。18世紀の後半頃に生産されたものと考えられる[2]。すべて外面に放線状の凹凸が施される。178，192～251までは碗類である。178，192～201は17世紀前半の碗である。192は，筒形の碗で外面に雲文が施される。194，197は青磁である。文様が明確なものは，193のみで，外面に草花文が施される。この時期の特徴は，畳付のみ露胎で砂が溶着している点である。202～215までは，17世紀後半の頃に生産されたものと考えられる。全体的に畳付の部分が狭く，断面逆三角形を呈する高台部が多い。文様としては，202の外面に花文，203は菊重ね，205，209，212，214は一重の網目文である。208は色絵である。215は外面に刻線文が施される。216～232は18世紀全般的に見られるものである。216は，二重の網目文，220は型紙摺で木の字文と花文様，227も同様に型紙摺で花散文が施される。218は，高台が高い白磁の碗である。その他225も白磁である。この時期になると222のように半磁器の製品が出現してくる。246は，やや小振りであるが18世紀前半には見られるものである。233～245，247～251は18世紀後半から幕末にかけてのものである。238～245，247，249までは，広東碗である。250，251は，19世紀初頭から中頃にかけての筒碗である。250は見

込にコンニャク判の五弁花で，蛇ノ目凹形高台になっている。251は外面草花文が施される。252，253はソバ猪口である。19世紀中頃までに生産されたものであるが，252は外面丸文が施される。

254～302，305は小杯である。254～259，261～269は内外面無文で透明釉が体部下半まで施される。254は，畳付も広く高台部が安定している。体部は直線的に立ち上がり，17世紀前半の特徴を有している。255～269は体部が内湾して立ち上がり，口縁部は外反する特徴がある。270～274は，外面に縦鎬文様が施される。273は他と比べるとやや大振りの小杯である。275，276は縦鎬文様の間に寿の字文がある。277～280の外面は，草花文（蘭）である。外面の文様構成は異なるが，255～280までは17世紀前半から中頃にかけての製品と考えられる。281～291まではやや大振りの小杯である。外面に草花文が描かれるものが多い。時期的には，やや新しくなるものと考えられる。300～302，305は18世紀に多く見られるものである。303，304，306～309は蓋物である。すべて口縁端部は無釉である。307は色絵で，308，309は外面に唐草文が描かれる。310～315は蓋である。310は19世紀初頭から幕末にかけてのものである。天井部の把手が欠損している。311は広東碗の蓋である。312は17世紀前半の頃と考えられる。313は，17世紀後半から18世紀前半の頃で，内外面掛け分けをしている。315は端反りタイプの碗の蓋である。外面に芙蓉手の文様があり，19世紀初頭から幕末の製品である。316は鉢であるが，口縁部は輪花で17世紀前半のものである。317～319，321，322，325は香炉である。317，321は半磁器で透明釉が施される。17世紀末から18世紀中頃にかけての製品である。320は青磁の盤で見込に線掘りの文様が施される。323，327は仏飯器で，その他324，326，328～330は瓶類である。330は，外面の文様が松竹梅で刳り底である。17世紀前半の製品である。

唐津：331～358までが皿である。331～333は絵唐津である。16世紀末の製品で，333を除き口縁部は波縁になっており，武雄市に分布している窯で多く生産されている。見込に胎土目跡が残るものとして，335，339があげられる。次に形態として，胎土目の時期に多いタイプは，338がある。胎土目から砂目にかけての時期としてあげられるものは，334，336，337，341，342，344，349，350がある。ほとんど溝縁皿の形態である[3]。その他17世紀後半から18世紀前半の頃と考えられる青緑釉皿がある。340は，見込蛇ノ目釉ハギで外面体部下半まで施釉しているが銅緑釉を使用していない。唐津の皿は，16世紀末から18世紀前半までのものが多い。

359～382は碗である。見込に胎土目が残るものとして，361，362，364，366，371，374がある。その他17世紀前半と考えられるものは365で，畳付に砂目が残り，銅緑釉が施される。375は，鉄釉が施され17世紀前半から中葉の時期と考えられる。378は内外面刷毛目で砂目高台である。381は白化粧されており17世紀末から18世紀にかけてのものである。382は象嵌刷毛目文様で高台に砂目跡が残る。

383～398，401は大皿である。見込に胎土目が残るものとして，390，392がある。胎土目から砂目の時期として，391，394がある。383は山辺田窯[4]の製品と類似しており，17世紀前半の時期と考えられる。386，388，398は二彩唐津で17世紀から18世紀，396も同様に二彩唐津で，

高台は切高台であり17世紀前半の製品と考えられる。

399，400は片口鉢である。399は胎土目から砂目の時期である。400は外面刷毛目文様が施され17世紀から18世紀前半と考えられる。402～404は蓋類である。402の天井部に刷毛目文様，403は土瓶の蓋である。405，406は小杯である。この小杯２点は胎土目から砂目の時期にかけてのものである。407，408は香炉で外面のみ施釉されており白象嵌手法である。しかしこの２点は尾戸焼の可能性もあり，17世紀の製品と考えられる。

備前：409～457は擂鉢である。409は，口縁端部の拡張が見られず古いタイプである。その他は口緑部が上方に立ち上がり，16世紀から18世紀にかけてのものである。全般的に条線が全面に施されるものが多く近世に生産されたものが多い。その他壺，甕，小壺が出土している。

瀬戸・美濃系：468～502，504～508は瀬戸・美濃系の製品と考えられる。468～482は皿である。16世紀に生産されたものとして，468，469，474の３点がある。468は碁笥底で見込は円形の露胎部で，その他は灰釉が施され16世紀中葉のものである。469は菊皿である。折縁口縁で16世紀後半の製品である。その他の皿類はすべて17世紀にはいるものである。477～479，481は長石釉が施され，内外面に荒い貫入がはいる志野皿である。477，478は美濃の笠原地区[5]の製品と類似している。483は小杯である。19世紀のもので高台部が露胎となっており，内外面に貫入がはいる。

484，485は碗である。485は長石釉と外面に陶胎呉須絵が施される。この製品は，17世紀前半の志野碗と考えられる。486～496，498～501は天目茶碗である。16世紀にはいる大窯の製品として，489，492，493があげられる。17世紀前半から中葉にかけての登り窯の製品は，486，488，490などがある。これらよりやや新しくなり，17世紀後半から18世紀初頭のものとして487，494，498などがある。495のみは，緑釉が外面体部下半まで施釉され高台脇を削っている特徴があり，17世紀前半のものを考えられる。

497は香炉である。外面腰部まで施釉しており，丸ノミ状工具による草花文の陰刻が刻される。17世紀後半から18世紀初頭の製品である。502，504は向付である。502は黒織部で，17世紀中葉から後半にかけてのものである。504は17世紀初頭の志野と考えられる。505，507，508は鉢である。見込に捩花，草花文が施される。506は磁器碗で，明治の初頭に生産されたもので，外面仙芝文が施される。

ニ．その他，産地不明陶器

503は底部破片であるが，常滑焼の鉢である。509～591の中で多くは産地不明陶器である。509～511は落し蓋である。512～515は灯明皿であり，18世紀末から19世紀の製品である。512，513の見込に足付ハマ溶着痕が残る。521の碗は半磁器の製品で，外面に呉須絵花文が施される。522は能茶山焼の碗である。見込に楼閣山水文，外底に銘が施され，19世紀の製品である。520は奈半利焼の碗の可能性がある。特徴として，見込が円形の露胎で外面に１条の沈線が施され

る。その他528も奈半利焼の土瓶である。536～573は，同様な胎土及び釉調の碗である。537，538，540は，高台が逆台形状を呈し，外面高台脇まで施釉している。胎土も灰色で密である。549は，外面に陶胎呉須絵が施される。その他のものは，高台が高く畳付のみ露胎で胎土も粗である。

575，576は，外底に「清水」の銘が見られるものである。577は陶胎呉須絵である。現在，「清水」印を焼成した窯として，伊万里市の大川内地区の窯址と，佐世保市地蔵平窯址，高知県の尾戸窯址[6]などが判明している。本遺跡で出土した京焼系陶器の明確な産地は不明であるが大川内地区の調査成果から17世紀後半の年代を考えることができる。これら京焼系陶器の底部は無釉のものが多く，高台内中央に浅い円圏を削りだしているものがある。585，586は，窯道具でチャツである。底部は回転糸切り調整である。587，588は，鉢と小碗で18世紀から19世紀にかけて生産された萩焼と考えられる。589は擂鉢で尾戸焼の可能性もある。590，591は甕で，590は肩部に数条の沈線が施され，591は２条の粘土紐を貼付押圧している。523，527は上野，高取系の碗と盤で時期は17世紀前半の頃と考えられる。

ホ．瓦

軒丸瓦：多量出土したが，完形品は１点もない。残りのよいものを18点図示した。詳細は表１，２のとおりである。瓦当はすべて「三巴文」で，巴は右方向に巻き込んでいる。614は横径中央部よりやや左寄りに，径1.2cmの釘穴を穿っている。612，621は，横径中央部に「アキ」の文字が刻み込まれている。615にも同じ位置に刻字があるが，判読できない。597は垂木丸瓦と考えられる。

軒平瓦：残りのよいもの８点（598～605）を図示した。瓦当文様はすべて唐草文である。

以上の外，瓦は平瓦（622～625），鬼瓦（626）が出土している。622の瓦当には，「御瓦師」が刻み込まれている。

No	種　類	直径cm	周縁幅cm	周縁高cm	内区径cm	珠文数	備　考
592	軒丸瓦	17.2	2.0	0.8	12.4	(11)	
593	〃	(16)	2.0	0.8	(12.0)	(11)	
594	〃	(16)	1.6	0.8	12.0		
595	〃	(14.4)	2.0	0.8	(11.2)		
596	〃	(17.6)	2.0	0.8	(8)		
597	垂木丸瓦	8.4	0.8	0.6	6.4	12	

丸瓦計測表１　　（　）は推定

No	種　類	横径cm	玉縁長cm	No	種類	横径cm	玉縁長cm
606	軒丸瓦	15.2	3.6	614	軒丸瓦	14.8	4.8
607	〃	15.2	4.0	615	〃	14.8	4.8
608	〃	16.0	4.0	616	〃	14.0	4.0
609	〃	14.8	3.6	617	〃	10.6	4.0
610	〃	14.0	3.2	618	〃	12.4	3.6
611	〃	14.8	4.4	619	〃	(15.2)	3.6
612	〃	15.6	4.8	620	〃	14.8	3.6
613	〃	14.8	4.0	621	〃	(16.0)	3.2

丸瓦計測表２　　（　）は推定

へ．金　属　品

煙管：煙管は，５点出土しているが，雁首と吸口を一組として把え得たものは１点（667）のみであり，火皿と脂返しが４点，吸口部が１点出土している。古泉弘氏の編年によれば，667はⅥ段階に属するものである。668～670は脂返しが湾曲する河骨形と言われるものであるが，火皿と首部の接合部に補強帯は見られない。これらもⅣ段階に属するものである[7]。666も吸口で湾曲するタイプである。

小柄：３点ほど（657～659）出土している。すべてが銅製で，刃部は失われている。

飾り金具：２点（676，677）出土している。共に銅製であり，KENIE の文字が打ち込まれている。

弾丸：鉛製の銃弾が７箇出土している。腐食のために表面は白色化している。重量は，5.82～14.76ｇで平均9.23ｇを測る。

その他金属器：鍔止（675），切羽（672，673），釣針（663），針（661，662），その外に用途不明の金属器（660，664，665，671，674）の出土もある。

ト．石　製　品

火打鎌：２点（686，687）出土している。687は，片面に「嶌夙南東覃斉」の線描文字が見られる。文化10年（1813）は五藤家七代内蔵助正順の時代であり，「正保」とあるのは，五藤家八代正保の可能性がある。また，686には，「主」，「井」が書かれているが，落書き的な要素がある。

砥石：小型のもの（688～692，695）大型のもの（696～698）が出土している。すべて砂岩製である。695の使用面には，叩打痕が見られる。

一石五輪塔：694が１点出土している。空輪・風輪・火輪までは原形を留めているが，水輪

以下は欠損している。砂岩製である。

石臼：699～703の５点が出土している。すべて砂岩製である。701と703が上臼で，703には側面に径２cm，深さ3.6cmの挽き手孔がある。目の分画は不明であるが，４条の副溝がある。699，700，702は上臼である。700は上面水平で下面は未調整，目は８分画で４～６条の副溝があり，中央部に径2.4cmの挽き手を持つ。

硯：693が１点出土している。長方硯で陸部の一部が欠損しているが，全体の形を把握することができる。長さ28cm，幅14.8cm，高さ２cmを測る。粘板岩製である。

チ．木　製　品

箸：713～722の他多量に出土しているが，多くは欠損している。形状は，断面方形のもの（721，722）と断面楕円形または多角形（713～720）のものがある。両端を細く削って面をとっていて物によって両方の使い分けをしていたと考えられる。

楊子：724は，大型のものであり長さ16cm，最大幅0.8cm，断面は長方形をなし，先端部は鋭く尖っている。

刀形：734が出土している。長さ26.2cm，幅2.5cm，厚さ0.8cmを測る。鋒先部にのみ刃部が削り出されており，他の部分は断面長方形を呈す。また前３分の１の部分には，鎬が造り出されている。各面共に平滑に仕上げられている。

角杓：735～738の４枚が出土している。これら４枚は同一個体を造るものである。735が底板で，736～738が側板となる。20×20.6×19cmに復元することができ，板の厚さはおおむね1.8cmを測る。側板の１つ（737）には，柄を着装するための方形孔（４×3.4cm）を斜に穿っている。また，その方形孔下５cmの位置に五藤家の裏紋である卍の刻印が打たれている。側，底板の縁辺部には，木釘穴が多く穿たれている。

下駄：752は前壺の部分が欠損しており，「メン」の形状を知ることはできないが，ほぼ全体を把握することができる。一木造りで前後両歯を造り出した連歯下駄と呼ばれるものである。大きさは推定20×8.8cmで，最大幅は後壺の部分に位置する。

燈明台：729，730は脚部と考えられる。中央を凹状に削り，反対側は，横木を受けるための方形孔が穿たれている。両者は，一対で使用されたものであろう。

柱根：755～758，760が出土している。756は，面取りを施しており，面取りの幅は全体の２分の１を示している。760は，先端部を尖らしており幅５cm余りのホゾ穴が穿たれている。

リ．銅　　銭

37枚出土している。寛永通宝以外は，すべて渡来銭であり，種類と枚数は，表－１のとおりである。また判読不明のものが，２枚ある。

種　　類	枚数	図版番号
寛永通宝	24	633，635～639 641～654
開元通宝	2	627，628
皇宋通宝	1	634
元祐通宝	1	630
聖宋元宝	1	656
皇宋元宝	1	640
洪武通宝	3	629，631，632
永楽通宝	1	655

表－1　銅銭一覧表

（図版には主要なものを載せた）

註

1　佐賀県立九州陶磁文化館『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』1984

2　有田町教育委員会『有田天狗谷古窯』1972

3　大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について―窯詰技法よりみた―」『佐々間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』1983

4　有田町教育委員会『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査』1980

5　仲野康裕氏の御教示による。

6　大橋康二「鍋島藩窯址出土の京焼風陶器（上）」『セラミック九州』佐賀県立九州陶磁文化館報No 7　1983

7　古泉　弘「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』第13号　1985

Tab. 1　出土遺物観察表

色調（　）は内面
〔　〕は釉
〈　〉は胎土

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
1	土師質土器 小皿	8.4	2.1	5.0	—	底部に平行圧痕。	淡黄色	粗，砂粒を含む。	Ⅴ層
2	〃	8.4	1.7	4.8	—	ロクロナデ，底部回転糸切り。	橙色	粗。	Ⅳ層
3	〃	8.4	1.9	—	—	内外面ともロクロナデ。 底部回転糸切り。	浅橙色	〃	口縁部の一部に黒斑。
4	土師質土器 皿	10.0	1.8	5.2	—	ロクロナデ。	淡橙色	〃	Ⅳ層
5	〃	9.6	2.9	5.8	—	底部に平行圧痕。 内外面ナデ調整。	灰白色	粗，砂粒を含む。	Ⅳ層
6	〃	9.6	2.8	6.9	—	内外面ナデ。	灰橙色	〃	
7	〃	9.7	2.9	7.2	—	内外面ナデ調整。	浅黄橙色	粗。	
8	〃	14.2	2.7	6.4	—	〃	淡褐灰色	〃	
9	〃	10.6	2.4	5.5	—	摩耗が著しく不明。	浅橙色	〃	
10	〃	12.4	(1.7)	—	—	体部に指頭圧痕が残る。 口縁部ナデ調整。	〃	〃	
11	〃	11.6	1.4	7.0	—	内外面ナデ調整。	淡褐灰色	粗，砂粒を若干含む。	
12	〃	12.0	2.0	6.8	—	内外面丁寧なナデ。	浅橙色	粗。	
13	〃	10.0	2.6	5.2	—	内外面ロクロナデ。	〃	〃	
14	〃	12.4	1.4	7.6	—	内外面ナデ。 外面に一部指頭圧痕が残る。	淡黄橙色	〃	Ⅳ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
15	土師質土器 皿	10.2	3.1	4.0	—	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕が残る。	淡黄色	粗。	Ⅳ，Ⅴ層
16	〃	13.8	3.5	4.0	—	〃	浅黄橙色	〃	Ⅳ層
17	〃	13.8	(2.1)	—	—	丁寧なナデ調整。	淡褐灰色	粗，砂粒を含む。	
18	〃	12.0	(3.2)	—	—	内外面ナデ調整。	〃	〃	
19	〃	10.7	2.3	6.0	—	口縁部内外面ヨコナデ，体部に指頭圧痕。	浅黄橙色	粗。	Ⅴ層
20	〃	10.7	2.3	6.0	—	口縁部内外面ヨコナデ，体部内外面指頭圧痕。	〃	粗，砂粒を若干含む。	Ⅴ層
21	〃	11.0	2.6	7.6	—	内外面ナデ，外面に指頭圧痕が残る。	淡褐灰色	〃	Ⅴ層
22	〃	11.2	2.2	7.8	—	口縁部ヨコナデ。	〃	粗，砂粒を多く含む。	
23	〃	11.8	1.9	7.4	—	内外面に指頭圧痕。 丁寧なナデ調整。	浅黄橙色	粗。	Ⅳ層
24	〃	12.8	2.9	—	—	〃	浅黄色	〃	Ⅳ層
25	〃	16.4	2.4	10.8	—	内外面に指頭圧痕が残る。丁寧なナデ調整。	灰白色	〃	Ⅳ層
26	〃	15.6	2.5	8.8	—	内外面に若干指頭圧痕が残る。口縁部ヨコナデ，内面底部は不定方向のナデ。	〃	〃	Ⅳ層
27	〃	16.2	3.3	6.0	—	口縁部内外面にヨコナデ，体部内外面に指頭圧痕が残るが全体的に丁寧なナデ。	淡黄白色	〃	
28	〃	15.0	2.5	10.8	—	口縁部内外面ヨコナデ。指頭圧痕が残るが全体的に丁寧なナデ調整。	〃	〃	Ⅴ，Ⅵ層
29	土師質土器 小皿	6.6	1.6	5.0	—	底部回転糸切り調整。	明褐色	粗，砂粒を多量に含む。	Ⅴ，Ⅵ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
30	土師質土器 皿	15.0	3.6	10.4	—	口縁部内外面ヨコナデ。指頭圧痕が残るが，全体的に丁寧なナデ調整。	淡黄白色	粗。	
31	〃	9.0	2.7	6.2	—	ロクロナデ調整。底部回転糸切り。	浅黄橙色	〃	Ⅳ層
32	〃	10.6	2.5	4.3	—	底部回転糸切り調整。内外面ロクロ痕が残る。	〃	〃	Ⅴ層
33	土師質土器 小皿	8.4	1.8	4.2	—	ロクロナデ調整。底部回転糸切り。	〃	粗，砂粒を含む。	口縁部に煤が付着。
34	土師質土器 皿	8.9	2.5	4.6	—	内外面ともロクロナデ。	浅橙色	粗。	
35	土師質土器 杯	14.8	4.3	5.3	—	底部回転糸切り調整。ロクロナデ。	淡褐灰色	〃	Ⅱ層
36	〃	—	(2.5)	4.6	—	ロクロナデ調整。底部回転糸切り調整。	にぶい橙色	〃	Ⅳ層
37	〃	—	(2.1)	5.6	—	ロクロナデ調整。	浅橙色	〃	
38	〃	—	(2.5)	8.4	—	〃	浅黄橙色	粗，砂粒を含有。	Ⅲ層
39	〃	—	(1.6)	3.7	—	ロクロナデ調整。底部回転糸切り調整。	〃	粗。	Ⅳ層
40	〃	—	(1.4)	5.8	—	〃	にぶい橙色	〃	〃
41	〃	12.8	3.1	6.5	—	底部回転糸切り。	褐灰色	粗，砂粒を多量に含む。	Ⅴ層
42	〃	12.4	4.5	6.4	—	底部回転糸切り。ロクロ調整，口縁部に指頭圧痕が残る。	浅黄橙色	粗。	Ⅴ，Ⅵ層
43	〃	9.7	3.2	6.7	—	底部に平行圧痕，底部内面に不定方向のナデ，外面に指頭圧痕が残る。	にぶい黄橙色	〃	
44	〃	11.8	(3.6)	—	—	ロクロ調整。	浅橙色	粗，精選された胎土。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
45	土師質土器 不明	—	(2.6)	5.6	—	甕の底部と考えられるが，中央部に穿孔が施される。底部回転糸切り。	赤褐色	粗。	Ⅱ層
46	土師質土器 椀	—	(1.6)	6.4	0.4	貼付高台	黄白色	粗，砂礫を含有。	Ⅴ層
47	土師質土器 甕	—	(8.7)	—	—	外面叩目，内面ヘラナデによる調整。	橙色 (淡黄橙色)	〃	〃
48	焼塩壺	6.4	8.4	3.8	—	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	黄橙色	粗。	
49	土師質土器 鍋	24.8	(6.0)	—	—	口縁部内外面ナデ調整。胴部外面に叩目。	淡褐灰色	粗，砂粒を多量に含有。	Ⅱ層
50	〃	23.8	(6.9)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面に斜位の叩き。	黄橙色	粗，砂粒を含む。	Ⅳ層
51	焼塩壺	—	(6.7)	—	—	内面底部に指頭圧痕が残る。	〃	〃	
52	土師質土器 鍋	20.2	(4.0)	—	—	内外面ナデ調整。	浅黄橙色	粗，砂粒を含有。	Ⅳ層
53	瓦質土器 高杯	8.6	6.6	4.4	—	外面に指頭圧痕が残る。	黒灰色	粗。	Ⅲ層
54	土師質土器 鍋	19.4	(6.0)	—	—	内面に大きな突帯がめぐる。	浅黄橙色	〃	〃
55	土師質土器 香炉	—	(8.4)	14.0	0.8	三足である。ロクロ成形。	黄白色	密。	〃
56	土師質土器 火舎	8.3	(3.5)	—	—	口縁端部が肥厚する。口縁部ヨコナデ。	黄橙色	〃	
57	土師質土器 鍋	26.0	(4.5)	—	—	内外面ナデ調整。	浅橙色	粗，砂粒を含む。	Ⅴ層
58	羽口	—	9.6	—	—	火熱され赤く変色している。	浅黄橙色	〃	〃
59	土錘	全長 5.2	直径 1.4	重量g 12.5	—	円筒形を呈し，中央に3㎜の円孔を穿つ。	〃	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
60	土錘	全長 4.8	直径 1.3	重量g 7.0	—	円筒形を呈し，中央に4㎜の円孔を穿つ。	浅黄橙色	粗，砂粒を含む。	Ⅴ層
61	〃	全長 5.4	直径 1.4	重量g 7.4	—	円筒形を呈する。径6㎜の円孔。	淡赤灰色	〃	
62	〃	全長 4.2	直径 1.3	重量g 5.5	—	円筒形を呈し，中央に4㎜の円孔を穿つ。	〃	〃	Ⅴ層
63	〃	全長 4.4	直径 1.2	重量g 6.8	—	〃	〃	〃	〃
64	〃	全長 4.9	直径 1.7	重量g 14.9	—	円筒形を呈し，中央に径6㎜の円孔を穿つ。	〃	〃	〃
65	〃	全長 5.7	直径 2.3	重量g 27.4	—	円筒形を呈し，中央に7㎜の円孔を穿つ。	〃	〃	〃
66	〃	全長 5.2	直径 2.0	重量g 20.0	—	円筒形を呈し，中央に8㎜の円孔を穿つ。	〃	〃	〃
67	〃	全長 5.0	直径 1.3	重量g 8.0	—	円筒形を呈し，中央に4㎜の円孔を穿つ。	浅黄橙色	粗。	Ⅳ層
68	瓦質 火鉢	32.1	14.8	21.6	3.4	三足。口縁部は肥厚され内傾する。	黒色	〃	
69	青磁 皿	—	(1.6)	6.8	0.8	畳付のみ露胎。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅴ層
70	〃	12.0	2.9	5.5	0.5	畳付のみ露胎，内外面荒い貫入輪花。	〔淡青緑色〕 〈灰白色〉	〃	菊皿。
71	青磁 稜花皿	—	(2.3)	—	—	口縁部は稜花形，内面に櫛描き沈線，内外面に貫入。	〔青緑色〕 〈灰色〉	〃	Ⅴ層
72	〃	—	(1.3)	4.8	0.5	釉は，畳付をこえて，一部外底まで施釉。見込円形状に露胎内外面貫入あり。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	〃
73	〃	—	(1.7)	5.6	0.5	高台内面，外底無釉。見込円形に，釉を剝ぎとる。	〔青緑色〕 〈暗灰色〉	やや粗。	
74	青磁 盤	—	(2.7)	—	—	内外面に荒い貫入。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅱ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
75	青磁 碗	—	(2.8)	5.6	0.9	畳付，内外面削り狭くしている。内外面貫入あり，高台内面まで施釉，見込に印花。	〔淡青緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅴ層
76	〃	—	(3.3)	5.8	0.7	外面に片切彫りの蓮弁文。見込印花文，外底のみ無釉，外底赤く発色。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ，Ⅵ層
77	〃	—	(4.2)	6.2	0.8	外底は無釉で赤く発色。見込に印花文。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅵ層
78	〃	—	(3.8)	6.4	0.7	高台内面まで施釉。外底に兜巾，見込に１条の界線。	〔青緑色〕 〈淡褐灰色〉	やや密。	
79	〃	14.1	6.3	5.6	0.8	口縁部外反する。見込に印花文。高台内面まで施釉，外底赤く発色，外面ロクロ痕残存。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅴ，Ⅵ層
80	〃	15.8	(5.1)	—	—	口縁部外反。	〔青緑色〕 〈灰色〉	〃	
81	〃	—	(2.6)	6.8	0.5	畳付のみ露胎。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
82	青磁 盤	—	(2.8)	(4.0)	1.0	高台脇まで施釉。内外面貫入あり。	〔青緑色〕 淡褐色 〈灰色〉	やや粗。	
83	青磁 碗	13.8	(4.4)	—	—	口縁部外面に雷文帯，体部に蓮弁文。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	
84	〃	13.4	(3.7)	—	—	外面に山形の細蓮弁文。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ，Ⅵ層
85	〃	—	(2.4)	(5.7)	0.8	全面施釉。	〔淡青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
86	〃	14.0	(4.3)	—	—	外面に細蓮弁文。内外面に貫入あり。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	〃
87	〃	—	(2.7)	—	—	〃	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	〃
88	〃	—	(2.9)	—	—	外面に細蓮弁文。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
89	青磁 盤	—	(2.0)	—	—	内面丸ノミ状工具による刻線。	〔濃青緑色〕 〈灰色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
90	青磁 鉢	24.2	(6.6)	—	—	内外面に荒い貫入。	〔青緑色〕 〈灰色〉	密。	Ⅱ層
91	染付 小杯	—	(1.4)	2.3	0.4	高台部無釉。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
92	〃	6.4	3.9	2.4	0.3	高台外面まで施釉。外面に花卉文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
93	染付 皿	—	(1.3)	7.8	0.3	見込に玉取獅子。畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	
94	〃	12.2	(1.9)	—	—	内面２条の界線。外面に牡丹唐草文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
95	〃	10.0	2.8	8.2	0.6	見込魚文。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	
96	〃	—	(1.4)	3.8	—	底部のみ釉を掻きとる。外面に芭蕉葉文，碁笥底。見込にも文様。	〔淡黄灰色〕 〈灰白色〉	〃	
97	〃	—	(1.8)	8.2	0.6	外面密な唐草文。見込アラベスク文様に梵字文，畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ，Ⅵ層
98	〃	9.8	(1.6)	—	—	外面に玉取獅子。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	
99	〃	—	(1.6)	8.4	0.6	畳付部外面露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
100	〃	—	(1.1)	6.2	0.4	見込に２条の界線中に文様。外底２条の界線中に銘。畳付に砂溶着。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	〃
101	〃	—	(1.0)	4.0	—	底部は露胎。見込に２条の界線中に蛇目文。	〔淡灰白色〕 〈灰白色〉		〃
102	〃	—	(0.8)	6.2	0.3	見込２条の界線中に玉取獅子。畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	〃
103	〃	—	(1.4)	5.0	0.4	外面体部下半まで施釉。内外面貫入あり。	〔淡青緑色〕 〈淡褐灰色〉	やや密。	Ⅳ層
104	〃	12.0	(1.9)	—	—	口縁部外面に１条の界線。内面，四方襷文。	〔淡青灰色〕 〈白色〉	密。	Ⅳ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
105	染付 皿	—	(1.4)	(5.8)	0.4	畳付のみ露胎で砂溶着。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	密。	Ⅴ層
106	〃	—	(1.1)	(6.4)	0.4	見込折菊，外底に２条の界線全面に施釉。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	〃
107	〃	—	(1.5)	—	—	見込に文様。畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉		Ⅳ層
108	〃	—	(1.0)	4.6	0.3	高台部外底は露胎。見込に鞁磨文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	密。	
109	〃	11.4	(2.2)	—	—	口縁部外面１条の界線。内面は四方襷文。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	Ⅴ層
110	〃	—	(1.3)	4.1	0.3	高台部露胎蛇ノ目凹高台。見込２条の界線中に文様。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	Ⅱ層
111	〃	14.2	2.8	8.4	0.3	畳付のみ釉を削りとる。見込は花文。	〔淡青灰白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅳ層
112	〃	—	(1.6)	4.8	0.5	見込蛇，目釉ハギ，中央に文様。畳付から外底無釉。	〔灰白色〕 〈淡灰白色〉	〃	Ⅲ層
113	染付 碗	14.0	(3.4)	—	—	外面に飛馬文。	〔淡青灰色〕 〈白色〉	〃	
114	〃	13.6	(5.0)	—	—	口縁部内面に１条の界線。外面に波濤文と，体部に芭蕉葉文。内外面荒い貫入。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅱ層
115	〃	13.4	(4.3)	—	—	口縁部外面波濤文帯。外面アラベスク文様。口縁部内面１条の界線。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	Ⅴ層
116	〃	—	(1.7)	6.7	0.6	見込２条の界線中に列点文。高台部の畳付内外無釉。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅱ層
117	〃	—	(2.0)	4.8	0.7	高台脇に２条の界線。見込２条の界線中に列点文。	〔淡青灰色〕 〈灰色〉	〃	Ⅴ層
118	〃	—	(2.4)	4.7	0.8	見込に仙人文。外底１条の界線中に銘。畳付は無釉。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	〃
119	〃	16.1	(2.5)	—	—	口縁部外面界線中に波濤文帯。内面に１条の界線。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
120	染付 碗	12.1	(3.2)	—	—	口縁部外面界線中に波濤文帯。体部に芭蕉帯文。内面に１条の界線。	〔淡青白色〕 〈淡灰白色〉	密。	Ⅴ層
121	〃	—	(1.3)	3.6	0.6	畳付のみ露胎，外底１条の界線中に銘。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	Ⅳ層
122	〃	12.8	(5.9)	—	—	口縁部外面に波濤文。内面１条の界線。体部外面芭蕉葉文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
123	〃	—	(1.5)	4.3	0.7	畳付のみ露胎。見込花文。外底に２条の界線。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	Ⅵ層
124	〃	—	(3.0)	—	—	口縁部は外反する。内外面に草花文。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	〃
125	〃	13.0	(4.5)	—	—	外面花木文。口縁部内面四方襷文。内外面荒い貫入。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
126	〃	—	(5.0)	—	—	外面に蟠龍文が施される。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
127	〃	12.2	(3.2)	—	—	口縁部外面に１条の界線下に卍文。	〔灰白色〕 〈乳白色〉	〃	〃
128	〃	—	(2.7)	4.4	0.7	畳付露胎，砂溶着。内面荒い貫入，見込１条の界線中に飛馬文。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	〃
129	〃	—	(2.3)	5.0	0.8	畳付のみ露胎。見込花卉文。	〔淡青白色〕 〈灰色〉	〃	Ⅳ層
130	色絵 碗	15.6	(4.2)	—	—	口縁部は稜花。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅴ，Ⅵ層
131	色絵 盤	—	(2.6)	—	—	口縁部内面波濤文と花文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
132	白磁 小杯	—	(1.3)	2.4	0.6	見込蛇ノ目釉ハギ。畳付のみ露胎。	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅴ層
133	白磁 皿	—	(1.1)	4.0	—	内外面貫入あり。外底露胎。見込に篦描き文様，内面に貫入あり。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅳ層
134	白磁 碗	16.0	(2.4)	—	—	口縁部は玉縁。	〔淡黄灰白色〕 〈灰白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
135	白磁 皿	—	(1.5)	3.0	0.4	高台部露胎輪高台。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	密。	
136	〃	—	(1.3)	6.4	0.4	畳付のみ露胎。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
137	〃	17.6	(1.7)	—	—	口縁部は端反り。	〔白色〕 〈灰白色〉	〃	
138	〃	18.0	3.5	11.0	0.6	口縁部端反り。畳付のみ無釉，砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
139	〃	11.9	3.4	6.2	0.6	口縁部端反り，畳付砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅴ層
140	〃	11.0	(1.8)	—	—	口縁部端反り。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	〃
141	〃	—	(2.7)	6.4	0.4	畳付内外面無釉。砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅲ層
142	〃	—	(2.6)	9.9	0.7	畳付露胎で砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅰ層
143	白磁 碗	13.8	(2.5)	—	—	口縁部外反。	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	
144	色絵 碗	—	(2.0)	6.8	0.9	見込蛇ノ目釉ハギ。畳付砂溶着，外底赤く発色。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅴ，Ⅵ層
145	伊万里 皿	—	(1.9)	4.5	0.3	内外面貫入。畳付のみ露胎で砂溶着。見込鳳凰文。	〔淡青白色〕 〈灰色〉	〃	
146	〃	13.2	3.8	2.9	0.5	外面のみ貫入，畳付のみ露胎で砂溶着。見込狩図文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
147	〃	—	(1.6)	4.8	0.3	畳付のみ露胎で砂溶着。見込花卉文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
148	〃	18.4	2.7	8.6	0.7	口縁部内面鋸歯文。畳付に砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	折縁皿。 Ⅳ層
149	〃	13.6	3.1	4.6	0.6	畳付のみ無釉，外面のみ貫入あり，口縁部内面に1条の界線。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
150	伊万里 皿	13.2	3.6	4.6	0.5	畳付のみ露胎，砂溶着。外面に貫入，見込草花と蝶文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅳ層
151	〃	8.6	2.2	3.2	0.3	手塩皿，口縁部は稜花，内面に福と花木文，見込に花文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	〃
152	〃	—	(1.6)	4.5	0.2	畳付のみ露胎，内外面荒い貫入，見込に草花文。	〔青灰色〕 〈灰色〉	〃	
153	〃	—	(2.7)	3.4	0.3	全面施釉。外底及び畳付部に砂溶着。	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	〃	
154	〃	—	(1.9)	8.1	0.3	畳付のみ露胎，見込山水文。外底に大明の２字。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	変形皿。 Ⅲ層
155	〃	—	(1.5)	—	—	畳付部は欠損。	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	色絵。 Ⅳ層
156	〃	—	(2.1)	10.8	0.7	内外面貫入，畳付のみ露胎。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
157	〃	—	(2.1)	4.3	0.6	見込蛇ノ目釉ハギ。体部下半から高台部露胎。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
158	伊万里 小皿	6.2	1.9	(1.9)	0.3	型作り内面亀甲花文。口縁部輪花。貼付高台。	〔灰黄色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅰ層
159	伊万里 皿	—	(2.0)	8.2	0.5	畳付以外全面施釉。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
160	〃	—	(3.1)	11.1	1.1	見込に印花文(?)高台外面に３条の界線。高台脇と外底に１条の界線貫入あり。	〔淡灰色〕 〈灰白色〉	やや密。	
161	〃	—	(2.3)	5.6	0.6	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	
162	〃	13.9	4.1	7.4	0.3	外面唐草文，内面梅文。外底界線内銘，見込五弁花。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅰ層
163	〃	13.8	(2.4)	—	—	口縁部内面に縦の区画線。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
164	〃	—	(1.0)	8.0	0.2	見込竹文様，外底は蛇ノ目凹高台。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
165	伊万里 皿	—	(3.0)	9.2	0.7	外底，蛇ノ目凹高台，見込花文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅲ層
166	〃	14.4	3.5	8.4	0.7	外面唐草文，畳付露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
167	伊万里 中皿	23.4	(3.5)	—	—	内面に一重の網目文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
168	〃	21.0	2.9	8.6	0.4	畳付に砂溶着。見込に亀甲菊花文。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	〃
169	伊万里 大皿	—	(3.3)	7.0	2.1	畳付高台内面に砂溶着。内外面貫入あり，見込草花文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
170	〃	—	(3.0)	10.4	0.8	外底が一部露胎，畳付も露胎で砂溶着。内外面荒い貫入。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
171	〃	—	(5.7)	13.0	0.8	畳付内外面釉削り狭くしている。外面に荒い貫入。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅰ層
172	〃	—	(3.3)	10.6	1.1	畳付は露胎で砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
173	伊万里 深皿	22.4	(5.4)	—	—	内外面貫入あり。見込篦描きによる文様。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
174	〃	29.1	(4.7)	—	—	口唇部は辰砂，内面に鎬文。	〔青緑色〕 〈白色〉	〃	
175	〃	27.2	(4.8)	—	—	口唇部は辰砂。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
176	〃	—	(2.2)	17.2	1.3	内外面貫入あり，外底蛇ノ目釉ハギの部分が赤く発色。見込片切彫り。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
177	〃	—	(6.3)	9.4	0.9	畳付は広くしっかりしている。見込に櫛描き文様。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
178	伊万里 碗	—	(2.7)	3.9	0.8	高台内一部露胎。畳付に砂溶着。	〔淡緑色〕 〈淡灰色〉	〃	
179	伊万里 小皿	8.6	2.3	6.2	—	口錆び畳付のみ無釉，砂溶着。	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅱ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
180	伊万里 紅皿	4.8	(1.2)	—	—	外面放線状の凹凸。口縁部外面まで施釉。	〔白色〕 〈灰白色〉	密。	
181	〃	3.5	1.5	0.8	0.3	外面は細かい放線状の凹凸が見られる。口縁部外面まで施釉。	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
182	〃	5.1	1.3	1.6	0.2	口縁部外面まで施釉。外面に放線状に凹凸が見られる。	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
183	〃	4.9	1.6	1.3	0.1	〃	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
184	〃	4.8	(1.2)	—	—	〃	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅱ層
185	〃	5.7	(1.2)	—	—	〃	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
186	〃	4.8	1.6	1.2	0.2	〃	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
187	〃	5.0	1.8	1.5	0.1	〃	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	
188	〃	4.6	1.3	1.3	0.2	〃	〔白色〕 〈乳白色〉	〃	
189	〃	4.6	1.4	1.2	0.1	〃	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
190	〃	4.8	1.4	1.4	0.2	〃	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
191	〃	4.7	1.7	1.6	0.2	〃	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
192	伊万里 碗	—	(4.2)	—	—	外面に雲文。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	
193	〃	8.7	5.1	—	—	口縁部外面１条の界線。外面に草花文。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	
194	〃	12.4	4.3	—	—	青磁釉が口縁部内外面に施される。	〔青緑色〕 〈乳白色〉		

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
195	伊万里 碗	—	(4.4)	4.2	0.5	内外面貫入あり。畳付のみ無釉，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅴ層
196	〃	—	(3.4)	4.5	1.0	畳付高台内露胎，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
197	〃	10.7	(5.2)	—	—	内外面無文。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
198	〃	—	(3.8)	4.6	0.9	内外面貫入あり。高台脇まで施釉。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
199	〃	—	(2.5)	6.0	1.0	畳付のみ露胎。	〔灰色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅲ層
200	〃	—	(3.1)	5.0	0.8	〃	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
201	〃	—	(4.0)	4.2	0.9	内外面貫入あり。	〔灰色〕 〈赤褐色〉	やや密。	焼成不良
202	〃	—	(3.5)	4.0	0.6	畳付のみ露胎，外面は花文。	〔淡青白色〕 〈灰色〉	密。	
203	〃	10.0	(5.0)	—	—	外面に菊重ね文。	〔淡青灰色〕 〈灰色〉	〃	
204	〃	8.4	(3.8)	—	—	口縁部外面雷文のくずれ。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
205	〃	—	(3.9)	4.0	0.8	畳付は露胎，砂溶着。外面一重の網目文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
206	〃	—	(3.2)	3.9	0.6	畳付のみ露胎，砂溶着。	〔灰白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅳ層
207	〃	—	(5.1)	4.8	0.7	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。見込に花文。	〔淡灰白色〕 〈白色〉	〃	
208	〃	—	(3.7)	4.2	0.8	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	色絵
209	〃	8.2	(6.2)	—	—	外面一重の網目文。	〔灰白色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅳ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
210	伊万里 碗	—	(3.3)	3.0	0.8	畳付のみ露胎，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	密。	
211	〃	8.4	5.1	3.4	0.6	外面草花文。畳付は露胎，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
212	〃	10.4	(4.5)	—	—	外面に網目文。	〔淡灰色〕 〈灰色〉	〃	
213	〃	11.8	6.2	4.8	0.8	全面施釉，内外面貫入あり。見込，体部外面に草文。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	やや密。	Ⅰ層
214	〃	—	(4.4)	4.8	0.8	高台外面に１条の界線。外面に一重の網目文。高台脇まで施釉。	〔濁灰白色〕 〈灰白色〉	やや密。	
215	〃	—	(3.6)	4.2	0.4	畳付，高台外面のみ露胎。体部外面に沈線，外面貫入あり。	〔白色〕 〈乳白色〉	密。	
216	〃	8.4	4.0	3.4	0.7	外面に二重の網目文。畳付は露胎。	〔淡黄灰色〕 〈灰白色〉	〃	
217	〃	9.6	4.1	4.6	0.6	畳付に若干砂溶着。	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	白磁。
218	〃	—	(3.7)	5.6	1.8	畳付のみ露胎。高台が高い。	〔白色〕 〈 〃 〉	〃	〃
219	〃	—	(3.0)	3.2	0.5	畳付のみ露胎，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
220	〃	8.2	4.7	3.0	0.5	畳付は露胎で，砂溶着。外面は型紙摺で，木の字文と花文。体部下半に４条の線描き。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
221	〃	—	(2.4)	5.4	0.8	内外面貫入あり。畳付のみ露胎で砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
222	〃	10.4	7.1	5.1	0.8	内外面貫入あり。畳付は露胎で赤く発色。外面は花木文。	〔青灰色〕 〈黒灰色〉	やや密。	半磁器。
223	〃	12.2	6.5	5.0	1.0	外面は草花文。口縁部内面四方襷文。畳付に砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅲ層
224	〃	—	(2.2)	3.6	0.5	畳付を除き全面施釉。畳付に砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
225	伊万里 碗	—	(2.6)	5.0	—	高台が欠損。	〔白色〕 〈乳白色〉	密。	白磁
226	〃	12.8	(3.7)	—	—	外面蝶文。	〔淡青灰色〕 〈灰色〉	〃	Ⅳ層
227	〃	8.5	5.1	3.7	0.6	畳付に砂溶着。外面に型紙摺で花散らし文。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	〃
228	〃	15.4	(4.3)	—	—	口縁部外面に２条の界線。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
229	〃	—	(2.8)	4.3	0.8	畳付に砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
230	〃	12	(5.2)	—	—	内外面無文貫入あり。	〔淡茶灰色〕 〈乳白色〉	やや粗。	
231	〃	—	(2.5)	6.8	0.8	畳付のみ露胎で赤く発色。見込蛇ノ目釉ハギ。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	密。	
232	〃	—	(5.0)	4.4	0.8	畳付のみ露胎で，砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
233	〃	—	(4.4)	4.8	1.0	畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
234	〃	12.0	6.8	4.5	1.0	内外面貫入あり，全面施釉。畳付の内外面砂溶着。見込に印花文。	〔淡青緑色〕 〈灰白色〉	〃	
235	〃	11.4	7.2	5.0	0.8	口縁部外面に草花文，体部に１条の界線。畳付高台内露胎。	〔淡白灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
236	〃	—	(3.9)	4.2	0.8	見込に２条の界線中に，コンニャク判手法の五弁花。内外面掛け分け，外底に渦福銘。	〔青緑色〕 〈淡青灰色〉	〃	Ⅰ層
237	〃	—	(3.9)	5.0	0.8	内外面貫入あり，高台は薄く高い。	〔淡灰色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅲ層
238	〃	11.8	(3.8)	—	—	外面に文様。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	広東碗。 Ⅲ層
239	〃	11.1	6.1	4.4	1.0	畳付のみ露胎で，砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
240	伊万里 碗	—	(4.2)	6.6	1.6	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。	〔淡青白色〕 〈白色〉	密。	広東碗。
241	〃	10.4	(4.6)	—	—	外面竹皿文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	〃
242	〃	10.6	(3.5)	—	—	口縁部内面雷文帯。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	
243	〃	—	(4.5)	6.2	1.0	畳付のみ露胎。	〔青灰色〕 〈灰白色〉	〃	広東碗。 Ⅰ層
244	〃	10.4	(3.5)	—	—	外面つる草文。	〔青灰色〕 〈灰白色〉	〃	〃
245	〃	10.9	(4.4)	—	—	外面に笹文，内面に界線。	〔淡緑灰色〕 〈乳白色〉	〃	
246	伊万里 小碗	7.4	3.8	3.6	0.5	畳付に砂溶着，外面に草花文。	〔淡灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
247	伊万里 碗	9.8	5.9	6.2	1.0	外面に文様，全面に施釉。	〔淡青灰色〕 〈白色〉	〃	Ⅰ層
248	伊万里 小碗	6.8	(3.5)	—	—	口縁部内外面１条の界線。外面に草花文。	〔淡青灰白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
249	伊万里 碗	11.6	6.3	6.1	1.0	外面は稲束文。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅱ層
250	〃	6.6	5.3	4.8	—	内外面貫入あり。口縁部内面四方襷文。見込コンニャク判の五弁花。外底蛇ノ目凹高台。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
251	〃	5.0	5.4	3.9	0.4	高台脇，外面，口縁部内面に界線。全面施釉。外面草花文。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	
252	伊万里 ソバ猪口	7.4	5.9	5.0	—	口錆び，外面丸文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
253	〃	7.0	6.7	6.0	0.3	口錆び，全面施釉。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅰ層
254	伊万里 小杯	6.0	3.6	3.5	0.4	全面施釉，畳付に砂溶着。内外面貫入あり。	〔淡灰白色〕 〈灰白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
255	伊万里 小杯	5.8	2.5	2.0	0.4	内外面無文で若干貫入がはいる。高台脇まで施釉，高台脇をヘラ削り。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	
256	〃	5.8	3.1	2.5	0.5	高台部露胎，内底に貫入がはいる。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
257	〃	6.1	3.7	2.5	0.5	外面高台脇まで施釉。口縁部内面に荒い貫入あり。	〔濁灰色〕 〈灰白色〉	〃	
258	〃	5.3	3.1	2.2	0.3	高台脇を削る，体部下位から高台外面まで施釉。畳付に砂溶着，内面のみ貫入がはいる。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	
259	〃	5.8	3.5	2.3	0.5	口縁部体部下半まで施釉。内外面無文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
260	〃	5.7	3.8	2.8	0.4	口縁部は外反する。外面に草花文（蘭）。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉		
261	〃	6.8	4.4	2.6	0.4	内外面貫入あり。外面体部下半まで施釉。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	密。	Ⅴ層
262	〃	7.0	4.3	2.3	0.5	高台外面まで施釉。内外面貫入あり，無文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
263	〃	6.7	4.3	2.3	0.5	高台内露胎，砂溶着。内外面無文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
264	〃	6.4	4.2	3.0	0.5	全面に施釉，内外面貫入あり。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅱ層
265	〃	7.2	(3.5)	—	—	全面に施釉。	〔白色〕 〈淡灰白色〉	〃	
266	〃	6.5	4.4	2.5	0.4	外面体部下半まで施釉。内外面荒い貫入。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
267	〃	—	(2.3)	2.5	0.4	高台脇，高台部露胎。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	
268	〃	—	(2.4)	2.6	0.5	高台部無釉。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
269	〃	—	(2.2)	2.6	0.4	高台及び体部下位一部露胎。	〔灰白色〕 〈白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
270	伊万里 小杯	6.0	3.6	2.1	0.4	体部下半まで施釉，高台部露胎。外面3ケ所に6本単位の縦縞文が施される。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	蜜。	
271	〃	5.4	4.4	2.2	0.6	体部下半まで施釉。外面全体に縦の鏑文様。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
272	〃	6.0	3.8	2.3	0.4	体部下半まで施釉。高台部無釉。外面全面に縦鏑文が施される。	〔淡黄色〕 〈灰白色〉	やや密。	焼成不良。 Ⅴ層
273	〃	8.4	(2.0)	—	—	口縁部は緩やかに外反。外面全体に縦の鏑文様。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅴ層
274	〃	—	(1.7)	2.1	0.4	外面に縦鏑文様（？）。高台外面まで施釉。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	
275	〃	5.6	3.6	2.1	0.2	外面寿の文字が4個とその間に縦鏑文が4本施される。高台脇まで施釉。	〔白濁色〕 〈灰白色〉	〃	
276	〃	5.5	3.7	2.3	0.5	体部下位，高台外面まで施釉。外面に寿の字が3個，その間に縦鏑文様が4～6本単位で施される。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
277	〃	5.8	3.6	2.4	0.4	外面高台脇まで施釉。外面草花文を2ケ所に染付。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
278	〃	5.8	4.2	2.5	0.5	外面高台脇まで施釉。外面2ケ所に草花文（蘭）。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	〃
279	〃	4.8	(3.5)	—	—	口縁部やや外反。外面に草花文。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
280	〃	5.6	3.2	2.4	0.4	外面2ケ所に草花文。高台内面露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
281	〃	7.0	(4.0)	—	—	内外面貫入あり。	〔淡灰白色〕 〈灰白色〉	〃	
282	〃	7.2	4.9	3.8	0.5	全面施釉，高台脇に3条の界線。	〔淡青灰色〕 〈乳白色〉	〃	Ⅰ層
283	〃	6.5	4.9	3.5	0.6	全面に施釉，畳付の部分に砂溶着。	〔淡灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
284	〃	7.1	4.3	2.4	0.7	高台部無釉，内外面貫入はいる。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
285	伊万里 小杯	—	(2.4)	2.8	0.5	畳付のみ無釉，砂溶着。見込に貫入がはいる。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	
286	〃	—	(3.8)	3.0	0.5	畳付のみ露胎。高台部に若干貫入がはいる。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
287	〃	6.8	4.7	2.9	0.5	全面施釉，畳付に砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
288	〃	6.8	4.3	2.8	0.6	畳付に砂溶着。外面に草花文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	〃
289	〃	7.2	(3.9)	—	—	口縁部は外反。外面に文様。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
290	〃	7.4	4.8	3.3	0.3	全面施釉。畳付に砂溶着。	〔淡灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
291	〃	—	(3.3)	3.2	0.5	内外面に貫入あり。全面施釉，畳付に砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅳ層
292	〃	—	(2.5)	2.6	0.4	畳付のみ露胎。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
293	〃	5.4	3.3	2.6	0.4	全面施釉，畳付に砂溶着。外面に山水文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
294	〃	—	(6.2)	3.1	0.5	畳付に砂溶着。外底に銘。全面に施釉。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
295	〃	7.1	5.2	3.8	0.4	高台脇に２条の界線。外面に草花文。全面施釉で，畳付に砂溶着。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
296	〃	—	(4.3)	3.3	0.4	外底に銘。畳付のみ露胎。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
297	〃	7.6	3.5	2.7	0.4	全面施釉，畳付に砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅰ層
298	〃	8.0	3.5	2.8	0.3	高台部露胎。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
299	〃	7.2	5.2	3.4	0.4	畳付のみ露胎。外面は草花文。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
300	伊万里 小杯	6.4	2.9	2.2	0.4	全面に施釉，畳付に砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	密。	
301	〃	7.0	3.2	3.0	0.4	畳付のみ露胎で砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
302	〃	6.4	2.8	1.8	0.5	畳付のみ露胎で赤く発色。砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
303	伊万里 蓋物	7.4	(5.9)	—	—	口縁端部は無釉。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	
304	〃	7.6	(3.1)	—	—	〃	〔灰白色〕 〈乳白色〉	〃	色絵。
305	伊万里 小杯	7.2	3.9	2.8	0.6	畳付のみ露胎。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
306	伊万里 蓋物	—	(1.0)	6.2	0.4	内外面貫入あり。畳付のみ露胎で砂溶着。	〔淡青白色〕 〈乳白色〉	〃	〃
307	〃	5.6	3.6	2.1	0.3	口縁部は露胎，畳付も露胎。	〔黄白色〕 〈 〃 〉	やや粗。	色絵。 Ⅳ層
308	〃	12.3	5.6	8.8	0.4	外面唐草文，口縁部無釉。畳付は露胎，内外面貫入。	〔青灰色〕 〈黄灰色〉	〃	Ⅱ層
309	〃	12.0	5.6	7.8	0.6	外面牡丹唐草文。口縁部無釉。畳付は露胎，内外面貫入。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	〃
310	伊万里 蓋	5.5	1.8	—	—	天井部把手が欠損。かえりの部分は砂溶着。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	
311	〃	11.9	3.2	—	—	広東碗の蓋。外面に文様。	〔淡青白色〕 〈白色〉	〃	広東碗の蓋。 Ⅱ層
312	〃	—	(1.8)	—	—	外面に文様。ボタン状のつまみ。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	
313	〃	—	(1.8)	—	—	内外面掛け分け。	〔淡青緑色〕 〈白色〉	〃	
314	〃	—	(2.2)	—	—	全面に施釉。外面に蛸唐草文。	〔白濁釉〕 〈灰白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
315	伊万里 蓋	7.5	(7.6)	—	—	外面芙蓉手，端反り。	〔灰白色〕 〈乳白色〉	密。	碗の蓋。
316	伊万里 鉢	—	(5.5)	—	—	口縁部は輪花。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
317	伊万里 香炉	11.0	(3.5)	—	—	口縁部内面まで施釉，内面は化粧がけ，内外面貫入あり。外面草花文か？	〔青灰色〕 〈暗灰色〉	〃	半磁器。
318	〃	12.4	(2.9)	—	—	口縁端部は肥厚する。	〔淡青緑色〕 〈乳白色〉	〃	
319	〃	—	(5.4)	6.2	0.7	高台部内面露胎，見込に砂溶着。畳付部が広い。	〔濁灰色〕 〈灰色〉	〃	
320	伊万里 盤	—	(2.6)	8.2	1.0	畳付のみ露胎，砂溶着。内外面貫入あり，見込に篦描沈線。	〔青緑色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
321	伊万里 香炉	11.0	(2.5)	—	—	文様は淡いコバルトブルーに発色。口縁部内面まで施釉。体部内面露胎。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅳ層
322	〃	—	(2.1)	5.8	1.0	高台部露胎，外面に貫入あり。内面に砂溶着。	〔青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
323	伊万里 仏飯具	—	(3.7)	4.2	—	脚端部，内面露胎。	〔淡青白色〕 〈淡赤橙色〉	〃	
324	伊万里 瓶	—	(5.7)	4.7	0.4	外面のみ施釉，底部に貫入が多くはいる。畳付に砂溶着。文様は不明。	〔淡青灰色〕 〈淡灰色〉	〃	
325	伊万里 香炉	—	(6.3)	6.0	0.5	畳付のみ露胎，内面は露胎。	〔青灰色〕 〈灰白色〉	〃	
326	伊万里 瓶	—	(5.8)	7.0	0.6	外面貫入あり，内面と畳付露胎。	〔淡青白色〕 〈淡茶灰色〉	〃	Ⅳ層
327	伊万里 仏飯器	6.0	(5.0)	—	—	口錆び。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	色絵。
328	伊万里 瓶	5.4	(5.5)	—	—	内外面荒い貫入。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅴ層
329	〃	—	(7.8)	6.6	0.5	刳り底，畳付のみ露胎砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
330	伊万里 瓶	—	(8.4)	6.6	0.8	外面貫入あり，外面松竹梅文。内面露胎，畳付は露胎で砂溶着。	〔淡青白色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅲ層
331	唐津 皿	12.9	4.3	4.2	0.4	見込唐草文。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	波縁皿。
332	〃	—	(3.9)	5.0	0.4	外面体部中程まで施釉。内面貫入あり，見込草花文。	〔暗灰色〕 〈 〃 〉	〃	波縁皿。 Ⅲ層
333	〃	—	(1.7)	5.4	0.6	見込に草花文，花弁を表現。細かい貫入あり。	〔暗緑灰色〕 〈褐灰色〉	〃	
334	〃	—	(3.3)	4.4	0.4	見込に砂目積，削り出し高台で，兜巾が見られる。体部外面露胎。畳付部がやや広い。	〔淡茶灰色〕 〈淡黄灰色〉	粗。	
335	〃	14.8	4.0	6.5	0.3	内外面貫入あり，外面高台脇まで施釉。見込３ケ所に胎土目痕が残る。	〔灰色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅳ層
336	〃	12.7	3.2	4.7	0.3	見込に砂目跡。畳付に回転糸切り痕が残る。外底に兜巾が残る。内面と口縁部外面まで施釉。	〔暗緑色〕 〈褐色〉	やや粗。	溝縁皿。
337	〃	—	(1.5)	4.4	0.5	見込に５ケ所の砂目。内外面細かい貫入あり。外底に兜巾。	〔淡褐灰色〕 〈 〃 〉	やや密。	
338	〃	12.4	3.7	5.4	0.3	体部下位まで施釉。高台脇はヘラ削り。	〔淡緑灰色〕 〈灰色〉	密。	
339	〃	10.8	3.3	4.4	0.4	見込胎土目，口縁部外面まで施釉。	〔緑灰色〕 〈灰白色〉	やや密。	
340	〃	12.4	3.5	4.6	0.5	見込蛇ノ目釉ハギ。外面体部下半まで施釉。高台部露胎。	〔淡青緑色〕 〈灰黄褐色〉	〃	Ⅱ層
341	〃	12.8	3.8	4.6	0.4	見込に砂目，口縁部外面まで施釉。	〔緑灰色〕 〈灰褐色〉	密。	溝縁皿。
342	〃	—	(2.0)	4.8	0.2	見込に砂目跡が４ケ所。高台露胎。	〔灰白色〕 〈赤褐色〉	やや密。	
343	〃	13.1	3.5	4.3	0.6	見込蛇ノ目釉ハギ。外面体部下半まで施釉。高台部露胎。	〔青緑色〕 〈淡黄灰色〉	〃	Ⅱ層
344	〃	12.6	3.7	4.0	0.3	見込に砂目跡。高台部露胎。	〔青緑色〕 〈灰色〉	〃	溝縁皿。

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
345	唐津 皿	12.2	3.3	4.0	0.3	高台部露胎。	〔青緑色〕 〈灰色〉	密。	
346	〃	12.6	(2.0)	—	—		〔灰色〕 〈 〃 〉	〃	溝縁皿。
347	〃	13.8	3.5	4.0	0.5	畳付部に砂目跡。外面体部下半まで施釉。	〔緑灰色〕 〈灰白色〉	〃	
348	〃	13.4	(2.8)	—	—	口縁部外面まで施釉。	〔青灰色〕 〈灰色〉	〃	
349	〃	13.5	3.2	5.0	0.3	見込砂目跡。外面体部下半まで施釉。	〔灰褐色〕 〈淡灰褐色〉	〃	溝縁皿。 Ⅳ層
350	〃	—	(1.7)	4.6	0.5	高台脇まで施釉。見込砂目跡３ケ所。	〔浅黄色〕 〈淡黄色〉	〃	
351	〃	14.6	(2.2)	—	—	外面一部露胎。	〔淡緑灰色〕 〈灰色〉	やや粗。	
352	〃	12.8	(2.0)	—	—	口縁部外面まで施釉。	〔淡青灰色〕 〈赤褐色〉	〃	溝縁皿。
353	〃	13.4	(2.9)	—	—	体部下位まで施釉。内外面細かい貫入あり。	〔青緑色〕 〈灰色〉	密。	
354	〃	12.0	(1.9)	—	—	内面に鉄絵。	〔青緑色〕 〈灰色〉	〃	
355	〃	—	(2.1)	4.3	0.2	体部下位まで施釉，内外面貫入あり，畳付外面が削られている。	〔青緑色〕 〈淡褐色〉	やや粗。	
356	〃	—	(2.0)	3.9	0.4	内面施釉，外面無釉。削り出し高台で，畳付部分に糸切りが残る。	〔青灰色〕 〈赤褐色〉	〃	
357	〃	12.0	4.6	2.4	0.4	体部下半まで施釉。	〔緑灰色〕 〈赤褐色〉	密。	Ⅳ層
358	〃	14.0	3.8	6.2	0.8	内外面貫入あり。口縁部外面まで施釉。畳付に砂溶着。見込に砂目跡。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	
359	唐津 碗	—	(3.4)	4.5	0.6	外面高台脇まで施釉。	〔淡緑灰色〕 〈灰白色〉	やや密。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
360	唐津 碗	—	(3.8)	5.0	0.9	外面露胎。	〔黒色〕 〈淡褐色〉	やや粗。	
361	〃	—	(3.7)	4.6	0.6	外面体部下半まで施釉。	〔灰黒色〕 〈灰色〉	〃	
362	〃	—	(1.8)	4.0	0.5	〃	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	
363	〃	—	(3.3)	4.8	0.8	体部外面下位まで施釉。外底に兜巾。	〔黒色の鉄釉〕 〈灰白色〉	〃	
364	〃	9.6	6.6	4.0	0.5	削りにより高台を作りだす。体部中程まで施釉。内外面貫入あり。	〔暗緑灰色〕 〈黄灰色〉	やや密。	
365	〃	11.6	7.1	4.6	1.0	全面に施釉，内外面貫入あり。畳付に砂目。	〔暗緑色〕 〈淡黄灰色〉	〃	
366	〃	—	(3.3)	3.7	0.4	内外面に貫入。外面体部下半まで施釉，高台脇削る。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	
367	〃	—	(4.7)	4.6	0.6	高台部無釉，見込に胎土目。	〔暗緑色〕 〈暗灰色〉	〃	
368	〃	—	(2.4)	5.2	0.4	外面は無釉。	〔青灰色〕 〈淡赤褐色〉	〃	
369	〃	—	(3.6)	4.3	0.6	畳付のみ露胎，砂溶着。	〔緑灰色〕 〈灰白色〉	〃	
370	〃	—	(2.7)	3.5	0.4	外面は無釉。	〔灰褐色〕 〈淡赤褐色〉	粗。	
371	〃	12.6	6.0	4.4	0.4	体部下半まで施釉。	〔褐灰色〕 〈赤褐色〉	やや密。	
372	〃	8.6	6.5	4.3	1.0	体部下半まで施釉。兜巾が残る。	〔黒色〕 〈灰黒色〉	〃	Ⅳ層
373	〃	11.0	(4.6)	—	—		〔褐灰色〕 〈赤褐色〉	〃	〃
374	〃	—	(2.8)	4.0	0.4	外面体部下半まで施釉。	〔灰色〕 〈 〃 〉	密。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
375	唐津 碗	—	(5.6)	4.6	0.8	内外面貫入あり。外面高台脇まで施釉。	〔黒色〕 〈灰色〉	密。	
376	〃	—	(2.2)	5.2	0.1	内外面貫入がはいる。見込砂目跡。	〔灰緑色〕 〈灰色〉	やや密。	
377	〃	—	(3.3)	4.8	0.4	見込に砂目跡。高台脇まで施釉。	〔灰白色〕 〈赤褐色〉	〃	
378	〃	11.8	7.1	4.9	0.7	砂目高台，内外面刷毛目。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	Ⅲ層
379	〃	—	(2.6)	4.2	0.5	高台脇を削る。外面体部下半まで施釉。	〔灰オリーブ〕 〈灰色〉	〃	Ⅰ層
380	〃	—	(3.5)	3.8	0.6	外面体部下半まで施釉。	〔黒色〕 〈赤褐色〉		
381	〃	—	(2.5)	5.0	0.8	畳付のみ釉をかきとる。内外面貫入あり。	〔淡緑色〕 〈灰色〉	やや密。	
382	〃	11.7	7.4	5.4	0.9	砂目高台，象嵌刷毛目。	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	密。	
383	唐津 大皿	35.0	(4.4)	—	—	内外面貫入あり。口縁部内面に文様あり。	〔淡灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
384	〃	—	(4.7)	5.0	0.3	内面のみ施釉，見込に砂目跡。	〔淡緑灰色〕 〈暗灰色〉	〃	
385	〃	31.8	7.2	9.6	1.2	逆台形の高台。内面に白象嵌，見込に砂目。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	〃	Ⅱ層
386	〃	29.0	(4.9)	—	—	内面に貫入あり。	〔緑灰色〕 (白濁色) 〈灰色〉	〃	二彩唐津。
387	〃	36.0	(4.0)	—	—	口縁部内面に刷毛目文様。	〔暗緑灰色〕 〈暗灰色〉	やや密。	
388	〃	37.6	(4.4)	—	—	口縁部外面まで施釉。	〔淡緑灰色〕 〈赤褐色〉	やや粗。	二彩唐津。
389	〃	35.2	(5.8)	—	—	口縁部は大きく外反する。	〔淡青灰色〕 〈灰色〉	密。	絵唐津。 Ⅱ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
390	唐津 大皿	32.6	9.2	8.8	0.4	外面中程まで施釉。見込胎土目。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	
391	〃	—	(3.0)	11.9	1.1	畳付に胎土目。見込に砂目跡。	〔緑灰色〕 〈赤褐色〉	〃	Ⅲ層
392	〃	—	(2.6)	8.2	0.7	見込に胎土目。内面のみ施釉。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	やや密。	
393	〃	—	(3.6)	13.0	1.2	切高台。	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	密。	
394	〃	—	(3.8)	9.6	1.3	見込刷毛状工具により調整。	〔赤褐色〕 〈暗赤褐色〉	〃	
395	〃	—	(3.3)	9.2	1.0	高台外面まで施釉。内面刷毛目塗り。	〔暗灰黄色〕 〈暗褐色〉	〃	
396	〃	44.4	12.9	12.1	1.6	切高台，内外面貫入あり。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	二彩唐津。 Ⅴ層
397	〃	—	(3.5)	8.6	1.3	見込砂目跡。内面釘堀りの線描文。	〔白濁色〕 〈淡赤褐色〉	やや密。	
398	〃	—	(3.6)	9.6	1.2	畳付外側を削る。	〔白濁色〕 〈赤褐色〉	〃	二彩唐津。 Ⅳ層
399	唐津 片口鉢	21.4	(9.0)	—	—	内外面貫入あり。	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	〃	
400	〃	15.8	(6.3)	—	—	口縁部外面，刷毛目文様。外面胴部は露胎。	〔暗緑色〕 〈淡褐色〉	やや粗。	Ⅱ層
401	唐津 大皿	—	(4.2)	8.4	1.0	見込に砂目跡。切高台。	〔褐色〕 〈灰褐色〉	密。	鉄釉鉢。 Ⅱ層
402	唐津 蓋	11.1	2.7	—	—	天井部は刷毛目文様。底部回転糸切り，天井部のみ施釉。	〔暗緑灰色〕 〈褐灰色〉	〃	
403	〃	7.5	3.0	—	—	天井部のみ施釉，貫入あり。	〔青緑色〕 〈灰色〉	〃	
404	〃	8.8	1.3	—	—	外面のみ施釉，貫入あり。	〔淡緑色〕 〈淡赤褐色〉	やや密。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
405	唐津 小杯	9.0	4.2	4.1	—	底部回転糸切り。体部中程まで施釉。	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	密。	
406	〃	10.0	5.5	5.6	0.3	〃	〔緑灰色〕 〈暗灰色〉	〃	
407	唐津 香炉	—	(4.7)	—	—	外面のみ施釉，貫入あり。白象嵌。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	〃	Ⅱ層
408	〃	—	(6.3)	—	—	外面のみ施釉，白象嵌手法。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	〃	〃
409	備前 擂鉢	—	(5.0)	—	—	口縁端部がやや肥厚。	淡赤褐色。	〃	
410	〃	24.8	(6.3)	—	—	口縁部は上方に立ち上がる。	〔暗褐色〕 〈灰褐色〉	〃	Ⅲ層
411	〃	32.6	(6.7)	—	—	〃	〔暗褐色〕 〈暗赤褐色〉	〃	〃
412	〃	30.4	(10.6)	—	—	口縁端部に２条の沈線。条線の単位は11本。	〔淡赤褐色〕 〈灰色〉	〃	Ⅴ層
413	〃	27.8	(8.3)	—	—	口縁端部に２条の沈線。条線は８本単位。	〔赤褐色〕 〈灰褐色〉	密。砂粒を含む。	
414	〃	26.8	(5.3)	—	—	口縁部外面に２条の沈線。条線の単位は不明。	〔暗赤褐色〕 〈灰色〉	密。	
415	〃	38.0	(6.1)	—	—	外面に２条の凹線，ロクロナデ。内面に条線が施されるが，単位は不明。	淡赤灰色。	〃	
416	〃	22.6	(6.0)	—	—	口縁端部に２条の沈線。条線は10本単位。	〔暗褐色〕 〈灰色〉	〃	Ⅳ層
417	〃	29.0	(6.0)	—	—	口縁端部に２条の沈線。条線は７本単位。	〔暗褐色〕 〈灰色〉	〃	〃
418	〃	32.0	(6.4)	—	—	口縁端部に３条の沈線。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	〃	〃
419	〃	29.4	(9.7)	—	—	口縁端部に３条の沈線。条線の単位は12本。	〔暗褐色〕 〈灰色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
420	備前 擂鉢	31.0	(5.4)	—	—	口縁端部に2条の沈線。	暗赤褐色	密。	Ⅴ層
421	〃	28.4	(4.2)	—	—	〃	〔暗褐色〕 〈灰色〉	〃	Ⅳ層
422	〃	30.4	(4.8)	—	—	口縁部外面に2条の凹線。内面に12本単位の条線。	暗褐色。	〃	
423	〃	—	(6.7)	—	—	口縁端部に2条の沈線。条線の単位は不明。	〔赤褐色〕 〈灰褐色〉	〃	
424	〃	—	(5.0)	—	—	口縁端部，外面に2条の沈線。条線の単位は不明。	〔赤褐色〕 〈暗灰色〉	やや密。	
425	〃	30.1	(7.7)	—	—	口縁端部に2条の沈線。条線は12本単位。	〔赤褐色〕 〈灰褐色〉	密。砂粒を含む。	
426	〃	27.4	(10.7)	—	—	口縁端部に2条の沈線。内面全面に条線。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	密。	Ⅳ層
427	〃	36.4	(8.2)	—	—	外面に2条の凹線。口唇部に深い1条の凹線。内面全面に条線が施される。	赤褐色	〃	
428	〃	32.2	(3.7)	—	—	口縁部外面に2条の凹線。内面全面に条線。	赤灰色	〃	
429	〃	30.6	(4.0)	—	—	〃	〔暗茶褐色〕 〈赤褐色〉	〃	Ⅰ層
430	〃	33.4	(5.5)	—	—	口縁部内外面に2条の凹線。内面全面に条線。	赤褐色	〃	
431	〃	31.0	(7.5)	—	—	口縁部外面に2条の凹線。内面全面に条線。	赤茶褐色	〃	Ⅱ層
432	〃	19.0	6.6	8.8	—	〃	赤褐色	やや粗。	〃
433	〃	28.4	(12.7)	—	—	〃	暗赤褐色	密，砂粒を若干含有する。	
434	〃	18.4	(3.6)	—	—	口縁部外面に1条の凹線。内面全体に7本単位の条線。	赤褐色	密。	Ⅱ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
435	備前 擂鉢	22.2	(4.4)	—	—	口縁部外面に２条の凹線。 内面全体に荒い条線。	赤褐色	密。	
436	〃	42.8	(3.5)	—	—	口縁部外面に２条の凹線。 内面13本単位の条線。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	密，砂粒を含有。	
437	〃	32.4	(4.5)	—	—	条線は全面に施される。 口縁端部に２条の沈線。	〔淡赤褐色〕 〈灰褐色〉	密。	
438	〃	34.0	(8.0)	—	—	口縁端部に２条の沈線。 内面全面に条線。	赤褐色	〃	Ⅲ層
439	〃	27.6	(10.3)	—	—	〃	〔暗赤褐色〕 〈赤褐色〉	〃	〃
440	〃	—	(4.7)	—	—	口縁部外面に２条の凹線。 全面に条線。	赤褐色	〃	Ⅰ層
441	〃	33.4	(8.0)	—	—	口縁端部に２条の沈線。 全面に条線が施される。	〔暗褐色〕 〈赤褐色〉	〃	Ⅳ層
442	〃	—	(4.8)	9.8	—		赤褐色	密，砂粒を含む。	Ⅴ層
443	〃	—	(7.0)	—	—	口縁部外面に２条の沈線。 条線は内面全面に施される。	〔褐灰色〕 〈灰色〉	密。	
444	〃	—	(4.5)	12.6	—	全面に条線。	〔淡赤褐色〕 〈灰色〉	〃	Ⅴ層
445	〃	—	(7.7)	—	—	口縁端部に２条の沈線。	〔赤褐色〕 〈灰色〉	〃	Ⅳ層
446	〃	—	(5.1)	12.8	—		〔暗赤褐色〕 〈灰色〉	〃	〃
447	〃	—	(4.4)	13.0	—		赤褐色	〃	〃
448	〃	—	(7.7)	16.2	—	内面８本単位の条線。	暗赤褐色	〃	Ⅱ層
449	〃	32.4	(9.9)	—	—	口縁部外面に２条の凹線。 内面全体に条線。	赤褐色。	〃	Ⅱ層

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
450	備前 擂鉢	—	(7.8)	12.4	—	内面に10本単位の条線。	〔赤褐色〕 〈灰色〉	密。	
451	〃	—	(3.8)	11.6	—	条線は全面に施される。	明橙色	〃	
452	〃	—	(5.8)	17.2	—	内面全面に条線が施される。	赤褐色	〃	
453	〃	—	(5.2)	8.9	—	〃	〔淡灰赤色〕 〈灰色〉	〃	
454	〃	—	(7.4)	10.4	—	〃	淡赤褐色	やや粗。	
455	〃	—	(3.6)	15.4	—	〃	灰黄橙色	粗。	
456	〃	—	(3.7)	11.6	—	内底及び内面に全面条線。	〔茶褐色〕 〈暗茶褐色〉	やや密。 砂粒を含む。	
457	〃	—	(5.7)	—	—	条線の単位は不明。	〔暗褐色〕 〈灰色〉	密。	
458	備前 壺	16.0	(8.2)	—	—	口縁部玉縁状を呈す。肩部に自然釉。	暗赤褐色。	密，砂粒を含有する。	Ⅱ層
459	備前 四耳壺	15.0	(5.5)	—	—	内面にロクロ目を残す。外面肩部に耳の残形。	〔暗赤褐色〕 〈灰色〉	密。	
460	備前 壺	—	(5.4)	9.8	—	内面にロクロ痕が残る。	〔暗褐色〕 〈灰色〉		Ⅲ層
461	〃	18.8	(5.5)	—	—	口縁は玉縁状を呈する。	〔暗赤褐色〕 〈灰色〉	密。	〃
462	〃	—	(7.5)	10.4	—	内面にロクロ痕が残る。	〔暗赤褐色〕 〈灰色〉		Ⅳ層
463	備前 小壺	—	(7.2)	3.9	—	内部に粒銀をいれている。	赤褐色	密。	Ⅲ層
464	〃	—	(2.3)	4.5	—	底部ヘラ切り，底部線刻。	明赤褐色	やや粗。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
465	備前 甕	14.8	(5.4)	—	—	くの字状に外反。外面に刻線。	〔灰色〕 〈暗褐色〉	密。	
466	〃	22.4	(5.7)	—	—	口縁は玉縁状を呈する。	〔暗褐色〕 〈暗灰色〉	〃	Ⅲ層
467	〃	34.4	(8.3)	—	—	口縁部折り返し玉縁状を呈す。	〔暗緑灰色〕 〈淡褐灰色〉 〈灰色〉	〃	
468	瀬戸・美濃系 皿	10.0	2.6	5.2	0.2	見込円形に露胎。碁笥底。内外面貫入あり。	〔オリーブ黄〕 〈灰黄色〉	粗。	
469	〃	9.5	2.2	5.4	0.2	折縁口縁。内面は花弁の陰刻。見込無釉。内外面貫入あり。	〔淡黄緑色〕 〈淡黄白色〉	〃	菊皿。
470	〃	14.0	3.5	7.1	0.7	外面にロクロ目が残る。口縁部がやや外反，見込に重ね焼きの痕跡が残る。体部から外底にかけて一部露胎。	〔淡灰緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅳ層
471	〃	—	(1.6)	3.8	—	内外面丸彫による陰刻。	〔淡黄緑色〕 〈淡黄白色〉	粗。	
472	〃	13.6	2.7	7.8	0.3	外底のみ一部無釉。見込外底に目跡が残る。	〔オリーブ灰〕 〈黄灰色〉	〃	
473	〃	14.6	3.8	7.5	0.7	外面高台脇まで施釉。高台部露胎，見込蛇ノ目釉ハギ。	〔淡灰緑色〕 〈黄灰色〉	〃	Ⅱ層
474	〃	10.2	(1.9)	—	—		〔灰緑色〕 〈灰黒色〉	〃	
475	〃	15.0	(3.0)	—	—	内外面貫入あり。	〔淡黄緑色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅴ層
476	〃	13.8	4.0	6.2	0.4	外面高台脇まで施釉。高台脇を削る。内外面荒い貫入。見込蛇ノ目状釉ハギ。	〔淡黄緑色〕 〈黄白色〉	〃	
477	〃	16.0	2.9	9.4	0.6	畳付を除き全面施釉。内外面荒い貫入。志野皿。	〔灰白色〕 〈黄灰色〉	〃	Ⅱ層
478	〃	16.4	2.6	9.4	0.7	畳付を除き全面施釉。内外面貫入あり。	〔灰白色〕 〈黄灰色〉	〃	
479	〃	14.9	4.3	6.8	0.8	見込蛇ノ目状に釉かきとる。外面高台脇まで施釉。高台部露胎，高台脇を削る。内外面貫入あり。	〔濁灰白色〕 〈黄白色〉	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
480	瀬戸・美濃系 皿	13.6	3.4	7.3	0.8	外面高台脇まで施釉。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	Ⅳ層
481	〃	—	(1.7)	8.8	0.6	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。志野皿。	〔灰白色〕 〈黄白色〉	粗。	Ⅲ層
482	〃	14.1	3.2	7.5	0.6	外面高台脇まで施釉。	〔淡緑灰色〕 〈灰色〉	やや密。	Ⅵ層
483	瀬戸・美濃系 小杯	—	(2.0)	2.0	0.2	高台部露胎，内外面貫入。	〔淡黄緑色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅲ層
484	瀬戸・美濃系 碗	—	(2.2)	4.9	0.8	高台脇まで施釉。内外面貫入あり。	〔淡黄灰色〕 〈淡黄赤色〉	粗。	
485	〃	11.2	6.6	5.0	0.4	陶胎呉須絵。外面高台脇まで施釉。内外面貫入あり。	〔淡灰白色〕 〈灰白色〉	〃	
486	瀬戸・美濃系 天目茶碗	10.6	7.3	4.4	0.5	外面体部下まで施釉。高台脇を削る。化粧掛けなし。	〔茶褐色〕 〈灰白色〉	〃	
487	〃	13.4	6.3	4.5	0.3	高台脇を削る。輪高台。	〔褐色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅲ層
488	〃	10.8	(7.0)	—	—	体部外面のみ露胎。鉄釉が施される。	〔黒褐色〕 〈淡黄灰色〉	密。	
489	〃	11.2	(5.5)	—	—	外面体部下半まで施釉。	〔黒褐色〕 〈黄白色〉	粗。	
490	〃	11.2	(6.7)	—	—	体部下位まで施釉。高台脇を削る。	〔黒褐色〕 〈淡灰白色〉	〃	
491	〃	14.4	(5.4)	—	—	外面体部中位まで施釉。	〔黒褐色〕 〈黄灰色〉	〃	
492	〃	12.2	(6.1)	—	—	化粧掛けはなし。	〔黒色〕 〈黄白色〉	〃	
493	〃	11.6	(5.6)	—	—	体部下半まで施釉。	〔黒褐色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅳ層
494	〃	—	(4.6)	4.5	0.8	高台脇を削る。輪高台。	〔黒褐色〕 〈黄白色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
495	瀬戸・美濃系 天目茶碗	12.6	(6.7)	—	—	外面体部下半まで施釉。高台脇を削る。	〔黄緑色〕 〈黄白色〉	密。	
496	〃	11.0	(5.5)	—	—	化粧掛けはなし。	〔黒褐色〕 〈淡黄色〉	〃	
497	瀬戸・美濃系 香炉	9.8	5.1	6.7	0.2	外面高台脇，内面体部中程まで施釉。外面丸ノミ状工具による草花文の陰刻。	〔淡茶色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅱ層
498	瀬戸・美濃系 天目茶碗	—	(1.7)	4.4	0.6	輪高台。	〔黒色〕 〈黄白色〉	〃	
499	〃	—	(2.0)	4.7	0.3	外面及び高台部露胎。削り出し高台。	〔黒褐色の鉄釉〕 〈淡黄白色〉	〃	
500	〃	—	(1.4)	4.8	0.6	輪高台。	〔黒色〕 〈黄灰色〉	〃	Ⅳ層
501	〃	—	(1.1)	3.7	—	高台内反り，化粧掛け。	〔黒色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅴ層
502	瀬戸・美濃系 向付	12.4	(5.5)	—	—	内面にロクロ目が残る。外面に２条の凹線。	〔黒色〕 〈淡黄白色〉	〃	
503	常滑 鉢	—	(3.9)	9.0	0.9	内面貫入あり。	〔緑灰色〕 〈灰白色〉	やや密。	
504	瀬戸・美濃系 向付	14.4	4.9	10.8	0.6	内外面貫入あり。	〔灰白色〕 〈黄白色〉	粗。	Ⅲ層
505	瀬戸・美濃系 鉢	35.0	9.8	16.0	0.8	高台外面まで施釉。内面捩花。	〔灰色〕 〈 〃 〉	やや密。	
506	瀬戸・美濃系 碗	9.4	5.0	4.2	0.6	全面に施釉。外底に銘。	〔淡灰白色〕 〈白色〉	密。	Ⅰ層
507	瀬戸・美濃系 鉢	—	(2.9)	17.4	0.6	全面に施釉。見込草花文。	〔灰色〕 〈 〃 〉	〃	Ⅳ層
508	〃	—	(4.3)	17.8	0.6	全面施釉。見込草花文。	〔浅黄色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
509	落し蓋	7.2	2.2	—	—	外面のみ施釉，貫入あり。	〔黄緑色〕 〈黄灰色〉	〃	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
510	落し蓋	14.0	(1.5)	—	—	口縁部内面露胎。	〔浅黄色〕 〈灰白色〉	密。	Ⅲ層
511	〃	8.4	(2.0)	—	—	外面のみ施釉，貫入あり。	〔黄緑色〕 〈黄灰色〉	〃	
512	灯明皿	13.0	2.8	3.6	—	見込に目跡。内面のみ施釉で，貫入あり。	〔淡緑灰色〕 〈灰黄色〉	やや密。	Ⅲ層
513	〃	11.0	2.3	4.1	—	口縁部外面まで施釉，内外面貫入あり。見込足付ハマ溶着痕が残る。	〔淡緑灰色〕 〈灰白色〉	〃	
514	〃	10.4	2.4	4.0	—	口縁部外面と内面のみ施釉。貫入あり。体部外面ロクロによるヘラ削り。	〔淡黄灰色〕 〈淡灰白色〉	密。	
515	〃	11.2	2.2	4.0	—	内面のみ施釉，内面貫入あり。内面に櫛目。	〔淡緑灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅱ層
516	碗	—	(2.1)	4.4	0.7	内外面貫入，畳付のみ露胎。	〔緑灰色〕 〈黄灰色〉	やや密。	
517	〃	11.2	7.4	5.0	0.7	高台脇まで施釉。内外面に細かい貫入。見込足付ハマ溶着痕。	〔淡緑灰色〕 〈灰白色〉	密。	
518	〃	6.6	(5.6)	—	—	内外面貫入あり。	〔淡乳白色〕 〈淡白灰色〉	粗。	
519	〃	12.2	(5.7)	—	—	〃	〔暗緑色〕 〈灰色〉	やや密。	
520	〃	12.7	4.6	5.6	0.5	口縁部外面に１条の沈線。外面高台脇まで施釉。見込円形に無釉。	〔暗褐色〕 〈淡茶灰色〉	〃	
521	〃	12.1	(6.6)	—	—	外面に草花文が施される。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	密。	半磁器。 Ⅳ層
522	〃	—	(2.5)	7.2	1.2	畳付のみ露胎，内外面貫入あり。見込楼閣山水文。外底に銘。	〔淡青灰色〕 〈灰白色〉	〃	Ⅲ層
523	〃	8.4	(6.3)	—	—	体部下半まで施釉。	〔灰白色〕 〈黄灰色〉	やや粗。	
524	〃	—	(2.4)	5.2	1.2	畳付のみ無釉，砂溶着。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量 (cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
525	皿	6.2	3.0	4.8	—	底部回転糸切り，底部は露胎。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	
526	〃	4.7	1.9	4.3	—	底部は露胎，回転糸切り調整。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	〃	
527	盤	—	(3.3)	5.5	1.6	切高台。	〔灰褐色〕	やや密。	
528	土瓶	—	(2.2)	9.0	—	内面のみ鉄釉を施す。底部に粘土塊を貼付。	〔暗褐色〕	密。	外面に煤付着。
529	皿	—	(2.0)	7.4	1.0	見込に砂目跡，畳付のみ露胎。	〔黄白色〕 〈 〃 〉	粗。	Ⅳ層
530	鉢	33.8	(4.8)	—	—	口縁端部は肥厚する。	〔灰褐色〕 〈赤褐色〉	密。	Ⅱ層
531	〃	27.6	(4.5)	—	—		暗褐色	〃	Ⅳ層
532	〃	30.2	(3.5)	—	—	内面全面に条線が施される。	灰褐色	〃	Ⅲ層
533	瓶	—	(14.5)	10.6	—	ロクロ成形。	黄白色	〃	〃
534	深皿	25.6	6.9	10.5	0.9	外面高台脇まで施釉。	〔淡黄色〕 〈灰色〉	〃	〃
535	碗	9.8	6.1	4.4	0.5	外面高台脇まで施釉。高台部露胎。	〔淡黄緑色〕 〈淡灰黄色〉	やや密。	
536	〃	—	(5.2)	4.2	1.6	畳付のみ釉を剝ぎとり，砂溶着。内外面貫入あり。	〔黄緑色〕 〈灰黄色〉	密。	
537	〃	11.8	8.0	4.9	0.6	外面高台脇まで施釉，内外面貫入あり。見込目跡。	〔淡青緑色〕 〈灰色〉	〃	
538	〃	—	(2.4)	3.2	0.5	高台脇まで施釉。内外面荒い貫入あり。	〔淡緑色〕 〈灰白色〉	〃	
539	〃	12.4	8.1	5.4	1.4	内外面貫入あり。畳付は露胎で砂溶着。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	粗。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
540	碗	11.6	6.7	5.6	0.6	外面高台脇まで施釉。内外面貫入あり。	〔灰白色〕 〈淡黄色〉	密。	Ⅲ層
541	〃	12.8	8.0	5.0	1.0	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。砂容着。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	粗。	
542	〃	13.0	8.0	5.4	1.2	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。焼成不良。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅳ層
543	〃	11.7	7.4	5.4	1.1	畳付を除き全面施釉。内外面細かい貫入あり。	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅱ層
544	〃	12.0	(5.5)	—	—	内外面貫入あり。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅲ層
545	〃	11.6	(5.1)	—	—	〃	〔黄灰色〕 〈黄白色〉	〃	
546	〃	12.6	(5.7)	—	—	〃	〔淡黄白色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅳ層
547	〃	12.6	(5.8)	—	—	〃	〔淡黄灰色〕 〈黄白色〉	〃	〃
548	〃	12.6	(5.7)	—	—	内外面細かい貫入あり。	〔濃黄緑色〕 〈灰色〉	密。	Ⅴ層
549	〃	12.9	(6.2)	—	—	内外面貫入あり。	〔淡黄褐色〕 〈淡黄灰色〉	粗。	
550	〃	10.8	(5.8)	—	—	内外面無文。	〔淡黄灰色〕 〈褐灰色〉	密。	
551	〃	11.0	(5.6)	—	—	全面施釉，内外面貫入あり。	〔淡緑灰色〕 〈淡灰色〉	〃	
552	〃	—	(6.1)	4.6	1.0	畳付のみ露胎で他は全面施釉。内外面貫入あり。	〔淡黄灰色〕 〈淡黄白色〉	粗。	
553	〃	—	(3.9)	5.4	1.2	畳付以外全面施釉。内外面貫入あり。	〔淡黄灰色〕 〈淡乳灰色〉	〃	
554	〃	—	(3.7)	5.1	1.2	畳付に砂溶着。畳付以外全面に施釉。内外面に貫入あり。	〔淡緑灰色〕 〈淡黄灰色〉	密。	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
555	碗	—	(2.3)	5.4	0.8	畳付部のみ露胎，内外面貫入あり。	〔淡黄灰色〕 〈黄白色〉	粗。	
556	〃	—	(3.5)	5.0	1.2	内外面に貫入あり。畳付のみ露胎，砂溶着。	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	
557	〃	—	(3.2)	5.2	1.0	畳付を除き全面施釉。内外面貫入あり。	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅱ層
558	〃	—	(3.0)	5.2	1.2	畳付を除き全面施釉。内外面細かい貫入あり。	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	
559	〃	—	(4.3)	5.0	1.2	〃	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅱ層
560	〃	—	(4.7)	4.9	1.0	〃	〔明黄褐色〕 〈黄白色〉	〃	
561	〃	—	(5.8)	5.4	1.2	〃	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	〃	Ⅱ層
562	〃	—	(3.3)	5.1	0.6	〃	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	〃	
563	〃	—	(3.4)	4.5	1.0	畳付を除き全面施釉。内外面貫入あり。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	〃	
564	〃	—	(3.7)	5.0	1.0	畳付のみ露胎で全面施釉。内外面細かい貫入あり。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	やや密。	Ⅱ層
565	〃	—	(3.8)	4.8	1.4	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。	〔黄灰色〕 〈黄白色〉	粗。	
566	〃	—	(2.4)	5.0	0.9	畳付に砂溶着。全面施釉。	〔淡灰緑色〕 〈灰色〉	密。	Ⅳ層
567	〃	—	(3.5)	4.8	1.2	畳付のみ露胎，砂溶着。内外面貫入あり。	〔淡黄色〕 〈黄白色〉	粗。	Ⅲ層
568	〃	—	(2.6)	5.0	0.6	高台脇まで施釉。	〔淡緑灰色〕 〈灰色〉	密。	〃
569	〃	—	(3.6)	5.6	1.1	畳付のみ露胎，砂溶着。内外面貫入あり。	〔灰オリーブ〕 〈灰黄色〉	やや密。	〃

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量(cm)				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
570	碗	—	(4.6)	4.8	1.3	畳付のみ露胎，砂溶着。内外面貫入あり。	〔青緑色〕 〈灰色〉	密。	Ⅲ層
571	〃	—	(2.7)	4.9	1.2	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。	〔灰白色〕 〈黄灰色〉	やや粗。	〃
572	〃	—	(6.0)	5.2	1.2	内外面貫入あり，畳付のみ露胎。砂溶着。	〔オリーブ灰〕 〈灰白色〉	密。	〃
573	〃	—	(2.3)	4.6	1.4	〃	〔浅黄色〕 〈黄白色〉	やや粗。	〃
574	〃	—	(2.3)	5.1	0.6	外面高台脇まで施釉。	〔灰白色〕 〈 〃 〉	〃	〃
575	〃	—	(3.3)	5.8	0.6	外面高台脇まで施釉。外底に銘，外面に陶胎呉須絵。内外面に細かい貫入が入る。	〔淡黄色〕 〈乳黄白色〉	粗。	
576	〃	—	(2.6)	5.5	0.6	内面及び高台脇まで施釉。外底に銘あり，内外面細かい貫入あり。	〔淡黄灰色〕 〈 〃 〉	〃	
577	〃	12.2	6.5	5.9	0.4	外面高台脇まで施釉。外面に陶胎呉須絵，内外面貫入あり。外面に4条の浅い沈線。	〔淡黄灰色〕 〈黄灰色〉	密。	Ⅱ層
578	〃	—	(1.3)	3.4	0.4	外面高台脇まで施釉。内外面貫入あり。	〔黄白色〕 〈 〃 〉	やや粗。	Ⅴ層
579	〃	—	(1.4)	4.5	0.5	高台脇まで施釉。内外面細かい貫入。外底に銘。	〔淡青緑色〕 〈淡黄灰色〉	〃	
580	〃	—	(2.3)	5.6	0.3	外面高台脇まで施釉。高台部露胎，内外面貫入あり。外底に清水の銘があり。	〔淡黄灰色〕 〈 〃 〉	密。	Ⅱ層
581	〃	—	(0.5)	—	—	外底に銘。	〔明黄色〕 〈淡黄色〉	やや粗。	Ⅳ層
582	〃	—	(4.0)	5.3	0.4	陶胎呉須絵，外面高台脇まで施釉。外底に銘，内外面貫入あり。	〔緑灰色〕 〈灰色〉	密。	〃
583	蓋	3.6	3.0	—	—	口縁部は露胎，体部は釉が剝落。	〔淡緑色〕 〈淡赤褐色〉	やや密。	蓋物の蓋。Ⅰ層
584	把手	—	—	—	—	獣形の把手をつけ，径7㎜の円孔。	黄灰白色	〃	

挿図番号 (図版番号)	種　類	法　量（cm）				特　徴	色　調	胎　土	備　考
		口径	器高	底径	高台高				
585	窯道具 チャツ	5.8	1.5	6.8	－	底部中央に長径2.2cmの円孔が穿たれる。底部外面回転糸切り調整。	淡黄灰色	やや密。	
586	〃	4.4	1.2	5.4	－	底面は回転糸切り調整。	灰白色	密。	
587	鉢	－	(2.9)	9.2	1.4	高台外面まで施釉。見込８本の沈線。	〔白濁色〕 〈淡灰色〉	やや密。	
588	小碗	9.8	5.0	3.6	0.7	外面体部下半まで施釉。	〔灰白色〕 〈灰色〉	密。	Ⅲ層
589	擂鉢	30.8	(4.9)	－	－	内面に条線，単位不明。	〔茶褐色〕 〈暗灰色〉	やや粗。	
590	甕	47.0	(23.2)	－	－	口縁端部と肩部に数条の沈線。	〔暗茶褐色〕 〈灰色〉	密。	
591	〃	29.0	(8.9)	－	－	肩部２条の粘土紐貼付後押圧。	褐色	〃	

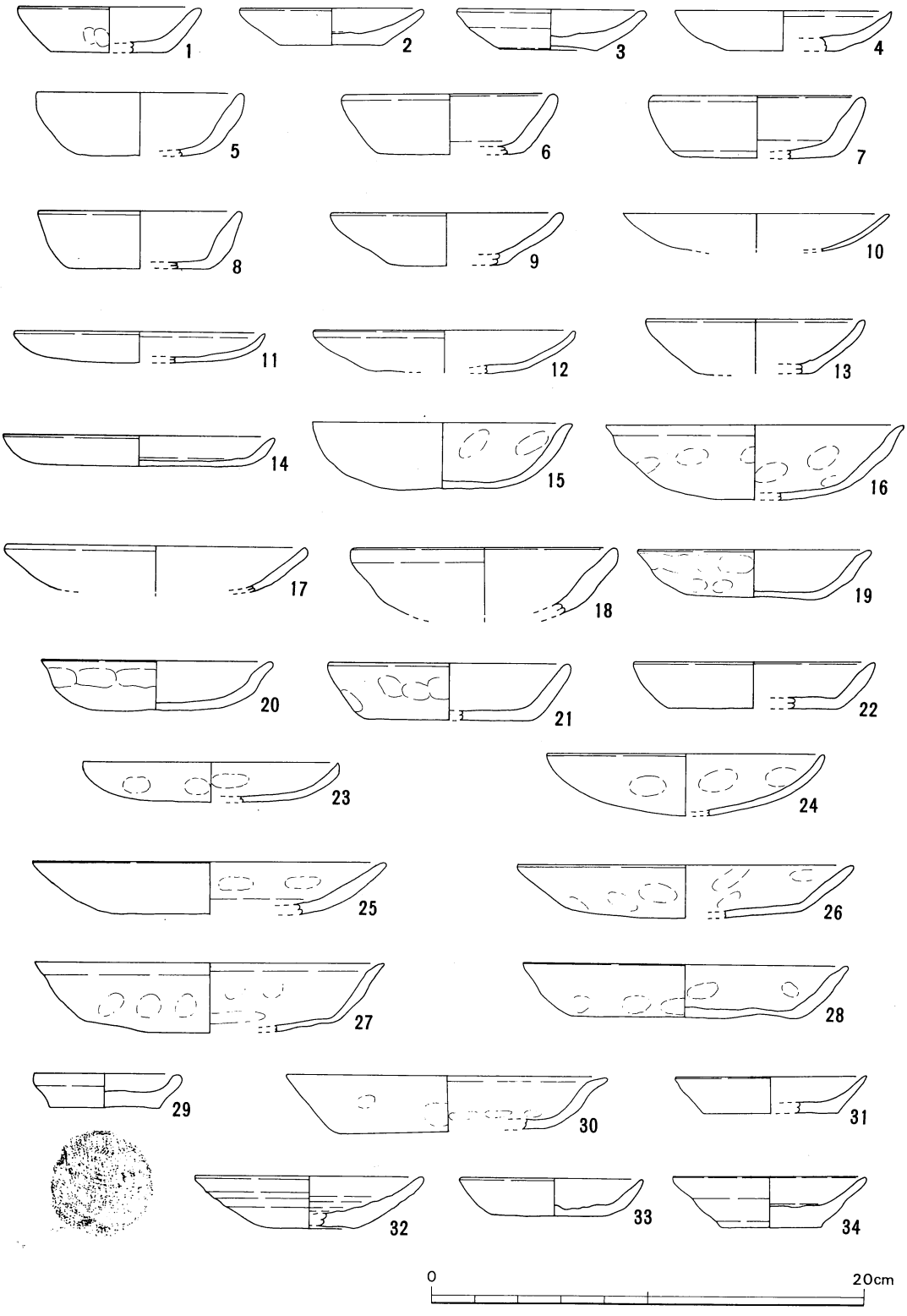


Fig.17　土師質土器実測図

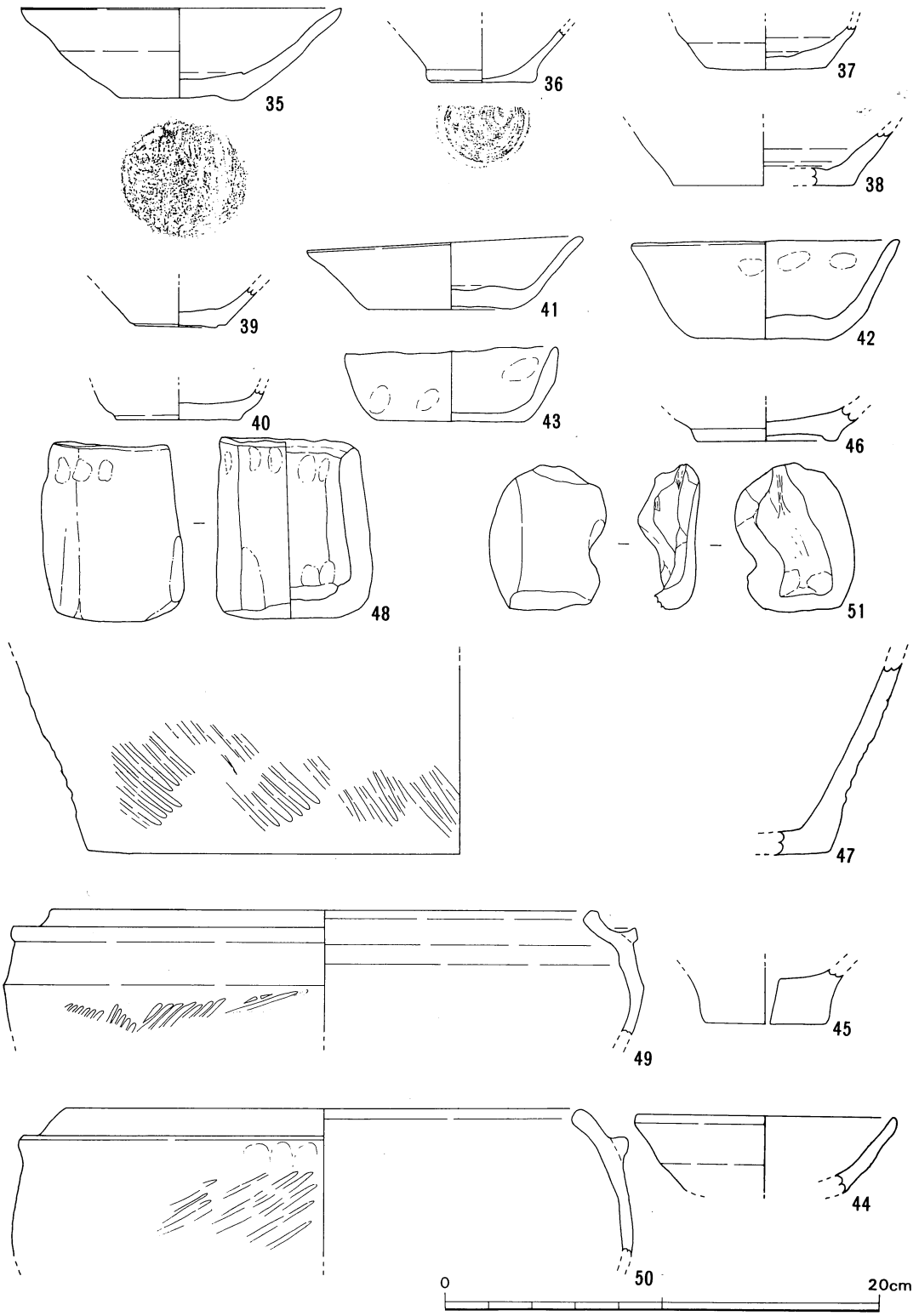


Fig.18　土師質土器，焼塩壺実測図

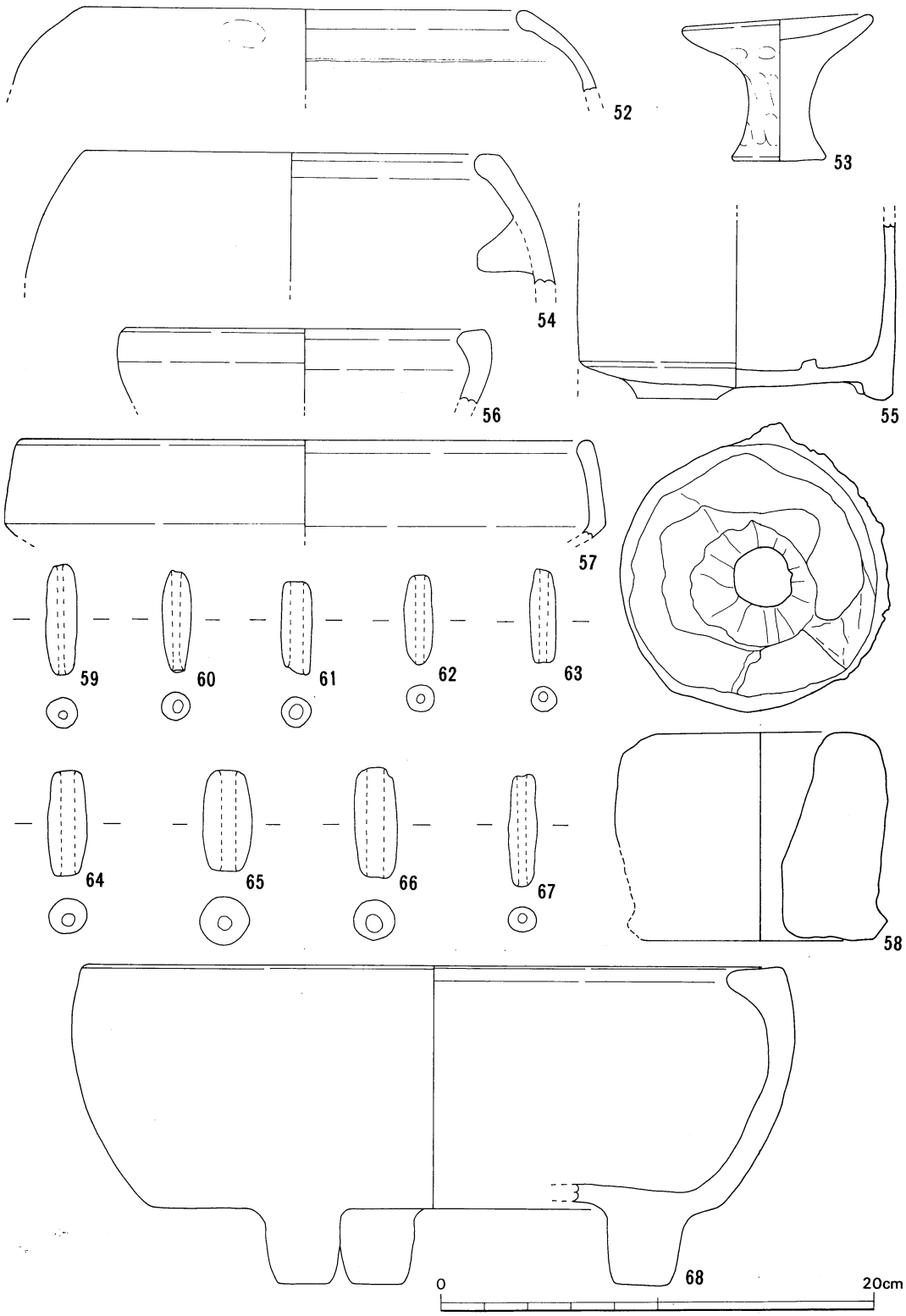


Fig. 19　土師質土器，瓦質土器，土錘，羽口実測図

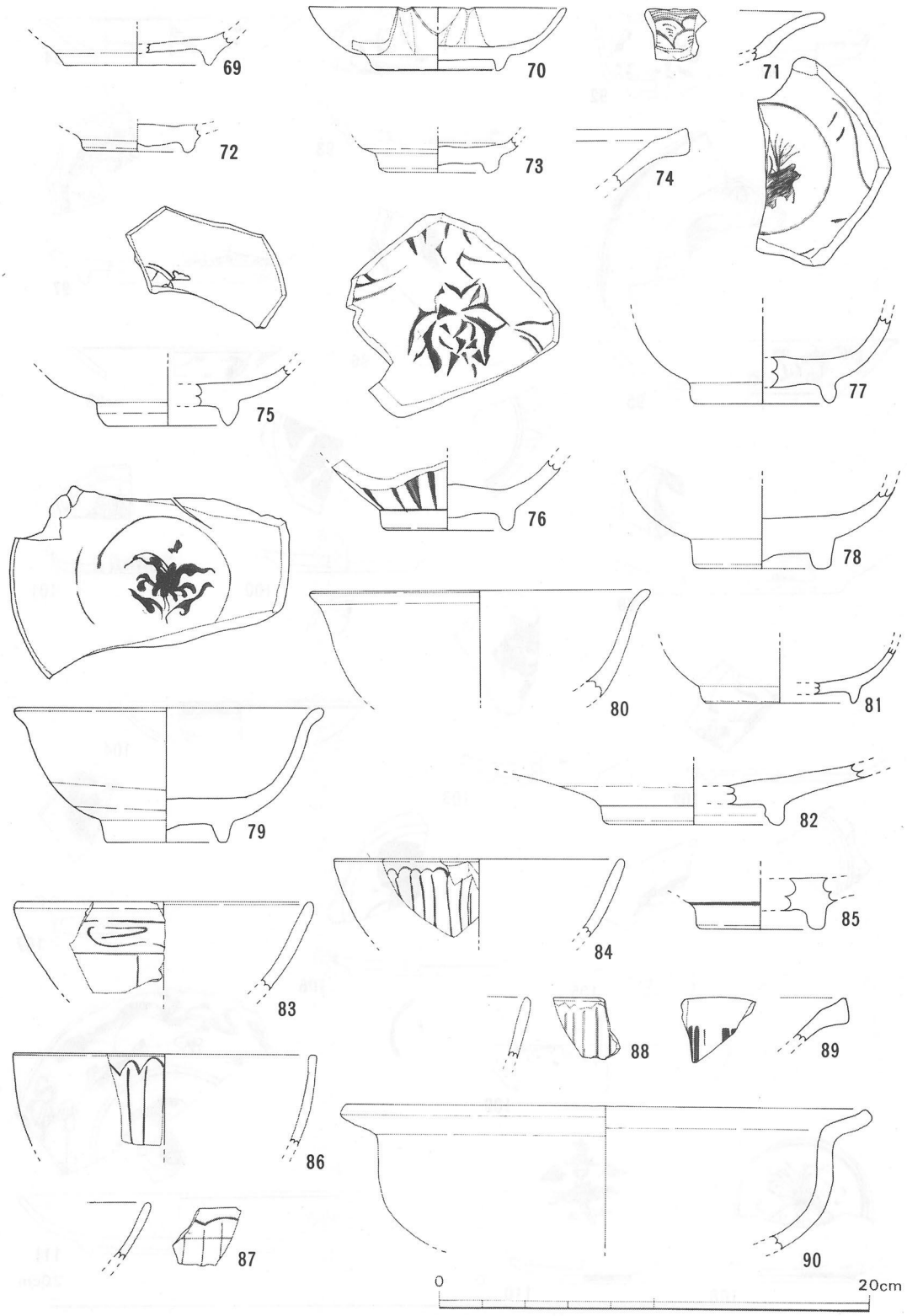


Fig.20　青磁実測図

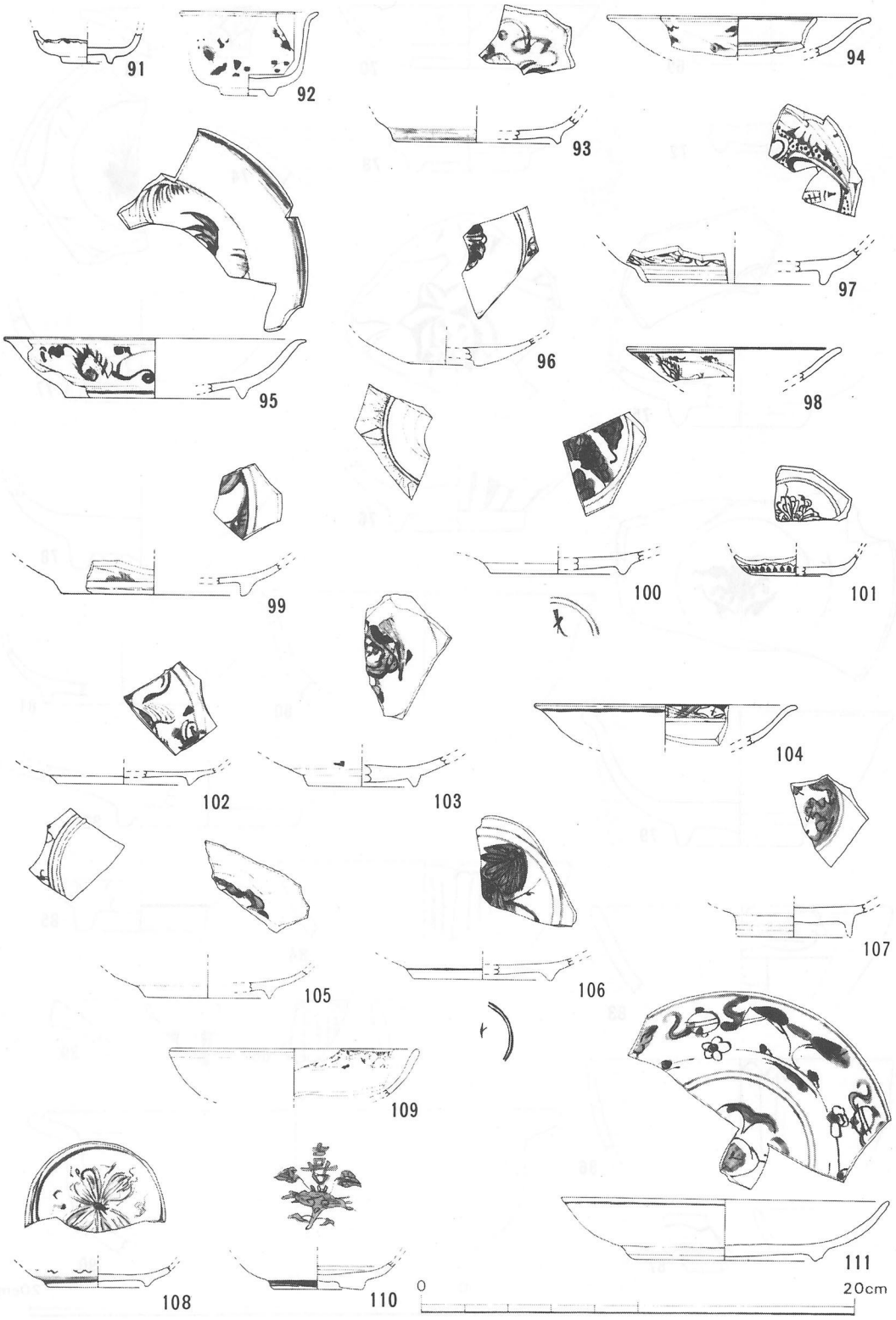

91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
0
20cm

Fig.21　染付実測図

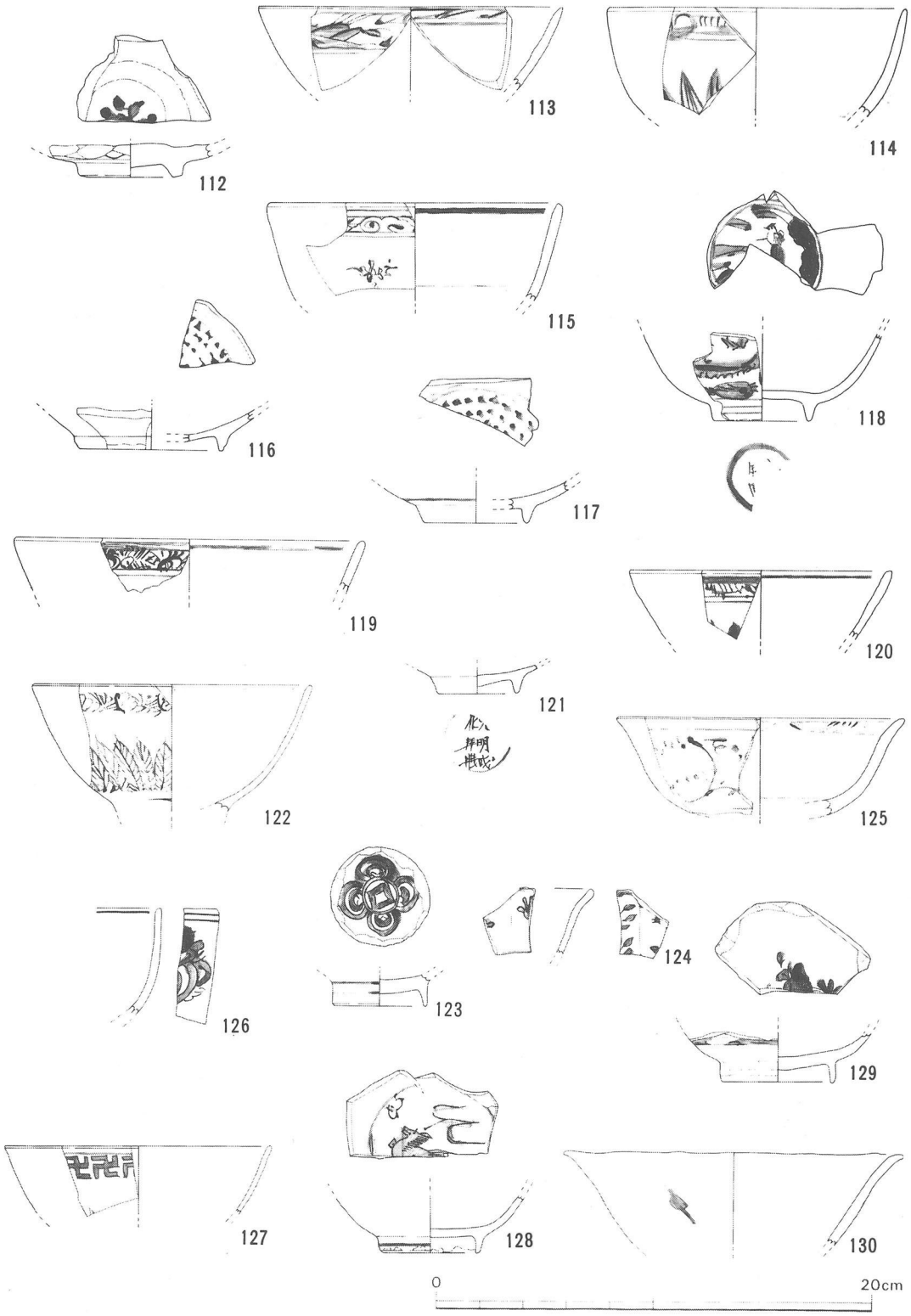

112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0
20cm

Fig.22　染付実測図

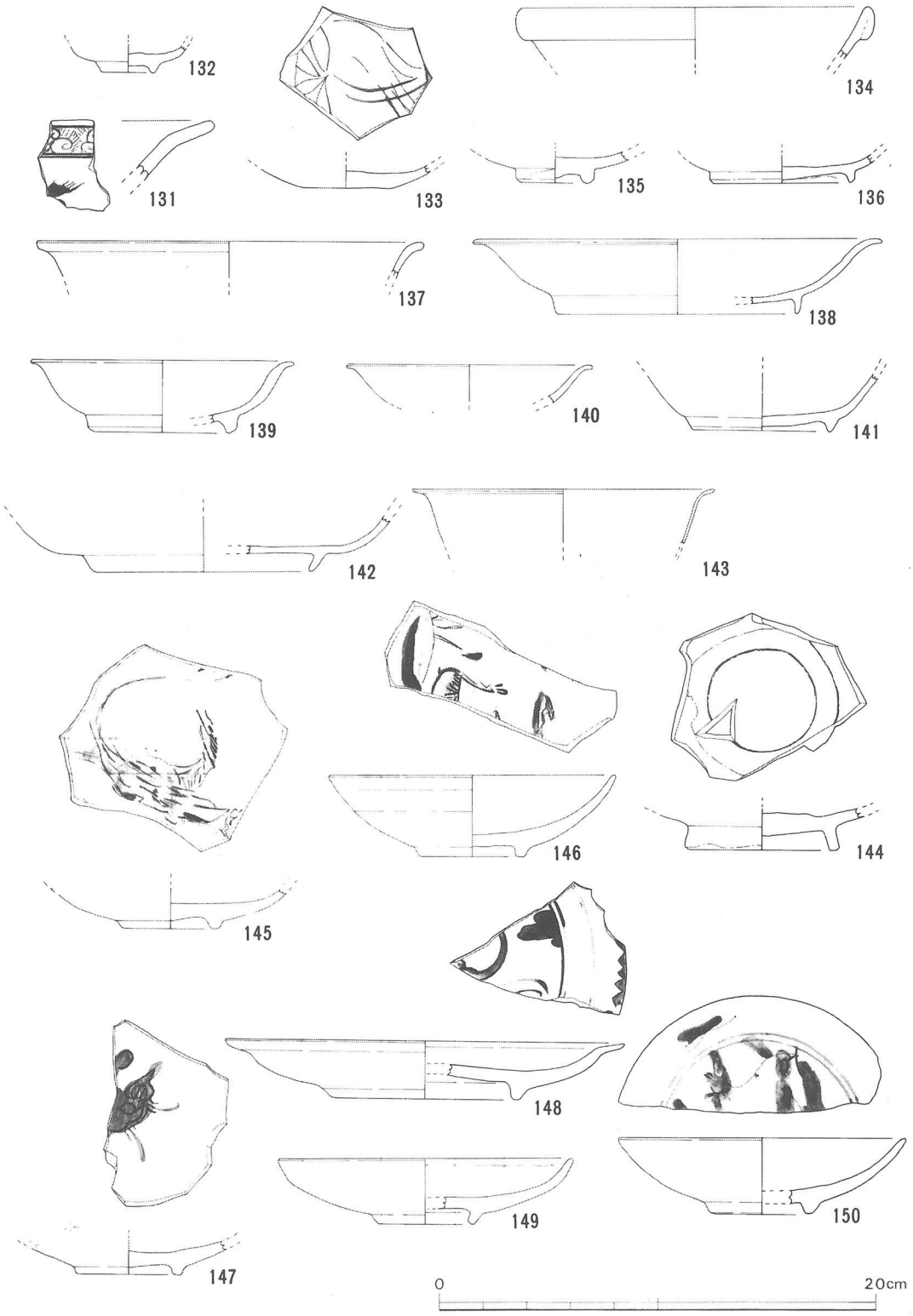


Fig.23　色絵，白磁，伊万里実測図

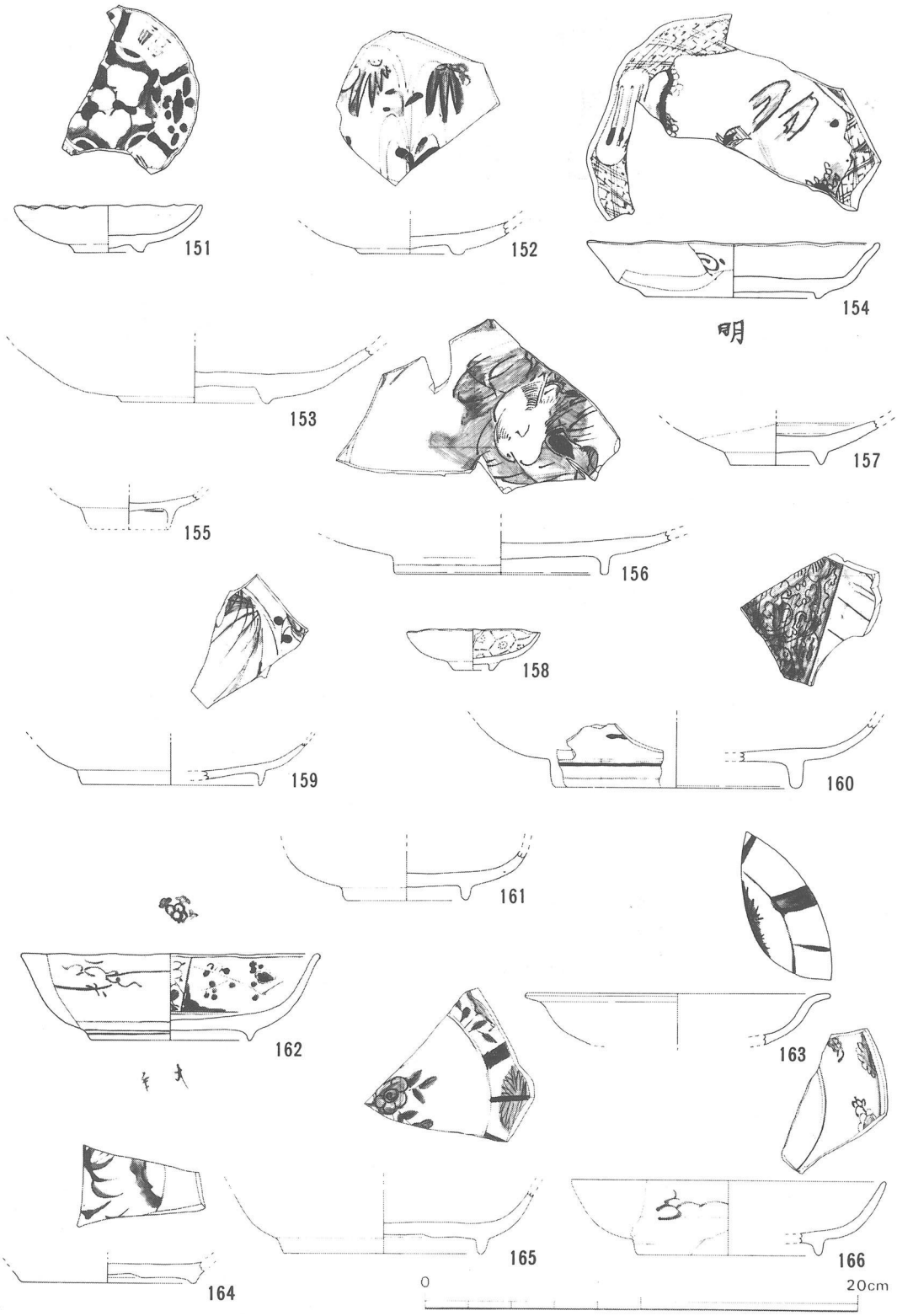


Fig.24　伊万里実測図

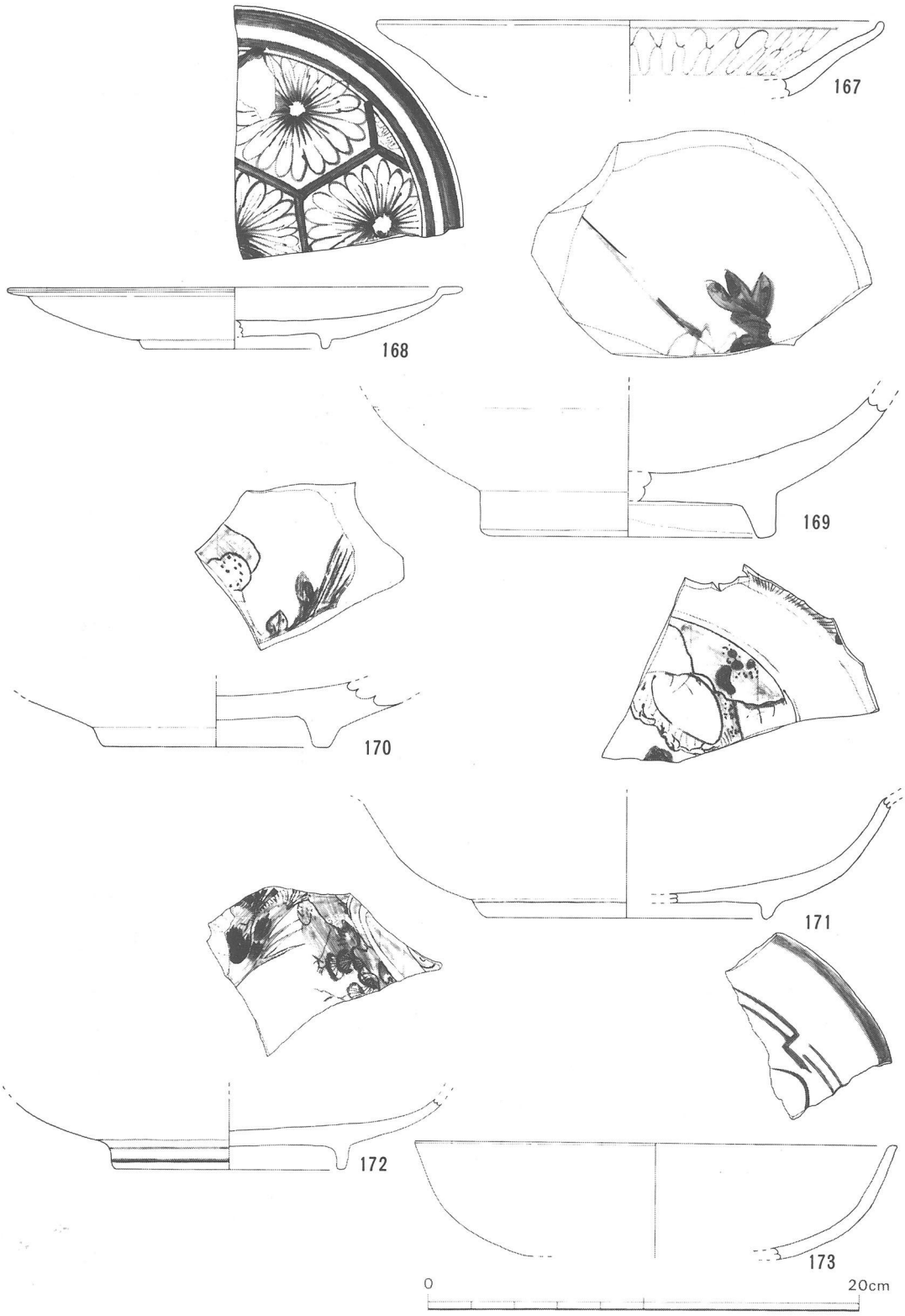


Fig.25　伊万里実測図

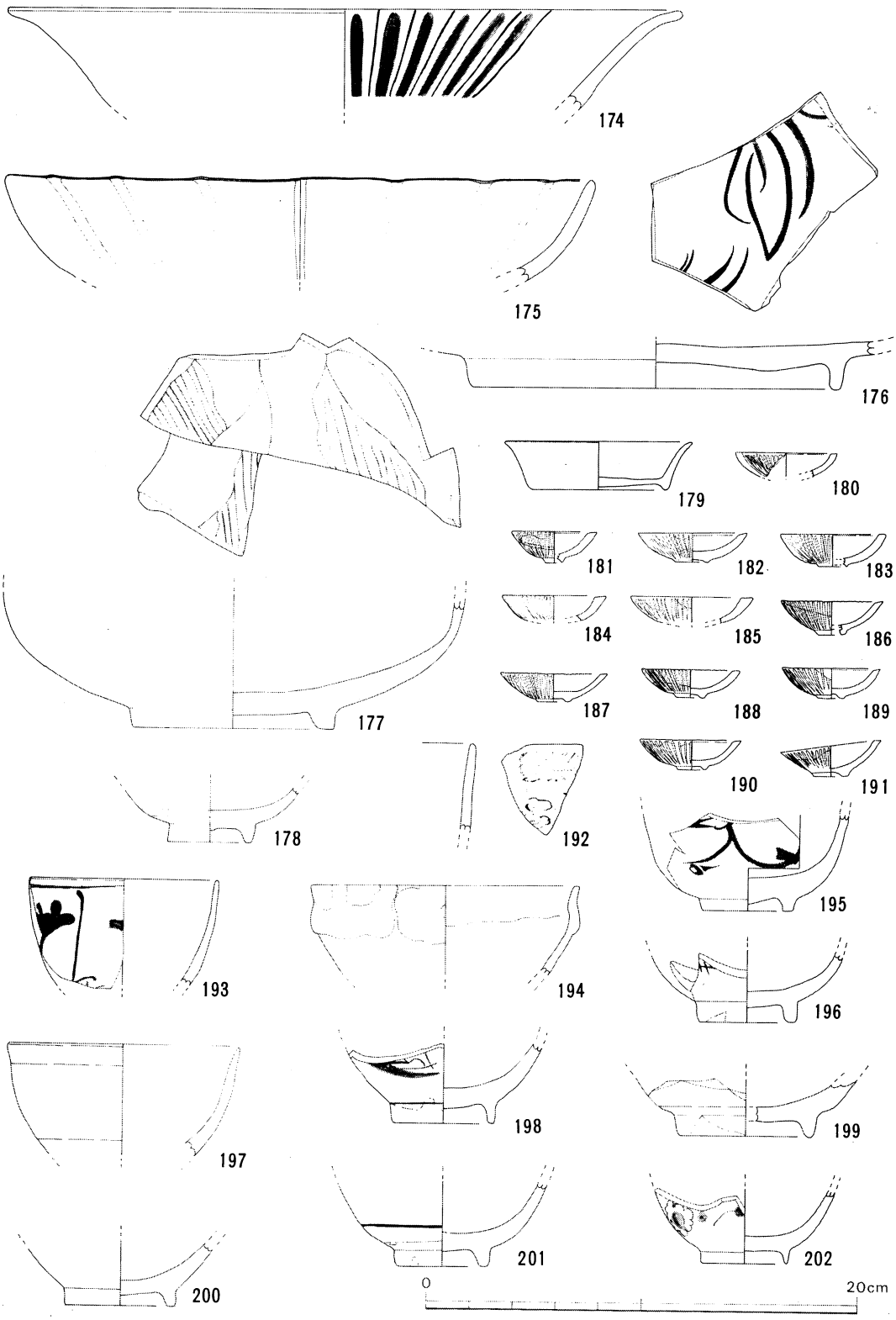


Fig.26　伊万里実測図

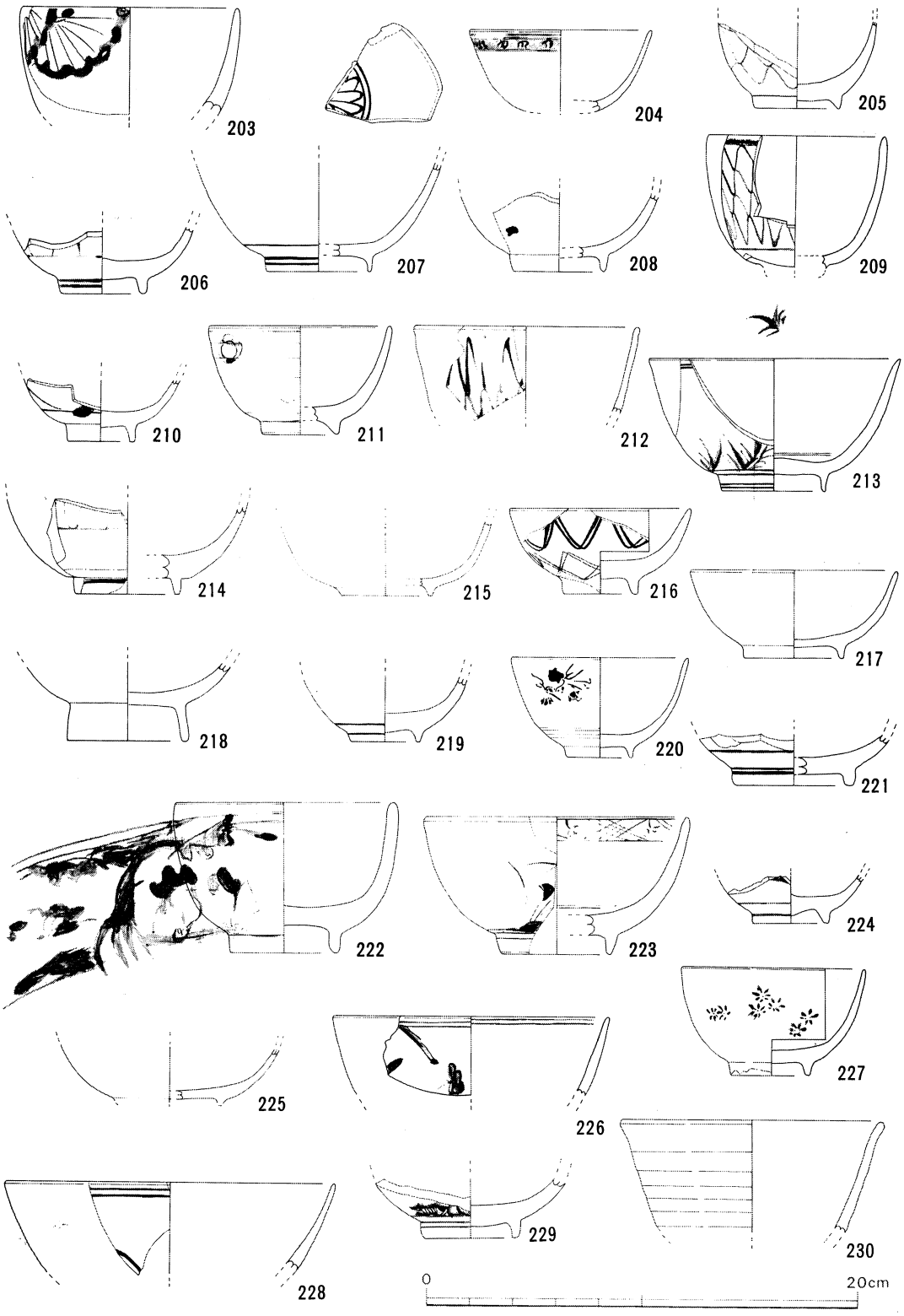


Fig.27　伊万里実測図

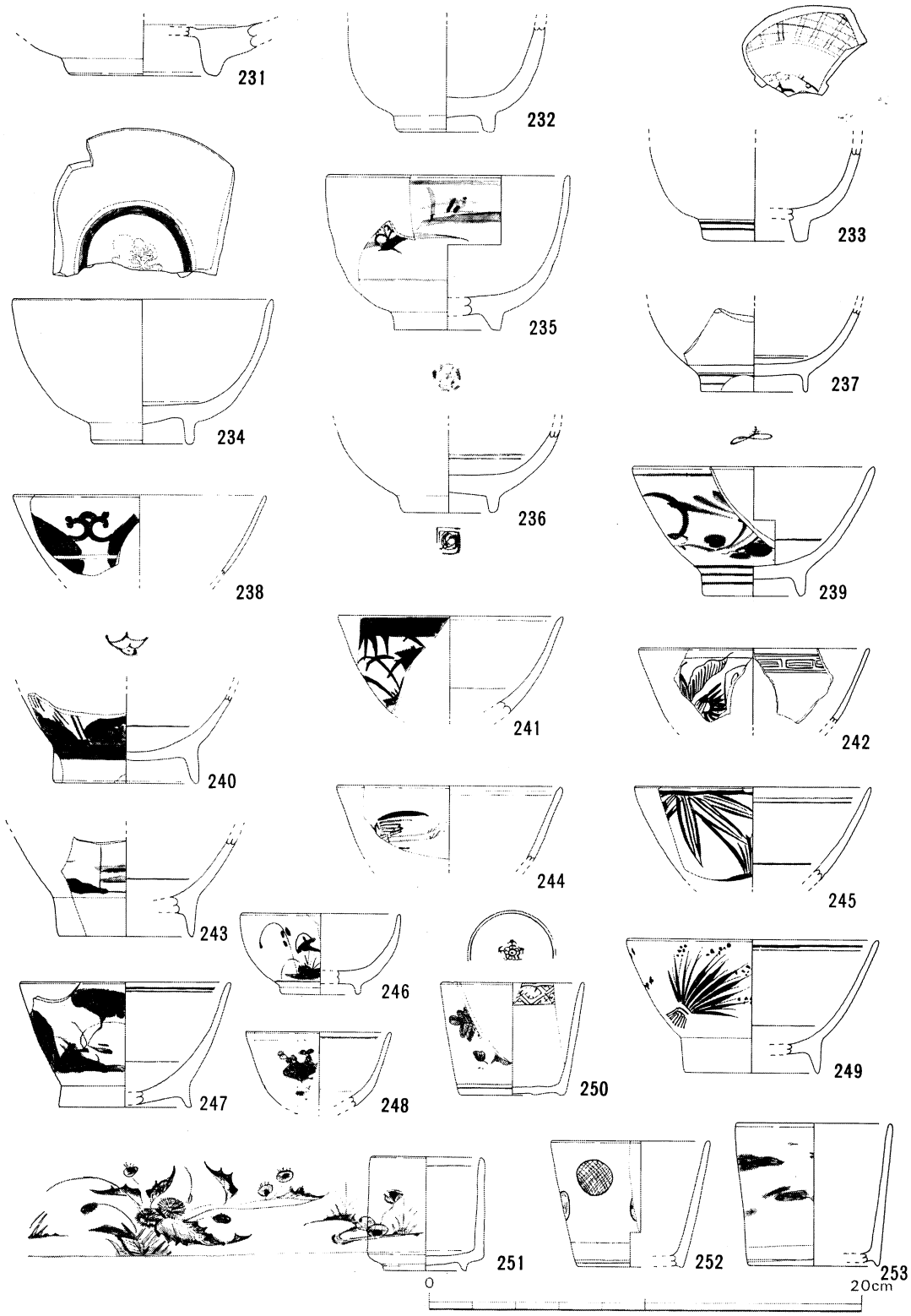


Fig.28　伊万里実測図

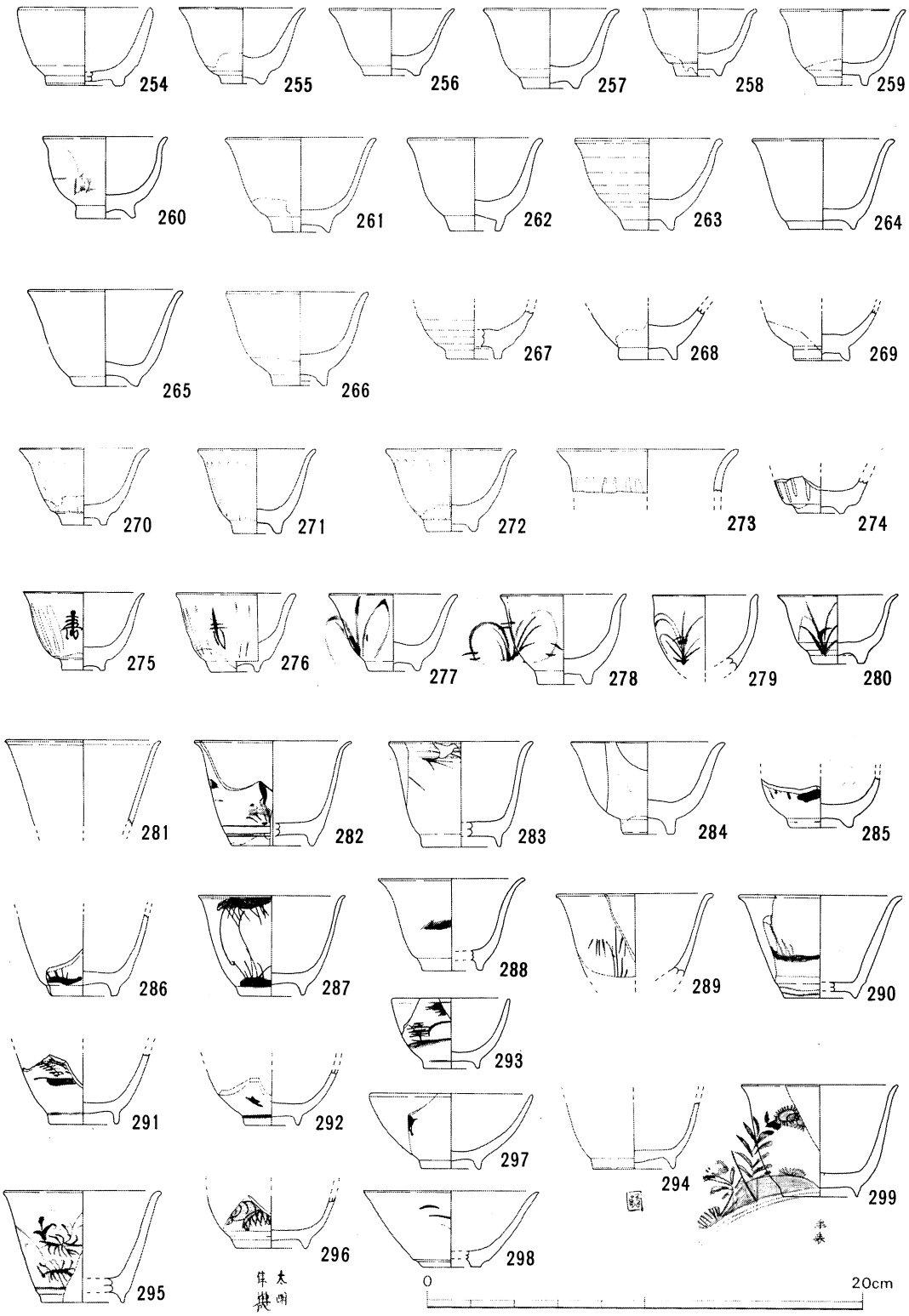


Fig.29　伊万里実測図

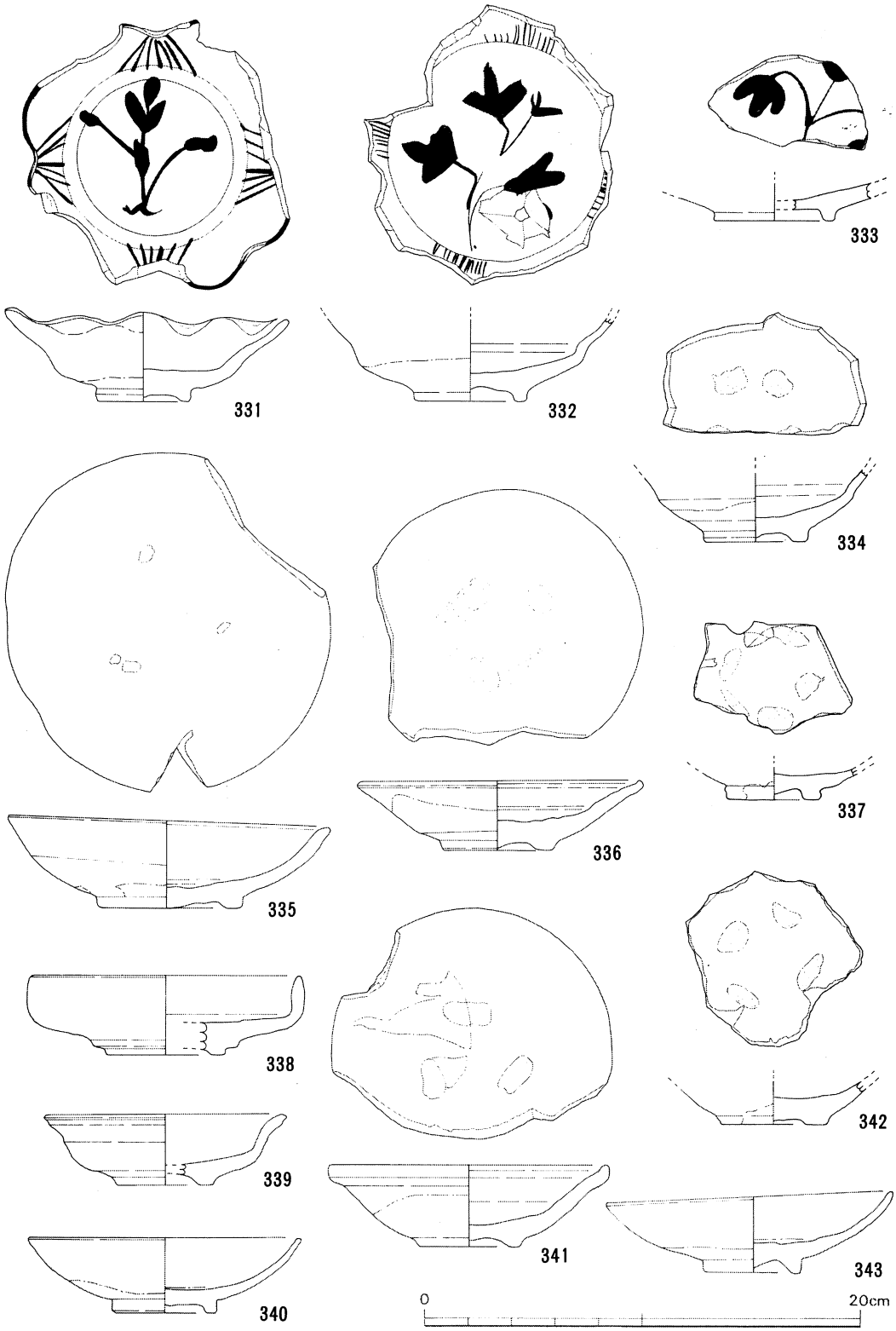


Fig.30　唐津実測図

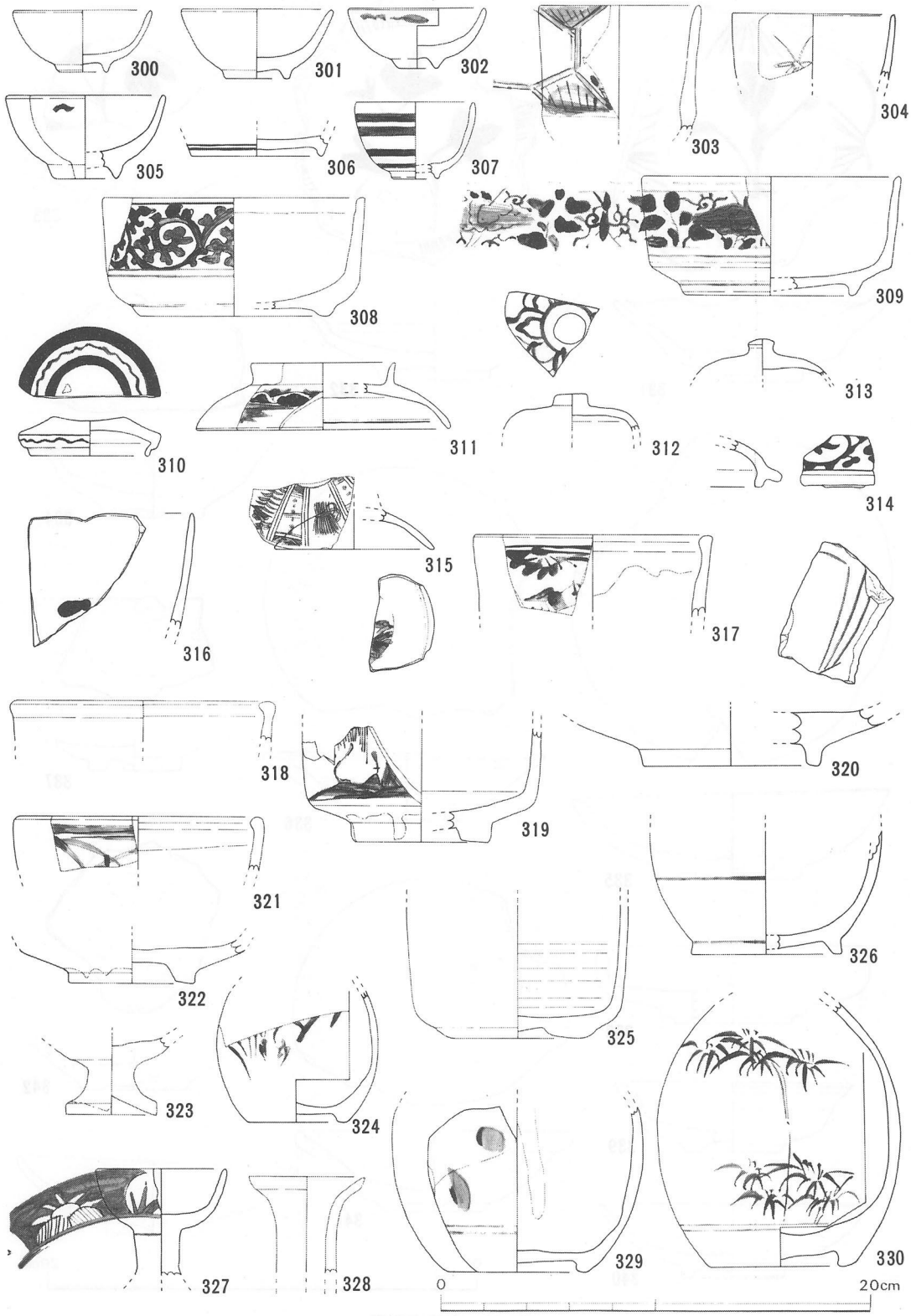


Fig.31　伊万里実測図

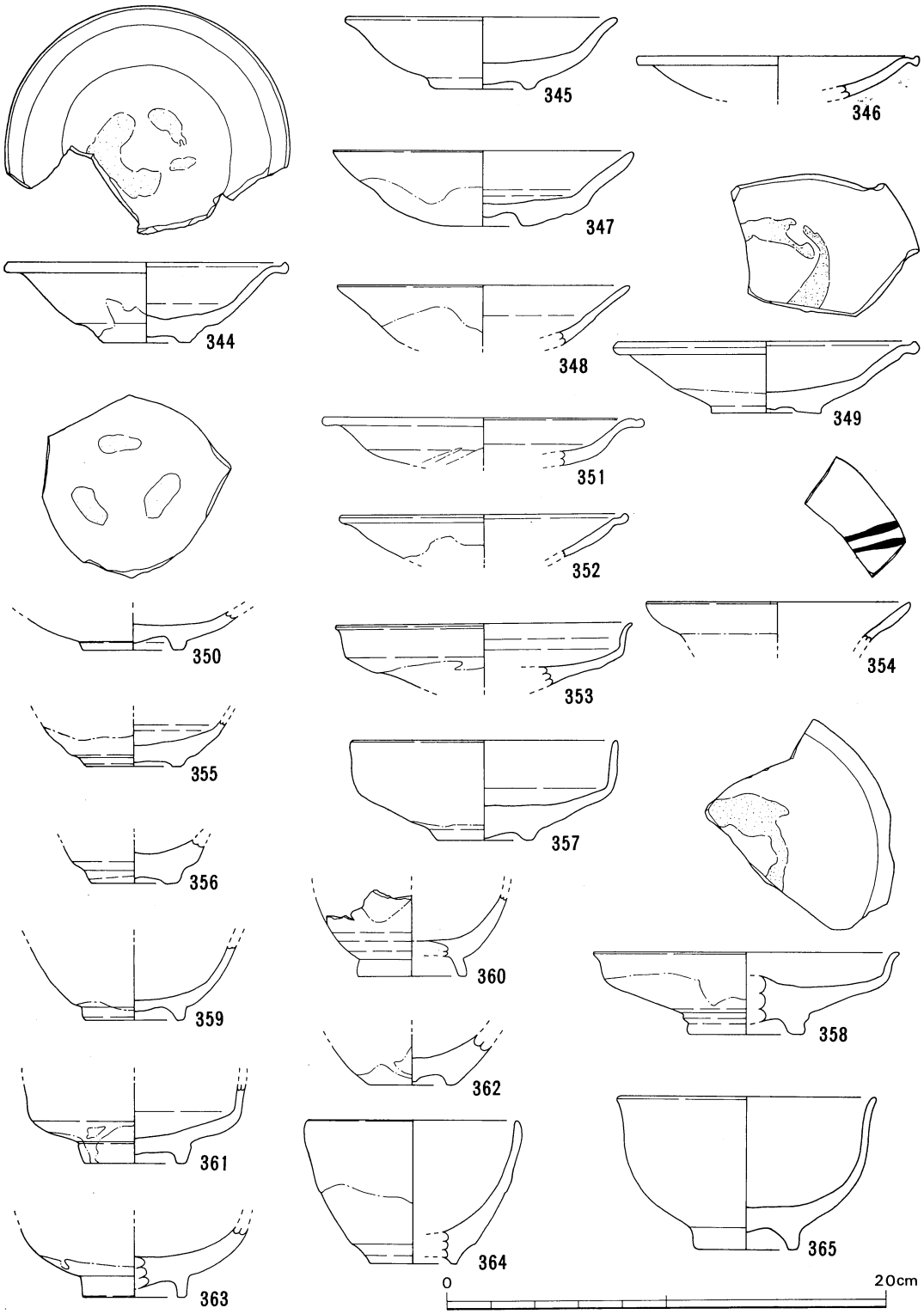

345
346
347
344
348
349
351
352
350
353
354
355
357
356
360
358
359
362
361
364
365
363
0
20cm

Fig.32　唐津実測図

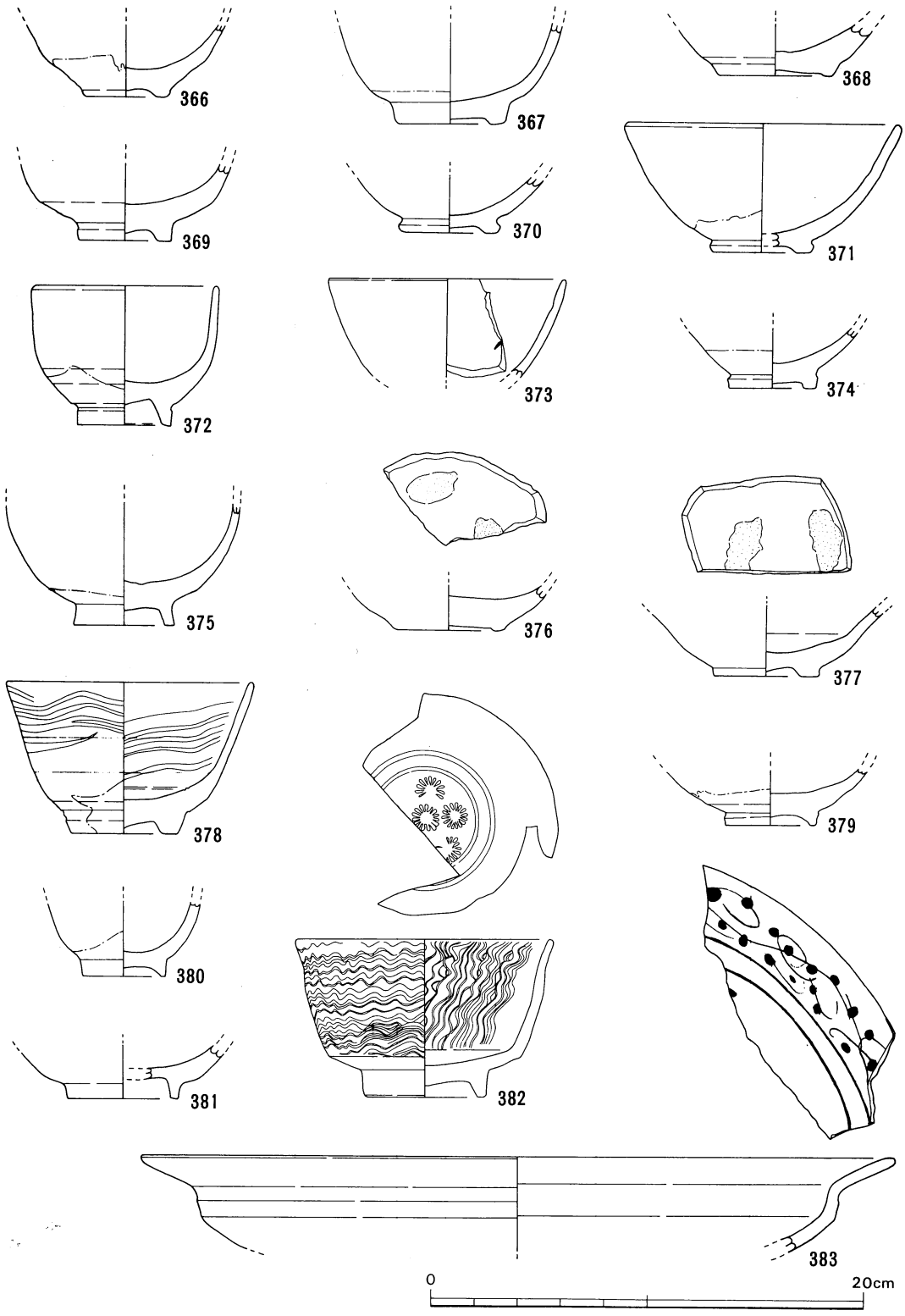

366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
0
20cm

Fig.33　唐津実測図

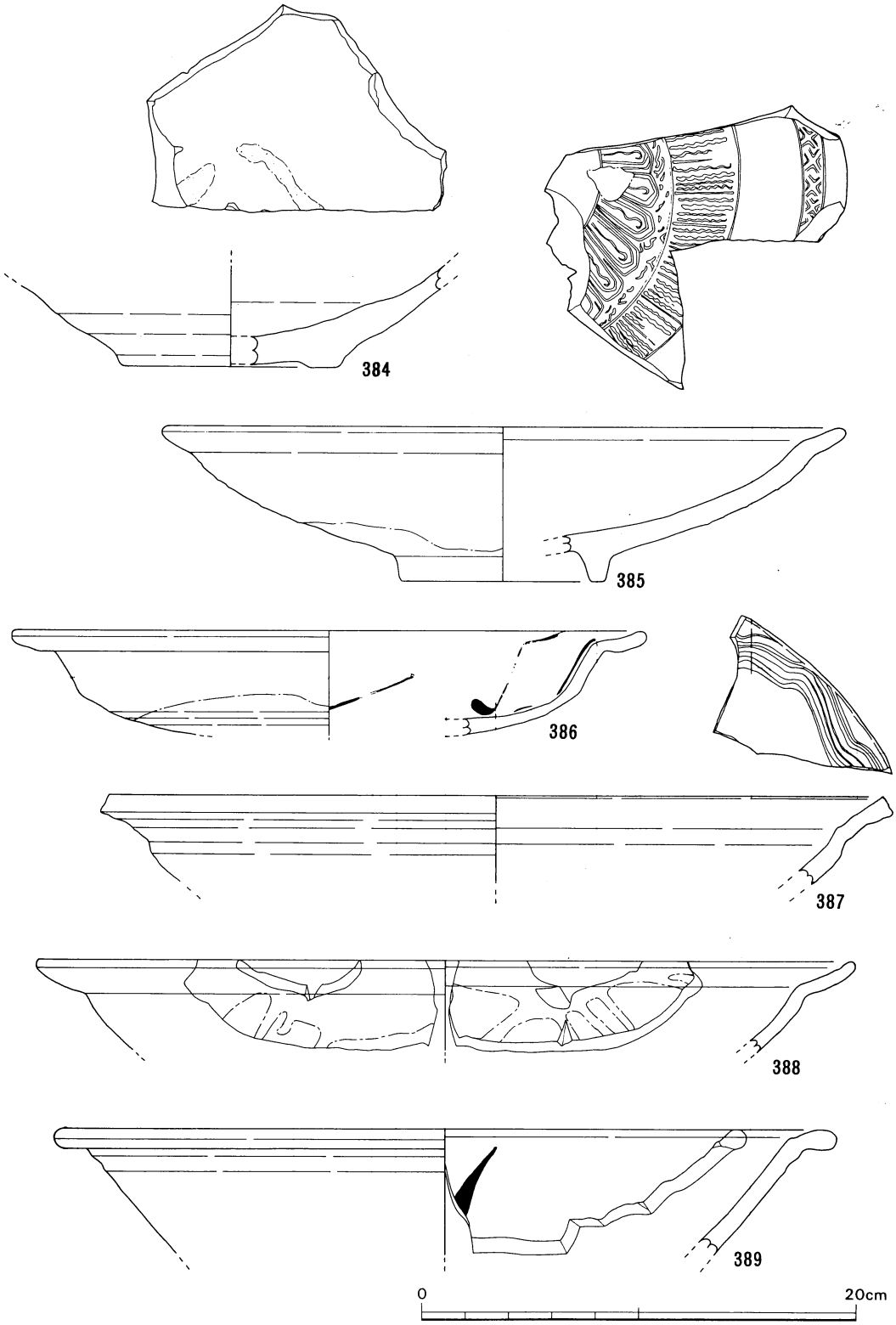


Fig.34 唐津実測図

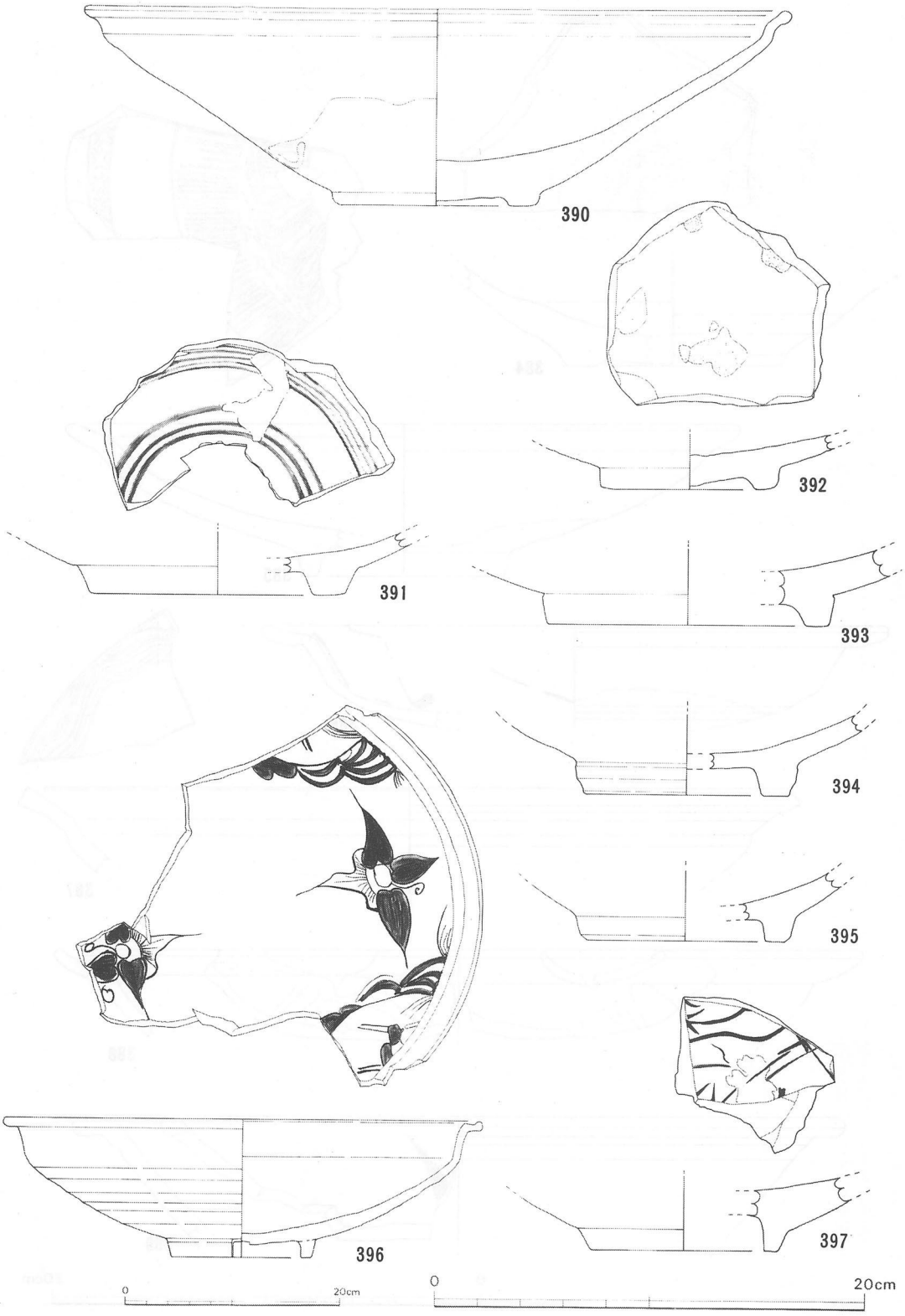


Fig.35　唐津実測図

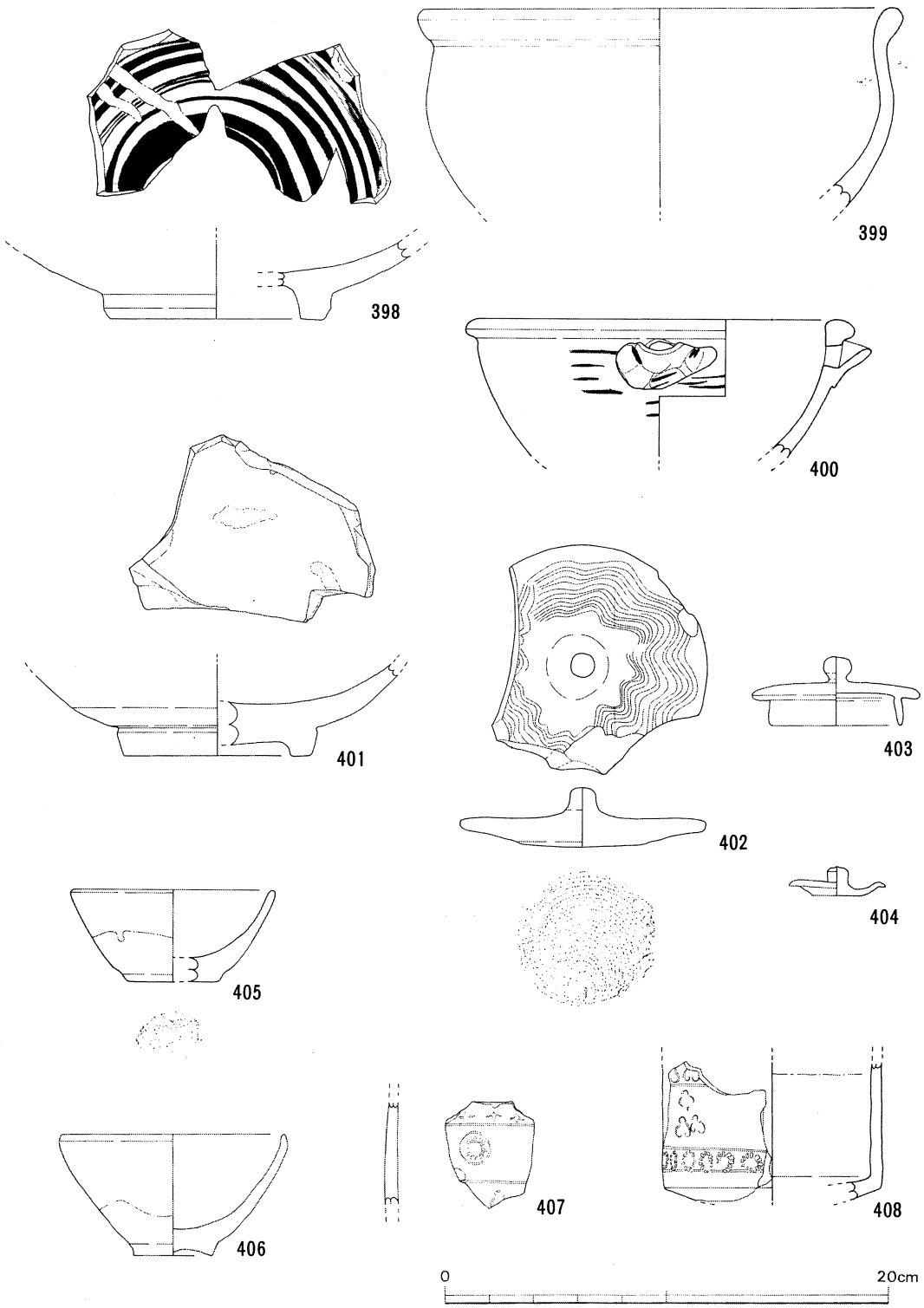


Fig.36　唐津実測図

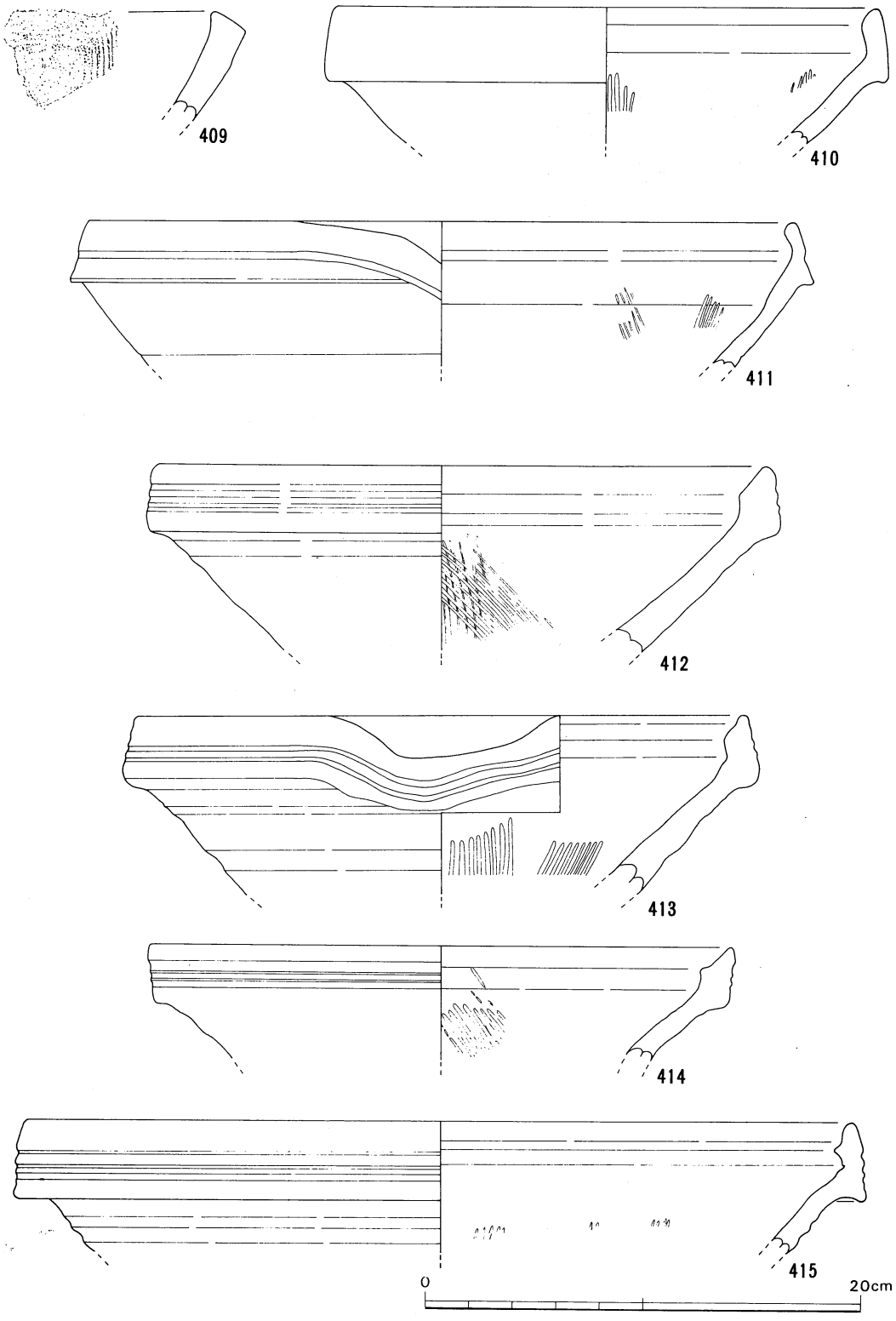


Fig.37　備前実測図

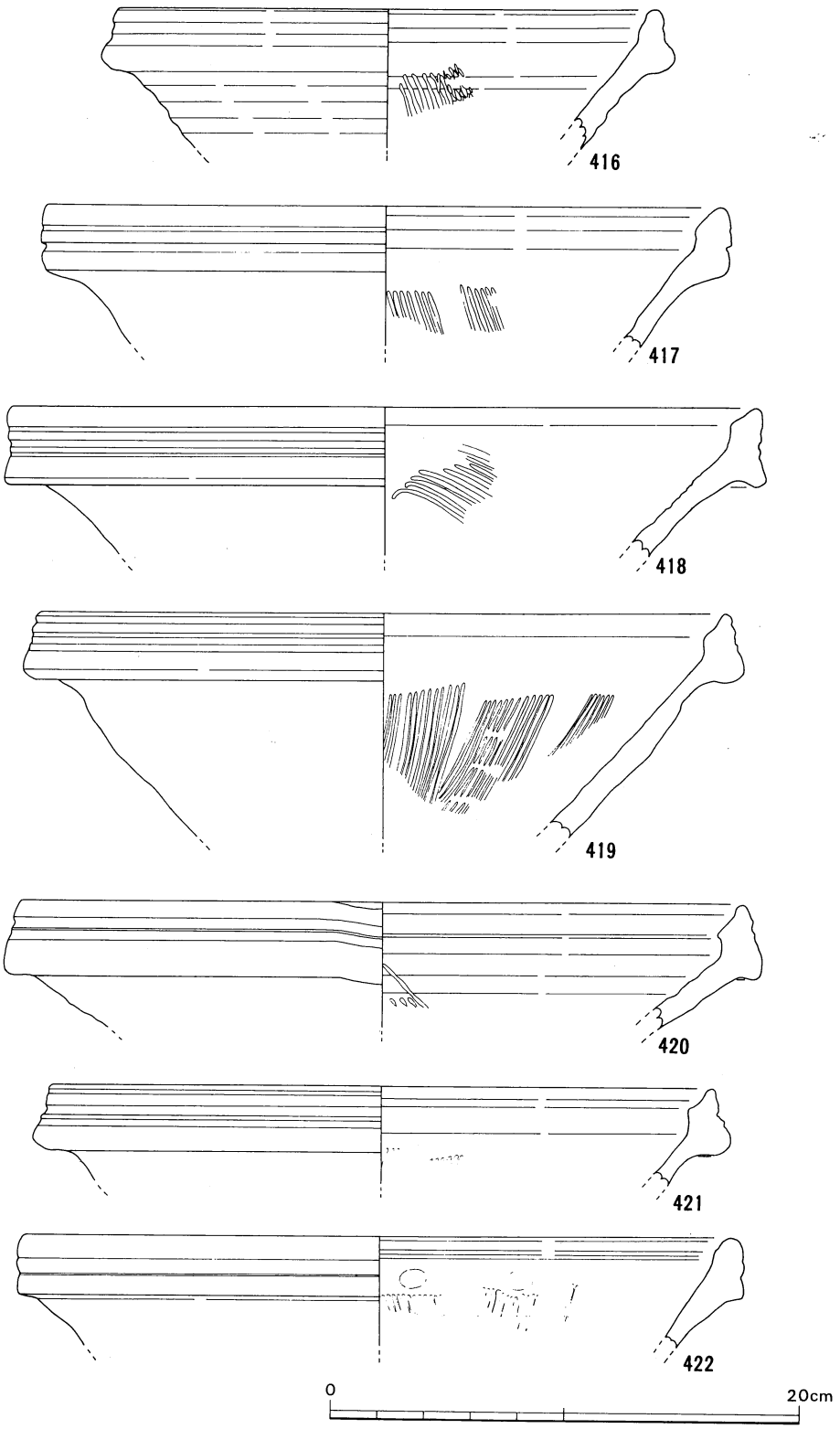


Fig.38 備前実測図

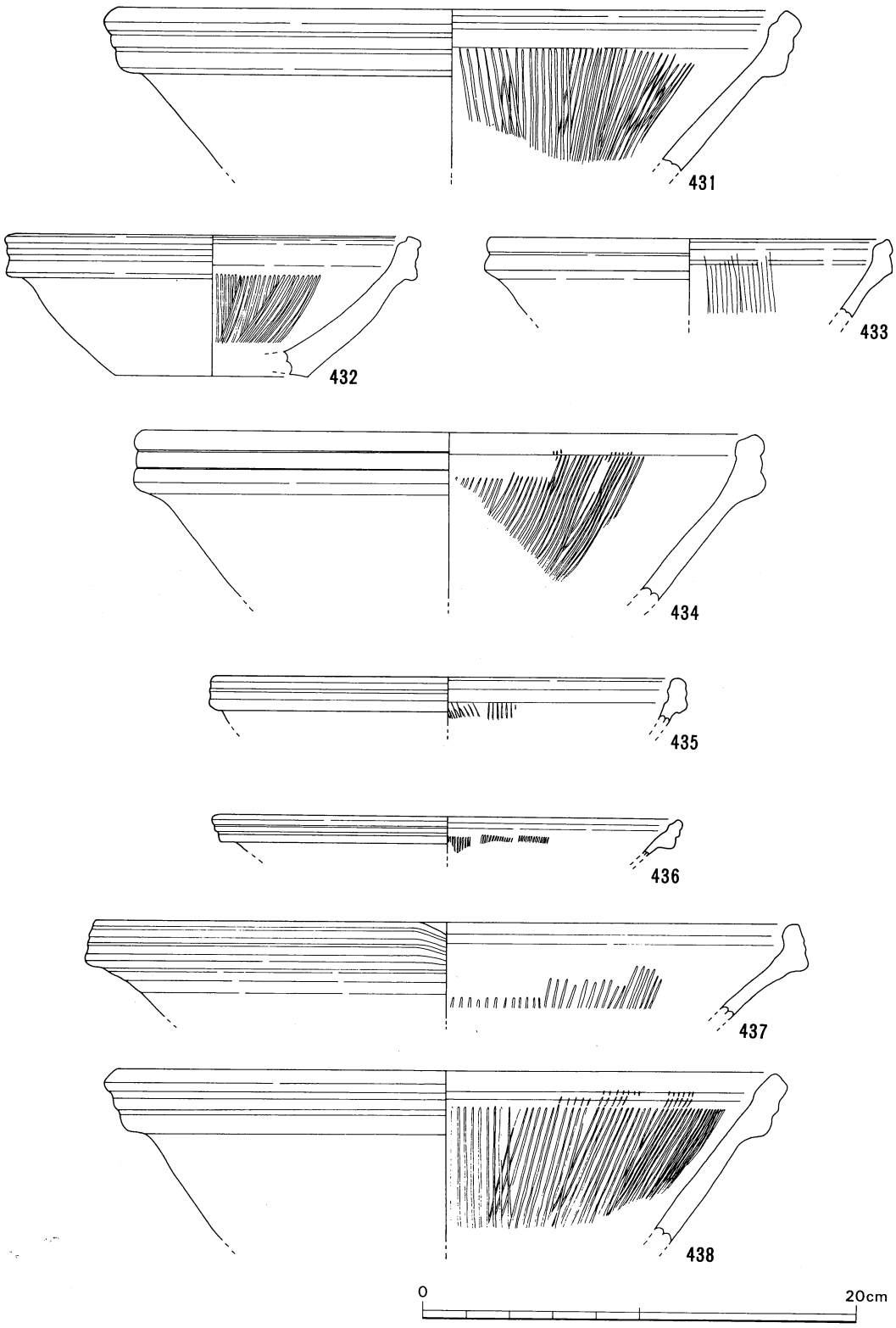


Fig.39　備前実測図

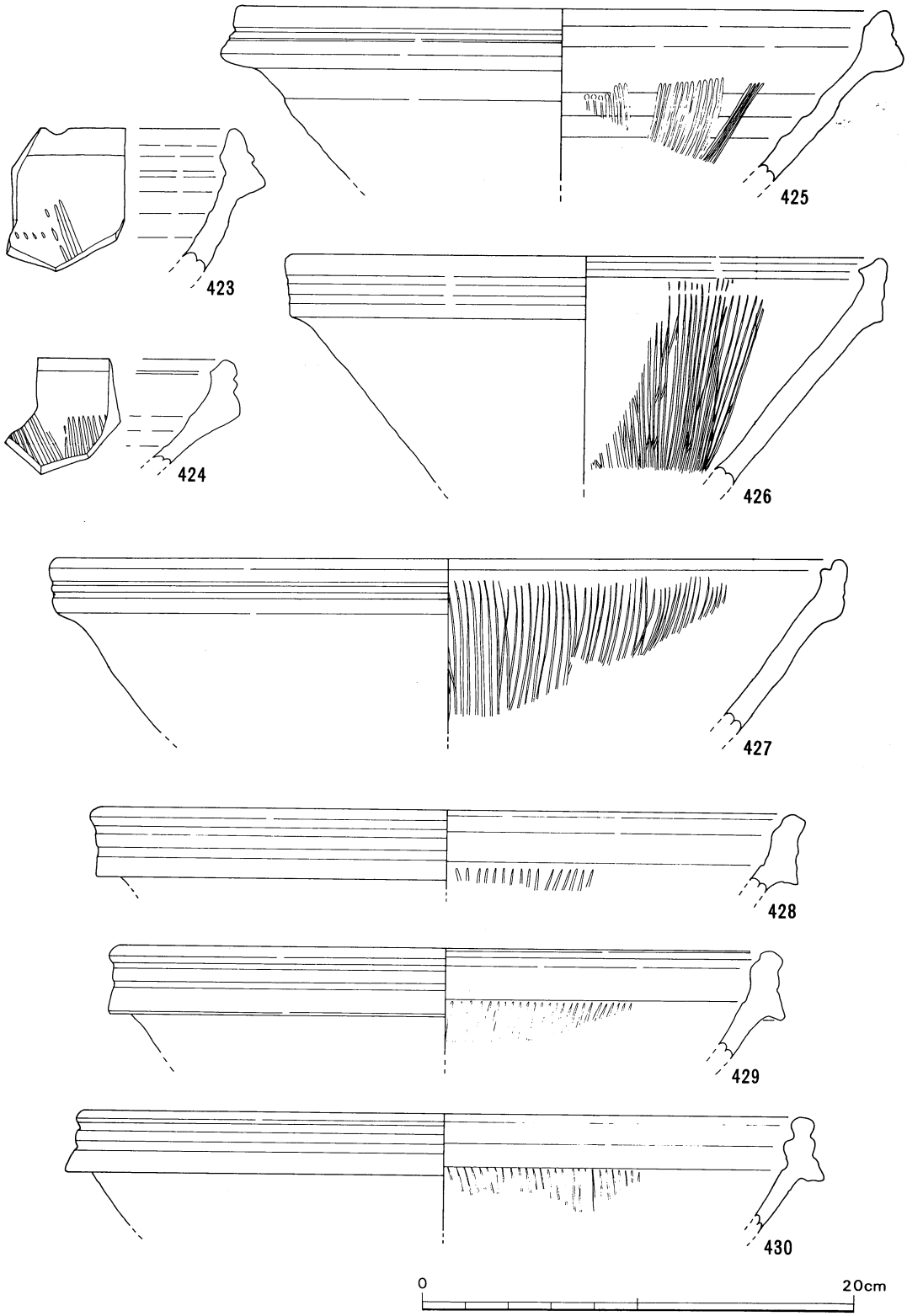


Fig.40　備前実測図

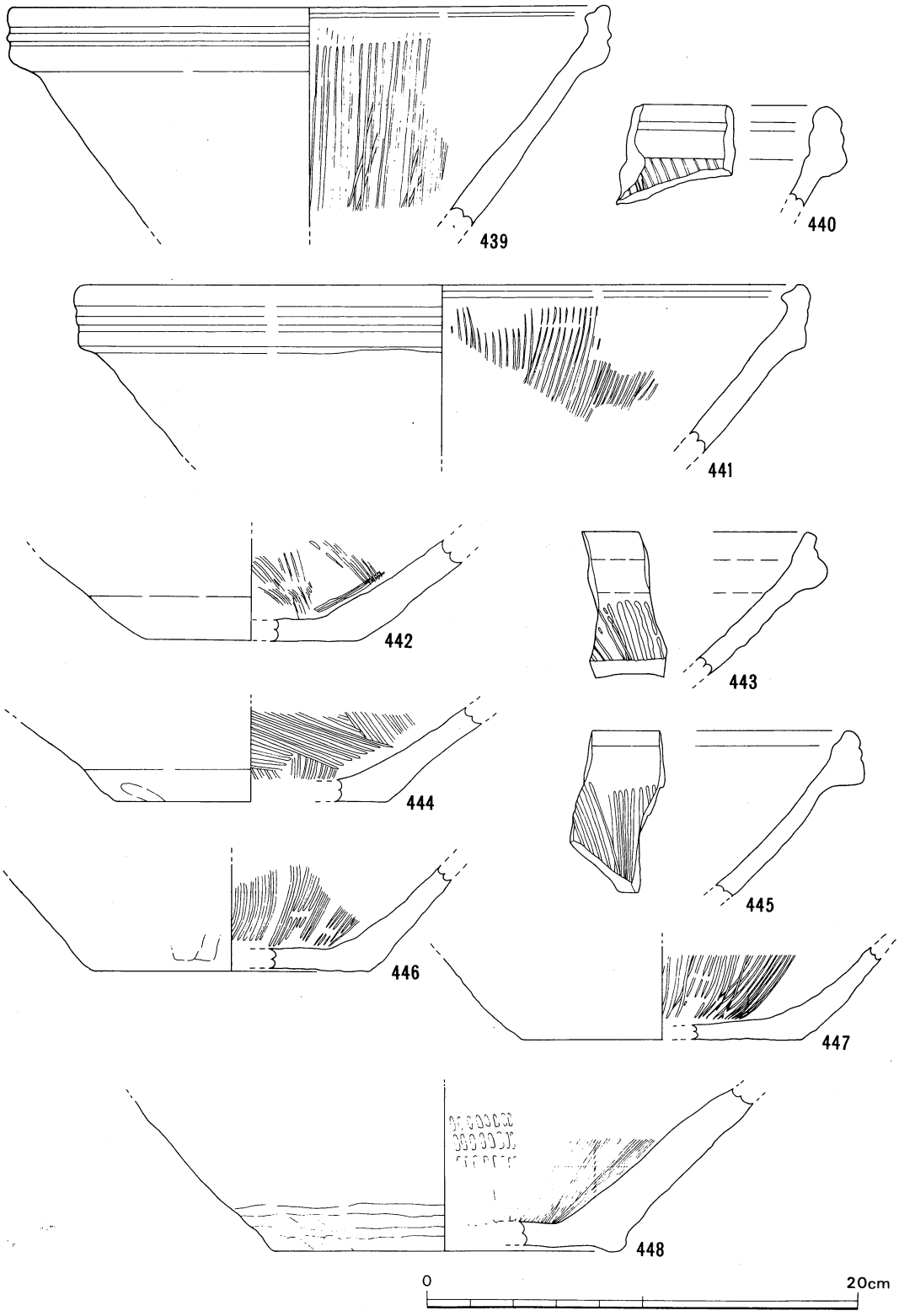


Fig.41　備前実測図

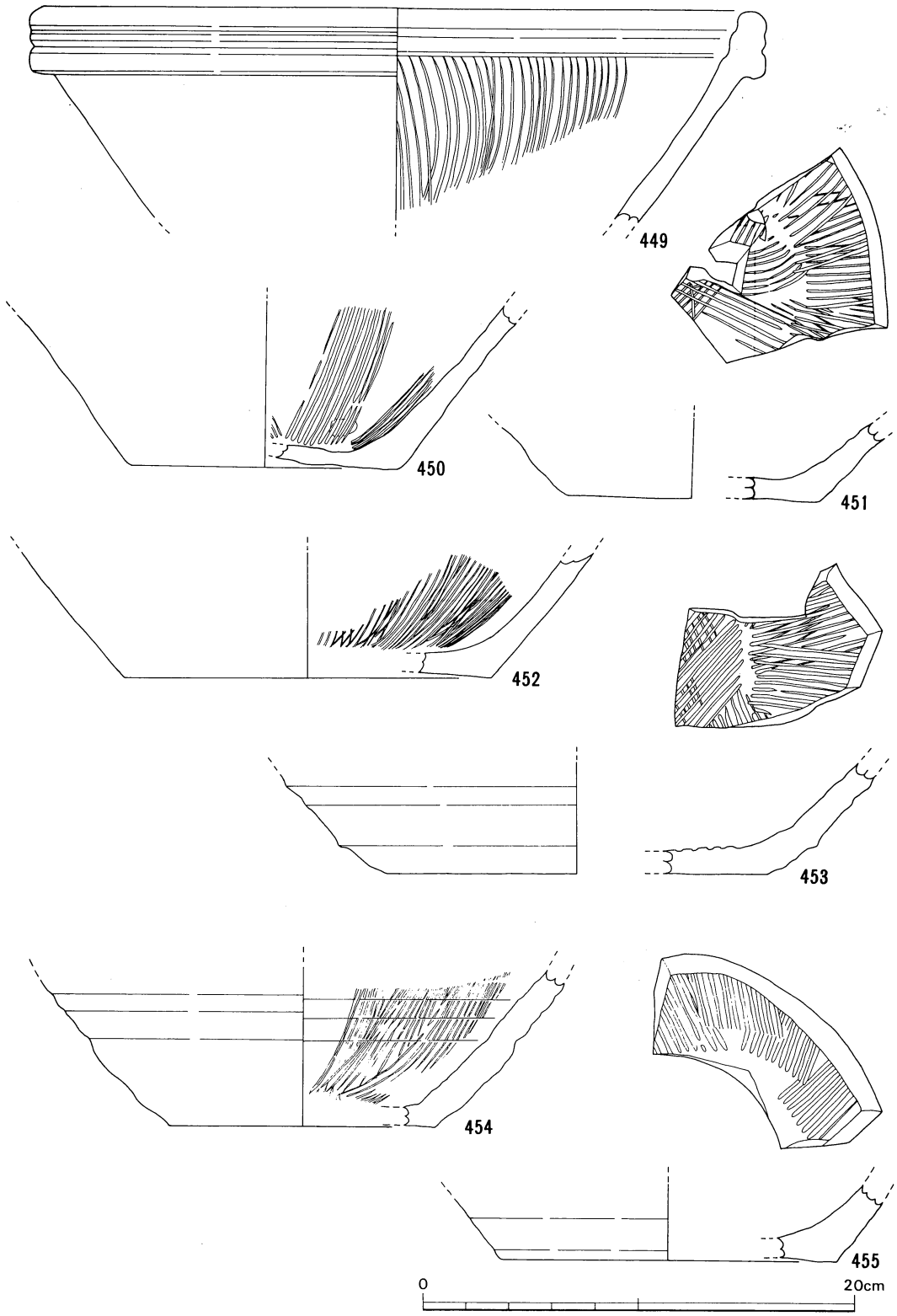


Fig.42　備前実測図

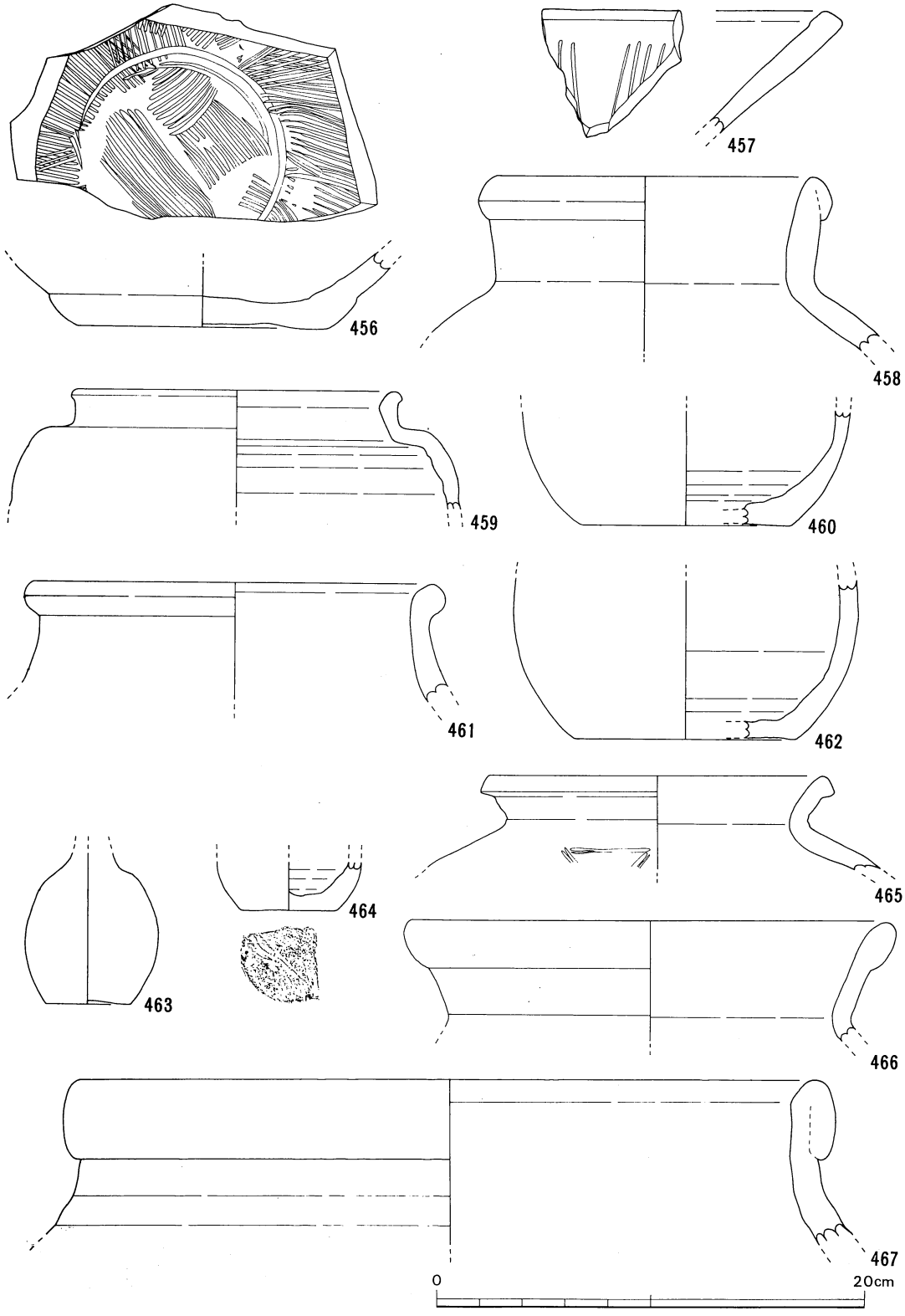


Fig.43　備前実測図

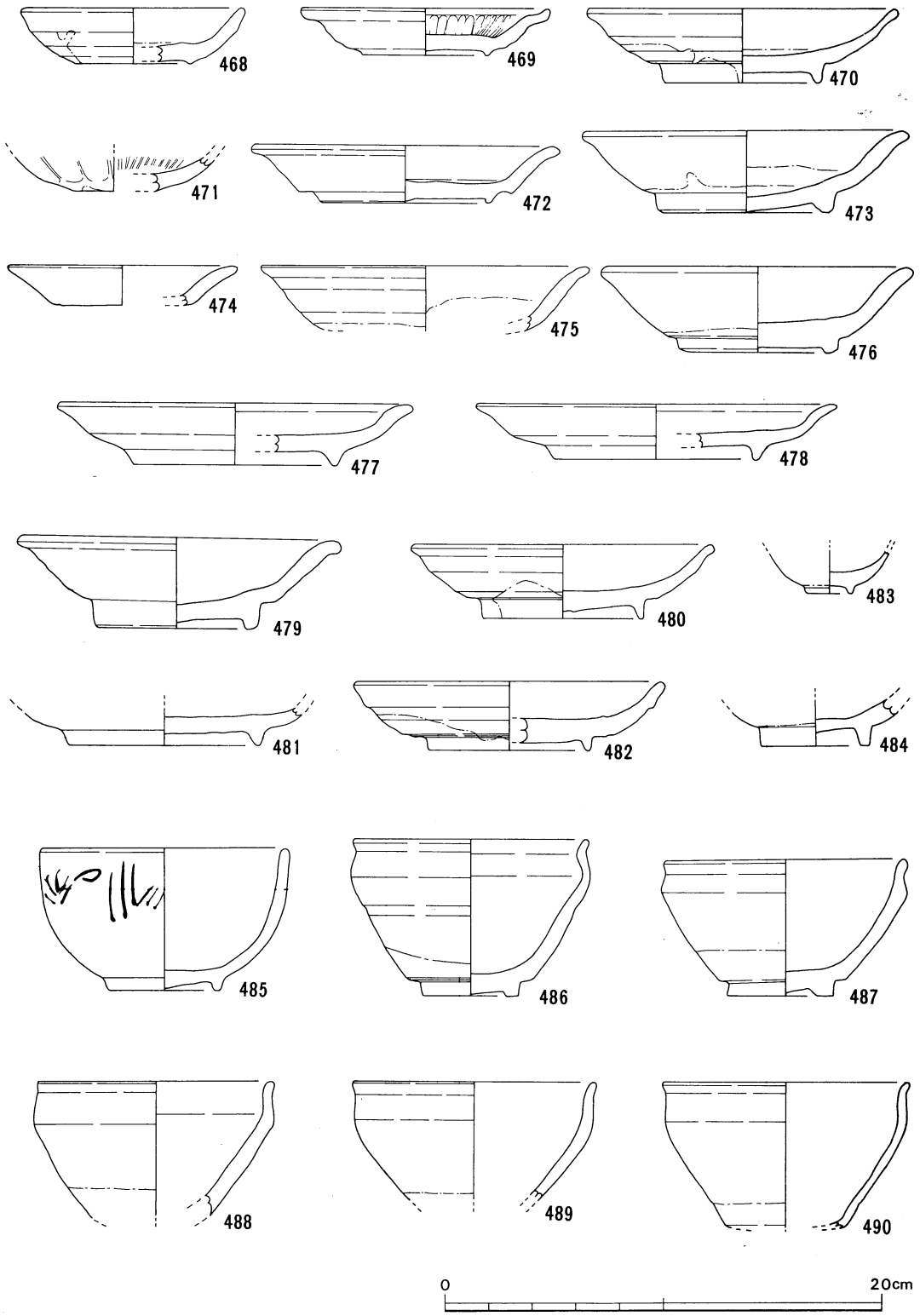


Fig.44　瀬戸，美濃系実測図

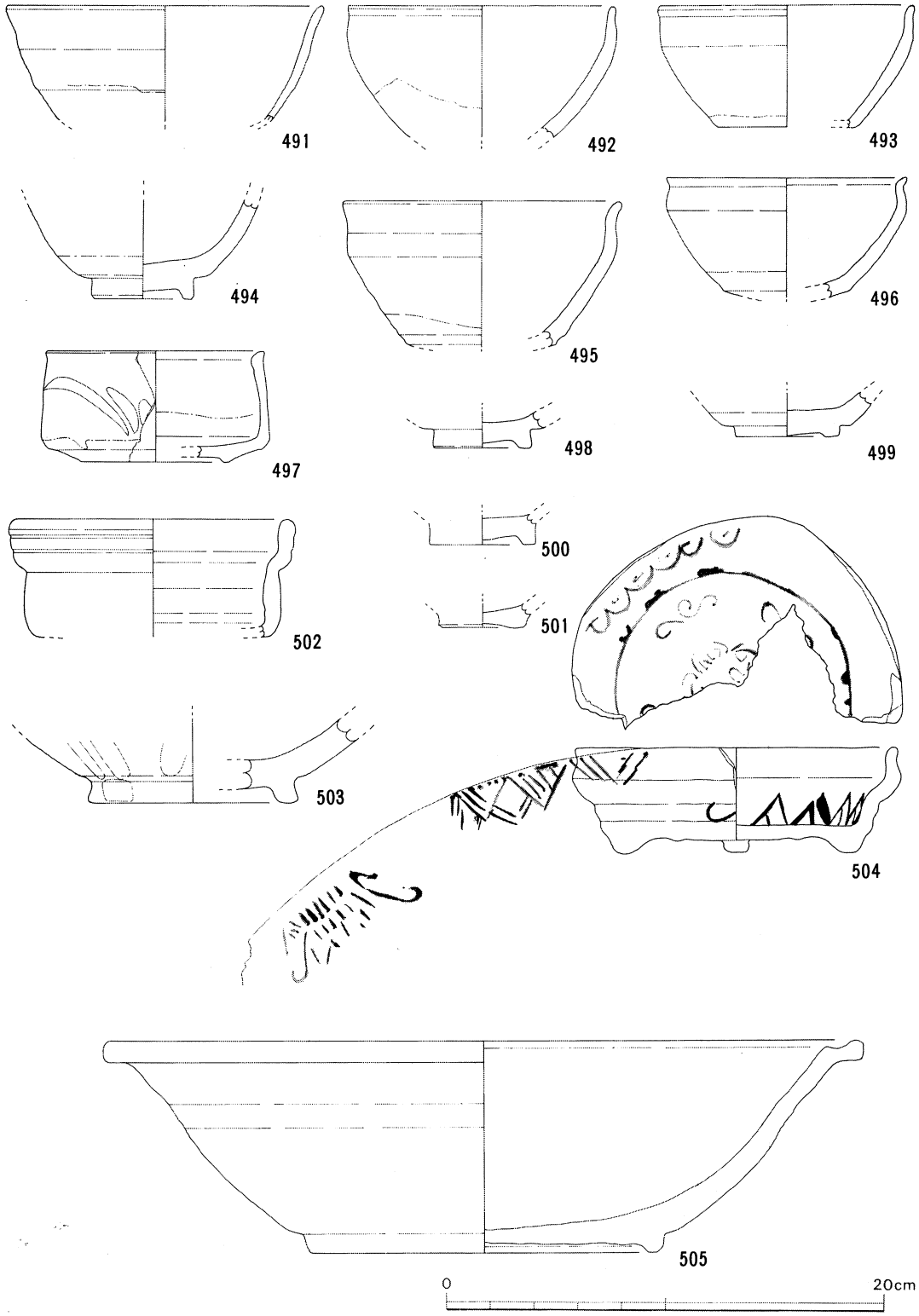


Fig.45　瀬戸，美濃系実測図

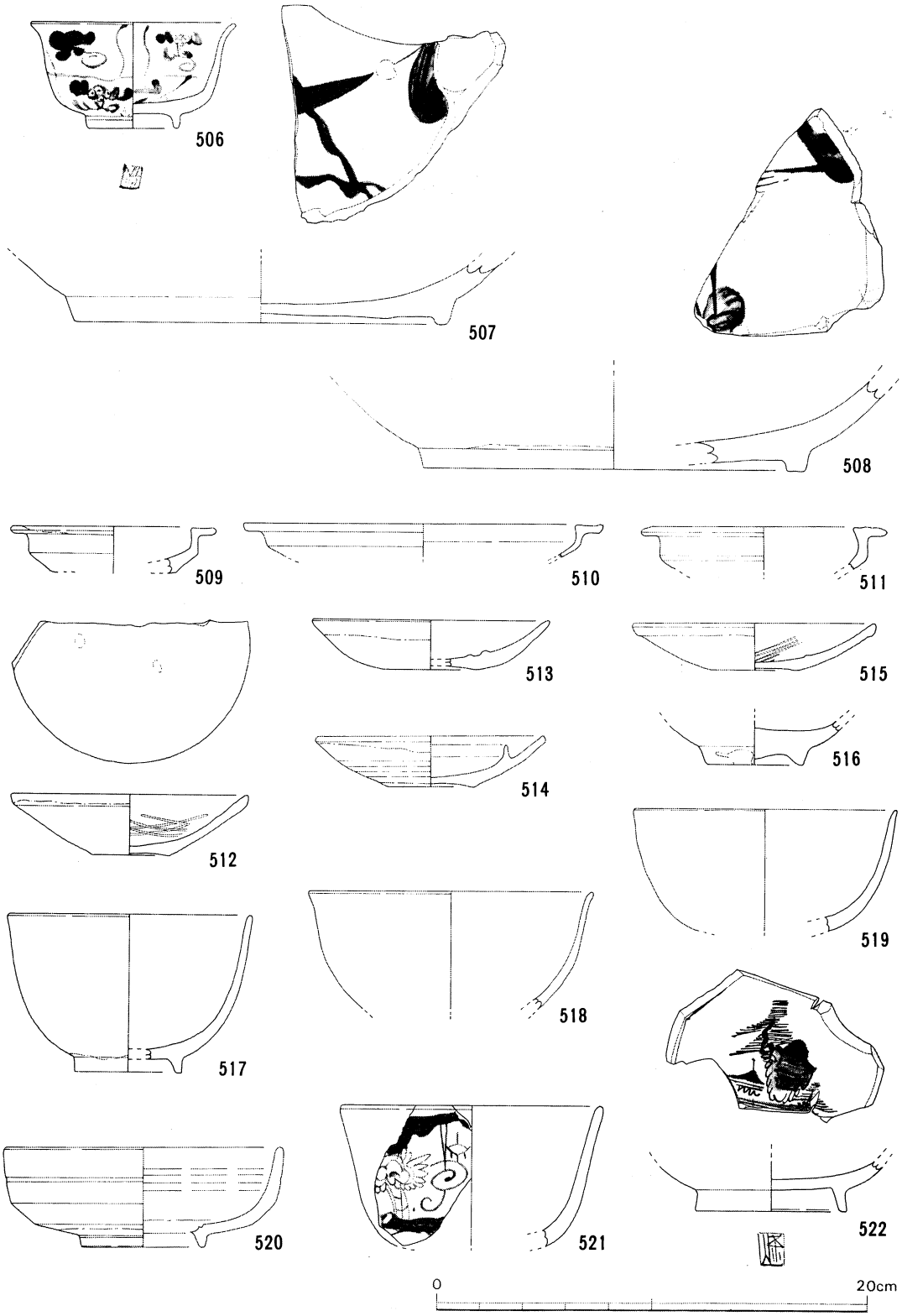


Fig.46　瀬戸，美濃系，産地不明陶器実測図

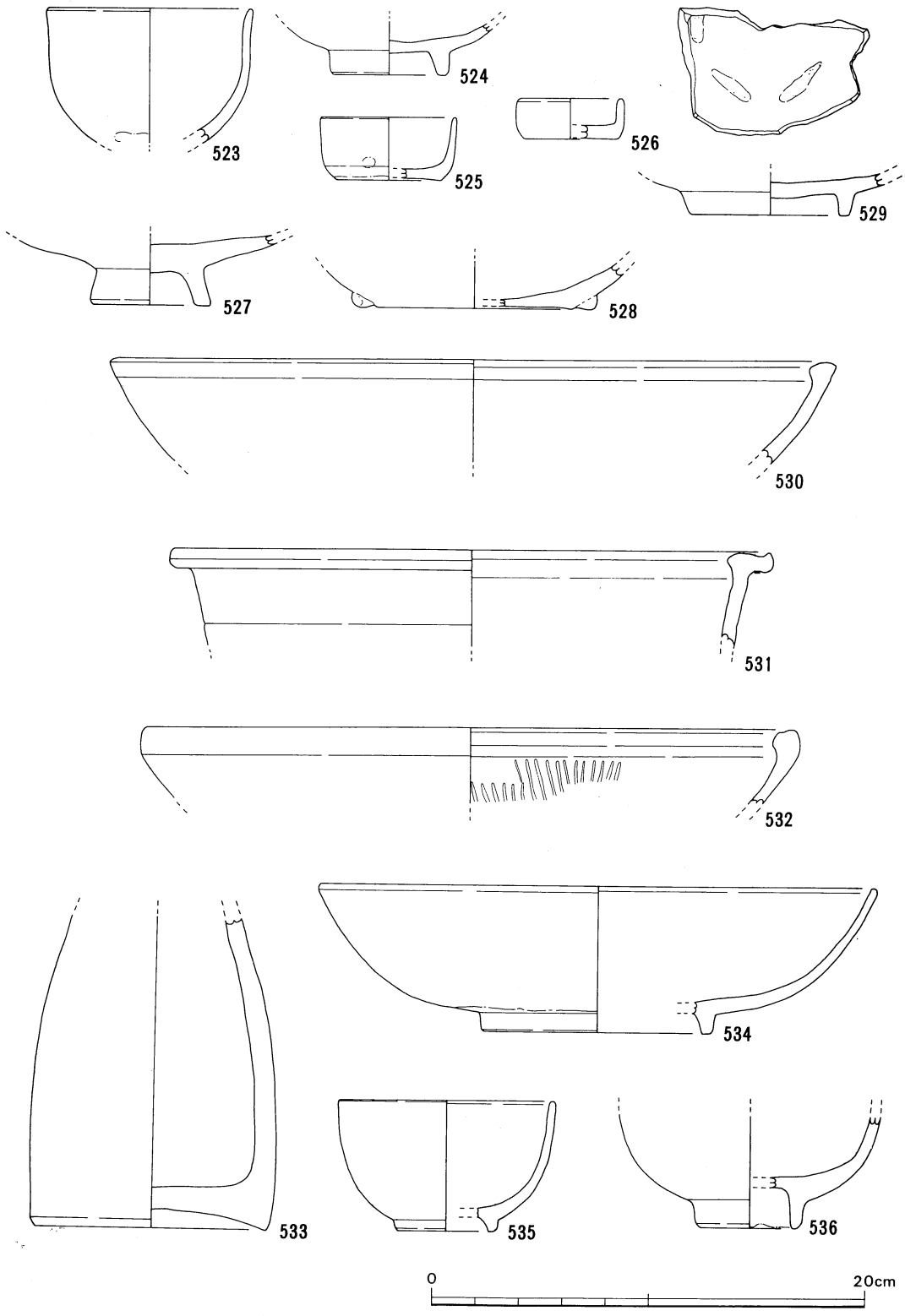


Fig.47　産地不明陶器実測図

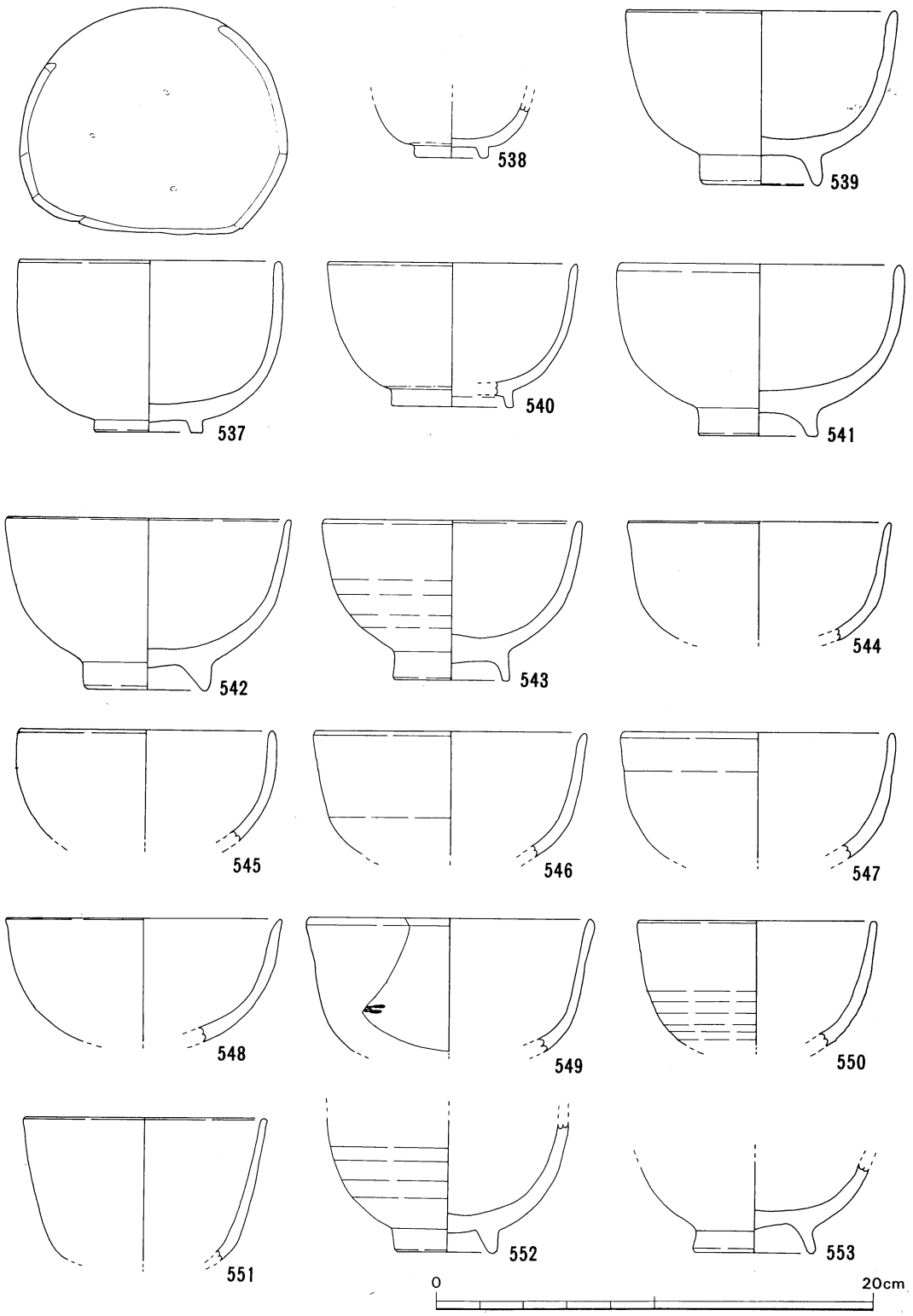


Fig.48　産地不明陶器実測図

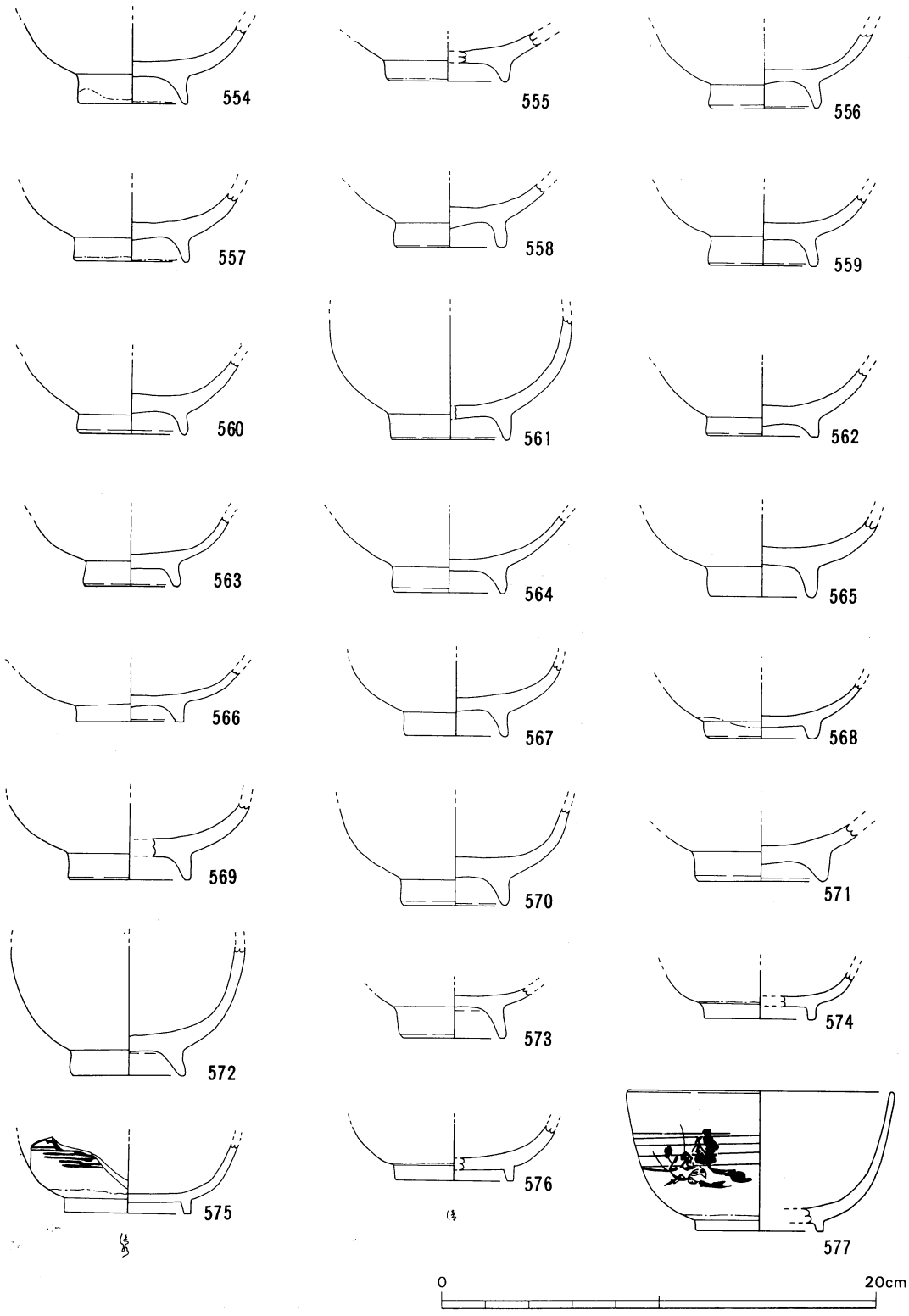


Fig.49　産地不明陶器実測図

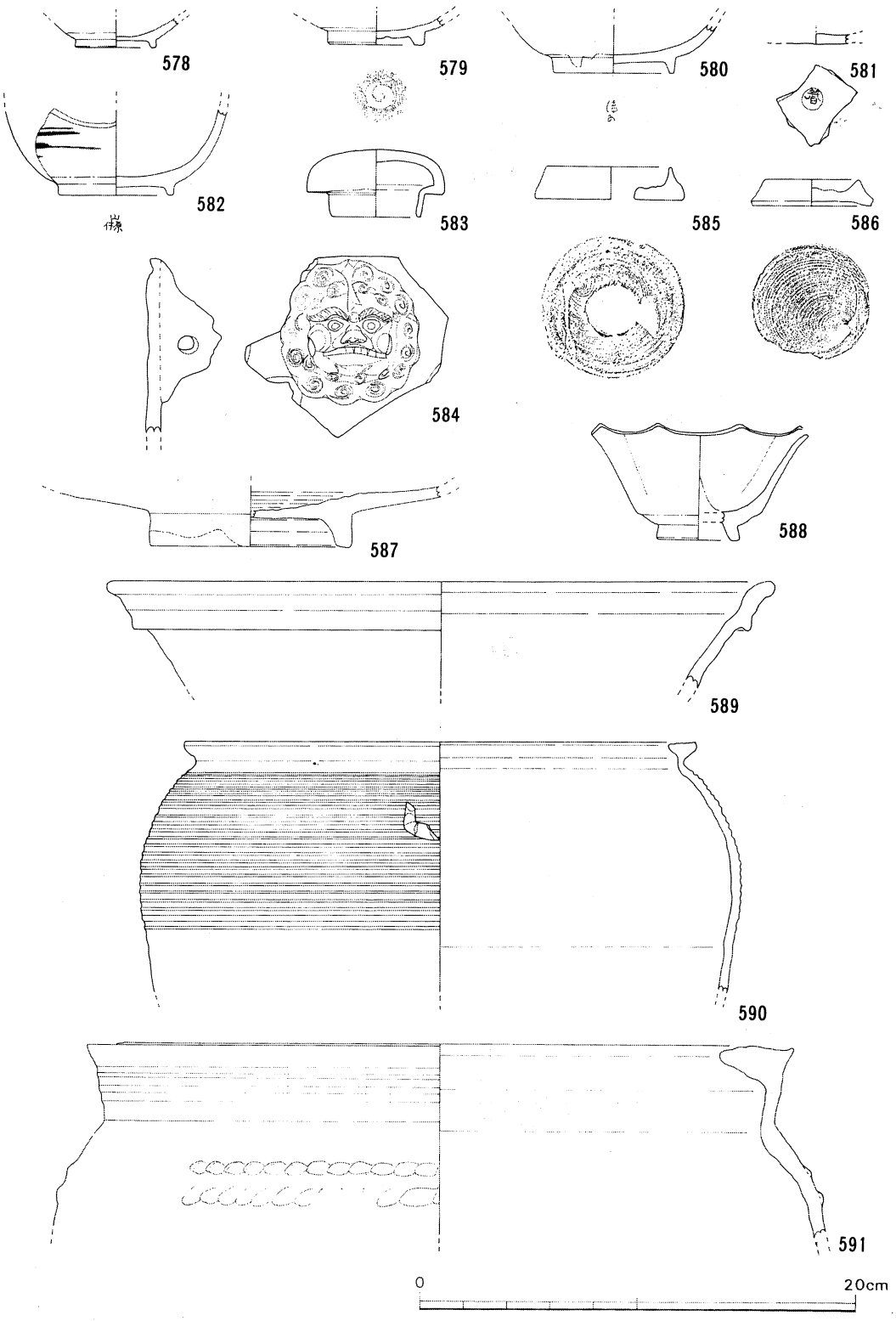
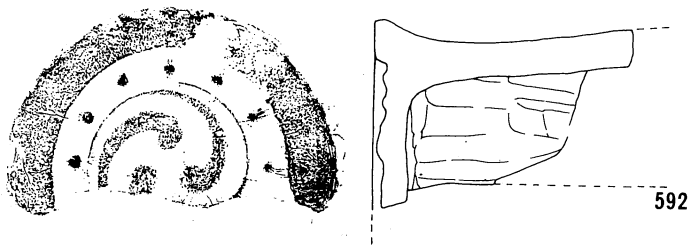
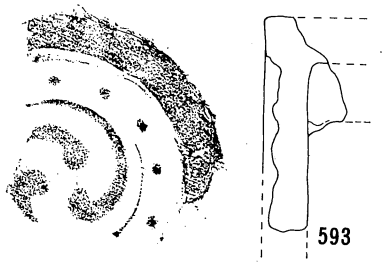
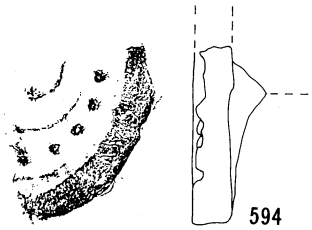
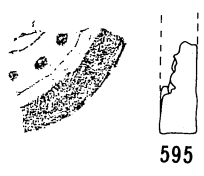


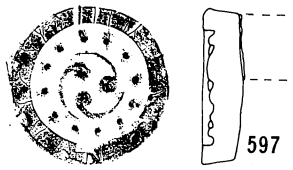
Fig.50　産地不明陶器実測図











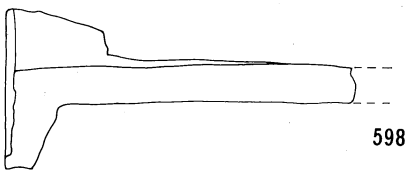


Fig.51　瓦類実測図

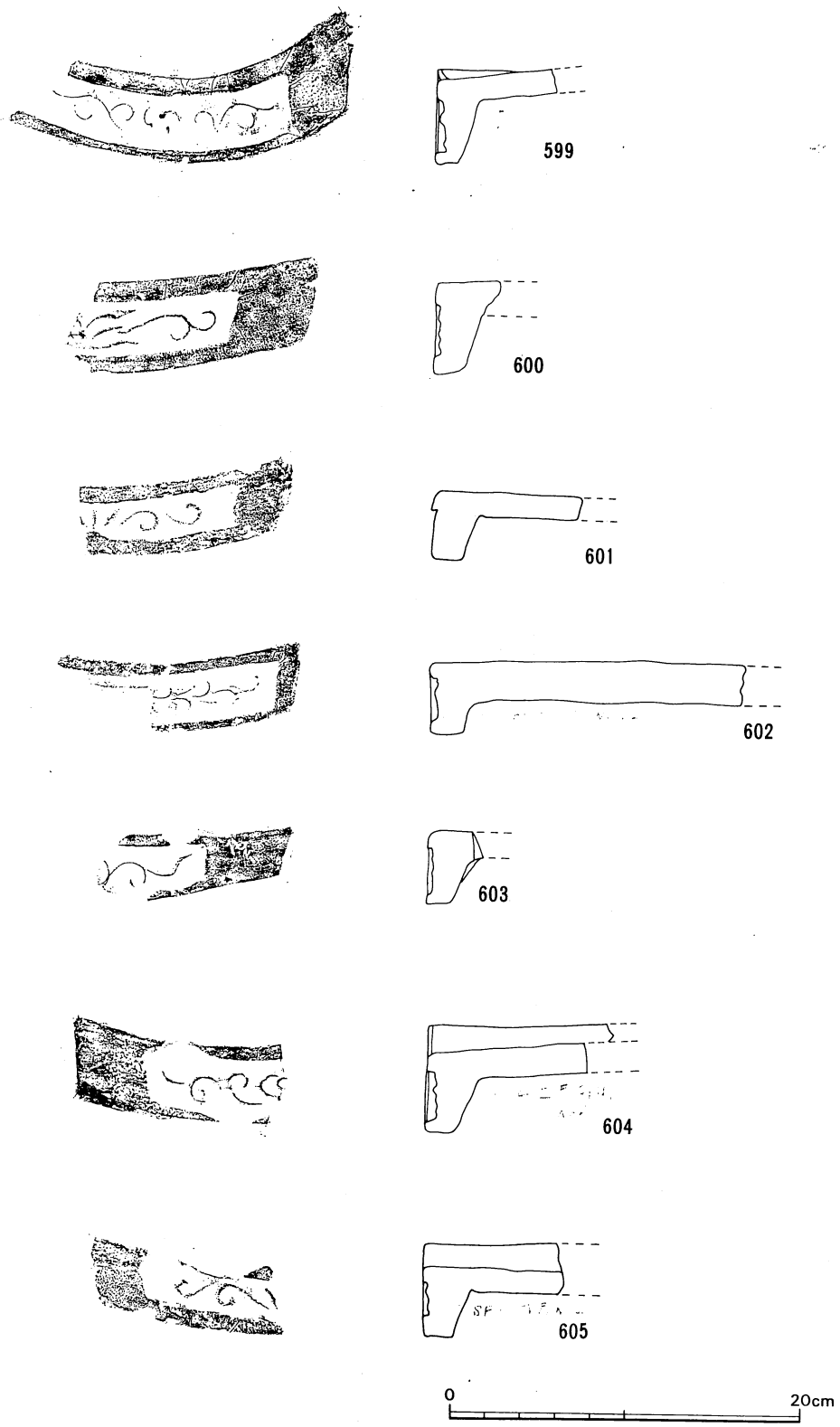


Fig.52　瓦類実測図

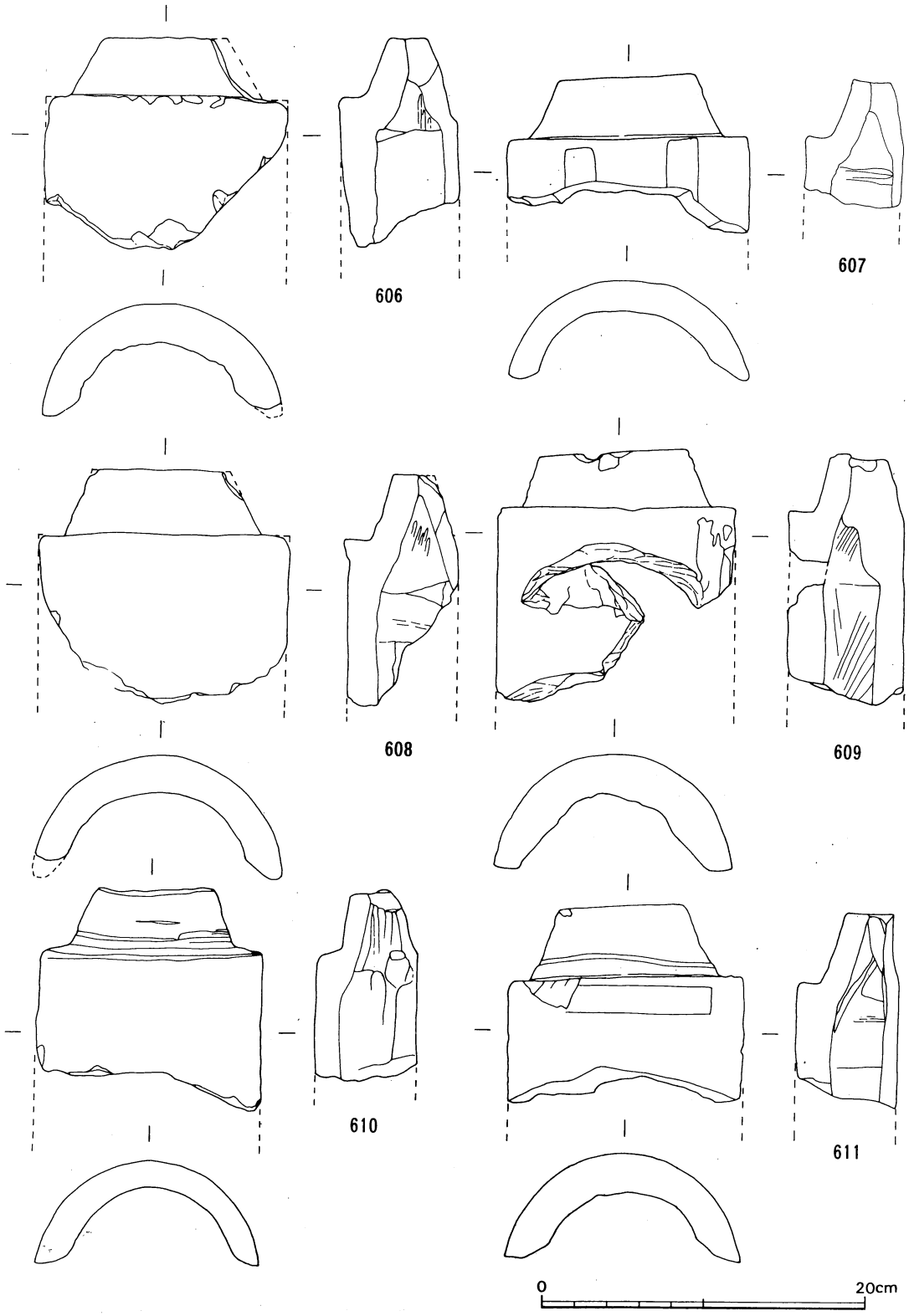


Fig.53　瓦類実測図

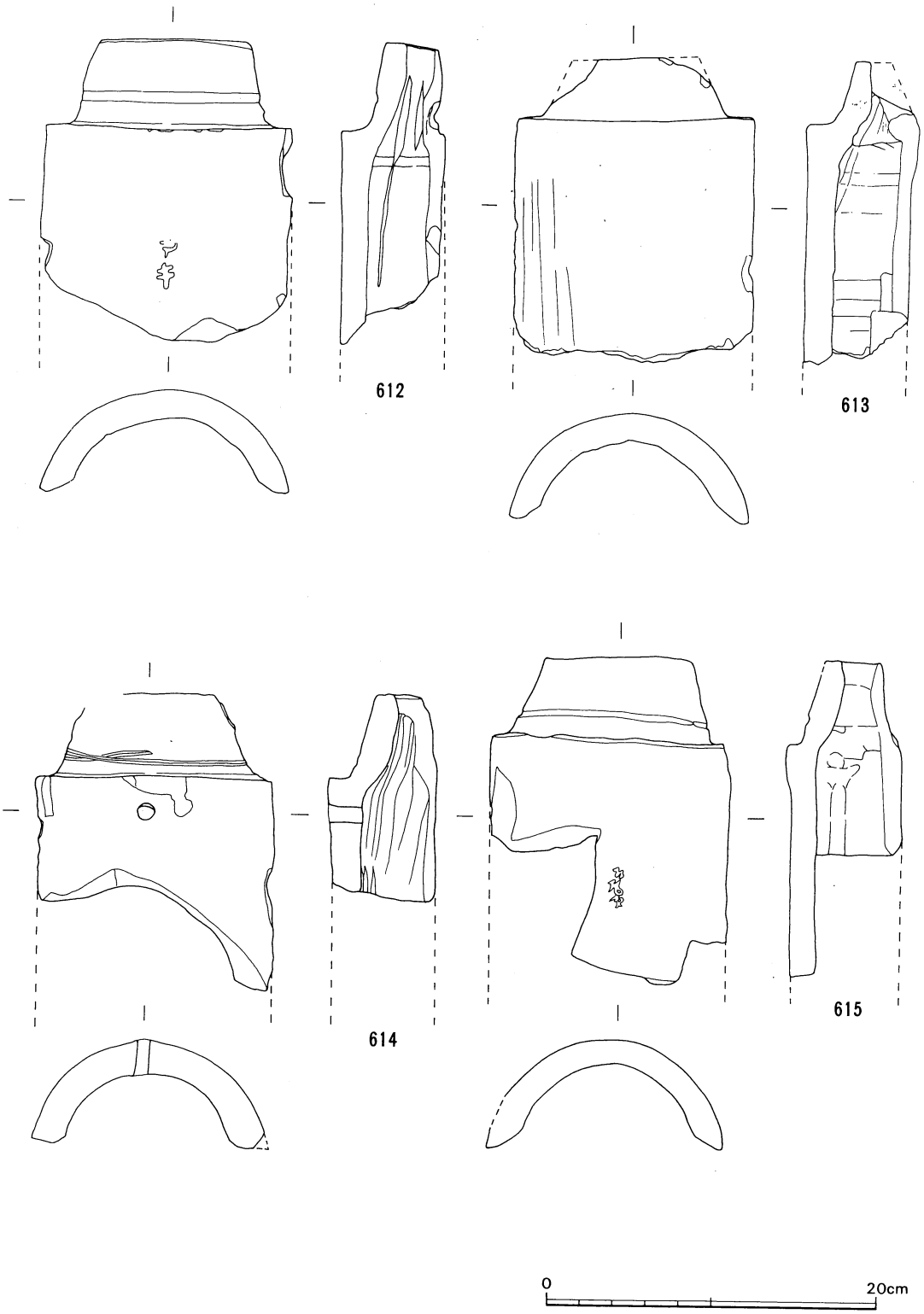


Fig.54　瓦類実測図

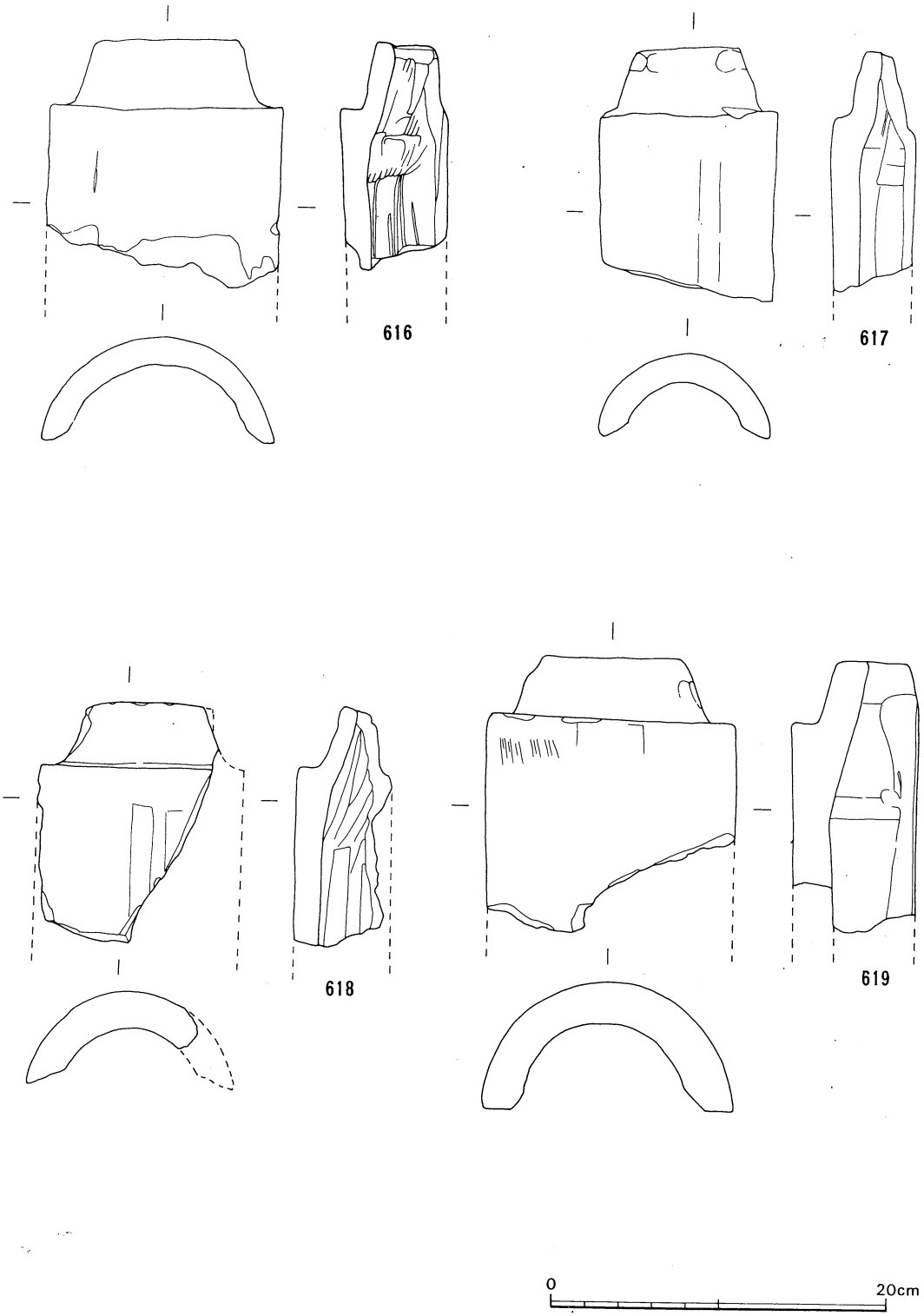
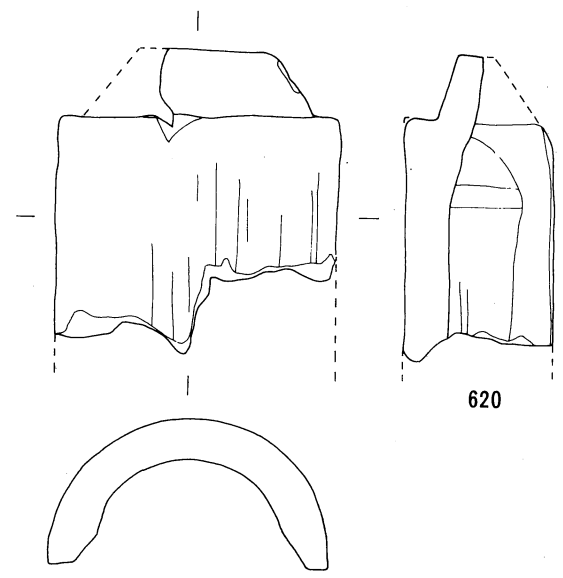
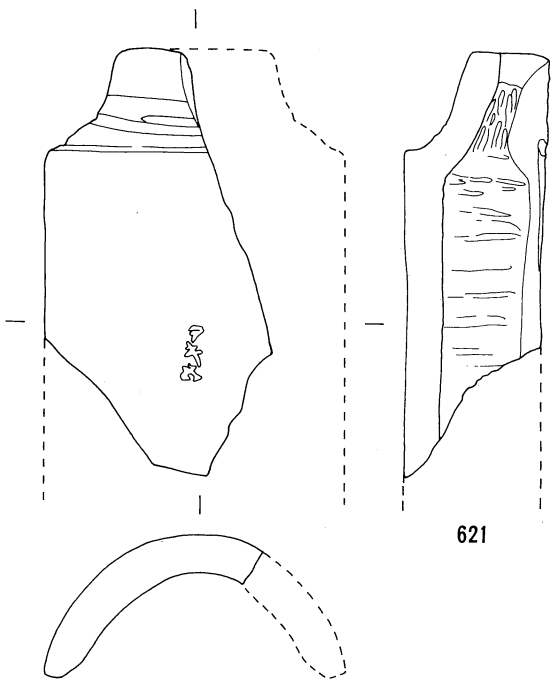


Fig.55　瓦類実測図



620



621

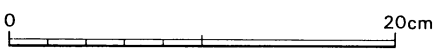
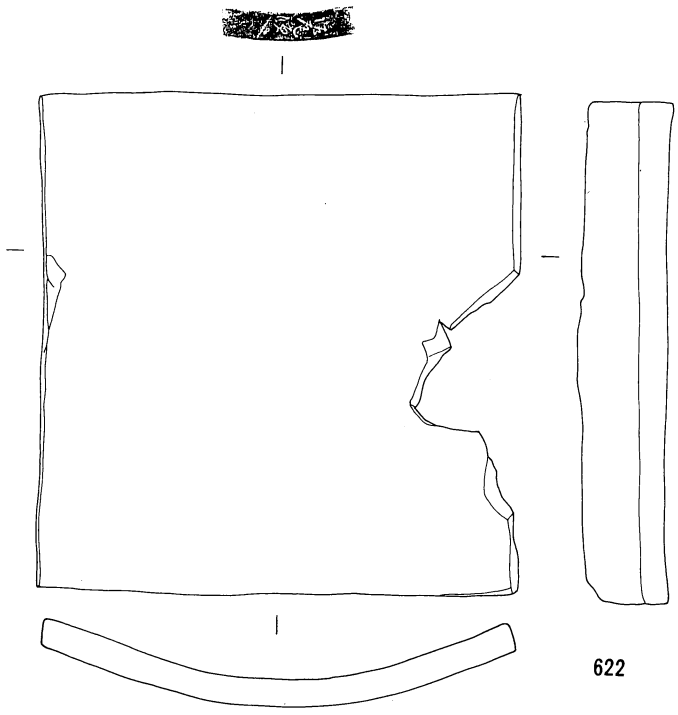
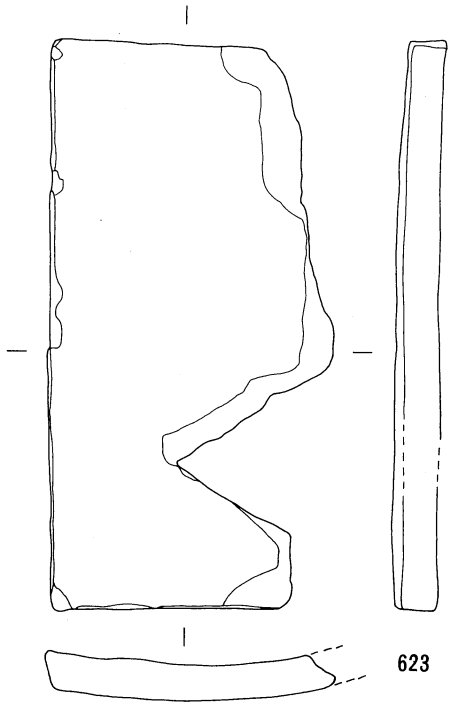


Fig.56　瓦類実測図





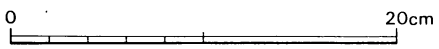


Fig.57　瓦類実測図

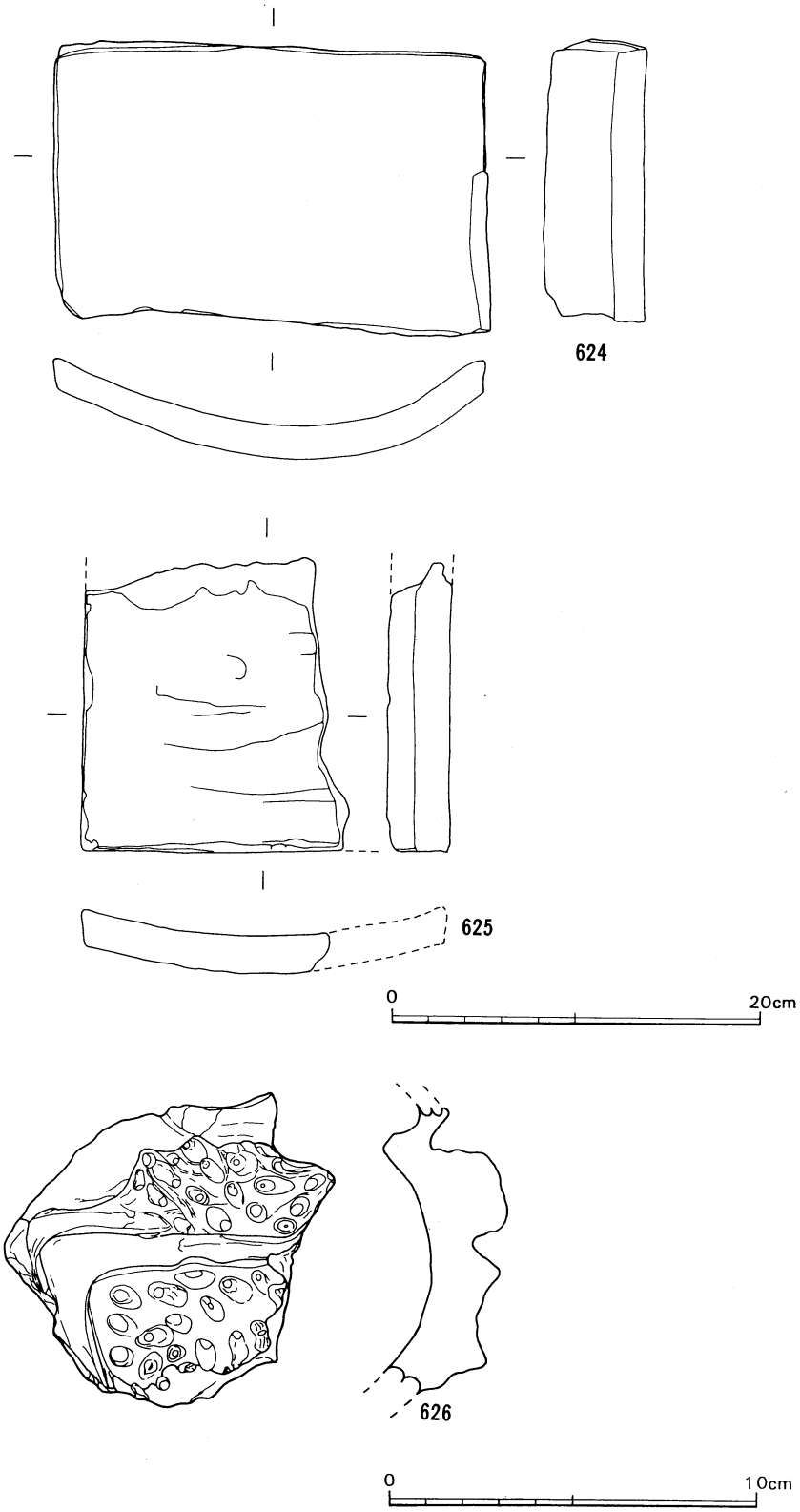
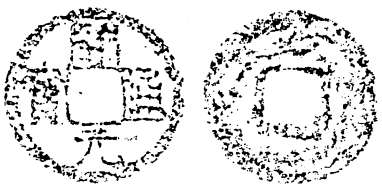
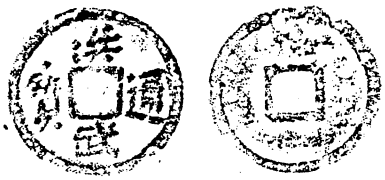
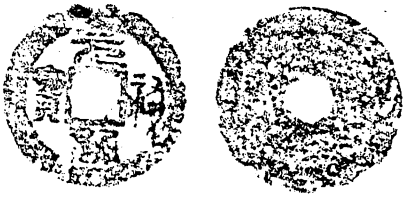


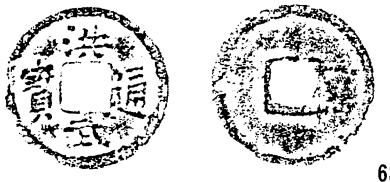
Fig.58　瓦類実測図


627

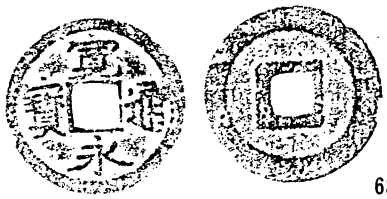
628


629

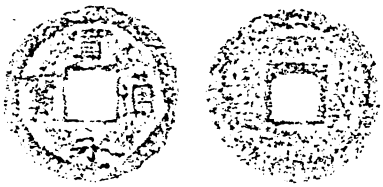

630


631

632

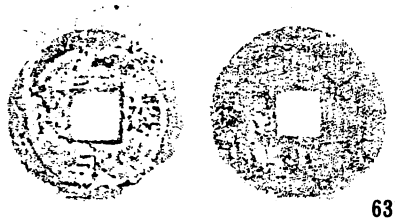

633

634

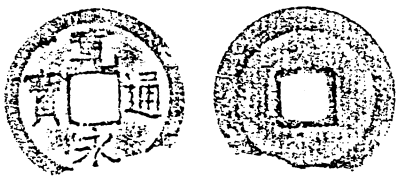

635

636

Fig.59　銅銭拓影

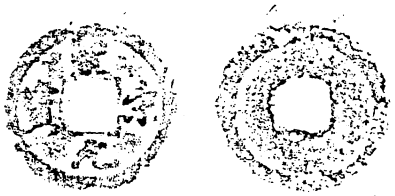


637

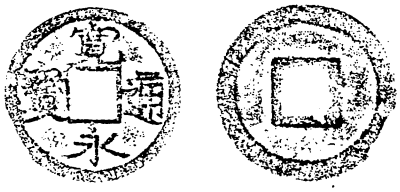


638

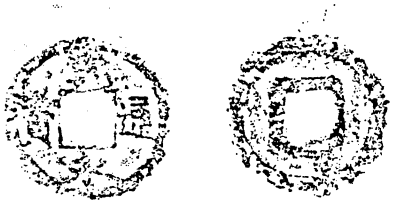
639



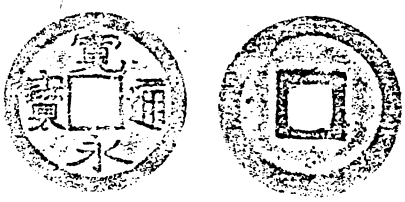
640



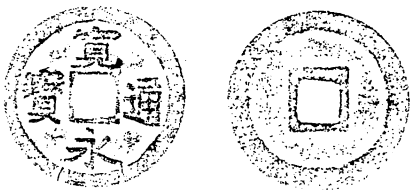
641



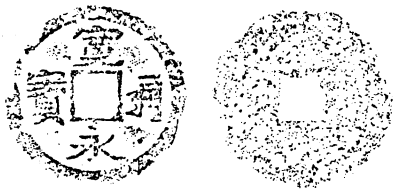
642



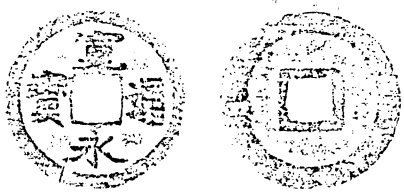
643



644

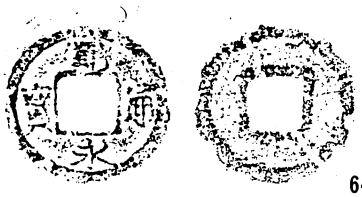


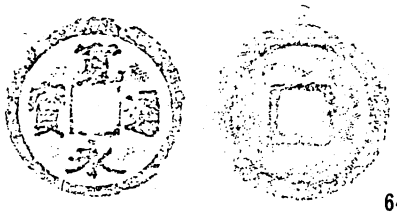
645

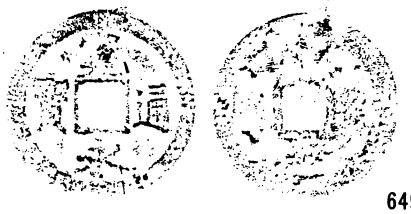


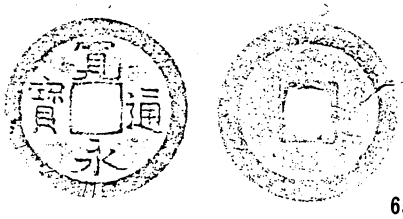
646

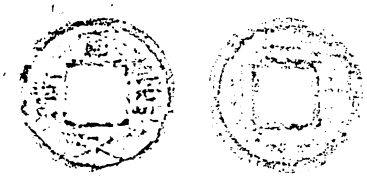
Fig.60 銅銭拓影

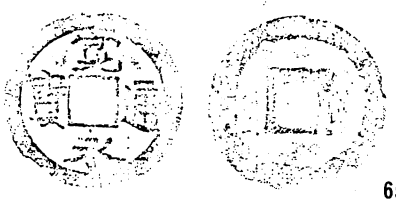

647

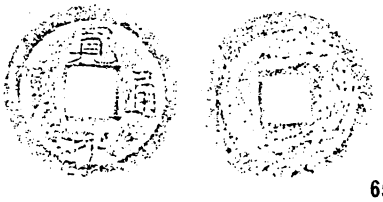

648

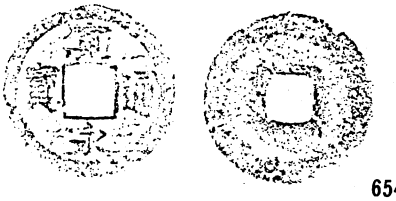

649

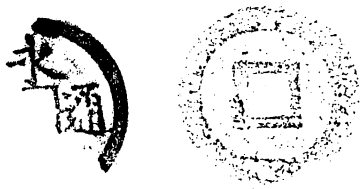

650


651


652


653


654


655

656

0 5cm

Fig.61 銅銭拓影

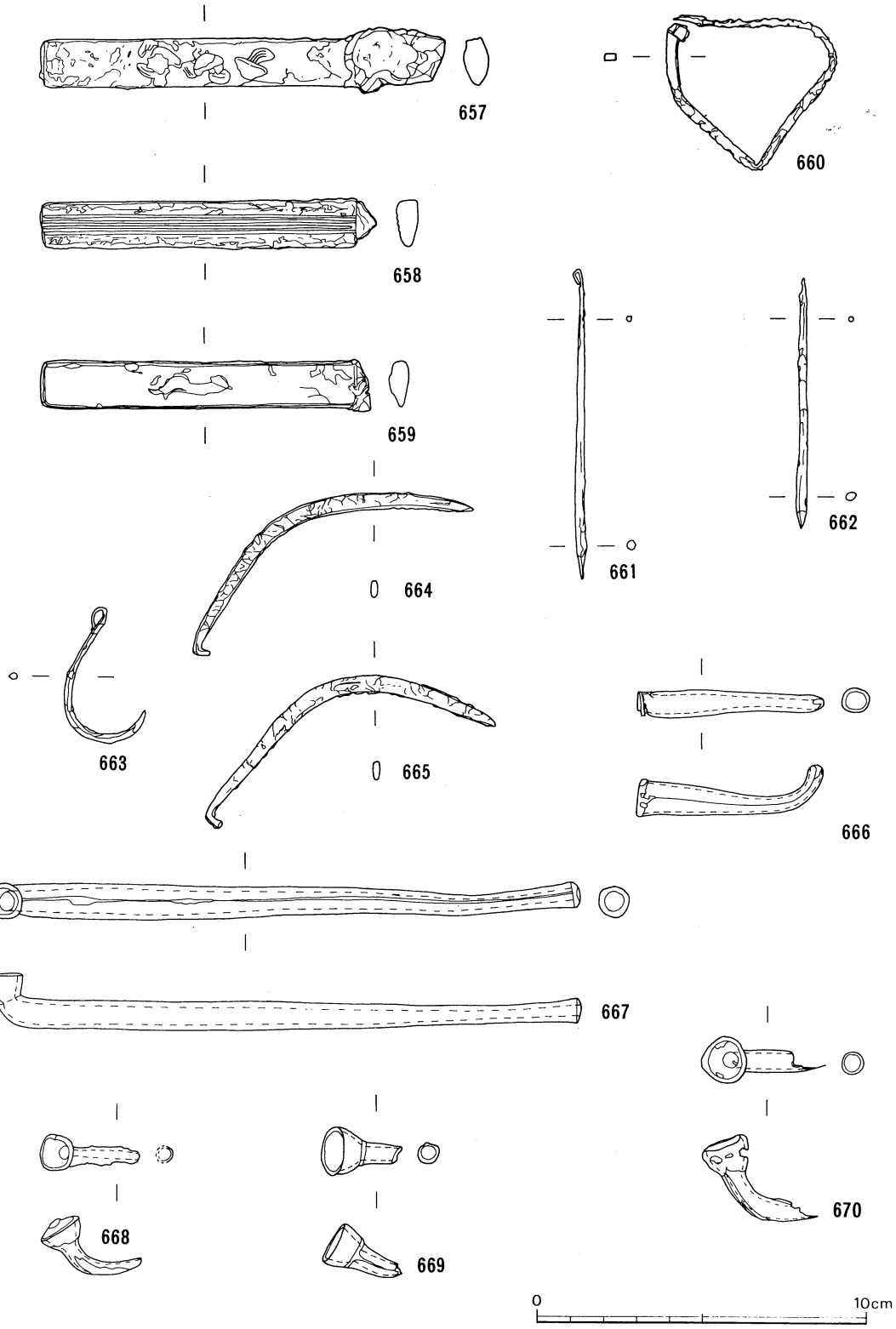


Fig.62　金属製品実測図

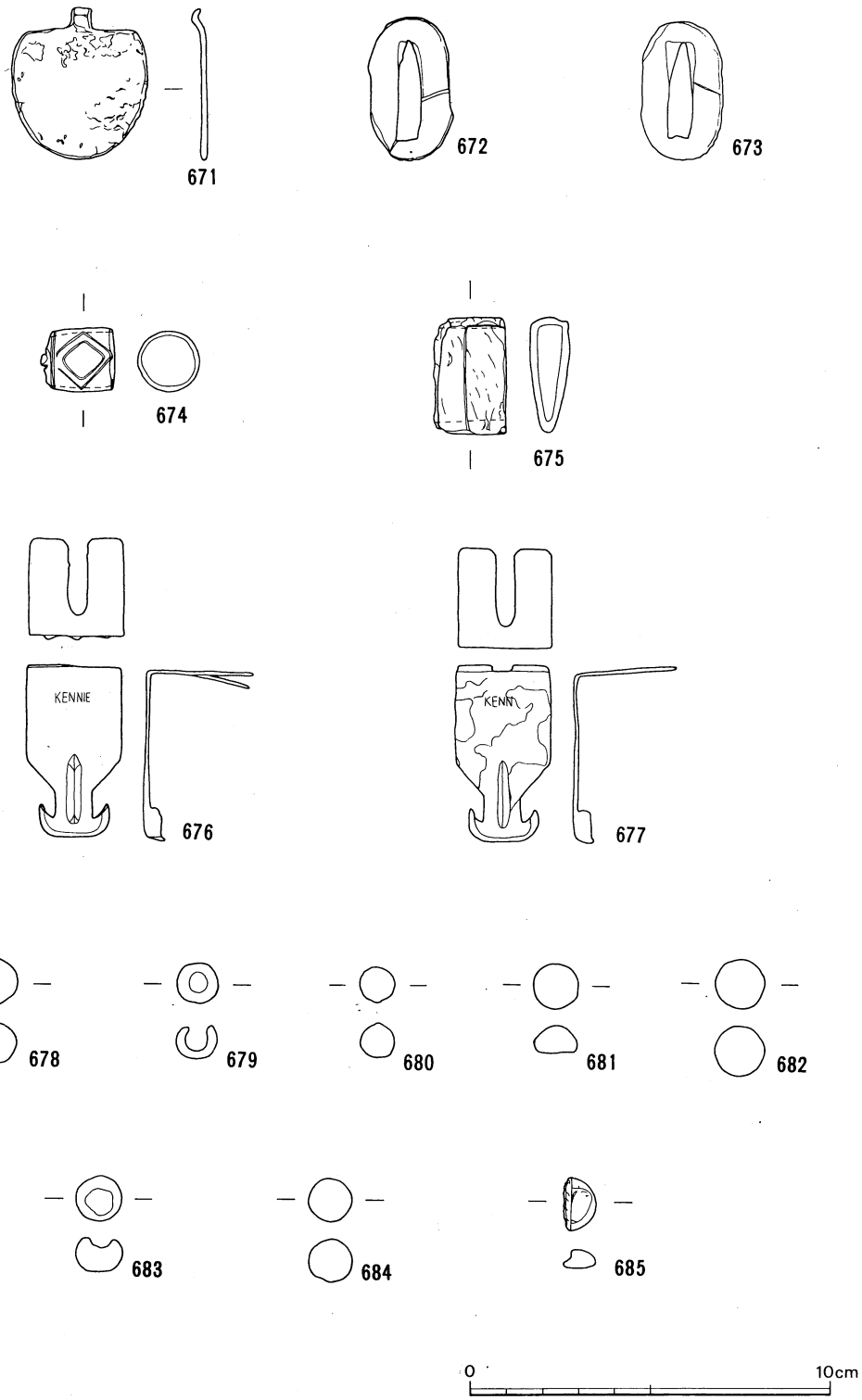
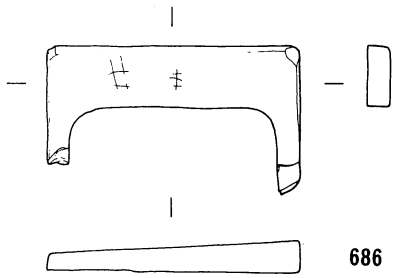
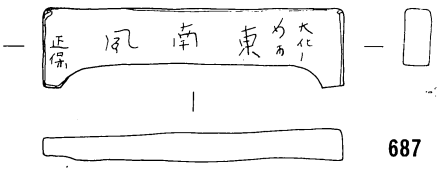


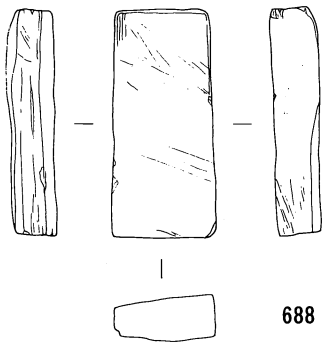
Fig.63　金属製品実測図



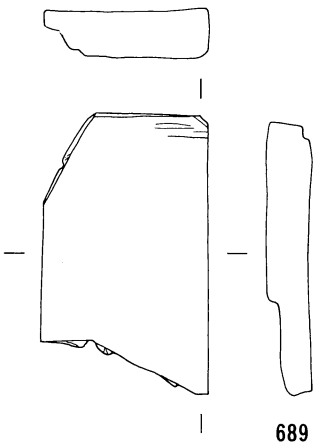
686



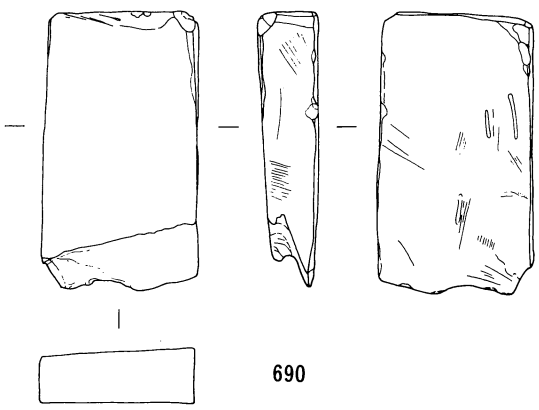
687



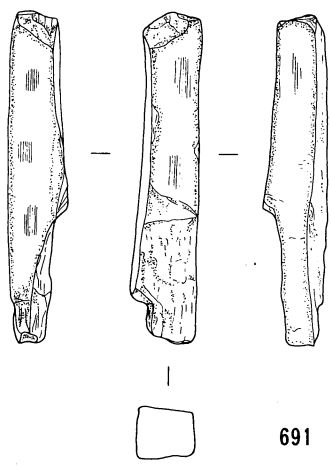
688



689



690



691

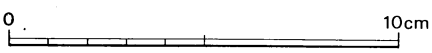
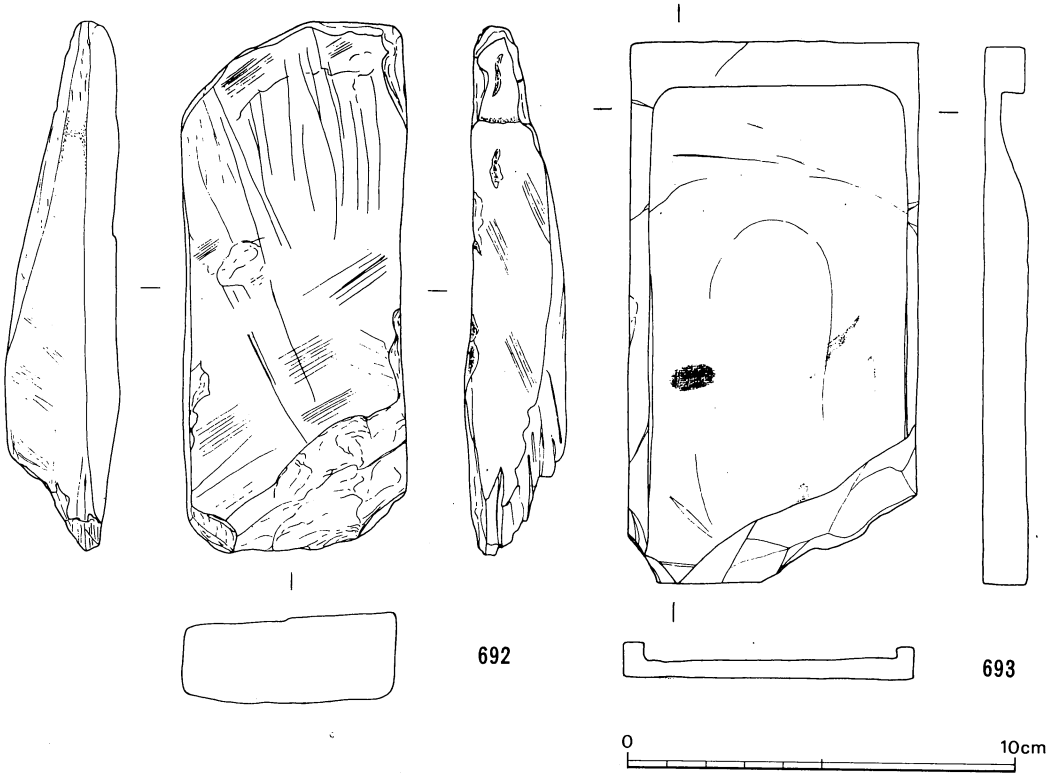


Fig.64　石製品実測図



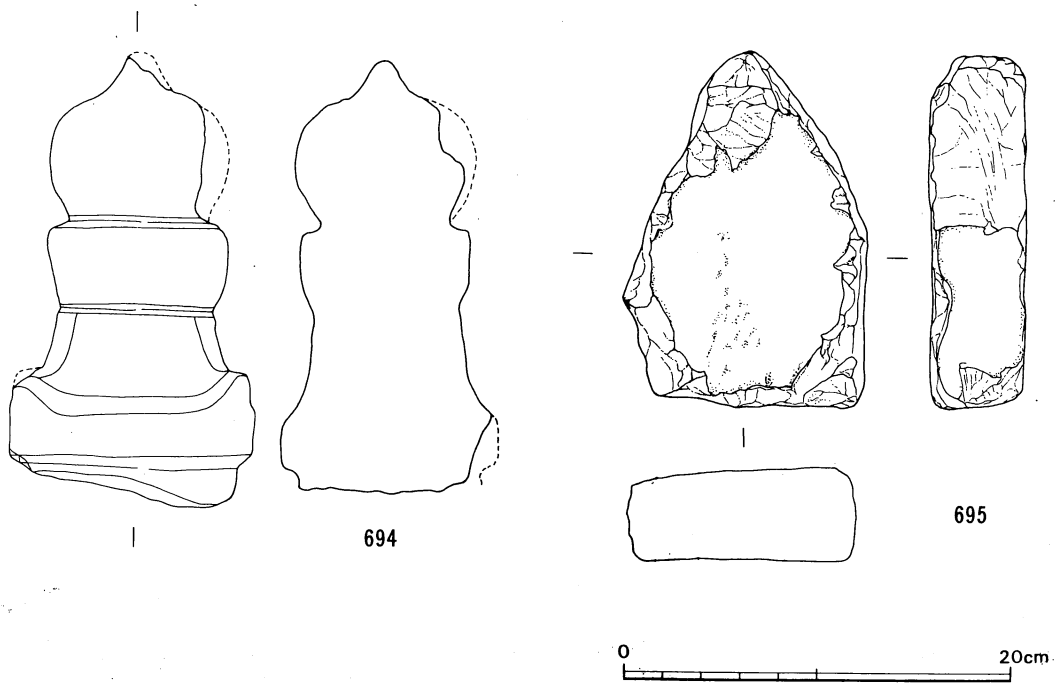


Fig.65　石製品実測図

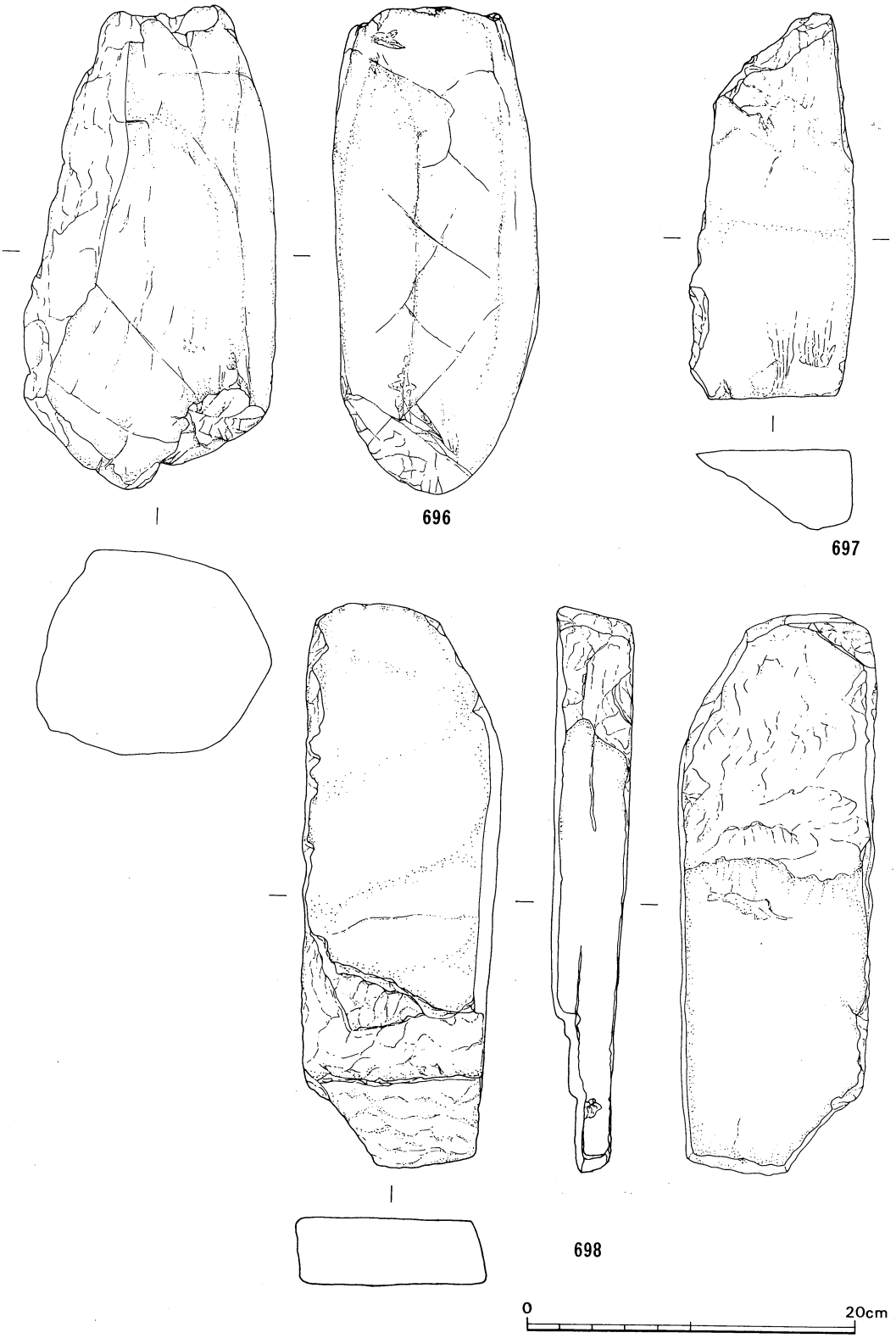


Fig.66 石製品実測図

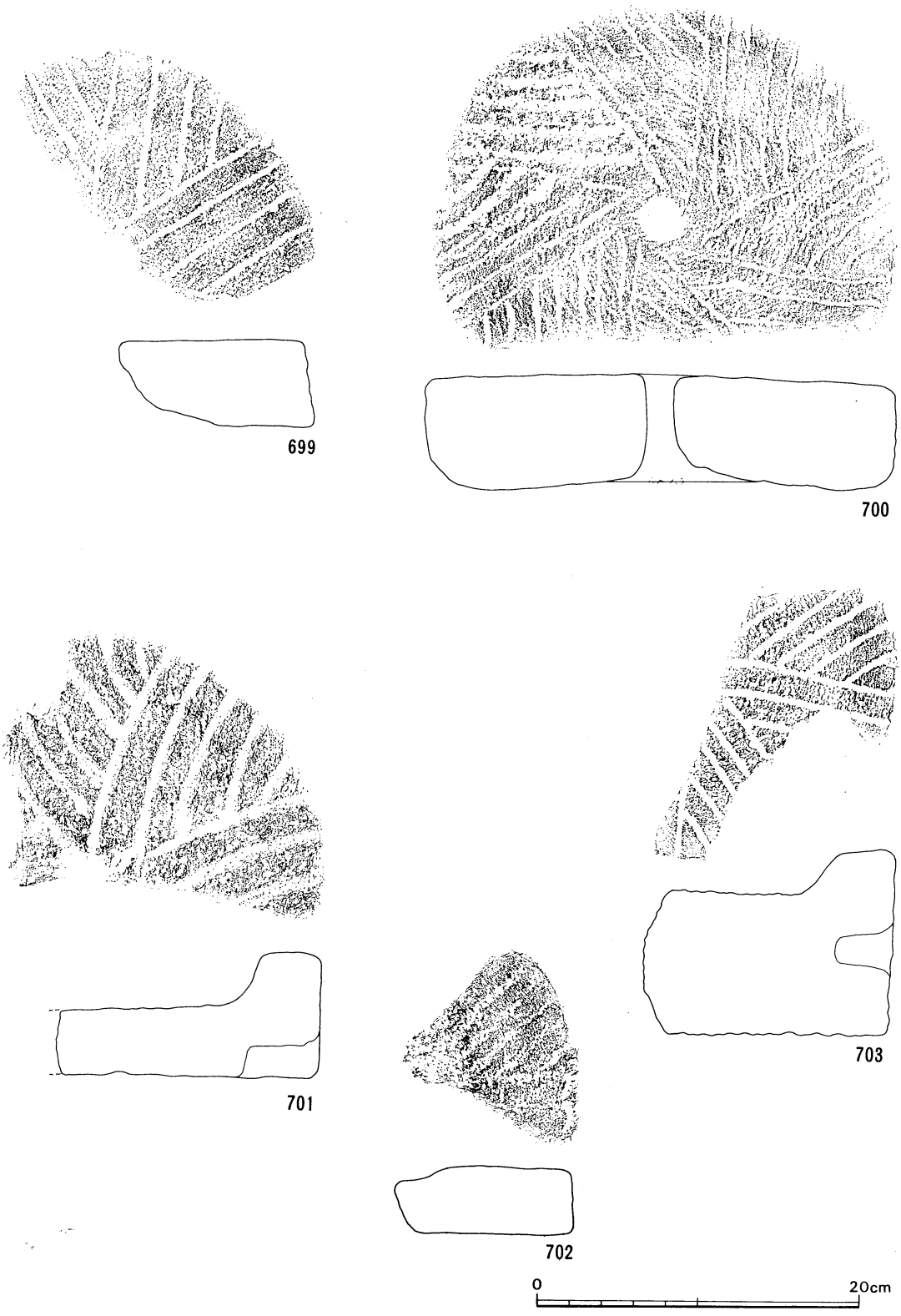


Fig.67　石製品実測図

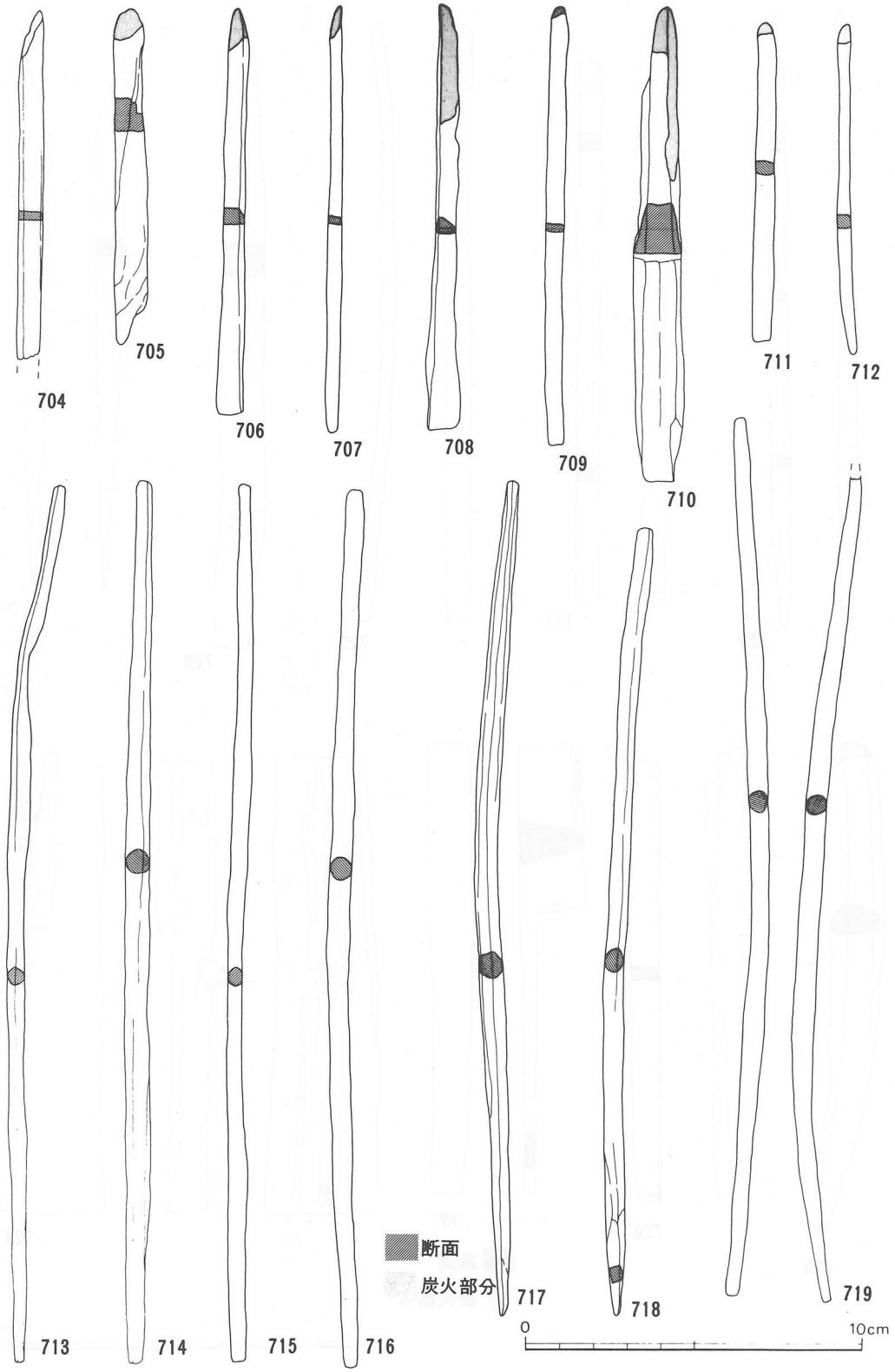


Fig.68　木製品実測図

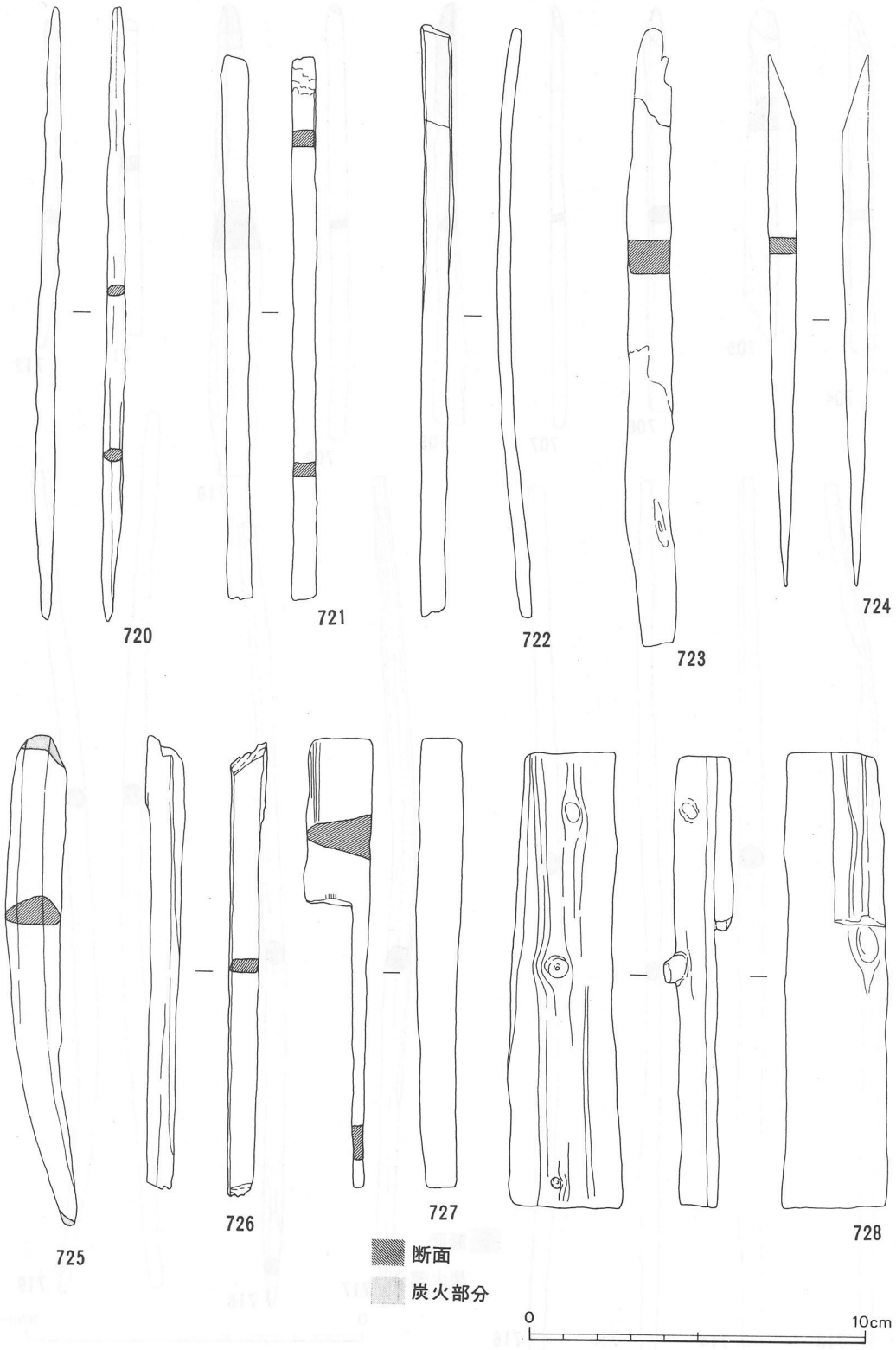


Fig.69　木製品実測図

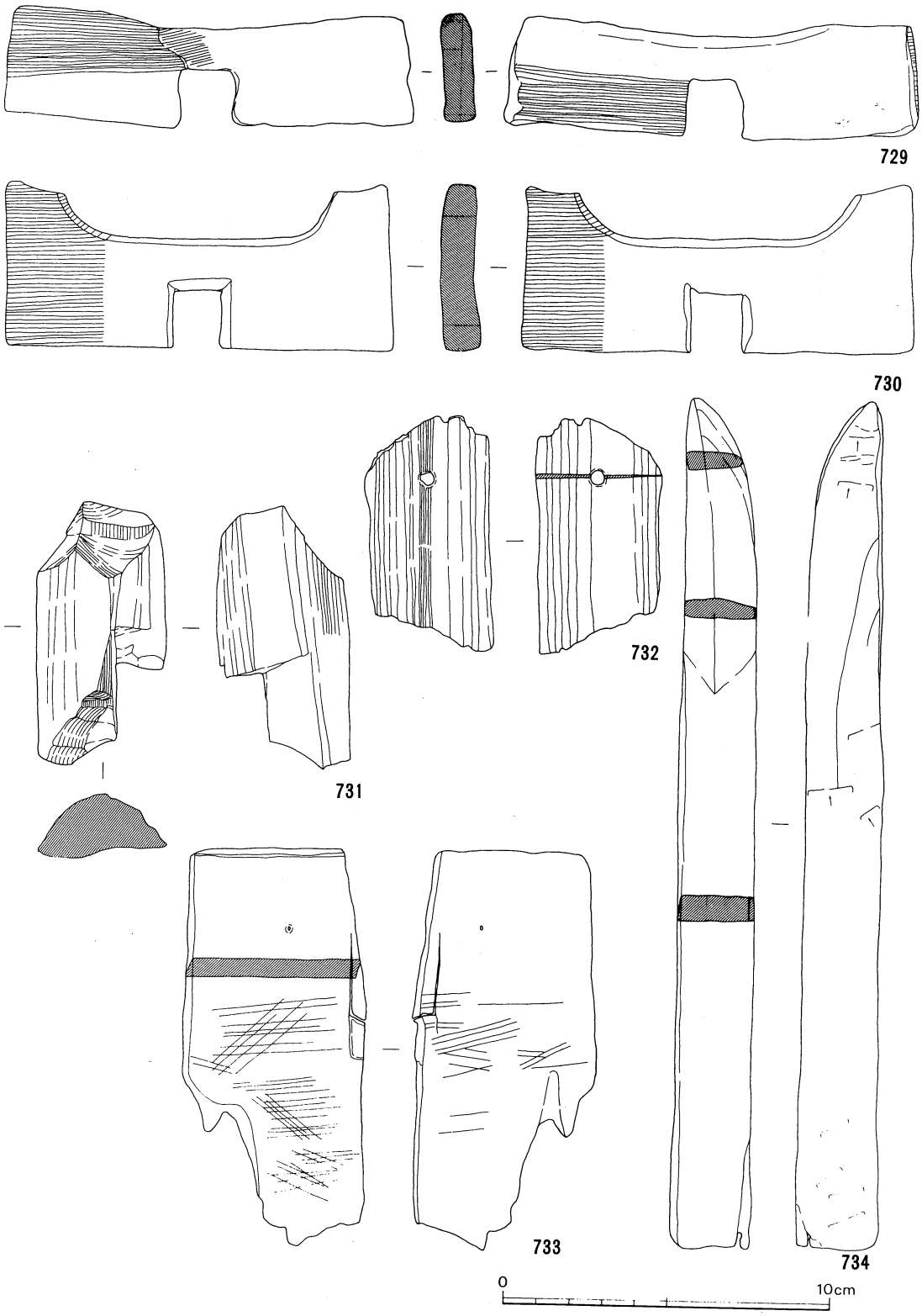


Fig.70　木製品実測図

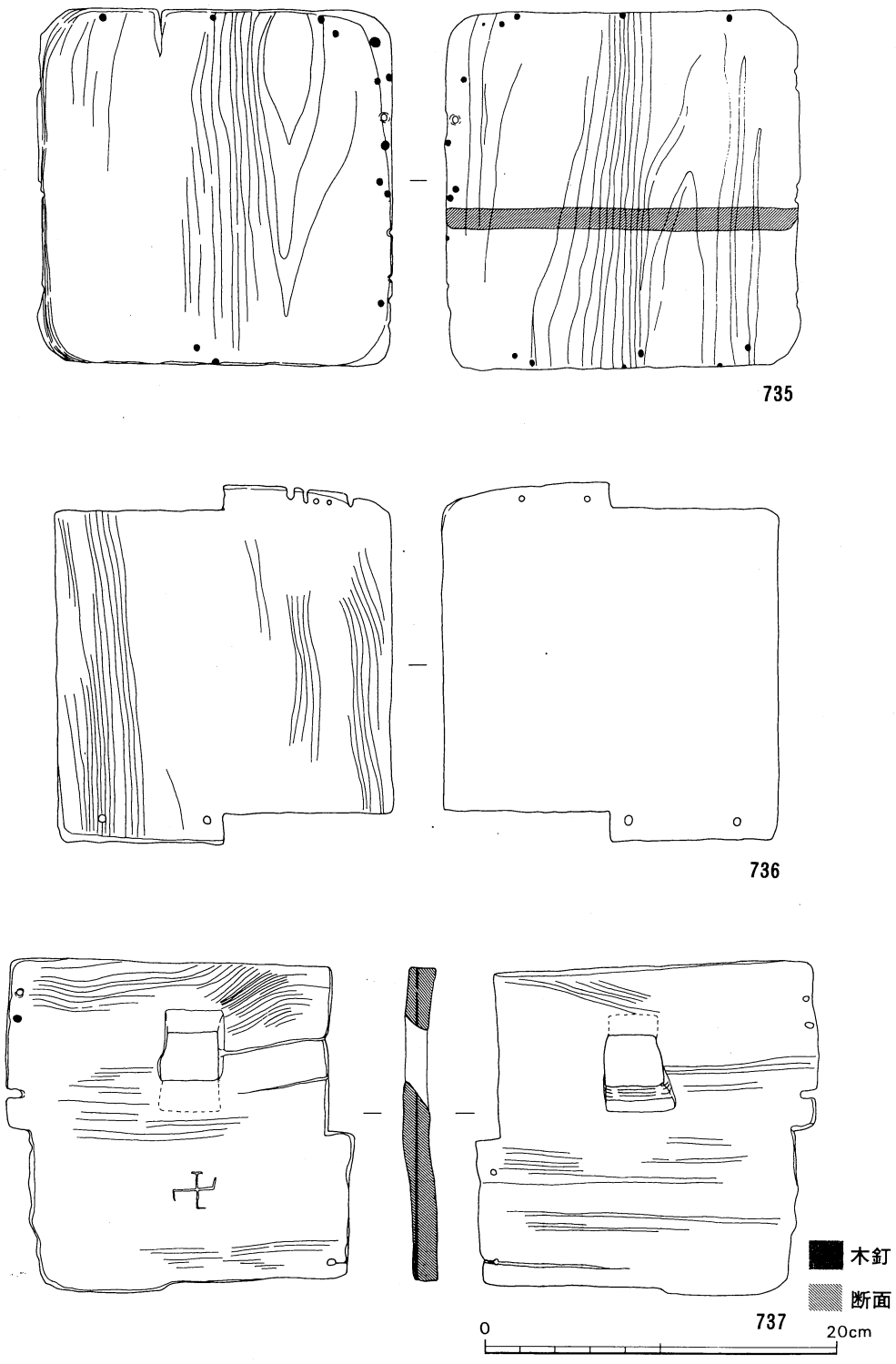
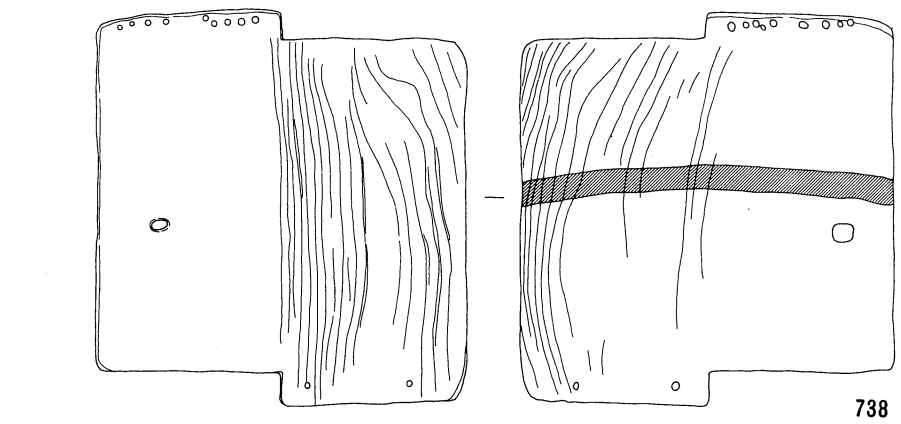


Fig.71　木製品実測図



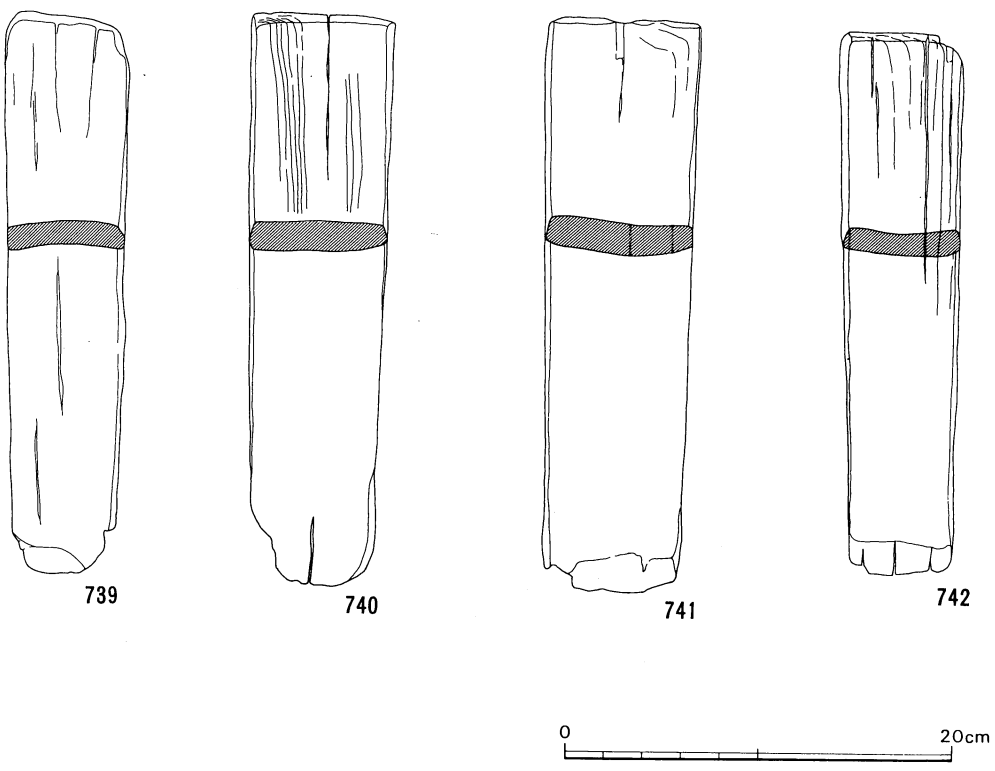


Fig.72　木製品実測図

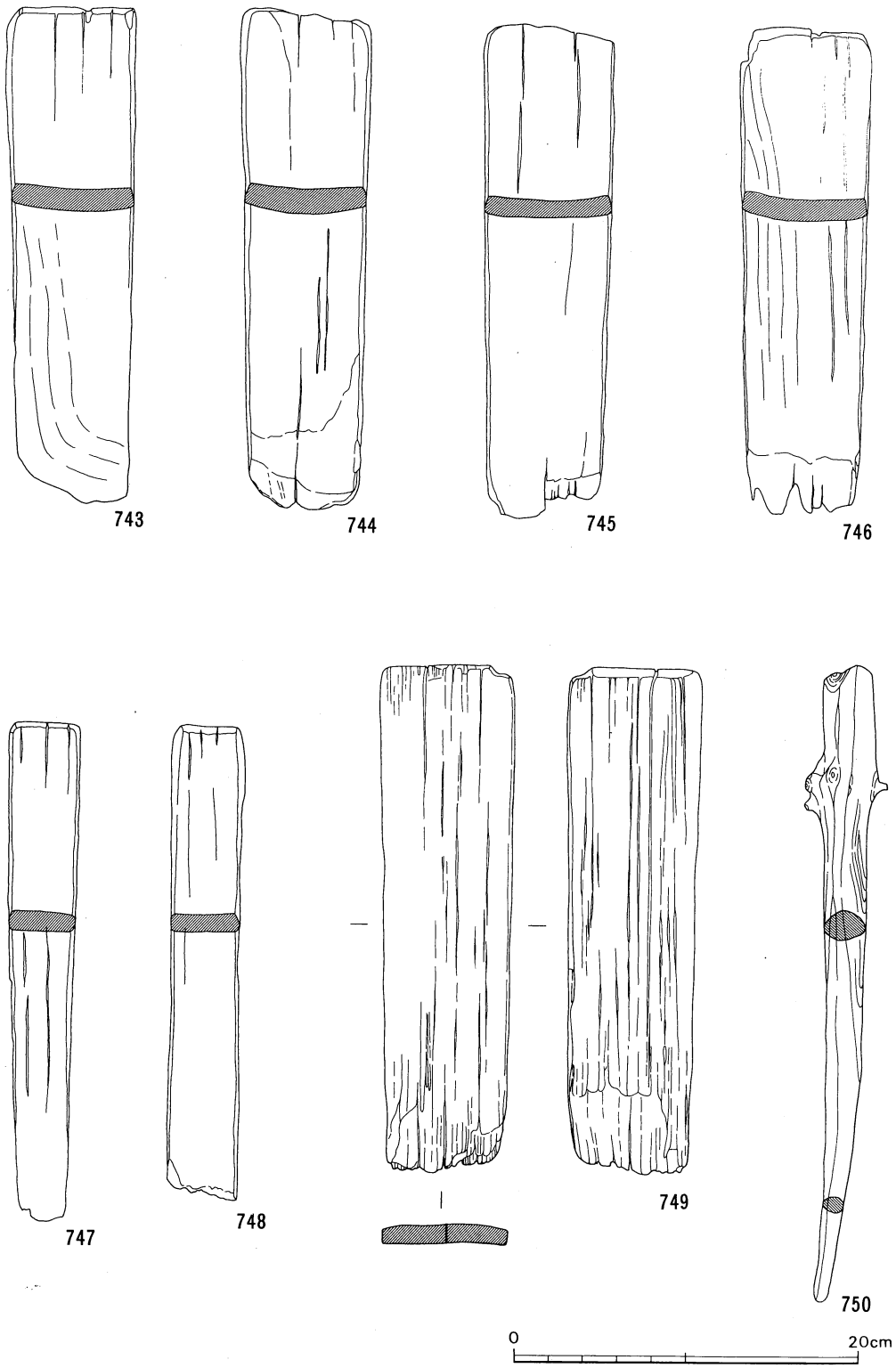


Fig.73　木製品実測図

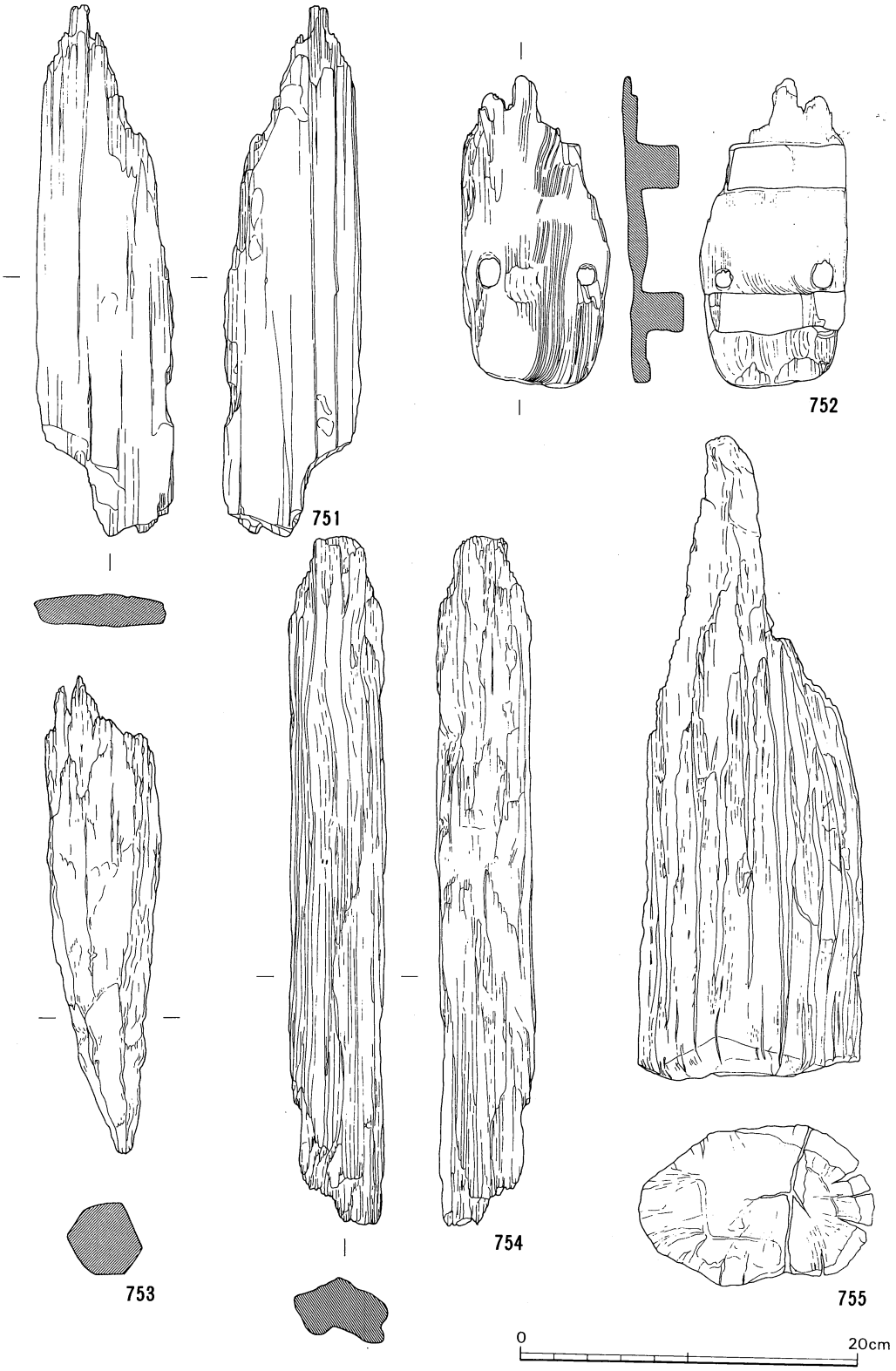


Fig.74　木製品実測図

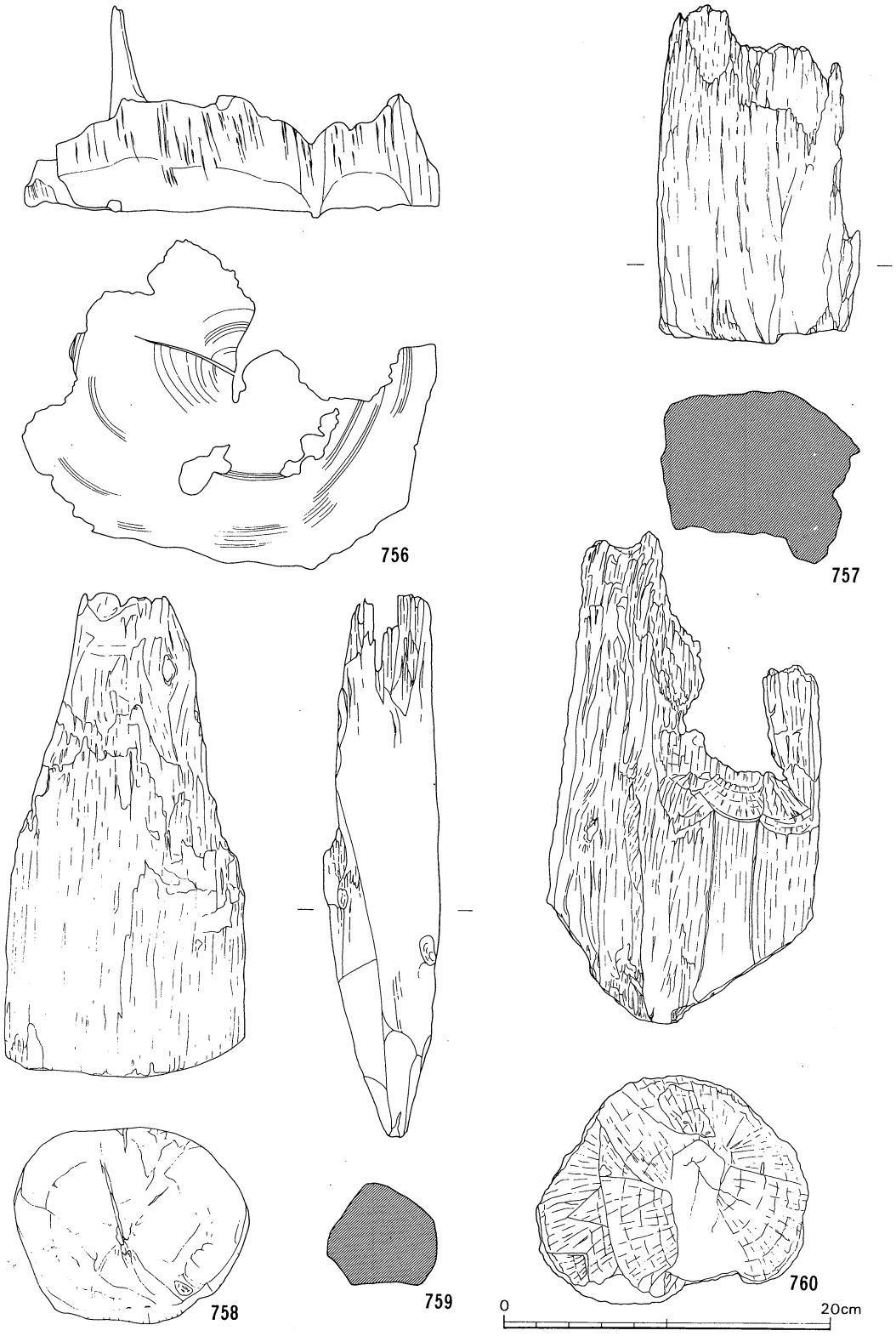


Fig.75　木製品実測図

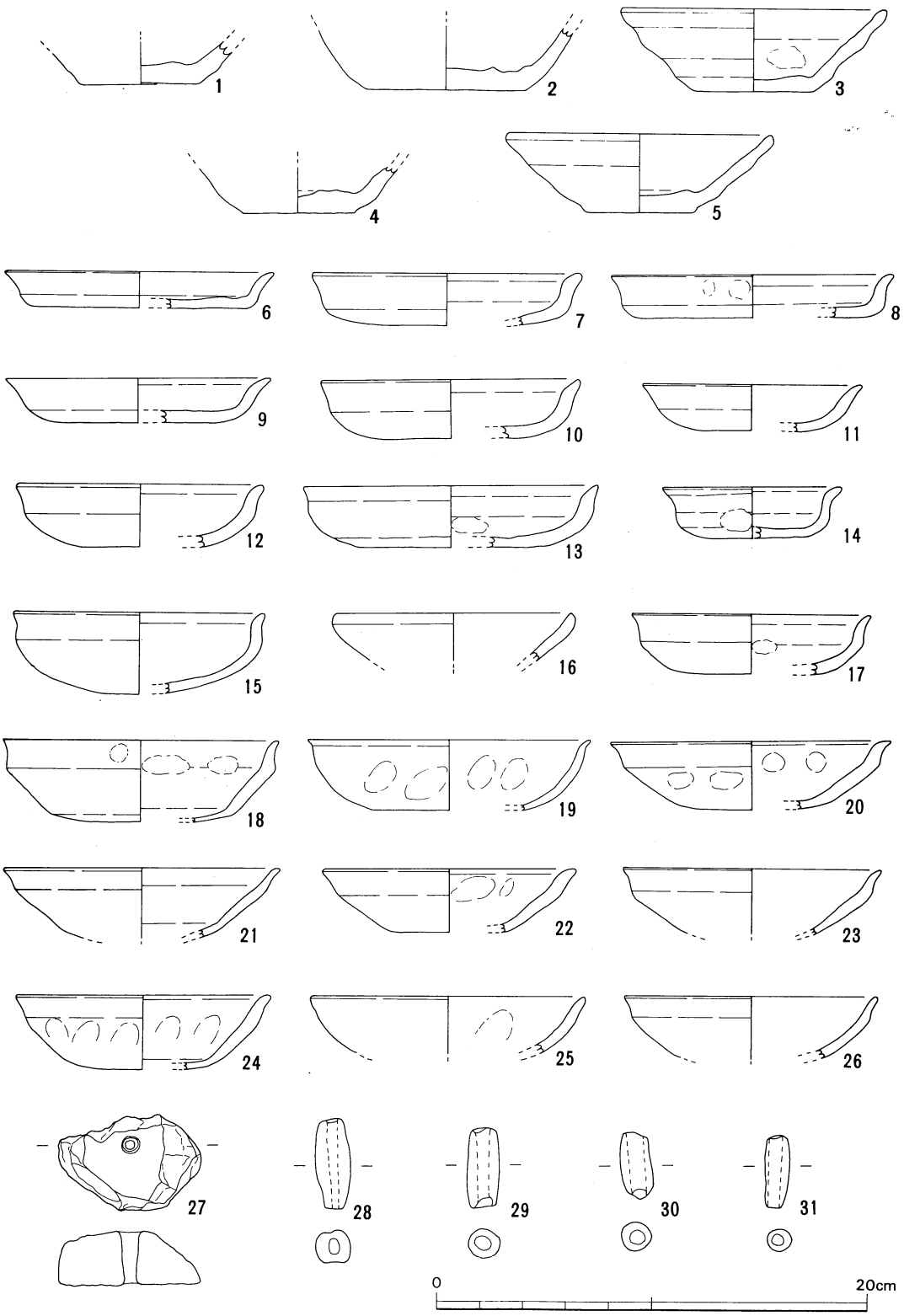


Fig.76　土師質土器，土錘実測図

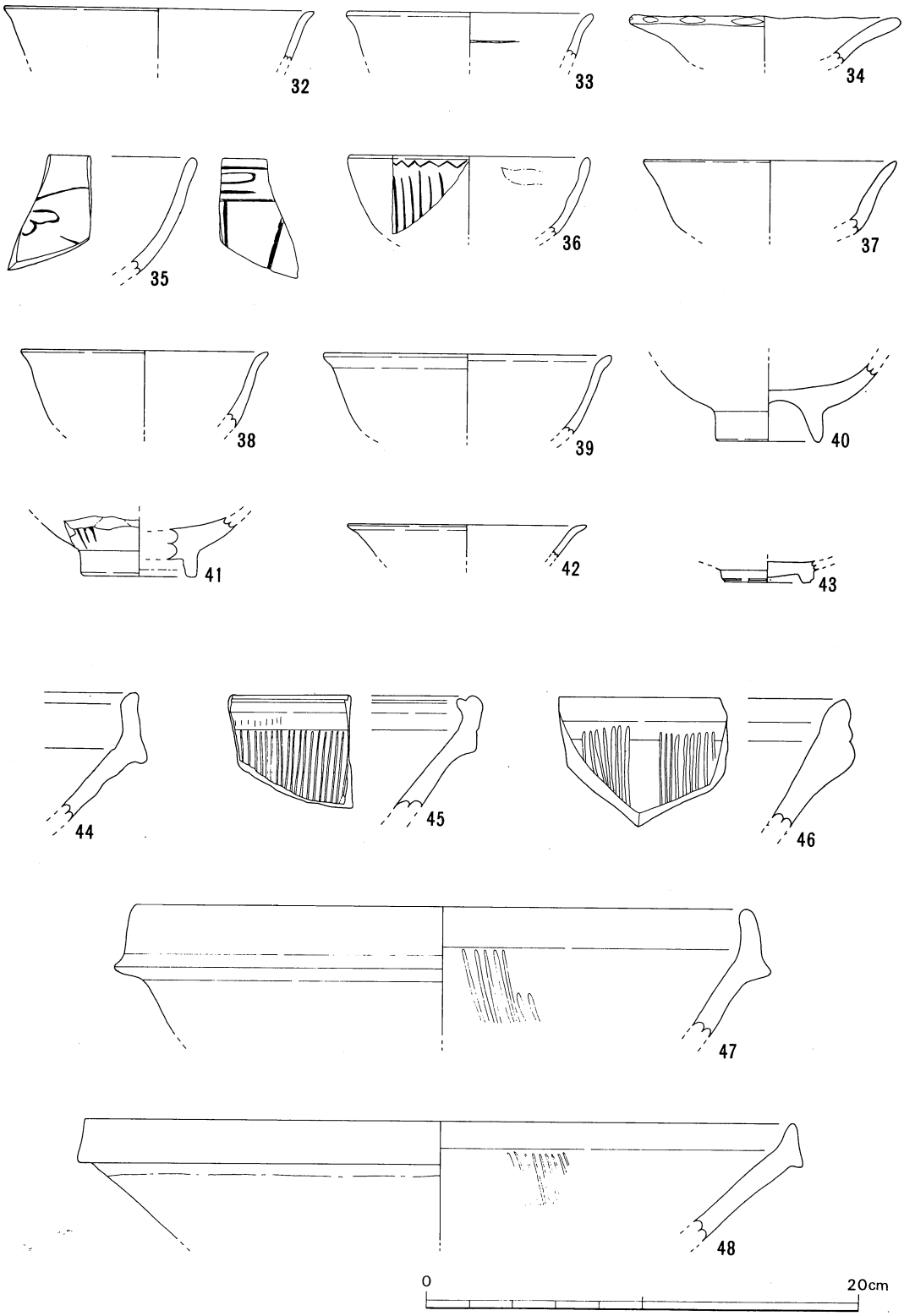


Fig.77　陶磁器類実測図

第Ⅵ章　総　　括

1）安芸氏土居及び五藤氏屋敷跡の発掘調査は，先の書道美術館建設に伴う調査についで今回が2回目である。書道美術館建設地内の調査にあたっては，土師質土器など中世遺物の若干の出土はあったが，遺構の確認はできなかった。今回の調査においては，15世紀代から幕末明治に至る広範多量の出土遺物と，それと共伴するものと考えられる遺構の確認ができた。ただこれらの遺構や遺物は，幾度かの嵩上げ盛り土による整地や攪乱による散在散逸が目立ち，層位的に遺構・遺物の関連性を把握できる調査が不可能であった。従って遺構については検出した遺構個々についてのべ，遺物についても種類・器種ごとにのべてきた。本稿においては上層から順次検出された遺構を整理し，それらの相互関連を考察することとしたい。

調査対象地の現状は，一部耕地も存在したが全体的には雑草や小竹の茂る荒れ地であった。その表土層及び表土層直下から検出された遺構はＳＳ－01，02，ＳＸ－01，02，03，ＳＤ－01，02，ＳＢ－01の各遺構で周辺からは18世紀末から幕末・明治にかけての時期を示す遺物が多量に出土した。ＳＤ－01，02などは現地表面に露出した部分も存在するなど攪乱もひどく，検出された遺構にも一貫性もなく小規模かつ断片的なものであった。

第Ⅱ層位で検出された遺構はＳＸ－04，ＳＳ－03，04，ＳＢ－02である。ＳＸ－04は良好な石敷遺構として検出されたがその性格は不明である。ＳＳ－03，04も良好でありＳＢ－02もＳＢ－01同様の長屋風礎石群である。周辺には概ね17世紀後半から18世紀前半に該当する遺物の出土をみた。

第Ⅲ層で確認されたものにＳＸ－05，06，07，ＳＦ－01，02，03，04，05，ＳＤ－03，ＳＢ－03などがある。各遺構とも非常に良好な遺存状況を示して検出された。Ⅲ層からは17世紀前半頃から17世紀後半にかけての遺物が比較的多量である。

第Ⅳ層では，ＳＢ－04，05の2棟の建造物とＳＫ－01，02，ＳＸ－08，09などである。この層における長屋風建造物ＳＢ－04や石敷建造物ＳＢ－05など遺構としてきわめて良好な遺存状況で出土遺物も17世紀前半期が主流である。

第Ⅴ層とそれ以下については，上層において発掘された遺構の主要部分の保存を目的としてⅠ～Ⅴ層間において遺構が検出されなかったか，あるいは小規模なものであった部分についてのトレンチによる調査を実施した。このため完全な遺構としての把握はできなかったが，掘立柱の柱根状自然木片や，杭などを各所で検出することができた。遺物も15世紀から17世紀初頭にかけてのものが比較的多量に出土した。

2）以上各層位における遺構の検出状況についてその概要をみてきたが，次にこれらの遺構の関連を考えてみなければならない。

本調査によって検出された遺構で最も古い時期と考えられるものは第Ⅴ層に該当する15世紀末から17世紀初頭にかけての遺物を伴うものである。前述のとおり遺構として明確に把握する

ことはできなかったが，39本におよぶ柱根状自然木片や自然木杭などは安芸氏関連の時期のものと判断してよいものであろう。安芸氏の土居については，『長宗我部地検帳』などにおいてもみえず判然とはしないが，城山の東麓に接近した土居構えであったのではないかと考えられる。それは今回のトレンチ調査によって，柱根や杭の出土する地層から判断しての考えである。いわゆるＥトレンチ周辺の層位は，青灰色粘質土や青灰色砂質土層部分が混在し，湿地や沼状地のヘドロ状堆積土がその中心である。杭はこれらの堆積土中に打ちこまれたものであり，湿地端部の護岸のためのものとみられる。『土居村史稿』にみる「戦国時代に於ける安芸城及び附近図」によれば，すでにこの期において現存する堀や土塁が囲んでいるが，これらの土居構えがすでに安芸氏によって形成されていたか否かは疑問である。Ｄトレンチ南部において検出された土塁裾石部の結果からみても裾石はこの層位よりは上層に敷かれており土塁の構築は時期的には降るものと判断したい。またＧトレンチ下層部もＥトレンチ同様の層位を示し，Ａ・Ｂ・Ｃの各トレンチにおいても，その大部分が黄褐色砂質土を中心とする無遺物の軟弱な山土であることからしてこの周辺も嵩上げ盛り土の層位と考えられるものである。従って安芸氏の土居は城山に東麓に接して南はＥトレンチ以北，東はＢ・Ｃトレンチを東限とする範囲内に小規模な柱による掘立柱の建造物によって構成され，南と東は湿地帯によって自然の要害が形成されていたものと考えることができるのではなかろうか。

次の時期はＳＢ－05を中心とする遺構である。このＳＢ－05の敷石家屋に伴うものとして，その北に存在するＳＦ－01とそれに南接するＳＸ－08の各集石群，それにＳＢ－04とその南のＳＫ－01，02とＳＦ－05などである。中心的建造物であるＳＢ－05は，東西４間，南北４間で床下部には敷石がみられる。東西両脇には雨落し溝も完備し，東南隅部分に出入口を構え前庭部ももった書院的な建造物ではなかったろうか。この建造物の中央部の柱の延長線上にＳＸ－08石群の中心石群があり，またＳＦ－01の中心地点とも合致する。また西接するＳＢ－04の建造物も，礎石もまたその上に据置かれた柱も非常に大きく，床板状木片にしてもかなりの部厚い用材が利用されているなど重量で重要物保管の用途をもった建造物のような様相である。南部ＳＫ－01，02は小規模な土壙であり，出土物もきわめて雑多・多岐にわたり統一性もなく乱雑でむしろ廃棄物処理土壙と考えてみてよいものであろう。ＳＦ－05については五藤氏所蔵の絵図のなかにもみられる石段であり，下段屋敷地より上方屋敷地への石段に間違いなかろう。これら一連の遺構は共伴する諸遺物から判断して一応17世紀前半期，いわゆる五藤氏の安芸入国当初のものではないかと思われる。

このＳＢ－05の直下には炭化物層が検出された。焼失についての文献記録などは存在しないが，焼失の可能性をもつ建造物である。炭化物層の上層は無遺物の黄褐色砂質土の軟弱な層であり，焼失後西方の城山南端部分を大きく削崩して，ＳＢ－05の敷石，礎石もそのまま残してその上方に盛り土し整地がなされたものであろう。

整地された上面に構築されたものがＳＤ－03とその排水口部分のＳＦ－02，03と，その溝に

囲まれた中に存在したであろうＳＢ－03などの建造物である。ＳＢ－03についてはその礎石がＳＤ－03の溝側石を利用した部分のみからの判断であり南限部分は壊され，また中央部分についても礎石の痕跡がなく正確な規模や性格の確認は不可能である。またＳＤ－03の構築法についても，比較的大きな楕円状の礫石の長軸部分を溝側に生かした手法が採用されているなど一般的にみる短軸面の利用法とは異る手法ももつものである。

この遺構検出面とほとんどレベル差のないＳＢ－02に北接してＳＳ－04と北へのびるＳＳ－03などの遺構がある。ＳＢ－02は発掘範囲内では１間×７間半の東西棟長屋建造物であるが，その西端部の検出状況からすれば，あるいはもっと西方へ延びている可能性もある。また通路状遺構のＳＳ－04と03は直交しないが，その規模や手法及び検出面からも同期の共伴遺構とみなければならないであろう。南に流れるＳＤ－02についてもＳＢ－02と同一方位を示しており，ＳＸ－04の石敷遺構にしても敷石北端の東西ラインはＳＢ－02の柱方向も全く同一である。従ってこれらの遺構はやや一貫性には欠ける点もあるが，すべて同期のものとみるべきであろう。五藤氏所蔵の絵図のなかにも，馬屋・木倉の如き小規模な間取りの長屋風建造物が描かれており，また「石畳」の文字の見える個所もある点などからすれば，この判断もあながち的をはずれたものでもないであろう。17世紀から18世紀前半期にかけて五藤氏の屋敷拡大期の遺構とみるべきものであろう。

調査対象地で最も新しい遺構はＳＢ－01と北接するＳＤ－01などである。この層位の遺構は検出面も浅く攪乱されるなど断片的で一貫性のないものが多い。ＳＸ－01，02などについても一応集石遺構として把えてはいるが，周辺にも類似の小規模な集石が存在し，これを遺構とすべきか否かの判断はむつかしい。ただ五藤氏所蔵の絵図によればＳＸ－02周辺から東方には馬場や射場が構えられている。この周辺には比較的集石群が少なく，西方屋敷地内には集石部分が多く存在する点，そしてＳＸ－02は南北に細長くのびている。これは，あるいは絵図における屋敷地と武者鍛練の場の境に築かれた小規模な塁状地形の基盤となるものではないかとの判断も手伝っている。

３）安芸城・安芸氏の土居を明確に伝える文献記録はない。また五藤氏屋敷を伝える五藤氏所蔵の絵図にしても時期不明のものもあり，あくまでも絵図であり正確な資料とはなり得ない面もある。

戦国期安芸氏の土居については前田氏も触れているように，城山は現在の土居構えの南堀部分までのび，土居はその東麓北よりに東と南は湿地の自然の要害に守られた小規模な掘立柱を中心としたものであったろう。

五藤氏の入国直後の土居は，掘立は礎石に変えられ整備はされていったが，地形的に急激な拡大整地はなされず，安芸氏の土居を踏襲したものであった。そして明確な時期の断定はできないが，火災による焼失後は大規模な整地が断行され，城山南端部の削り取りによる低地部の埋めたてと嵩上げがすすめられ，土居の面積も確保され現状の土居構えの景観に整備されてい

ったものであろう。『五藤家文書』にみえる天和３年（1683）の洪水によって門の石垣が崩れた時期にはすでに土居構えも一応の完成をみていたものであろう。元禄16年（1703），宝暦10年（1760）寛政12年（1800）などにみる改修整備の記録のあとは，今回の調査によって明確に把えることは不可能ではあったし，また絵図における建造物の内容や位置についても合致させることはできなかったが，15世紀から幕末，明治に至る屋敷地の変遷の概要は把握することができた。なお良好な遺存状況の遺構や多様な遺物は，近世考古学の分野においてもきわめて貴重なものであり，その資料も今後より高度な分析が行われてその成果の位置づけもなされることを期待したい。

付　　録

〔付〕

書道美術館建設に伴う調査

1．調査は昭和57年1月13日から18日にかけて実施されたものである。

調査は対象地内について磁北に対し4mグリットを設定し，遺構・遺物の所在確認調査を実施し，その結果に基づいて調査区を拡大することとした。調査は原則として人力で実施したが，一部層位確認にあたっては攪乱層が厚くまた軟弱であったため重機も使用した。

発掘区の層位についてもほとんどが攪乱であり明確な個所はなかったが，一応第Ⅰ層の表土層以下，第Ⅱ層の黄褐色砂質土層，第Ⅲ・Ⅳ層は黒色または茶褐色砂質土層でそのなかには第Ⅱ層の黄褐色土が相当量混入し土質もきわめて軟弱な層。第Ⅴ層は茶褐色粘質土でこの層は20～30cmの厚さで広く，そのなかに若干の土師質土器を包含している。第Ⅵ層は親指大から人頭大の河原石層となっている。

調査対象地は，五藤氏所蔵の絵図によれば，発掘区北端に倉庫状の長屋1棟と，それに東接して小規模な番所が1棟描かれている。本調査においてはこれらの建造物の遺構確認のためのトレンチを設定して調査をすすめたが，周辺一帯は耕作土層下は音地状の黄色砂質土でその中には灰色化した風化砂岩や，泥岩などが混入する層であり，他所からの運搬埋め土の様相であった。礎石や根石状遺構など確認はできなかった。ただ藩政期のものと思われる瓦の小片が数片散在していた。

発掘区東北隅部分において，床面を版築状に固めその西端部に1間と半間間隔で1列の柱穴状ピット3基と，それに伴う雨おとし排水用とも考えられる小溝状遺構と長径2.0m，短径1.5m，深さ1.5mの土壙を検出した。これらの遺構はごく一部分の調査であり，東及び北へのびているものもあるが，雑木林や土塁などが存在しそれ以上の調査は不可能であった。従って遺構の全体像や性格も把握するまでにいたらなかった。土壙内からはごく細片ではあるが土師質土器や青磁片が数片出土した。

また調査区南東隅トレンチ部において，数個体の完形土師質土器や土錘などが出土した。これらの包含層は河原石直上で上層部は攪乱の第Ⅲ・Ⅳ層に接続しており中世における生活面と考えられないこともないが断定するまでの調査には至らなかった。

2．出土遺物

土師質土器

土師質土器は，皿，杯が出土している。1～5までは杯である。すべて底部回転糸切り調整で，底部からわずかに内湾気味に立ち上がり口縁部にいたる。内面にロクロ目が顕著に見られる。胎土は，精選されており砂粒をほとんど含まない。3，5などを見ると口径が12cm，器高4cm内外を測る。6～26は皿である。すべて手づくねで，口縁部は横ナデが施され外反するものが多い。胎土は浅黄橙色を呈している。法量は，28，29がやや小振りであるが，その他は口径12cm内外で，器高のみ若干の差が認められている。6～14までは，2～3cmで，15～26は，

3～4㎝を測る。27は器種不明であるが，径6㎜の丁寧な穿孔がみられる。その他土錘が4点出土している。

輸入陶磁器

青磁，白磁が出土している。34は，青磁の稜花皿である。32～33，35～41は青磁碗である。35の口縁部外面には雷文帯が施される。36，41は細蓮弁の碗である。その他は，内外面無文で口縁部が外反するものである。42，43は白磁の皿である。42は，端反りの皿で16世紀に多く見られるものである。43は，底部のみであるが輪高台で，42よりはやや古く位置づけられるものである。

国内産陶磁器

備前焼の擂鉢のみ出土している。48の口縁端部が肥厚し拡張されるものから，47，44のように上方に拡張するものが見られる。45，46は，やや新しく近世にはいるものと考えられるが，45は内面全面に条線が施される。

出土遺物から見ると，土師質土器は，皿などの特徴から15世紀後半から16世紀前半にかけてみられるもので，備前焼の45，46を除けば，その他の青磁，白磁，備前焼も同様な年代を考えることができる。